イスラーム世界研究　第5巻1–2号（2012年2月）365–494頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 5-1&2 (February 2012), pp.365–494

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』（5）

守川　知子*　監訳
ペルシア語百科全書研究会**　訳注

（p.163）

第4部　町やモスクや聖堂などについて

［第1章　モスクについて］

至高なるアッラーのいわく、「本当にマスジドは（凡て）アッラーの有である。それで、アッラーと同位に配して外の者を祈ってはならない」［Q72: 18］、あるいはいわく、「アッラーのマスジドは、ひたすらこれらの者（信者）によって管理されるべきである」［Q9: 18］。

［聖なる家のモスク］

知れ。最初の礼拝所（masjid）は、「聖なる家（イェルサレム）のモスク（Masjid Bayt al-muqaddas）」である[1)]。ダーウード――彼に平安あれ――がそれを建設した。その長さは1000アラシュで、幅は700アラシュである。天井には4000本の梁があり、内部には1700本の柱があった。また、1500本もの金や真鍮の鎖があり、毎晩、1000個の吊りランプを灯し、毎年、10万アラシュのむしろをそこに敷き詰めた。700人の下働きの者がおり、500個の黄金製の大甕が置かれた。『詩篇』の入った50の櫃があり、400の説教壇が備えつけられていた。

現在、その天井は錫でできている。ミフラーブの右手には黒い碑文があり、そこにはアッラーの使徒たるムハンマドの台座がある。キブラの背後には白い石があり、そこには黒で、「慈愛あまねく慈悲深きアッラーの名において。ムハンマドはアッラーの使徒。そのお方が彼を助けんことを」[2)]と書かれている。モスクの内部には、女性用に3つの小部屋が設けられている。またシャーム門には、預言者――彼に平安あれ――のドーム、ジブリールの足跡石（maqām）、昇天のドーム（岩のドーム）、ダーウードとスライマーンの門のドーム、ヒズル――彼に平安あれ――の門、改悛の門、赦しの門[3)]がある。さらに、マルヤムとザカリヤーのミフラーブ、（p.164）慈悲の門、諸部族の門、渓谷の門、ヤァクーブとダーウードの門のある場所がある。7年の歳月［を費やしてダーウードが］建設した。

---

*　北海道大学大学院文学研究科准教授

**　本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号（2009年）の監訳者による「解題」（198–204頁）を参照のこと。

1）　現在、イェルサレム旧市街の聖域ハラム・シャリーフにあるアクサー・モスクを指す。正統カリフ、ウマルの時代に仮設され、後出の岩のドーム（昇天のドーム）が創建された後、ワリード1世によって8世紀初頭に建設された。もともとは、ダヴィデ（ダーウード）が「契約の箱」を納めるためにイェルサレムに建設した建物のことであり、紀元前10世紀にソロモン（スライマーン）が神殿として完成させ（第一神殿）、紀元前20年にはヘロデ王が大規模に拡張した［「アクサー・モスク」『岩波イスラーム辞典』;「シオン」『新カトリック大事典』研究社、1998年］。ここでの描写に類似した記述をイブン・ファキーフが行っている［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp.100–101］。

2）　テキストには、naṣara-hu のあとに ḤMZH とあるが、意味は不明。典拠であろうイブン・ファキーフのテキストでも同様に “ḥamza” が入っているが、校訂者は “? Sic” を付している［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.100］。

3）　テキストでは「享楽の門（Bāb al-ḥazza）」となっているが、この門は『クルアーン』のイスラエルの民への「頭を低くして門を入り、『お許し下さい（ḥiṭṭa）』と言え」［Q2:58］にちなむことから「赦しの門（Bāb al-ḥiṭṭa）」と読む。イブン・ファキーフ前掲頁等でも記述は “ḥiṭṭa” である。

スライマーンの時代に至り、そこにさらなる建物をたくさん建設した。つまりは偉大なモスクであり、12万4000人の預言者たちのキブラである[4)]。

＜偉大なるカァバ（al-Ka‘ba al-mu‘aẓẓama）＞

「カァバ（al-Ka‘ba）」は偉大なる家である。地上に建てられた最初の家はカァバである。**至高なるアッラーのいわく、「本当に人々のために、最初に建立された家は、バッカのそれで、［それは］祝福である」**［Q3: 96］。マッカ（Makka）は町のことであり、バッカ（Bakka）はカァバのある場所のことである。イブラーヒーム――**彼に平安あれ**――がそれを建造した。その長さは27アラシュで、表側は24アラシュ、裏側も同様であり、渓谷に面した側の幅は20アラシュ、石のある面[5)]は21アラシュ、入り口の幅は4アラシュである。そこには3本の柱があり、［両脇の］2本はモミの木で、真ん中はチーク材でできている。面積は490アラシュである。そこのムアッズィン（アザーン呼びかけ人）たちはアブー・マフズーラ（Abū Maḫẕūra）[6)]の子孫である。

カァバを布で覆った最初の人物はトゥッバゥ（Tubba‘）[7)]である。アスアド・アル＝ヒムヤリー（As‘ad al-Ḥimyarī）[8)]が毎年それを皮の敷布で覆い、風で土埃が入らないようにした。預言者――**彼に平安あれ**――の代になり、イエメン産の布がかけられた。その後、ウスマーン・ブン・アッファーン（‘Uṯmān b. ‘Affān）はコプト産の布を被せ、そしてアブドゥッラー・ブン・ズバイル（‘Abd Allāh b. Zubayr）[9)]は錦の布を作り、香を焚き、カァバを竜涎香や麝香で満たし、オリーブ油の吊りランプを国庫から捻出した。ウマル・ブン・アル＝ハッターブはマダーインを征服したとき、2個の黄金の飾り房を手に入れ、カァバに送り、そこに垂らした。そして真ん中の柱を金で飾った。アブドゥルマリク・ブン・マルワーンは、2つの金の飾り房と2つの金の盃をカァバに送り、吊るした。アブー・アル＝アッバース・アル＝サッファーフ（Abū al-‘Abbās al-Saffāḥ）[10)]は、碧のルビーでできた杯を送り、吊るした。アブー・アル＝ジャァファル・アル＝マンスール（Abū al-Ja‘far al-Manṣūr）[11)]は、ファラオの水差しをその地に送った。チベットの王は黄金の像をマームーンに送り、「私はあなたに偶像を送る。あなたの信仰に帰依したからだ」と言った。（p. 165）マームーンはその像をカァバに送り、カァバの繁栄に役立てた[12)]。

カァバのすばらしさの1つは次のようなものである。カァバに目を向けた者は誰であれ涙し、その上空では、鳥は飛ばずにその周囲をまわる[13)]。いかなる野獣も禁域（ḥaram）の周りに来るとお

4）預言者ムハンマドは、当初イェルサレムをキブラ（礼拝の方向）としていたが、624年に啓示を受け、メッカのカァバにキブラを変更した。

5）すなわち、カァバの黒石のはめ込まれた側面のこと。

6）ムハンマドの教友ジャムヒー・カルシー（al-Jamḥī al-Qarsī）のこと（678/9年または698/9年没）。通る声の持ち主で、メッカのムアッズィン職をムハンマドから与えられた［*EI*²: Masḏjid］。

7）3–6世紀に南アラビアを支配したヒムヤル朝の支配者を指して、ムスリムが用いた呼称［*EI*²: Tubba‘］。

8）4世紀末に、中央アラビアまで進出した最も有名なトゥッバゥ、アブーカリブ・アスアド（Abūkarib As‘ad）を指すか。9世紀に成立した『ヒムヤルの諸王の冠の書（*Kitāb al-tījān fī mulūk Ḥimyar*）』は、アスアド・アブーカリブが最初にメッカの神殿（al-bayt）を布で覆ったと伝えている［*EI*²: Ka‘ba; Tubba‘; Abū Muḥammad ‘Abd al-Malik b. Hišām, *Kitāb al-tījān fī mulūk Ḥimyar*, Sana‘a, Markaz al-Darāsāt wa al-Abḥāṯ al-Yamanīya, 1979, pp. 306–307］。

9）最初期からの信徒ズバイル・ブン・アウワームの息子で、アーイシャの甥。第2次内乱中にメッカでカリフを名乗りウマイヤ朝に対抗したが、692年にハッジャージュの軍勢に破れて死亡した。683年のウマイヤ朝軍によるメッカ攻撃の後、カァバの大改修を行った［「イブン・ズバイル」『岩波イスラーム辞典』; *EI*²: Ka‘ba］。

10）アッバース朝初代カリフ（在位749–754年）。

11）アッバース朝第2代カリフ（在位754–775年）。サッファーフの異母兄。アッバース朝体制の事実上の創設者であり、バグダードを建設した。

12）この段落で述べられている出来事はイブン・ファキーフが記している［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 20–21］。

13）ここでは「タワーフ（周回礼）」の語が用いられており、メッカ巡礼の際に信徒が行う7回まわりの儀礼に鳥さ

となしくなり、禁域の土はどこに持っていっても神聖であり、野獣はその［土の］周りをまわる。

イブン・ジャンナーフ（Ibn Jannāḥ）[14] の時代に、ある男が禁域の土を集めては、禁域の外に撒いていた。すると獣たちはその土の周りに集まり、おとなしくなった。そこで男はその獲物を捕らえるということをしていた。ついにイブン・ジャンナーフは彼の手を切り落とし、言った。「このような裏切り行為はユダヤ教徒たちがしていたことだ。創造主が彼らに土曜日には魚を獲らないよう命じたのに対し、彼らは金曜日に網を仕掛け、土曜日はそのままにしておき、日曜日に引き上げた。その結果、みなブタやサルにされてしまったではないか[15]。」

エチオピアの王アブラハ（Abraha）[16] はカァバを破壊しようと目論み、軍を率いてアブドゥルムッタリブ（‘Abd al-Muṭṭalib）[17] のラクダを奪った。アブドゥルムッタリブは彼のもとに行き、言った。「私のラクダを返してくれ。」

［アブラハは］言った。「望むならば、［ラクダのかわりに］カァバはおまえのもとに残してやろう。」

［アブドゥルムッタリブは］「**まことにこの家は主が守りたまう**。おまえは私のラクダを返せ」と言い、そしてカァバの鍵をカァバの屋根の上に投げ、［主に向かって］言った。「あなたの家です。あなたに預けました。」

アブラハにはマフムードという名の象がいた。［アブラハは］カァバの入り口に来ると、「カァバを破壊せよ」と［象に］言った。象はカァバの入り口に着くと跪いた。別の方向から連れ入れたが、またもや跪いた。彼らが象を叩いたので、象は引き返して逃げていった。

至高なるアッラーは鳥を遣わした。鳥たちはエチオピアの海から飛び立った。顔は黒色で、どの鳥も3粒の石をくわえ、彼らの頭上に投げ落とした。そうしてすべての者を滅ぼした。彼らのうちの1人が逃げ出し、エチオピアの王（ヤクスーム）のもとへやって来た。［ヤクスームは］尋ねた。「どんな報せがあるのか？」

彼は言った。「何と申し上げましょう。私が見たようなことを誰も見ることがありませんように！エチオピアの兵士は誰1人として生き残りませんでした。石が彼らの頭上に降ってきて、カラスやハゲタカにみな喰い尽くされてしまいました。」

ヤクスーム王（Malik Yaksūm）は言った。「どのように降ってきたのだ？」

（p. 166）［そのとき］1羽の鳥が彼の上から石を投げつけた。［石は］彼の頭に当たった。両目が刳り出し、彼は息を引き取った。そのとき以来、カァバの偉大さは人々の心に刻まれたのである。

知れ。カァバの上に昇る奴隷はみな自由人となる。そこでは狼はカモシカを捕らえず、1羽の鳥もカァバの屋根には止まらない。ただし、病気や傷を負った鳥は別であり、そのような場合にはそこに降り立つ。

＜黒石について＞

えもが則ることを伝える。

14）この人物については不明。サーデギー校訂本のハッジャージュ・ブン・ユースフとするのが適切か。

15）『クルアーン』7章163–166節に基づく話。

16）6世紀半ばに南アラビアを支配していた王。南アラビアに進出したエチオピア勢力の出身であり、ネストリウス派キリスト教徒であったと推察されている。『クルアーン』105章（象章）に登場する、メッカへの侵攻途中に鳥の放った石つぶてによって壊滅した軍の指揮官であったとされ、彼にまつわるさまざまな伝承が発達した。逸話の後半に登場するヤクスームは彼の息子である［*EI*²: Abraha; *LN*: Yaksūm］。

17）預言者ムハンマドの祖父。

さて、「黒石（al-Ḥajar al-aswad）」もまたその地（カァバ）にある。**預言者――彼に平安あれ――は、「黒石は地上におけるアッラーの右手である」と言った**。それは黒い石であり、世界中の人々がそれに手を触れる。石の描写をすることには意味がない。その驚異は目で見ることができるのであり、それは人々の心にどれほどの影響を及ぼしていようか。ムハンマド・ブン・アリー（Muḥammad b. ‘Alī）[18] によると、3つの石が楽園から地上にもたらされたという。［すなわち］「黒石」、「イブラーヒームの足跡石」、「イスラエルの民の石」である。黒石が楽園からもたらされたときにはその白さや輝きはたいそうなもので、その光や輝きが東から西まで届くほどであった。今はこれほどまでに黒くなってしまっている。［人々は］それが黒くなった理由を我らの預言者――**彼にアッラーの祝福があらんことを**――に尋ねた。［預言者は］「圧制と罪の黒さがそうさせたのだ」とおっしゃった。また、「**われは、あなたがたの主ではないか。かれらは申し上げた。『はい』**」［Q7: 172］というお言葉を［神が］述べられた日[19] に彼らが約束の書に書き記したことは、復活の日に至るまで、真理者［たる神］――**讃えあれ、至高なれ**――がこの石の中に納められた。

＜足跡石について＞

さて、「足跡石（Maqām）」は正方形の石である[20]。高さは手4つ分であり、その周りには金の輪がある。石には両足の跡が見え、指7本分である。それぞれの足の間は指1本分である。あまりにも多くの手がそこに擦りつけられたので、黒くなってしまった。この石は正方形の囲いの中に置かれている。信徒の長のアル＝ムフタディー（al-Muhtadī）[21] は1000枚の純金のディーナール貨を送り、足跡石を金で飾った。高貴な石であり、イブラーヒーム――**彼に平安あれ**――が両足を置き、［そこから］馬に跨った石である。この石は囲いの中に置かれているが、［囲いの］（p. 167）周囲は鉛で作られ、チーク材の箱がその上に載せられ、2つの隅には2本の鎖と2個の錠がかけられている。もしこの足跡石をじっくりと見るならば、珍しい造形を目にすることができよう。至高なる神のお創りになったものがその石の中に具現している。

＜聖域（ハラーム）のモスク＞

知れ。「聖域のモスク（al-Masjid al-ḥarām）」は偉大なるモスクである[22]。ウマル・ブン・アル＝ハッターブが建物を購入し、1度解体して［モスクを］再建した。その後、ウスマーン・ブン・アッファーンが増築した。そしてアブドゥッラー・ブン・ズバイルがアル＝アルカム（al-Arqam）の館[23] の半分を1000ディーナールで購入し、モスクに組み込んだ。彼はモスクの柱脚を大理石で造り、アーチの表面を色とりどりの琺瑯で装飾した。それは「モザイク（fusayfisā）」と呼ばれて

18）この名前からは誰のことか特定はできない。

19）上述の『クルアーン』の冒頭に来る語 “alast” の日というのは、アーダムが生まれた人類最初の日とされる［*LN*: Alast］。

20）カァバの中の黒石の北東に安置されている、イブラーヒーム（アブラハム）の両足の跡と伝えられる石のこと。一般に、「イブラーヒームの立ち処（足跡）」と呼ばれる［*EI*²: Ka‘ba; Maḳām Ibrāhīm］。

21）アッバース朝第14代カリフ（在位869–870年）。

22）メッカのカァバにあるモスクのこと。「マスジド・ハラーム」という名称は、イスラーム以前から用いられていた。カァバ、ザムザムの泉、イブラーヒームの足跡石を含む聖所であり、預言者ムハンマドが629/30年に礼拝所を設けて以来、拡張され続けている［*EI*²: al-Masḏjid al-Ḥarām］。

23）アルカムはムハンマドの教友で、一般には al-Arqam b. Abī al-Arqam として知られる（673年あるいは675年没）。メッカのサファーの丘に建つ家をムハンマドに提供し、ウマル・ブン・ハッターブの頃までその家はウンマ（ムスリム共同体）の中心であった。アルカムはムハンマドとともにメディナに移住し、多くの戦いに参加した。彼の家は、のちにアッバース朝カリフのマンスールが購入し、さらにハールーン・アル＝ラシードの母ハイズラーンの手に渡り、「ハイズラーンの家」と呼ばれるようになった［*EI*²: al-Arḳam］。

いる。そして天使の描かれた高い尖塔を建てた。その後、［アブー・］ジャァファル・アル＝マンスールが増築し、シャームの方角（北の方角）に数々の建物を建てた。彼より前には、アブドゥルマリク［・ブン］・マルワーンが屋根をチーク材で造り、柱を金で飾った。その幅は 304 アラシュで、モスク［全体］は 12 万アラシュである。東の部分には 99 本の柱があり、西の部分には 100 本の柱が、シャーム方面の部分には 125 本の柱がある。全部で 465 本の柱がある[24]。柱はそれぞれ 10 アラシュ［の高さ］である。18 の門があり、455 個の吊りランプがある。**預言者――彼に平安あれ――のいわく、「［神に］護られている村は、マッカ、マディーナ、イーリヤー[25] とナジュラーン[26] である。」**

［預言者のモスク］

「預言者――**彼に平安あれ**――のモスク（Masjid al-Nabī）」はマディーナのモスクである[27]。縦 140 アラシュ、横 120 アラシュで、高さは 11 アラシュである。ウマル・ブン・アル＝ハッターブは当初、要塞の中に［モスクを］造った。［ヒジュラ暦］17 年（西暦 638 年）に建設された。ミフラーブも彼が造り、その後、ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズが、ルームから 40 人、コプトから 40 人の男を使って、純金 4 万ミスカールと数千ハルヴァールのモザイクをそこに費やした。〔一区画を増やし、〕内部の重厚な柱を鉄と錫で造った。現在、その長さは 200 アラシュで、幅も同じである。サーリフ・ブン・カイサーン（Ṣāliḥ b. Kaysān）[28] は、［ヒジュラ暦］89 年（西暦 707–08 年）に（p. 168）3 年間かけて自身の仕切り部屋（maqṣūra）[29] を造った。マディーナのムアッズィンは、アンマール・ブン・ヤースィル（‘Ammār b. Yāsir）[30] の被護者（mawlā）であるサァド（Sa‘d）の子孫である。

そのモスクは最初、アーイシャの家であったが、それは預言者の墓（mašhad）とされた。人々はウマル・ブン・アブドゥルアズィーズに対し、［彼の］死の際に次のように言った。「あなたをこの墓土に埋葬するよう命じてください。まだ場所は空いているのですから。」

［ウマルは］言った。「そのような考えが私の心に生じないように。私は預言者のいらっしゃる場所［に埋葬されること］を望めるような者であろうか。私を［一般の］墓地に運び、［そこに］埋葬しなさい。そのような言葉を二度と言ってはならない。」

人々は彼をウマイヤ家のカリフたちの墓地に埋葬した。

24）数が合わないので、南部分が抜けているのだろう。数が正確であれば、南部分には 141 本の柱があることになる。

25）イェルサレムを指す。本書第 4 部第 3 章の町の説明箇所でより詳しく言及される。

26）北イエメンの都市。イスラーム以前からキリスト教徒の中心地であり、ムハンマドとの契約によってキリスト教の実践を許された［*EI*²: Nadjrān］。

27）メディナの「預言者モスク」のこと。もともとはムハンマドの家であり、ムハンマドはこの家に埋葬された。本書の冒頭でも、ムハンマドの墓のそばにアブー・バクルやウマルが埋葬される話が載せられている［本訳注（2）『イスラーム世界研究』第 3 巻 1 号、2009 年、429–430 頁］。この話の後半に出てくるウマル・ブン・アブドゥルアズィーズ（ウマル 2 世）はウマイヤ朝のカリフ。

28）アブー・アル＝ハーリス（Abū al-Ḥāriṯ）とも呼ばれた（722/3 年没）。ハディースの知識に優れ、ウマイヤ朝のウマル 2 世から保護を受けた［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 16, pp. 268–269］。

29）支配者が、敵対者の襲撃を避けるためにミフラーブの傍に作らせた仕切り部屋のこと。初めて設けた人物については諸説あるが、ウマイヤ朝初期から導入されたと考えられる。メディナの預言者モスクについては，ウマル 2 世が支配者であった 705–712 年の間にチーク材で建設したと言われている［*EI*²: Masdjid］。

30）ムハンマドの教友。バドルやウフドをはじめ、ムハンマドが行ったすべての戦いに参加したと言われる。841 年にはウマルからクーファの支配を委ねられ、フーゼスターン遠征を行った。のちにアリー支持派として活動し、657 年にスィッフィーンの戦いで戦死した。ハディースの知識で有名である［*EI*²: ‘Ammār b. Yāsir］。

「ヌーフ――**彼に平安あれ**――のモスク（Masjid-i Nūḥ）」はジューディーの山にある[31]。17の扉を持ち、訪れる人がいない時はない。そこでは誰も他人の荷物に手をかけようとはしない。誰かが他人の物を持ち去ると先には進めず、品物を元の場所に戻すと道が見つかる。そこでは子供たちが旅人を案内する。彼らは、各々の旅人から鉄くず（qurāḍa）を取り上げる。さもなくば道に迷い、戻れなくなる。これは驚くべきことである。

「ムーサー――**彼に平安あれ**――のモスク（Masjid-i Mūsā）」はサーミラ（Sāmira）にある[32]。何千もの大理石と色とりどりの琺瑯のタイルがある。壁と床はそれらで覆われ、［石と石との］つなぎ目はダマスクス産の真鍮で接合されている。そこには釘が打ち込まれているが、それぞれの釘には相当な額が費やされている。1本の高いミナレットが道の向こう側にあり、騎兵がそこに登ると、ミナレットの先端では馬はスズメほどにしか見えない。

ある年、馬［の像］の頭が落ちたが、誰もそれを持ち去ることができず、売られてしまった。その価値は、モスクの屋根を銀で飾ることができるほどであった。このモスクの内部には石の鉢があり、爪ほどの大きさの多彩な色がついている。そこには水車を回すことのできる樋がついており、鉢がいっぱいになると、その樋を伝ってモスク中に水が流れる。その後［水は］鉢に戻る。

「クーファのモスク（Masjid al-Kūfa）」はヌーフの造ったモスクの1つである。「パン焼き釜の洞窟（Fār al-tanūr）」と呼ばれる洞窟の角にある[33]。その場所にはヌーフの民が崇拝した偶像がいくつかあった。「ヤウーク（Ya‘ūq）」、「ヤグース（Yaġūṯ）」、「ナスル（Nasr）」、（p. 169）「ワッド（Wadd）」、「スワーゥ（Suwā‘）」は、ここから広まった[34]。

イブン・ムルジャム（Ibn Murjam）[35] がその場所でアリーを短剣で刺したとき、彼は捕らえられた。アリーは言った[36]。「やつを捕らえておけ。私が死んだら、私の復讐を求め、彼を殺せ。そして私をこのモスクに埋葬せよ。**なぜならここには私の兄弟であるフードとサーリフ――彼ら2人に平安あれ――の墓があるのだから。**」

アブドゥッラー・ブン・ズィヤードがモスクを再建し、それぞれの柱に700ディーナールを費やしたが、ハッジャージュ［・ブン・ユースフ］は強引に解体し、アブドゥッラー・ブン・ズィヤードが建てたものを破壊した。そして、彼はそこに新しいモスクを建てた。それは、「ハッジャージュが造った」と言われるためであった。カリフのマンスールがその地に到ると、彼は馬から下

31）『クルアーン』11章44節に基づき、ノアの方舟は大洪水の後、この山に漂着したとされる［*EI*²: al-Djūdī, Djabal］。本書の第3部「山の章」に既出［本訳注（4）『イスラーム世界研究』第4巻第1–2号、2011年、520頁］。

32）実際にどの地方を指すのかは不明だが、高い塔があることから、イラクのサーマッラーの可能性が高い。一方ハラウィー（1215年没）の『巡礼地案内の書（*Kitāb al-išārāt ilā ma‘rifa al-ziyārāt*）』によると、ムーサーの礼拝所は、サーヒラ（al-Sāḥira）という山があるサイード地域のラワースィー（al-Lawāsī）村にあるという［Abū al-Ḥasan ‘Alī al-Harawī, *Kitāb al-išārāt ilā ma‘rifa al-ziyārāt*, Ed. J. Sourdel-Thomine, Damascus, Institut français de damas, 1953, pp. 42–43］。この場合のサイードはナイル川上流の地域であり、イブン・ルスタは、ここにムーサーやユースフが埋葬されているとエジプト人が主張していると伝えている［Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 150］。

33）『巡礼地案内の書』によると、クーファには「パン焼き釜の洞窟（Fār al-tanūr）」という井戸があり、その傍でヌーフが生まれたと伝えられている［al-Harawī, *Kitāb al-išārāt*, pp. 77–78］。

34）イブン・カルビーによると、これら5つは、ヌーフの民やイドリースの民が崇拝の対象とした偶像の名前である［Hišām b. Muḥammad al-Kalbī, *Kitāb al-aṣnām*, Russian Trans. V. Polosin, Moscow, 1984, pp. 17, 23; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 367］。

35）アリーの暗殺者。正式な名前は ‘Abd al-Raḥmān b. ‘Amr b. Muljam で、ハワーリジュ派であり、アラブのキンダ族出身とされる［*EI*²: Ibn Mulḏjam］。

36）アリーは襲撃されて数日後に死亡したという説があり、捕らえられたイブン・ムルジャムの処遇を自ら指示したという。処遇の内容についてもさまざまな説があり、なかにはイブン・ムルジャムに食事と寝床を与え、自分がこの傷で死んだら彼も即座に殺すように命じた、というものもある［*EI*²: Ibn Mulḏjam］。

りて、言った。「ここにヌーフ――**彼に平安あれ**――のモスクがある。1度目は大洪水で荒廃し、2度目はホスロウの軍、3度目はヌゥマーン（Nu‘mān）[37]、4度目はハッジャージュによって［破壊された］。」

「ザカリヤーの息子ヤフヤー（洗礼者ヨハネ）――**彼ら2人に平安あれ**――のモスク（Masjid-i Yaḥyā b. Zakariyā）」はダマスクスにあり[38]、「ジャイルーン（Jayrūn）」[39] と呼ばれる。壮大なモスクであり、ドームは高く、ミフラーブは堂々としている。サービア教徒[40] からユダヤ教徒の手に渡り、その後ギリシア人、さらに、不信心者たちに渡った。最初にヤフヤーがこの場所で殺され、彼の首がここに安置された。その後、ワリード・ブン・アブドゥルマリク（Walīd b. ‘Abd al-Malik）[41] の時代に、彼は床を大理石とし、壁をオニキスで飾った。また、ミフラーブを黄金にして宝石をちりばめ、天井を金で飾った。7年分のシャームのハラージュ税をそのために費やし、屋根を錫で覆った。そこを水がめぐり、すべての柱から流れ落ちる。

「スライマーン――**彼に平安あれ**――のモスク（Masjid-i Sulaymān）」はイスタフルから1ファルサングのところにある[42]。高楼のモスクであり、はしごを使って登る。内部にはスライマーン――**彼に平安あれ**――の肖像が描かれ、奴隷たちがその前に整列している。10枚の壁画（dīwār）があり、人の顔、象の耳、馬の尾が描かれている[43]。偉大なモスクであり、有名である。

「ダーウード――**彼に平安あれ**――のモスク（Masjid-i Dāwūd）」は聖なる家にある。その中には大きな墓があり、黄金の壺がいくつか（p. 170）置かれている。このモスクは「復活の聖堂（Kanīsa al-qiyāma）」あるいは「ダーウードの礼拝所（Namāzgāh-i Dāwūd）」と呼ばれている[44]。そこではある祭礼があり、スルターンは毎年出席する。すると山から火が降りてきてろうそくに点火し、さらに他の吊りランプに火を灯す。そこで各地の王たちに「これこれの時間に火がやってきた」とい

37）おそらくは3–6世紀にイラクを支配したラフム朝の君主ヌゥマーンを指すのだろう。同朝には同名の君主が3人いるが、いずれかは不明。ヌゥマーン1世については、後注228参照。もしくはムハンマドの教友であり、ムアーウィヤによってクーファに任じられた人物か。反アリー派であり、クーファ住民との折り合いが悪かった。第2次内乱においてアブドゥッラー・ブン・ズバイルに加担し、684年に敗死した［*EI*²: al-Nu‘mān b. Bashīr］。

38）いわゆる「ウマイヤ・モスク」のことと思われる。ウマイヤ・モスクは、706–714/5年にウマイヤ朝のカリフ・ワリード1世によってダマスクスに建造された。現存する最古のモスクである。ローマ時代の神殿の聖域であった場所に建てられ、洗礼者聖ヨハネ教会の一部を転用している［「ウマイヤ・モスク」『新イスラム事典』］。『巡礼地案内の書』も、ダマスクスの集会モスクにはヨハネの首があると伝える［al-Harawī, *Kitāb al-išārāt*, p. 15］。

39）ダマスクスの集会モスクの近くにある門の名。

40）『クルアーン』では2章62節など3ヶ所で言及され、啓典の民とされる。この語が意味する宗派については、マニ教説など諸説ある［「サービア教徒」『新イスラム事典』］。

41）ウマイヤ朝第6代カリフ、ワリード1世（在位705–715年）。中央アジア、インド、アンダルスへの征服活動を行い、ウマイヤ朝の最大版図を築いた。

42）前330年にアレクサンドロスによって破壊されたアケメネス朝の都ペルセポリスのこと。現在、ペルシア語では「ジャムシードの玉座（タフテ・ジャムシード）」と呼ばれる。シーラーズの北西約57キロメートルに位置する。イスタフリーやイブン・ハウカルといったイスラーム初期の地理学者は、この遺跡をイランの伝説的な王ジャムシードに帰した。ジャムシードはスライマーンと同一視されていたため、ペルセポリスは「スライマーンの遊技場」あるいは「スライマーンのモスク」とも呼ばれた［*EIr*: Persepolis］。このモスクについては、イスタフリーとイブン・ハウカルがまったく同じ記述を伝えている［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 122; Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-’arḍ*, p. 278］。

43）原文ではdīvārとなっており、これを「壁画」と解釈した。しかし、これはdīwān（悪鬼たち）の誤りである可能性もある。その場合、この箇所は、「10体の悪鬼が描かれており、［その悪鬼たちは］人の顔、象の耳、馬の尾をもっている」と訳すことができる。

44）イェルサレムのゴルゴダの丘にある聖墳墓教会のこと。「復活の聖堂」は次章で後出。『巡礼地案内の書』が「ダーウードの塔（burj）」「ダーウードのミフラーブ」としているものと同じであろう［al-Harawī, *Kitāb al-išārāt*, pp. 27–28］。

う手紙が書かれる。もしそれが明け方ならば豊作であり、日中ならそれ以下、夜に［火が］降りてくるようであれば凶作である。

「イーサー――**彼に平安あれ**――のモスク」は「肉の館（Bayt al-laḥm）」と呼ばれ、ルーム地方にある[45]。キリスト教徒はここで犠牲を捧げる。毎年、決まった夜に火がやって来て、この建物の中のランプを昼まで灯す。その理由は次のとおりである。ユダヤ教徒たちがイーサーを捕らえ、この建物の中に留置したとき、夜が更けると、火がやって来て、この建物の中に浮かんだ。イーサーは夜が明けるまで礼拝を続け、その後、彼は天に召された。ユダヤ教徒たちは1人の男をその建物に遣わし、イーサーを外に連れ出して彼を吊るそうとした。［男は］外に出てくると、「建物は空です」と言った。［だが］創造主はイーサーの似姿をその男に投じていた。そこで［ユダヤ教徒たちは］その男を吊るし、彼がイーサーであると思った。**至高なるアッラーのいわく、「だがかれらがかれ（イーサー）を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない」**［Q4: 157］。

このモスクの長さは200アラシュである。柱は銅で、壁は真鍮で造られている。ここには宝石や黄金の器といった相当な財があるが、それらについては創造主のみがご存じである。その向かいにはエメラルドで造られた建物があり、それは「犠牲の場（Mawḍi‘ al-qarābīn）」と呼ばれている。その扉の上には12体の彫像がある。そこには28の黄金の扉があり、外側の壁は1200アラシュにもなる。そこには12の銅製の門があり、近くには「光の館（Bayt al-nūr）」と呼ばれる建物がある。夜が更けるといつもこの聖堂は光輝く。建物の中は溢れんばかりの光である。これはルームの町にある。

「ジルジース（ゲオルギウス）[46]――**彼に平安あれ**――のモスク（Masjid-i Jirjīs）」はダマスクスにある礼拝所である[47]。（p. 171）他にもマルヤム――**彼女に平安あれ**――の礼拝所があり、またユーヌス（ヨナ）、BLALYS、ḤNYNA、QBRYAN、ヨハンナー（使徒ヨハネ）のものもある。キリスト教徒たちは世界の彼方からやって来て、ここに参拝する。

「イフリーキヤのモスク（Masjid-i Ifrīqiya）」は壮大である。その中には、宝石でできた10本の柱がある。ルームの王は人を送り、巨額でもって柱を1本買おうとした。イフリーキヤの王は、「これは慈悲あまねき者（神）のモスクである。だがおまえのモスクはシャイターン（悪魔）のモスクだ。この柱はここにあるほうがふさわしい」と手紙に書き、［ルームの王の］手紙を送り返した。

これらの柱は覆いで隠されている。だが金曜日には覆いが外され、人々は見ることができる。蛇にかまれた人が短刀の先で［柱を］削り、それを傷口に当てると効果がある。そこにある1本の木は、ティール月[48]になると、その葉から町全体に十分なほどの蜜をしたたらせる。これはイーサーの弟子たちが植えたものである。その理由は次のとおりである。この地方の王が弟子たちをこのモ

45）「肉の館」はベツレヘム（Bayt Laḥm）のこと。ヘブライ語では「パンの家（Beit Leḥem）」を意味する。この教会は、ベツレヘムの降誕教会であろう。ここでベツレヘムが「ルームにある」とされているのは明らかな誤謬であり、この誤謬は、マスウーディーがルームの諸王の解説の中でベツレヘムに触れていることによるのかもしれない［al-Mas‘ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, p. 124］。

46）聖ゲオルギウスは、3世紀のローマの軍人でキリスト教徒として迫害され殉教した聖人。イスラーム世界ではしばしば預言者ヒズルやエリヤと混同される［*EI*²: Ḏjirdjīs］。

47）12世紀に巡礼地となっていた聖ゲオルギウスの殉教地は、イラクのモースルにあったカルケドン派の教会である［al-Harawī, *Kitāb al-išārāt*, p. 69; *EI*²: Ḏjirdjīs］。ダマスクスにある「ジルジースのモスク」とは、彼の生誕地とされ墓も現存する、イスラエルのロード／リッダ（Lod/Lydda）の聖堂の可能性がある。

48）イラン太陽暦の4番目の月で、夏至からの1ヶ月にあたる。

スクの中に捕らえ、そこを牢獄とし、食事を与えなかった。創造主はこの木を彼らの糧となし、ようやく10日目に彼らに救いが訪れた。［その後］このモスクとこの木は祈りの場となった。

続いて、聖堂について述べよう。

［第2章］ 有名な聖堂とその驚異について

知れ。聖堂（kanāyis）は初期のモスク（礼拝所）である。それらのうち、訓戒や驚異が含まれるものについて私はいくつか言及しよう。荒廃したものやイスラームの民の手中にあるものについても述べよう。

「高貴なる聖堂（Kanīsa-yi šarīfa）」はルームの町にある[49]。そこには使徒のマリクトゥス（マルコ）（Mārīquṭūs）が埋葬されている。彼は「殉教者たちの長（ra's al-šuhadā）」と呼ばれている。この聖堂の長さは1500アラシュで、3つのバシリカがあり、銅製のアーケードが架けられている。またここには有名な聖堂があり、「殉教者たちの長スティファニウス（ステファノ）（Iṣṭifānīus）の聖堂」[50]と呼ばれている。

「シオンの聖堂（Kanīsa-yi Ṣahiyūna）」は聖なる家（イェルサレム）にある[51]。その大きさは1ファルサング（p. 172）四方で、高さは200アラシュである。そこには、被葬者たち[52]のための供物台（maḏbaḥ）がある。それは緑のカンラン石からできており、長さは20アラシュである。その後ろには、金製の20体の彫像があり、それぞれ10アラシュの大きさで、目は紅いルビーでできている。色とりどりの大理石からなる1200本の柱がある。そのうちの3本の柱は銅製である。この聖堂には1200の真鍮製の扉と40本の金の柱がある。この他、黒檀や象牙でできた扉や数え切れないほどの吊りランプがある。

知れ。不信心者たちの聖堂について私が言及するのは、預言者たちや、イーサーの教友であった殉教者や被葬者たちを、不信心者たちがどのように尊崇しているかをそなたが知るためである。それによって、カァバや聖域モスクや預言者［ムハンマド］――**彼に平安あれ**――の墓やその教友たちを尊崇するムスリムたちが優れている［ことがわかるだろう］。

「王の聖堂（Kanīsa al-malik）」はルームの町にある[53]。そこには語りつくせないほどの財がある。それは「ミールーン（MYRWN）」と呼ばれている。1万の卓と1万の皿と700の説教壇と3000の十字架があり、すべて黄金でできている。1000冊の書物が黄金で書かれている。そこには王の御

49）マルコおよび後半のステファノとの関わりから、おそらくはヴェネツィアのサン・マルコ聖堂のことであろう。マルコはアレクサンドリアにキリスト教を伝え、そこで殉教したが、828年にマルコの遺物はヴェネツィアに移され、サン・マルコ大聖堂が建設された［「ヴェネツィア」「マルコ」『新カトリック大事典』］。

50）ステファノはヘレニスト（ギリシア語話者）ユダヤ人の中心人物であった。ユダヤ教の体制を批判したため石打の刑により処され（30年代）、キリスト教の最初の殉教者とされる［「ステファノ」『新カトリック大事典』］。

51）イェルサレムの東にある丘の聖所。ダヴィデが征服して移住し、「契約の箱」を納めるための建物を建設した。その後、ソロモンが神殿を建設し、イスラエルの精神的宗教的中心となった［「シオン」『新カトリック大事典』］。

52）サーデギー校訂本では「犠牲（qurbān）」。

53）イスタンブールの聖ソフィア大聖堂（アヤ・ソフィア）のことか。聖ソフィアは、新皇帝の叙任式を含む、帝国にとって重要な儀式を行う場所でもあった。

座所（nišast-gāh）[54] があり、「座所（basāṭ）」と呼ばれている。そこには、アーダムから最後の預言者ムハンマド――**彼に平安あれ**――に至る預言者たち――**彼らに平安あれ**――の姿［が描かれている］。あたかも［本物の］人間を見ているかのようである。座所の周囲には100本の金の柱があり、それぞれの柱に偶像がある。偶像は手に鈴を持ち、敵がこの場所に入ろうとすると、鈴を鳴らす。そうして人々に知らせ、敵を追い払うのである。

「審問の聖堂（Kanīsa al-imtiḥān）」は聖なる家にある。ある人物が預言者の子孫であるかどうかという疑念が生じた場合はこの聖堂へ行き、その人物の手が脂っぽくなれば、預言者の子孫であった。乾いたままであればそうではなかった[55]。［あるいは］台の上で釜を煮立て、2人の人物が対立している場合に手をその釜の中に入れた。嘘をついている方は火傷を負ったが、真実を述べているならば火傷を負わなかった。また、この聖堂の扉には木製の犬がいた。（p. 173）放蕩者や呪術師がそこにやって来ると、その者に対して吠えた。犬に向かって矢を射ると、［矢が］戻ってきて、射た者を殺した。

これらはすべて彼らを試すためのものであり、それによって彼らのヴェールは引き裂かれてしまった。それらを尊崇するためでは決してない。

「復活の聖堂（Kanīsa al-qiyāma）」は最も大きな聖堂の1つである[56]。祭りの日にはすべてのランプが消される。すると空中で火が生じ、ランプに再度火を灯す。それは白い火だが、少しずつ赤くなっていく。私はイーサー――**彼に平安あれ**――のモスク［の項］で同じようなことを述べた。［イスラームの］説法者たちは、「この火は司祭たちのペテンであり、拝火殿で用いられていたように、硫黄が用いられているのだ」と言う。「マギたちがどれほどそこに水をかけても［火は］より激しくなった。確かめてみると、拝火壇（kānūn）はタールと石油の油田の上に建てられていた。［そこは］石油が油井から湧き出るほどであり、火がその油を燃やし続けていたのである」と。だが、私は［この聖堂も］そうだと言うつもりはない。この火は至高なる造物主のお創りになったものであり、不思議なことではない。しかし不信心者の世界では、彼らを惑わすためにこのような幻術が用いられているのである。

「火の聖堂（Kanīsa al-nār）」。ファールスの境界に1つの建物があり、1人の司祭がそこに暮らしていた。彼は火と言葉を交わし、火から答えを得ていた。やがてアラブの時代になり、イスラームの人々がそこを掘り起こし、40アラシュほどの石の管を見つけた。管の先には長廊下があり、そこに1人の男が隠れていた。男は息を管に吹きつけ、言葉を発していた。［その］声が管を伝い、火の中から声が聞こえていたのである。人々はそれに騙されていたのであった。

「オリーブの聖堂（Kanīsa al-zaytūn）」はルームにあるドーム［型の聖堂］である[57]。ドームの上

54）聖ソフィア大聖堂の2階の東側には、大理石の扉で仕切られた皇帝専用室がある。その扉の上には、11世紀の作とされるキリストの足元に跪く皇帝のモザイク画がある。この他にも、9世紀後半の作とされる聖母子と大天使のモザイク画や教父や総主教らの肖像モザイクがある［「聖ソフィア」『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年］。

55）この逸話は、イブン・ファキーフが伝えるイェルサレムの「敵対者審判の鎖（silsilat qaḍā al-ḫuṣūm）」の逸話に類似している。次章の「敵対者の鎖」への注69も参照のこと［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 101–102］。

56）聖墳墓教会のこと。イエスの墓の上に建てられたと伝えられる。

57）イェルサレムにはオリーブ山や鶏鳴教会があるが、これらに該当するのかは不明である。本書第5章のオリーブの項でも触れられている（テキスト314頁）。

には［2羽が］合わさったかたちをした銅製の鳥がいる。2羽が一体となった鳥であり、優美な声を出す。その子は悲しげな声で鳴く。鳥が啼くと、他の鳥たちはその鳥のもとへオリーブを持ってきて食べさせる。さらに毎年、風の強く吹く決まった時期に、その鳥は声をひとつにして鳴く。すると鳥たちがオリーブを持ってきて、その銅製の鳥のところに落とす。それはオリーブの山がいくつもできるほどである。

（p. 174）「真鍮の館（Bayt al-ṣufr）」はマグリブの荒地の中にイスカンダルが建てた館である。［大きさは］400アラシュ四方で、その礎は真鍮と錫でできている。200本の真鍮製の梁が天井にわたされ、それぞれの梁は400アラシュ［の長さが］あり、真鍮製の板金でもって覆われている。双角の所有者は、この礎を次のように建設した。［まず］囲いを造り、その中に石や石膏を詰め、壁でもって屋根を支えた。そして、梁の太さにあわせて200本の鋳込み路を作り、真鍮、青銅、錫を熔かしてこの鋳込み路に注ぎ、200本の青銅の梁と、梁の上にのせる真鍮の板金を流し込んだ。その後、石と石膏を除き去ると、真鍮製の天井がこのようにして残った。世界中で400アラシュもの長さと幅のある屋根つきの建物は、これ以外に目にすることはない。

「珐瑯の聖堂（Kanīsa al-mīnā）」はミスルにある。ガラスと大理石から造られ、毎年ルームから何ハルヴァールもの黄金がここに運ばれる。内部には預言者たち――**彼らに平安あれ**――が描かれている。毎月初めの新月のとき、その中の1体の偶像が台に乗り、「月は改まった」と人間が言うかのように、手を動かす。その理由は誰も知らない。

聖堂はたくさんあるが、ヒーラ（Ḥīra）[58] にも堂々たる聖堂がある。そこには、「この聖堂は、アムル・ブン・アル＝ムンズィル（‘Amr b. al-Munẕir）[59] 王が、アムル・ブン・ハンナーン（‘Amr b. Ḥannān）の手によって建造した」と書かれている。その下には、「**私は人のもとで移ろう時代を多く見てきた。おまえもまた幸多き時の移ろいから救われることはない**」と書かれている。すなわち［ペルシア語では］「時は人の上を過ぎ去り、誰も時から死を免れることはない。たとえ幸運であったとしても」という意味である。つまり、人はみな死すべきもので永遠ではない、ということである。

「ガリーヤーンの聖堂（Kanīsa al-Ġarīyān）」[60]。ガリーヤーンの意味は「善」である。これは、アル＝ムンズィル・ブン・イムルー・アル＝カイス・ブン・マー・アル＝サマー（al-Munẕir b. Imru’ al-Qays b. Mā’ al-Samā’）[61] が建設した。彼はアラブ出身の王であった。［聖堂建立の］理由は次のとおりである。彼にはハーリド・ブン・ファドラ（Ḫālid b. Faḍla）とウマル・ブン・マスウー

58）ティグリス・ユーフラテス両川の中洲に位置する都市。イスラーム以前には、ペルシア、ビザンツ、アラビア半島の諸勢力の政治・外交・軍事活動の中心的役割を担い、なかでもアラブ人の王朝でサーサーン朝の臣下であったラフム朝（3–6世紀）の王都となる。ラフム朝はネストリウス派キリスト教を受け入れ、その結果王都ヒーラはアラブ系キリスト教徒の一大集積地となり、教会や修道院が建てられた。イスラーム時代に入りクーファが重要性を増してからは衰退し、廃墟となった［*EI*²: al-Ḥīra; Lakhmids］。

59）ラフム朝の王アムル（在位554–569年）を指すのだろう［*EI*²: Lakhmids］。

60）両テキストではGRMANだが、聖堂の名前の読みはイブン・ファキーフの表記に従う。クーファにある建物。以下の一連の逸話と同様の話を、細部や人名に若干の違いがあるものの、イブン・ファキーフが記録している。本書では触れられていないが、特に3つめの逸話の最後の箇所は、シャリークらの誠実さはキリスト教徒であることによっており、「ガリーヤーン（善）」という名称の意味も、彼らの美徳ゆえであるとされている［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 179–181; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, pp. 196–200］。

61）ムンズィル3世（在位503–554年）のこと。ラフム朝の最盛期を現出した［*EI*²: Lakhmids］。

ド（‘Umar b. Mas‘ūd）という2人の近臣（nadīm）がいた。ムンズィルは2人に腹を立て、2人を泥の下に生きたまま埋めてしまった。（p. 175）その後、彼は酔って起こしたことを後悔し、彼らの墓の上に2つの聖堂を建てた。そして、1年のうちに善なる日と悪なる日を1日ずつ定めた。善なる日には、目にした者に賜衣を与え、悪なる日には、目にした者を殺し、その血を聖堂の扉に塗り込んだ。

ある［悪なる］日、彼を讃えようとウバイド・ブン・アル＝アブラス（‘Ubayd b. al-Abraṣ）がやって来た。ムンズィルは彼に言った。「もしも私が父ヌゥマーン[62]なら、私はおまえを［即座に］殺すだろう。だがおまえが望むならば、おまえの腕の静脈（akḥal）か、あるいは〔頭部の〕静脈（qīfāl）か、あるいは頸の静脈（warīd）の血管から血を出してやろう。」

［ウバイドは］言った。「それらの血管は3つとも急所であります。ですが、私に酒をお与えください。さすれば私の四肢は弱まり、その後あなたがなさりたいことは何でもできましょうから。」

［ムンズィルは］彼に酒を与え、彼の腕の静脈を引き裂いた。すると血が流れ出し、［ウバイドは］死んだ。

その後、別の日に［ムンズィルは］ハンザラ・ブン・アビー・ジャァファル（Ḥanẓala b. Abī Ja‘far）を見かけ、彼を捕らえた。［ハンザラは］言った。「私に1年の猶予をください。」

ムンズィルは言った。「おまえの保証人は誰だ？」

シャリーク・ブン・アムル（Šarīk b. ‘Amr）が［その場に］いたので、［ハンザラの］保証をした。1年が過ぎ、ムンズィルは待っていた。シャリークが現れた。［ムンズィルが］彼を殺そうとするや否や、ハンザラがやって来た。彼の後ろでは妻が嘆き悲しんでいた。シャリークの後ろからも妻が来て、嘆き悲しんでいた。ムンズィルは2人の誠実さに驚き、言った。「私がもし彼らを殺そうものなら、私はこの2人よりも不義となるわい。」

そして、その慣習を廃止した。

「裏切り者の聖堂（Kanīsa al-ġādir）」はジャバル地方にある[63]。そこには若く、美しい容姿をした修道士がおり、女たちを連れ込んでは淫らなことをしていた。ある日、アブー・ヌワース（Abū Nuwās）[64]がそこを訪れ、その修道士に欲情した。アブー・ヌワースは男色家であった。修道士は言った。「おお、アブー・ヌワースよ。おまえが私に求めることを、私もおまえに求めたい。」

アブー・ヌワースは言った。「よかろう。」

修道士はアブー・ヌワースと交わった。［続いて］アブー・ヌワースが修道士を求めようとすると、修道士は言った。「私はこのようなことをしたことは1度もない。」

アブー・ヌワースは激怒し、怒りにまかせて修道士を殺し、修道士の聖堂の扉に（p. 176）次のような詩を書いた。

修道士は彼自身まったく誠実ではなかった

なぜなら自分は人と契っても［人には］契らせないのだから

［この話の］意図するところは、アブー・ヌワースは他人にしたことを自らの身に返され、修道

62）ムンズィル3世の父ヌゥマーン2世を指す。好戦的な王として知られていた［*EI*²: Lakhmids］。

63）アブー・ドゥラフがまったく同様の話を記している［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、21頁］。

64）アッバース朝期の著名な詩人。本名はḤasan b. Hānī al-Ḥakamī で、生没年には諸説ある。アフワーズ出身とされるが、人生の大半をバグダードで過ごし、アッバース朝カリフのハールーン・アル＝ラシードやアミーンの寵愛を受けた。詩集『ディーワーン』があり、飲酒や男色でもよく知られている［*EI*²: Abū Nuwās; アブー・ヌワース著『アラブ飲酒詩選』塙治夫編訳、岩波文庫、1988年］。

士もまた報いを受けた、ということである。

聖堂の驚異についてはこの程度のことを述べておこう。続いて、都市や城砦の驚異について言及しよう。

［第３章］　諸都市や諸地域について――アルファベット順に配列される

＜アリフ（al-alif）の項＞

「イーリヤー（エリヤ）（Īliyā）」は祝福された町である。「エリヤ」というのはこの町を造った預言者の名前である[65]。ARQYL という名の王がおり、その町にやってきた。［エリヤは］シナイの山に逃げた。［山は］ミスルの領域から４日行程のところにある。しばらくの間その山に隠れ、山の上に聖堂を１つ建てた。「エリヤの聖堂」という名で山の中腹にある。大きな広場があり、広場の中には木々や水路がある。シナイの山についてはすでに言及した[66]。

エリヤ［の町］は「聖なる家」[67] にある。それはダーウードが着工し、15 年かけてスライマーンが完成させた。毎年２万クッルの小麦や同じ量のオリーブが人夫に与えられ、10 万人の石工がおり、３万人の男たちが山から石を運び、７万人の男たちが鍬や斧を手に働いた。そうして装飾を施された石でもってそれ（聖なる家）は建設されたのである。内部は金で飾られ、そこには黄金のドームが添えられた。その後、40 アラシュある２本の銅製の柱が立てられ[68]、12 アラシュの扉と、銅製の泉亭が設置された。

その町には大理石の礼拝所（masjid）が１つ建てられ、天井や壁はルビーで、床はトルコ石で造られた。ディーヴや妖精（parī）が宝石を運び、完成させた。「敵対する者たちの鎖（silsila al-ḫaṣmīn）」が架けられ、不正を働く者（ẓālim）がその鎖に手をかけようとすると、鎖は上にあがり、手を触れさせなかった。一方、不正を被った者（maẓlūm）が手をかけようとすると、鎖は下におりてきて従うのであった[69]。

あるとき、ある人物が別の人物に預け物をしていたが、男は預かり品を（p. 177）１本の杖の中に入れてしまった。［2 人は］鎖のもとにやってきた。男は預かり品があることを否定した。［預けた方は］言った。「鎖に手をかけてみよ。」

否定した男は杖を相手（ḫaṣm）に渡し、手を伸ばして鎖を掴んだ。相手の男は叫んだ。「預けた品は彼のもとにあるはずだ！私のところには届いていないぞ。」

男は言った。「私のもとには品物はない。すでにおまえに渡したよ。」

やがて、ジブリール――**彼に平安あれ**――がダーウードのもとにやって来たので、［ダーウードは］この策略のことをジブリールに報告した。このような卑劣な策略を案じて、鎖は取り外された。

65）旧約聖書に出てくる預言者エリヤ（Elijah）のこと。町の名前の場合は、イェルサレムを指す。

66）本書第３部第５章「山の章」参照［本訳注（4）、524 頁］。

67）Bayt al-maqdis あるいは Bayt al-muqaddas は通常イェルサレムの地名として使われるが、ここではダヴィデやソロモンによって建てられた神殿を指すのであろう。

68）巻末注で īā 写本が正しかろうと述べているのに従う。

69）イブン・ファキーフは、「聖なる家」には、スライマーンの子孫以外の者が触れると手が焼ける「敵対者審判の鎖（silsilat qaḍā al-ḫuṣūm）」があったが、ブフトゥナッサルがそれを持ち去ったと伝える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 101–102］。

知れ。この礼拝所はブフトゥナッサル（Buḫtunaṣṣar）[70] の時代まで存続していたが、彼が破壊し、荷車数千台もの宝石をそこから持ち出したのである。

また次のように言われている。ティー沙漠に［現在見られる］大きさにその聖堂を建設したのは、ムーサー・ブン・イムラーン（モーセ）であった。そこにはイブラーヒーム――**彼に平安あれ**――の洞窟やシナイの山があり、礼拝所に近接している。両者の間には、「地獄の谷（Wādī-yi jahannam）」がある。その場所でイーサー――**彼に平安あれ**――は天に召された。使徒たちの墓はその場所にある。また、そこから1ファルサングのところには、ベツレヘム（Bayt al-laḥm）の町があり、イーサー――**彼に平安あれ**――はその地でマルヤムから生まれた。イブラーヒーム、イスハーク、ヤァクーブ、ユースフ、サーラー（Sāra）の墓はそこにある[71]。預言者――**彼に平安あれ**――のサンダルはその地にあり、「聖なる家」の導師（imām）のもとにある。

エリヤの町は、ウマル・ブン・アル＝ハッターブによって征服された町の1つである。

「アイラ（Ayla）」はユダヤ教徒たちの町である[72]。創造主は海の漁を彼らに禁じ、彼らをサルにした[73]。彼らのもとには、預言者〔スライマーン〕――**彼に平安あれ**――の約定書［があった］。［この町は］ファールスの海の岸辺にある。

「アンタキア（Anṭākīya）」はシャームにある町で、その地の建物は驚くべきものである。その1つに、1軒の家があり、「司祭たち［の家］（qissīsān）」と呼ばれていた。木で造られた「救世主（masīḥ）の聖堂」同様、それ以上に驚異的なものはないほどであった。

ヌーシラヴァーンがアンタキアにやって来たとき、［町を見て］驚愕した。引き返すと、［アンタキアの町と］同じ方法で町を建設した。町の名は「ルーミーヤ（ルームの町）（Rūmīya）」といった[74]。アンタキアの捕虜たちが［そこに］連れて行かれた。［捕虜たちは］町の中に入ると、［そこが］アンタキアだと思った。各々が自身の街区に向かったが、誰もその町が（p. 178）アンタキアでは〔ない〕とは気づかなかった。しかし、靴屋は別であった。というのも彼の家には1本のクワの木があったからである。その木が見当たらず、彼は戸惑った。館の中に入ると、自分の家とまったく同じであった。彼以外には誰も見分けられなかった[75]。

アンタキアの特性は、武具がさび付くことと、良い香りのものをその地に持っていくと変質することである。アンタキアはルームの海の岸辺にある。

70）聖書に登場する新バビロニアの王ネブカドネザル2世（在位前605–前562年）のこと。前597年と前586年に南ユダ王国に侵攻する。イェルサレムを破壊し、捕虜をバビロンに連行した。イスラームにおいては、聖書由来以外の複数の系統の伝承に登場する［*EI*²: Bukht-naṣ(ṣ)ar］。

71）これらの墓は、本書第6章で扱われている。なおサーラー（サラ）はイブラーヒームの妻。

72）紅海沿岸にある現在のアカバ。聖書に登場するエジオン・ゲベル（Ezion-geber）があった場所とされる。エジオン・ゲベルはソロモンの時代にユダヤ教徒の支配下に入った［*EI*²: Ayla］。

73）『クルアーン』7章163–166節を踏まえた話。前出。

74）本書において、「ルーミーヤ」はローマの町そのものを指すことが多いため「ルームの町」と訳出しているが、ここではサーサーン朝皇帝が建てた「ローマ風の町」のことなので、「ルーミーヤ」の名称にとどめる。

75）同様の記述がイブン・ファキーフの書に見られる［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 115–116］。この逸話は、258–260年にサーサーン朝のシャープール1世がアンタキアを征服した際、住民をジュンディー・シャープールに移したことを踏まえているのだろう［*EI*²: Anṭākiya］。

「トリポリ（Aṭrābulīs）」は栄えており、ルームの海の岸辺にある[76]。アフランジャ（Afranja）[77]やアウラース（Awlās）[78]同様、岩を用いて建設されている。

「ヨルダン（al-Urdun）」はシャームの大きな町である。その周囲にはスースィーヤ（Sūsīya）とサッフーリーヤ（Ṣaffūrīya）とタバリーヤ（Ṭabarīya）の町がある[79]。そこには1本の川がある。至高なるアッラーは、それによってタールート（Ṭālūt）の民[80]をお試しになった。「**本当にアッラーは、川であなたがたを試みられる**」［Q2: 249］**という至高なるアッラーのお言葉にあるのが、**このヨルダンの川である。ユースフの井戸はヨルダンにあり、ヤァクーブの住居は12ファルサング離れたところにある[81]。

「イスタフル（Iṣṭaḫr）」はファールスにある。スライマーンの国都（dār al-mulk）であり、彼の軍営地があった。イスタフルの宮廷には、1000本の金の支柱と1000本の絹の綱でもって彼の天幕が張られていた。ナウバ（nawba）[82]の度に、100の金の太鼓が100のラッパと100の金のシンバルとともに打ち鳴らされ、ジンや人間、猛獣や野獣や鳥といったあらゆる種族や動物たちが彼のもとに仕えた。世界の四方八方から王たちが彼のもとにハラージュ税を届け、世界各地から貢ぎ物がイスタフルに運ばれた。

風が彼の玉座をイスタフルから運び上げ、［スライマーンは］正午にはシャームに座し、午後の礼拝時にはイラクに、朝には［再び］イスタフルで玉座に座していた。世界中の王たちが彼の玉座の前に立ち控え、午前の間、ジブリールは右側で、死の天使（イズリヤーイール）は左側で、彼の頭上に立っていた。

預言者――**彼に平安あれ**――はファールスの人々について次のように言った。「**ファールスの人々は王や王の子孫であり、貴人や貴人たちの子孫である**。全世界は彼らに税を支払うが、彼らは（p. 179）誰にも税を払わない」と。またいわく、「世界が荒廃しても、ファールスは繁栄する。ファールスが荒廃すれば、世界中で繁栄は失われる。」

［ファールスは］ジャムシードやホスロウたち、そして世の支配者たちの場所である。

「イスファハーン」は祝福された町で、気候は穏やかである。そこの人々は明敏で、諸工芸で互

76）「トリポリ（Ṭarābulus）」はシリアとリビアにあるが、並べられている地名から判断して、ここで述べられているのはシリアの方であろう。本訳注（4）、520頁、注203参照。

77）一般に「（ア）フランジャ」は、フランク（ヨーロッパ）地方のことであるが、ここでは都市であるかのように記述されている。以下、このような例が散見される。

78）ルームの海の沿岸にあるイスラームの町で、タルスースの近郊にあり、ルームの人々が巡礼を行う2つの場所があったという。ミノルスキーの注釈では「エレウサ」と比定されているが説明はない［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 171（Minorsky comment, p. 149）; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 1, p. 282］。

79）これら3つの地名は、イブン・ホルダードベによる「ヨルダン地方」の記述に見られる。このうちタバリーヤは、ガリラヤ湖畔に位置しており、名はティベリウス帝にちなむとも伝えられる。温泉が有名であり、ナースィル・ホスロウはこの地を訪れ、ソロモンが造ったという浴場に入っている［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 78; *EI*²: Ṭabariyya; ナースィレ・フスラウ著「旅行記」森本一夫監訳『史朋』36、2003年、26–27頁）］。

80）旧約聖書のサウルのこと。ここでいう「タールートの民」とは、サウルに従ってヨルダン川を越えたユダヤの兵士たちで、渡河後ダヴィデ（ダーウード）がゴリアテ（ジャールート）に勝利したことが『クルアーン』2章249–251節に記されている。

81）タバリーヤ付近にあるこれらの場所については、イスタフリーが触れている［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 59］。

82）太鼓やラッパの音で礼拝の時を告げること。アッバース朝初期においてはカリフのみが行える権威の象徴であり、のちにカリフに許可を受けた者も行えるようになった［後藤敦子「10–12世紀における王権の象徴に関する一考察――太鼓の用例を中心として」『オリエント』42（2）、1999年、112–128頁］。

いに競い合っている。サイード・ブン・アル＝ムサイイブ（Sa‘īd b. al-Musayyib）[83] は言う。「もし私がクライシュ族の出身でなくとも、イスファハーンの出であれば、恐れることはない。」

この町はかつて「ヤフーディーヤ（ユダヤの町）（Yahūdīya）」と呼ばれていた。その礎［となる壁］が曲がりくねっている町で、丸くもなければ四角でもない。その理由は次のとおりである。イスカンダルは何度もそれを建てたが、［その都度］崩れ落ちた。彼は［城壁を］建て終えるまでは［故郷に］帰還しない、と誓った。しばらくして、1匹の蛇がその辺りを這い回っているのを見た。［イスカンダルは］蛇の這った跡に沿ってイスファハーンを建設した。［そのため］このように曲がりくねっているのである。

次のようにも言われている。ユダヤ教徒が聖なる家（イェルサレム）から追い出され、ブフトゥナッサルから逃れ［たとき］、聖なる家の土を持ち出し、世界中を巡ってその土で町を建設しようとした。イスファハーンに着くと、両者の土はよく似ていたので町を建設し、その名を「ヤフーディーヤ」とした。〔イスファハーンの人々は〕彼らの子孫である[84]。

［イスファハーンは］また、放蕩や遊蕩が多く見られる町である。その理由として次のように言われている。アポロニウスが1人の少年（ġulām）を連れてその地に到着した。人々はその少年をかどわかして、少年と男色行為にふけった。アポロニウスは呪いをかけ、彼らが放蕩と遊蕩にさらされ、彼らの道が破滅へと向かうようにした。

＜逸話＞

ある人がハサン・バスリーのもとへ行った。［ハサンは］尋ねた。「どこからきたのか？」

［男は］答えた。「イスファハーンからだ。」

［ハサンは］言った。「**逃亡とは、ユダヤ教徒やマギたち、そして支配に貪欲な人々から逃れることである。**」

＜逸話＞

次のように言われている。イスカンダルは諸地域や自らが建設した町々を巡り、（p. 180）狼藉者や吝嗇な者やならず者がいると、「私の町から出て行け」と言って追い出した。［そうした者たちは］すべてシャームやルームから追い出され、世界中をさすらい、ある場所にたどり着いた。その地は「ジャイ（Jay）」と呼ばれていた。彼らは〔「ゼンデ・ルード（Zanda-rūd）」[85] と呼ばれる〕水の美味な川を見つけ、町を建てた。それを「イスファハーン」と名づけ、そこに留まった。

こういったことについてはいろいろと語られている。**文責は伝え手にある。**

分別ある見地から言えば、［イスファハーンは］偉大な町であり、「イスラームの家（Dār al-Islām）」である。その地の人々は『クルアーン』読誦と集団礼拝をよく実践し、信仰のしきたりを遵守している。そこではあらゆる工芸において、その器用さで並ぶもののない人々がいる。放蕩者がいるとしても、信心深い者もまたそこにはいるのである。

83）メディナのハディース伝承者・法学者。没年には、712/3年他諸説ある［Ibn Ḫallikān, *Wafayāt al-a‘yān wa-anbā’ abnā’ al-zamān*, Beirut, Dār al-Jīl, n.d., vol. 2, pp. 375–378］。なお、以下に引用される言葉と同じものをイブン・ファキーフが引用している［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 262］。

84）イブン・ファキーフがほぼ同じ記述を伝える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 261–262］。

85）「ゼンデ・ルード（命ある川）」はザーヤンデ・ルード（命を生み出す／黄金の川）の別名。本訳注（4）、502頁参照。

イスファハーンの人々は吝嗇と結びつけられる[86)]。「イスファハーンに行き、40日滞在した者は誰しも吝嗇家になる」と言われている。

そこの土はやせている。あらゆる飢饉の兆しはその地から起こると言われている。

「アルメニア（Armanīya）」は、マギのゾロアスターが築いた町である。シーラーズも同様である。［ゾロアスターは］「ドゥルフシュ（Duruḫš）」[87)] と呼ばれる拝火殿をアルメニアに建設した。この町は、ウマル・ブン・アル＝ハッターブの時代に、ムハンマド・ブン・アル＝マスラマ・アル＝ファフリー（Muḥammad b. al-Maslama al-Fahrī）[88)] が征服した。恩恵に満ち、祝福された町である。

「アゼルバイジャン（Āḏarbayjān）」は、サームの息子のアル＝アスワドの息子のイーラーンの息子であるアーザルバード（Āḏarbād b. Īrān b. al-Aswad b. Sām）[89)] 王に関連する。アルダビールはこの方面にある。恩恵に満ちた町で、国都（dār al-mamlaka）である。その境域にはサバラーンの山がある。飢饉の少ない地方であり、もし［飢饉が］起こってもすぐに終息する。創造主は彼らに対して慈悲のまなざしを向けている。その地の人々は勇敢で信心深い。

「イスカンダリーヤ（アレクサンドリア）」は大きな町で、イスカンダルが築いた。アムル・ブン・アル＝アースは、「彼はイスカンダリーヤを300年かけて建設した。30年かけてそのモルタルが準備された」と言っている。アムル・ブン・アル＝アースはイスカンダリーヤの長官であった。彼は命じて、その地の人々を数えさせた。200万（p. 181）のコプト教徒がそこにおり、召使いとルームの男たちが4000人もいた。その他［の数］は想像が〔つくだろう〕。

イスカンダリーヤの長（アムル）はアブドゥルアズィーズ・ブン・マルワーン（‘Abd al-Azīz b. Marwān）[90)] に言った。「イスカンダリーヤは、300年かけて建設され、（p. 182）3000年間繁栄し、3000年間荒廃しました。70年の間、彼らは日中はブルカ布をかぶっていました。［宝石の］壁の輝きと光沢によって視力が奪われてしまうのを恐れていたのです。100年の間、宝石の輝きのために、夜でも灯りを手にすることはありませんでした。」

また次のように言われる。数々の建造物はフィールフースの息子のイスカンダル（Iskandar b. Fīlfūs）が築いたもので、双角の所有者であるイスカンダルによるものではない[91)]。

この町は海の中にある。諸門は水面で開き、大理石で造られている。巨大な柱と1本の灯台が水中からそびえ、その灯台の上には300の家がある。この灯台は600アラシュ［の高さ］であり、非常に遠くからでも見える。（p. 183）石の堰が造られ、壁のような支柱がその灯台の上部まで延びている。この灯台の上部は広がっている。［上部では］穴（窓）が下に向かって開いており、海を見

86）本書第3部の各地の特性に関する部分で、イスファハーンは「吝嗇」や「飢饉」と関連づけられている［本訳注(4)、513頁］。

87）アルメニアにある拝火殿の名で、設立者はマギの長とされる［*LN*: Duruḫš］。

88）正統カリフ・ウマルの時代に数回にわたってアルメニアを攻めたハビーブ・ブン・マスラマ（Ḥabīb b. al-Maslama）の誤りであろう［*EI*²: Armīniya］。

89）アゼルバイジャンを建て、その名祖として知られる人物［*EIr*: Azerbaijan］。曾祖父のサームは英雄ロスタムの祖父と同名だが関係は未詳。

90）ウマイヤ朝第4代カリフ、マルワーン1世の子（704年没）。マルワーンおよびアブドゥルマリク時代にエジプト総督であった［*EI*²: ‘Abd al-‘Azīz b. Marwān］。

91）前者の「イスカンダル」はフィリッポスの息子アレクサンドロスの意で、実在したアレクサンドロス大王（前323年没）を指す。後者の「双角の所有者イスカンダル」は主に『クルアーン』に見られる伝説上の人物である。同一人物とされることが多いが、ここは両者が別人とみなされていた一例である。なお、記述はイブン・ファキーフに基づく［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 71］。

下ろすことができる。大胆な者なら穴の縁まで行き、海を眺めることができよう。その図は左のページに描かれているとおりである［図］。

「アッラーン（Arrān）」[92]と「アラーン（Alān）」[93]と「サリール（玉座）（Sarīr）」[94]と「カブク（Qabq）」[95]は、互いに隣接した地域である。アッラーンからは金や銀、図像、宝石がもたらされる。マンドレイク草（yabrūj）はこの地からもたらされる。これは人の形をした植物で、赤いおさげ髪を持ち、致死性の毒物である。アッラーンは祝福され、恩恵に満ちた場所である。その地の人々は熱情的で信心深い。気候は穏和で、人々は勇敢である［図］。

「アンダルス（Andalus）」はマグリブの境域にある。その地における大きな町はコルドバ（Qurṭuba）であり、ウマイヤ家の手にあった。アンダルスは、ムーサー・ブン・ヌサイルの被護民であるターリク・ブン・ズィヤードが征服した。彼はこの地で多くの財を獲得し、スライマーン――**彼に平安あれ**――の食卓を手に入れた。それには見たこともないようないくつもの宝石が付いていた。ターリクは卓の1本の脚を外し、ワリード・ブン・アブドゥルマリク・ブン・マルワーンに送った[96]。

アンダルスの地方には多くの驚異がある。それらは、この本のさまざまな章で述べられよう。

ターリクがそこを征服した時代、アンダルスの王はイルヤーン（Ilyān）[97]であった。ターリクのもとには、1万2000隻のベルベルの船と1万6000人のアラブの騎兵がいた。イルヤーンはターリクと親交があった。彼はターリクの軍勢をアンダルスの船に乗せ、アンダルスに連れてきた。アンダルスの人々はそのことを知らず、報せが届いたときにはターリクもまたやって来ていた。［ターリクは］ターリクの山（ジブラルタル）に降り立ち、アンダルスを征服した。［ヒジュラ暦］92年（西暦711年）のことであった。そこは不信心者との境界である。

アンダルスの王たちは「ルズリーク（Luḏrīq）」や「カーミール（QAMYL）」と呼ばれる[98]。アンダルスは山の頂にある島であり、その頂は10ミール［の高さが］ある。そこの町は、シャーテバ（Šāṭiba）[99]、RAṬYH[100]、コルドバである。ミスルよりも［町の数は］多い。その地方［へ行くに］は、6ヶ月の道のりとなる。（p. 184）そこの人々は勇敢かつ聡明で、学識があり、礼節の徒である。

92）イスラーム時代には通常、コーカサス地方のアラス川とクル川にはさまれた地方を指す。前イスラーム時代には、東コーカサス、すなわち古アルバニアを指した［*EI*²: Arrān］。

93）北コーカサスのイラン系民族の名称で、1世紀から歴史に登場する。アラビア語史料では、“al-Lān” と表記されることが多い［*EI*²: Alān］。後出本文191頁の記述によると、「諸門の門（Bāb al-abwāb）」すなわちダルバンドがこの地方に含まれ、現在のダゲスターンの辺りを指す。

94）南ダゲスターンの地域名。この地域を支配していた王が「玉座の主（Ṣāḥib al-sarīr）」と呼ばれていたことにちなむ［*EI*²: al-Ḳabḳ］。

95）山の名称の場合は、コーカサス山脈を指す。本訳注（4）、526頁参照。

96）ビールーニーによると、ターリクがこの食卓を見つけたのは711/2年、食卓の一部がカリフのワリードに送られたのは714/5年のことであるという［Bīrūnī, *al-Jamāhir fī al-jawāhir*, pp. 143–144］。この食卓については、本書第6部の「アンダルスの宝」の項目でも述べられる。

97）ターリクのスペイン上陸を助けたセウタの支配者ユリアン（Julian）を指すのだろう［*EI*²: al-Andalus］。

98）「ルズリーク」は西ゴート族の王ロドリックのこと。転じて、アンダルス地方のキリスト教徒の王全般を指しても用いられるようになった［*LN*: Luẕrīq］。「カーミール」は、アンダルスでキリスト教徒の集団の長として任じられたqūmis（ラテン語ではcomes）の誤りか［*EI*²: Ḳūmis］。

99）現代のヴァレンシア地方に位置する都市ハティバ（Xativa）のこと［*EI*²: Sh̲āṭiba］。

100）サーデギー校訂本ではRAṬBHとなっているが、いずれにせよどの町のことか不明。

「アフワーズ（Ahwāz）」はフーゼスターンの町である。空気が悪く、1年間アフワーズに暮らす者は、その知力が衰える。モースルに暮らす者が力を増し、［穏和な］ハーシム家の者でも気難しくなるのと同様である。イスファハーンに行くと、けちで卑しくなるように、どの土地にもそれぞれの特性がある。アフワーズでは、子供たちを除き、血色の良い顔をした者はいない。商人やよそ者たちの中で血色の良い者は死んでしまう[101)]。この地には蛇や毒蛇や致死の毒をもつサソリがいる。それらは墓地に多い[102)]。

ザイド・ブン・ムハンマド（Zayd b. Muḥammad）はその地に行き、次のように証言している。「夜になると、私は何度も決意した。暑さと熱風と悲嘆ゆえに、水に身を投げて溺れ死んでしまおう、と。」

アフワーズは、ウマル・ブン・アル＝ハッターブのカリフ時代に、アブー・ムーサー・アシュアリーが征服した。

「ウーシュ（Ūš）」はマーワラーンナフルとトゥルキスターンの間にある町である[103)]。この地で死ぬと、その死体は動かない。たとえ大勢がその周りに集まったとしても、「神は偉大なり」と唱えるまでは［運ばれることを拒む］。「神は偉大なり」と唱えると動く。これは、ウーシュの特性の1つである。

「エラム（Iram）」は美しい宮殿である。それを建設したのはシャッダード・ブン・アード（Šaddād b. ʻĀd）である[104)]。**至高なるアッラーのいわく、「円柱の並び立つイラム（の都）のことを、これに類するものは、その国において造られたことはなかったではないか」**［Q89: 7–8］、［すなわちペルシア語では、神は］言った。「エラムを思い起こせ。そこには高い柱がある。諸国でそれと同じようなものはない。」

シャッダード・ブン・アードは、世界中にある金や銀や宝石をすべて集め、麝香とサフランで［エラムを］建造した。高楼のベランダを築き、その仕様には金を施した。黄金の木々を配し、果実は宝石でつくった。壮大な宮殿となした。その高さは500アラシュで、円形であり、500年を費やした。これを完成させるためにあらゆる財を送り込んだ。［シャッダードは］この町に入ろうとしたが、城門に足を踏み入れた瞬間に息を引き取った。そこに行くことはできなかった。

言われているところによると、東方にも西方にも、宝石は1つとして残らなかった。誰の耳にも耳飾りは残らなかった。なぜならシャッダードがそれらを奪い、［エラムの造営に］使ってしまったからである。とある地域で、とある娘が（p. 185）耳飾りをつけていると知らされると、［シャッダードは］人を派遣し、その耳飾りを娘の耳ごと切り落として持ち帰らせた。娘は泣き叫んで言った。「おお天空にいる神よ。眠っているのでなければ、私たちを助けてください。」

101）『世界の諸境域』に、「［アフワーズの］人々は黄色い顔をしている。アフワーズで暮らしている者は頭が足りなくなってしまう、と言われる」とある［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 130］。また、イブン・ホルダードベやヤークートも、アフワーズには頬が赤い人がまったくいないと伝える［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 170; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 1, p. 412］。

102）サーデギー本に従い、qattāla を省いて読む。

103）フェルガーナ地方の町。近郊にはウズケントの町がある。10世紀のウーシュはムスリムの東端の牙城の1つであり、堅牢な砦では兵士が異教徒のテュルク人を警戒していた［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 113; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 478–479］。

104）伝承によると、エラムはシャッダード・ブン・アードにより天国を模してアデン近郊に建設されたが、のちに、シャッダードの自惚れを罰するために暴風によって破壊され、砂に埋まったとされる。町の場所については、ダマスクスの辺りをヘブライ語で、“Arām” と呼んでいたことからダマスクスとみなす説や、アレクサンドリアあるいはイエメンに同定する説もある［*EI*²: Iram］。

創造主は1人の天使を遣わした。［天使は娘に言った。］「神は眠ってはいない。しかし、シャッダードの死は、おまえのその泣き声次第である。」

［娘は］シャッダードに対して叫び声をあげた。彼の肝は裂けて、死んだ。

次のようにも言われている。預言者フード（Hūd）[105] ——**彼に平安あれ**——が、シャッダードのもとにやって来た。［フードは］彼を［信仰へと］招いた［が、シャッダードは］背いた。シャッダードに対して天から大音声が下った。軍隊ともども彼は死んだ。彼も、彼の軍隊も、そして彼の後の者も誰1人としてエラムにはたどり着けなかった。そこへの道は人々には隠されてしまった。

＜逸話＞

次のように言われている。アブドゥッラー・ブン・キラーバ（‘Abd Allāh b. Qilāba）はラクダを求めてアデン（‘Adan）[106] を発ち、宝石でできた場所へと至った。そこの壁は炎のように光輝いていた。その一部を剥がし出そうと思ったが、できずに戻ってきた。彼はムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーンのもとに、いくつかのリンゴと木の実を持ってきた。木の実は黄色のルビーからできており、1つは麝香でできていた。それはまったく香りを放たなかった。ムアーウィヤが砕くと、そこから麝香の香りが立ち上った。ムアーウィヤは、カァブ・アル＝アフバールを呼んで尋ねた。「世界の中で、ルビーや黄金でできている場所をおまえは知っているか？」

［カァブは］答えた。「はい。それは、エラムです。」

［ムアーウィヤは］言った。「そこには誰も行っていないのであろう？」

［カァブは］答えた。「ムハンマド——**彼に平安あれ**——のウンマのうち1人を除いて、誰もいません。その人物というのは、あなたの前に立っているこの者のことで、エラムに行って、帰ってきたのです。」

ムアーウィヤはこの言葉に驚いて、言った。「ああ、よき人物がやって来たものよ。だが私にはその宮殿に入る手段がない。」

そうして1000ディーナールを彼に与えた[107]。

『クルアーン』解釈学の徒（ahl-i tafsīr）は、「円柱の並び立つエラム」はダマスクスであると言う。それについては「ダールの項」で述べよう。

「アフラーム（ピラミッド）（al-Ahrām）」[108] は壮大な宮殿である。イブン・ウファイル（Ibn ‘Ufayr）[109] は次のように言っている。この宮殿は、ジュバイル・アル＝ムータフィキー（Jubayr al-Mu’tafikī）（p. 186）が70年かけて7万人の大工でもって建設した。2体の青銅製のカニの上に2本の柱を建てた。それは、「2本のオベリスク（misallatayn）」と呼ばれている。この2本の柱には、

105）アードの民と預言者フードに関しては、本書第1部（本訳注（2）『イスラーム世界研究』第3巻1号、421頁、注58）を参照のこと。

106）アラビア半島の南海岸（現在のイエメン）にある町。伝承によると、アデンの建設者はしばしば、シャッダード・ブン・アードに帰せられる。このことからイラム（エラム）は、アデンかその近郊に位置しているとも言われている［*EI*²: ‘Adan］。

107）同様の話が『諸都市辞典』に見える［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, pp. 156–157］。

108）「アフラーム（ahrām）」はアラビア語の「三角錐（haram）」の複数形であり、通常ピラミッドのことを言う。だが以下の記述はカイロ近郊のギザなどではなく、イスカンダリーヤ（アレクサンドリア）にまつわるものとされている［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, pp. 184–185］。

109）この人物は、ターヒル朝のアブドゥッラー・ブン・ターヒル（844/5年没）がミスルで見た3つの驚異の中に出てくる学者で、本名は Sa‘īd b. Kaṯīr b. ‘Ufayr である［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 68］。

「私はジュバイル・アル＝ムータフィキーである。全身全霊をかけて私がこの町を建設した。アフラームにより私は疲弊した。私はそれを銅製のおおいで覆い、海中に置いた」と記されている[110]。

また次のように言われている。この2本の柱はバルカの山（Kūh-i Barqa）[111] からもたらされた。700年かけて切り出され、建造に用いられた。カトゥン・ブン・ジャールード（Qaṭn b. Jārūd）[112] という名の若者がいた。至高なる神が彼に授けた学識によって、その2本の柱をガラス製の2つのドームの上に据え置いた。その向かい側には銅製の2体の牛［の像］をつくった。そこには、次のように記されている。

「私はアジュナード・ブン・マイヤード[113] である。国中で石を集め、釘を打ち込み、兵士たちを集め、柱を設置し、宝を埋めた者である。このアフラームの宝は、終末のときにハマードという名の預言者のウンマに現れる。その徴が王国に現れるとき、サワードの諸王のうちの7人が5人となり、手に手に1000頭のラクダを連れてくる。この僧院の日付は、1400［年］である。」

500年が経ったとき、ルーマーン・ブン・タムナァ・サムーディー（Rūmān b. Tamna‘ Ṯamūdī）[114] がやって来て、一部を破壊した。アブドゥルアズィーズ・ブン・マルワーンは再建しようとしたが、ミスルの人々は次のように言った。「もし、彼らに属する男たちが連れてこられるなら、我々がこれを再建させましょう。」

2人の老人がやって来た。被り物を持ってきており、荷車の上においた。2頭の牛が力の限り［荷車を］引っ張った。歯が1本折れた。［それは］20ラトル[115] であった。

アフラームやイスカンダリーヤはこのような男たちが造ったのだと言われている。

「アブラク・ファルド（Ablaq al-Fard）」はタイマー（Taymā）[116] の要塞であり、シャームとヒジャーズの間にある。美しさと堅固さで知られている。この要塞に、サマウアル・ブン・アード（Samaw’al b. ‘Ād）[117] という名の王がいた。彼の誠実さはたとえ話にもなっている。

次のように言われている。ある者が、ダーウードの鎖帷子を彼に預けた。1人の敵がそのことを知り、［サマウアルに］鎖帷子を（p. 187）要求したが、［サマウアルが］彼に渡さなかったので戦いが生じた。［敵は］サマウアルの息子を捕らえて言った。「鎖帷子を渡さなければ、おまえの息子を殺すぞ。」

110）これに対応する文章が『諸都市辞典』に残されているが、「アフラームにより私は疲弊した（al-ahrām iḍnā-nī）」という一文はなく、内容もかなり異なる。『諸都市辞典』版の訳は、「白髪になることも老いも私を屈服させなかった時に（建設した）（ḥīna lā šayba wa lā haram aḍnā-nī）。そしてその（町の）宝をジュバイルの壺に入れた」である［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 184］。

111）サーデギー本に従う。校訂テキストではBRKM。「バルカの山」は本書の山の章には現れないが、「バルカ」についてはこの章の「バーの項」で後述される。

112）校訂テキストではWṮN b. DAWDだが、『諸都市辞典』の伝える、イスカンダリーヤに2本の柱を建てるための指揮をした人物名の表記に従う。彼はジュバイル・ムータフィキーのグラームであった［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 185］。

113）この人名に関しては、初期の地理書で正確に合致するものはない。ファラオ以前の支配者として登場するYa‘mur b. Šaddād b. Jannād b. Ṣayyād b. Šimrān b. Mayyād b. Šamir b. Yur‘aš という人名の要素の一部を流用したものか［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 185］。

114）『諸都市辞典』の表記に従う［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 185］。なお、サーデギー本では父親の名は「ヤムナァ（Yamna‘）」。

115）重さの単位。1ラトルは91ミスカールであり、ミスカールの値によって異なるが、12世紀のエジプトでの1ラトルは450グラム程度とされる［Hinz, *Islamische Masse*, p. 29］。牛の歯1本が9キログラムもあるほどに牛も老人も屈強ということを示すのだろう。

116）北アラビアのオアシス都市。紀元前8世紀から交易の中継地として機能していた［*EI*²: Taymā］。

117）アラブ人ユダヤ教徒の詩人。現存している詩は少ないが、彼の誠実さを伝える逸話は広く流布していた［*EI*²: Samaw’al b. ‘Ādīya］。以下の逸話については『諸都市辞典』参照［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 75］。

［サマウアルは］言った。「私は預かったものを渡すわけにはいかない。」

［敵は］彼の息子を殺したが、［サマウアルは］預かりものを決して渡しはしなかった。

アブラクを征服できた者はいないと言われている。

「ハマダーンの真っ白な砦（Qal‘a-yi abyaḍ）」。真っ白な砦（アブヤド）はハマダーンにある城砦で、シャフレスターン（Šahrastān）城砦の上にある。3つの要塞がシャフレスターンにあり、3つの要塞が真っ白な砦にある。この真っ白な砦はダーラー（Dārā）[118] がハマダーンに建設したものである。ダーラーは妻と娘をそこに連れていった。しばらく世界中を巡り、イスカンダルと何度か戦った。そして、彼（イスカンダル）に手紙を書いた。「多くの血が流れてしまった。全世界は私のものであった。おまえが奪ってしまい、私は傷を負っている。私の子たちは真っ白な砦にいるが、彼らを苦しめないでほしい。そうすれば私は財宝をおまえに送ろう。」

イスカンダルは返事を書いた。「王国はあなたに返す。私が奪ったものも返そう。」

ダーラーは承諾せず、ヒンドの王に手紙を書いた。「私に味方せよ。そうしてイスカンダルと戦おう。」

ダーラーには2人の宰相がいた[119]。［彼らは］互いに話し合い、次のように一致した。「国運（dawlat）はダーラーから離れ、運勢はイスカンダルに向いている。人々は苦しんでいる。私たちでダーラーを殺そう。そうすればイスカンダルは私たちにいくつかの地方をくれるだろう。」

そこで彼らは短刀をダーラーの腹に刺し、傷ついたままの状態で彼をイスカンダルのもとに送った。イスカンダルは嘆き、彼の頭を脇に抱え、言った。「ああ、イランの王よ。何が望みだ？あなたにそれを与えよう。あなたの傷を治そう。私にとってあなたは敬愛すべき人なのだ。」

［ダーラーは］言った。「おお、イスカンダルよ。私は王権については望みを失った。だがおまえに忠告をしよう。自らを偉大だと思うな。どれほどおまえの手に入ろうとも、自分のものだと思うな。私を教訓とするがよい。王国は私に残らなかった。おまえにもまた残らないだろう。私の娘、ロウシャナク（Rawšanak）をおまえにやろう。彼女を大事にしてくれ。若輩者を年長者の上には立てるな。」

そうして［ダーラーは］息を引き取った。イスカンダルは2人の宰相を捕らえ、言った。「おまえたちはダーラーに悪事を働いた。他の者たちにも良きことはしないだろう。」

［イスカンダルは］2人を吊るし、言った。「神に感謝を。なぜならダーラーは私の手で殺されなかったのだから。」

［イスカンダルは］イスタフルに行き、アンムーリーヤの母に手紙を書いた。「白砦（アブヤド）に向かい、ダーラーの娘を私のところへ連れてきてください。」

彼女（ロウシャナク）が（p. 188）イスカンダルのもとに連れて行かれると、［イスカンダルは彼女の］言葉を受け入れ、彼女はアンムーリーヤに連れて行かれた。

この砦は栄え、王たちの場所であった。

やがて、ブフトゥナッサルがこの要塞を破壊しようと企てたができなかった。そこでハマダーンとその地方の図を描くよう命じた。［図を］見るや、アルヴァンド［の山］の前に、砦よりも高

118）ここではアケメネス朝の最後の王ダレイオス3世を指す。より正しくは「ダーラー・ブン・ダーラー（Dārā b. Dārā）」。イブン・ファキーフやアブー・ドゥラフは、ダーラーはイスカンダルと戦った際に、自らの財産や家族を避難させる砦を築いたと伝えるが、その砦の名前は現れない［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 219; アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、26頁］。

119）この後の逸話については『王の書』参照［Firdawsī, *Šāh-nāma*, vol. 3, pp. 1580–1588, vol. 4, pp. 1589–1595］。ただしロウシャナクの話は細部に異同があり、彼女の処遇に関する箇所は言葉を補って訳出した。

い場所に堤を造るよう命じた。長い時間がかかった。アルヴァンドから来る水をその堤の中に集め蓄えた。［堤は］海のようになった。そこで命じてラクダと牛をその水の中に入れ、水をかき乱して堤を壊させた。［堤は］崩れ落ちた。水が砦に打ちつけ、要塞をなぎ倒した。白い砦のみが残った[120)]。その砦には1人の女がいた。地方の王であった。侍女に水を持ってくるよう言った。水は砦の縁まで来ていた。水をすくおうと金の水差しを沈めると、水は引いてしまった。［ブフトゥナッサルは］その砦を破壊することはできなかった。今もその跡が残っている。

＜バー（al-bā'）の項＞

「白［砦］（Bayḍā）」はバスラにある城砦である[121)]。ウバイドゥッラー・ブン・ズィヤード（'Ubayd Allāh b. Ziyād）[122)] が長い時間をかけて建設した。そこには不思議な図や彫像が施されている。

マダーイニー（Madāyinī）[123)] は［次のように］言う。［ウバイドゥッラーは］これを建て終えると、代官たちにそこを見張り、誰も中に入らないようにせよと命じた。1人のアラブ人がそこに入り、言った。「ウバイドゥッラーはこの砦の良さを享受しないだろう。」

男はウバイドゥッラーの前に連れて行かれた。［ウバイドゥッラーは］言った。「なぜそのようなことを言ったのか。」

［アラブ人は］言った。「**私は、しかめっ面のライオンと嘆き悲しむ犬と角を突き上げる雄羊を見た。これらはみな、戦いの予兆である。**」

数日後、バスラの人々はウバイドゥッラーを追い出した。［ウバイドゥッラーは］シャームに行き、白砦（バイダー）を楽しむことはなかった。

また次のようにも言われている。［ウバイドゥッラーが］白砦を建てていたとき、1人の男がそこにやって来た。壮大な建物を見ると、こう声をあげた。「**あなたがたは高地という高地に悪戯に碑を建てるのですか。またあなたがたは（永遠に）住もうとして、堅固な高楼を建てるのですか**［Q26: 128–129］。」

ウバイドゥッラーは気分を害し、言った。「次の章句は何だ？」

［男は］言った。「**あなたがたは暴力を振るうとき、暴虐者のように振舞うのですか**［Q26: 130］。」

［ウバイドゥッラーは］「おまえにやってもらいたいことがある」と言って、その男を放り出すよう命じた。そして、生きたまま彼を建物の中に埋めてしまった。白砦の柱の1つは彼の上に建てられた。結果として、［ウバイドゥッラーは］白砦を楽しむことはなかった[124)]。

120）アブー・ドゥラフもハマダーンの水攻めの逸話を伝えるが、攻め手はブフトゥナッサルではなくイスカンダルである［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、26–27頁］。

121）この項目の頭には、「バスラ（al-Baṣra）」という語が見られるが、バスラについては後出するので、ここでは不要と判断し省略する。本書では、ハザルにある「バランジャルの海」の項で「バイダー」という地名が見られるが［本訳注（4）、486頁］、ここでの「バイダー」はイラクの城砦名なので明らかに別のものである。他にはファールスとミスルに同名の地名がある［Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 1, pp. 529–531］。前出の「真っ白な砦（アブヤド）」同様、ここでも「バイダー」の意味する「白」と採る。

122）ウマイヤ朝初代カリフ、ムアーウィヤにバスラの統治を任されたズィヤード・ブン・アビーヒ（Ziyād b. Abīhi）の子。ホラーサーンとバスラの統治者に任じられたが、父同様シーア派やハワーリジュ派を手厳しく弾圧した。683/4年にバスラの有力者たちによって町を追い出されシリアへと向かう。第2次内乱の渦中、686年に戦死した［*EI*²: 'Ubayd Allāh b. Ziyād］。

123）クーファで活動した歴史家。没年は830年をはじめ諸説ある。200以上の作品を著したと伝えられ、多くのムスリム史家が彼の作品を参照しているが、ほとんど現存していない［*EI*²: al-Madā'inī］。

124）この話の典拠はイブン・ファキーフであろう［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 156］。

（p. 189）「バービル（バビロン）（Bābil）」は7つの要塞である。世界の不思議の1つはバービルである。

ウマル・ブン・アル＝ハッターブは、ファッルージャ（Fallūja）[125] の地主（dihqān）にバービルの様子を尋ねた。彼は言った。「［それは］7つの町であります。最初［の町］には館を建て、その中に大地の模型（ṣūrat-i zamīn）[126] を作り、そして川や小川を再現しました。ある地域の人々が反乱をおこした場合には、彼らが服従するまで、指でもって彼らの水を別の川に投じ、その後［服従すると］指でもって再度、水をその土地に戻したのです。次の町には、大きな池がありました。それぞれの部族から誰かがその中にブドウ酒を注いでも、誰もが自身のブドウ酒を飲むことができました。それというのも［ブドウ酒は］混ざることがなかったからです。3番目の町には、門に太鼓が吊るされていました。誰かの姿が見えなくなると、その太鼓を叩くのです。もし太鼓から音が鳴れば、いなくなった者は生きており、音が鳴らなければ死んでしまっていたのです。4番目の町には、鉄製の鏡があり、いなくなった者が死んでいるのか、生きているのか、病気なのかといったことがその中に映し出されました。5番目の町には、町の入り口に銅製の水鳥がありました。密偵がそこを通ると、水鳥が声を上げ、町の人々が彼を捕らえるのです。6番目の町には、2人の裁判官がいました。彼らは水の上に座し、敵対する2人がそこに来ると、嘘をついた方が水に沈みました。7番目の町には、銅で作られた大きな木がありました。そこにはたくさんのスズメがいました。その木の幹には影が及ばなかったのですが、しかし人が1人でもその下に行けば、1000人までは［木は］影を与えたのです。ですが、もし1000人より1人でも多くなると、全員が日光にさらされました。」

知れ。バービルは美しい場所であり、水は美味で、空気は温暖で心地よく、そこには安らぎがあった。［だが］彼らは叛き、圧制を行った。彼らの王はイスカンダルであった。彼は世界を手に入れ、いかなる王もなし得なかったほどの富や財を築き、「闇の世界」に入り、カーフの山へと至り、ゴグとマゴグの防壁を築いた。創造主は雲を彼に侍るものとしたので、イスカンダルは雲の背に座して敵の上に闇をつくり出し、勝利を収めたのであった。イスカンダルが死ぬと、バービルの人々は言った。「帝王たることとはまさに彼にこそ備わっており、王国とは（p. 190）まさに彼のもとにあり、富とはまさに彼のもとにあったくらいのものを言う。イスカンダルが［さらに］得るものは死をおいて他になかったのだ。［彼の死は］我々にとってなんと悲しいことであろうか。」

［バービルの人々は］諸事より手を引き、自らを去勢し、子作りや婚姻をやめた。建物は崩れ、バービルの地方には何もなくなってしまった。彼らの死に際して水があふれ出し、彼らの地方は水に浸り、町々は水に沈んだ。この7つの町は痕跡をとどめなかった。

さて、バービルはイラクの中心であり、イラクは世界の中心である。バービルはコンパスの支柱のようなものである。最初はアシュカーン家（Aškāniyān）[127] の諸王の支配地であり、その後、ア

125）ユーフラテス川西岸に位置するイラクの町。

126）7つの町に関する記述は『諸都市辞典』のものとほぼ同じであり、ここではその表現に拠った［Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, pp. 310–311］。

127）歴史的にはアルサケス朝パルティア（前250年頃－後226年頃）を指す。アルサケスに率いられたイラン系遊牧民 Parni 族はセレウコス朝領内にあったイラン東北部の Parthava 地方に侵攻して拠点とし、現在のイランを中心にイラク、アフガニスタン、タジキスタン、パキスタンなどを含む広大な領域を支配した。頻繁に対外遠征を行ってセレウコス朝やバクトリア、さらにローマ帝国と覇権を争った。最終的にアルダシール1世（サーサーン朝の建国者）の反乱によって滅亡する［*EIr*: Arsacids］。イラン古来の伝説では、カヤーン家に続く「諸部族の王たちの時代」の王家として、初代のアシュカーン（Aškān）にちなむ「アシュカーン家」の名が使用され、ここ

ルダワーン（Ardawān）[128] の諸王が、そしてサーサーン家の諸王、それからアッバース家の諸王［の支配地となった］。水車の輪板が心棒を軸に回るように、世界はバービルを［中心に］まわる。彼らにはどの民よりも美点がある。

［バービルは］ザッハークが1000年に1日足りない期間で建設した[129]。彼は暴君であり、血に飢えていた。最後はアーファリードゥーンが彼を破滅させたのであった。カルビーは言う。「バービルの幅は12ファルサングであり、ユーフラテスがそこを通る。1万2000の宮殿がその中にあったが、イスカンダルがそれらを破壊した」と。ギリシア人の言葉ではバービルは「木星（muštarī）」と呼ばれている[130]。7つの町はこのようになっている［図］。

「パフラヴィー家[131] の町々（Bilād al-Bahlawīya）」は、アゼルバイジャンの境域からファールスの地の端やスィースターンやマーワラーンナフルに至るまで数多くある。パフラヴィー家の町々の中心点はコヘスターンであり、コヘスターンの中心はハマダーンである。またファールスの中心はイスタフルであり、［それは］ホスロウたちの居所である。

次のように言われている。中国の王ファグフール（天子）はイランの王アーファリードゥーンに次のような手紙を送った。「1000人の王が我が軍にいる。太陽は我が方角から昇り、1000の寺院があり、各寺院には、アーファリードゥーンの王国にあるくらいの財宝がある。我が領域には、金、銀、ラピスラズリ、宝石の鉱山があり、木はナツメや白楊、植物はヒヤシンスやサフラン、石は琥珀があり、人々は妖精の顔をしている。国中を探しても醜い者はおらず、みな色白の黒髪で、天使の姿をしている。工芸は錦織りやミクラーディー織りやマリキー織り[132] である。中国からジャイフーンのほとりまでが我が王国である。」

（p. 191）アーファリードゥーンは返書を送った。「おまえはなんと大げさに言うことか。パフラヴィー家の町1つでさえも、中国（Čīn wa Māčīn）の王国全体よりもすばらしいというのに。世界中から地税はイランへと送られる。我々の下僕はすべてホータンや中国の者たちからなっている。パフラヴィーの町々からは誰1人として中国の下僕とはなっておらぬ。おまえの言う鉱山は、私の領域にはもっと多く存在する。おまえたちの仕事は錦織りだ［と言う］が、色［付け］や図案や染め付けや髪結いといったものは、女の仕事である。おまえはまるで高慢なクジャクのようだ。［羽の］色以外にはどんな美点もない。たとえ太陽がおまえの方角から昇るにしても、何もおまえたちのために昇るのではなく、我々の地域を目指して昇ってくるのである。おまえたちは、他の者たちも受けている恩恵の一部を受けているにすぎない。おまえが世界の端を得るにせよ、私は世界の中心を握っているのだ。爪は体から遠くにあるが、心臓は体の中心にあり、［心臓こそが］帝王で

でもそのような神話的な歴史認識に基づいて語られている。

128）歴史的にはパルティア王アルタバヌス1世から同5世までを指すが［*LN*: Ardawān］、伝説上では「諸部族の王たちの時代」の後半を占める一族で、先のアシュカーン家とは異なり、「アシュガーン（Ašǧān）家」と呼ばれることのある一族を指す。

129）バービルはザッハークによって建設され、彼の1000年に及ぶ統治に1日半満たない期間君臨したと言われる［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 86; Ibn Ḫawqal, *Kitāb ṣūrat al-'arḍ*, p. 244; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, p. 309］。

130）『諸都市辞典』の「バービル」の項参照［Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, p. 310］。

131）中世ペルシア語であるパフラヴィー語を使用したサーサーン朝を指すものと思われる。ここではそのまま「パフラヴィー」と訳す。アラビア語の地理書類において、ハマダーンが「パフラヴィーの町々」の中心地であることは一致するが、イブン・ホルダードベはレイやイスファハーンが含まれるとしているのに対し、イブン・ファキーフやムカッダスィーは含まれないとする［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 57; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 209; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 386］。

132）これらの織物は、『四つの講話』の中で高価な布地として名前が挙げられており、当時知られたものだったのだろう［ニザーミー著『ペルシア逸話集　四つの講話』黒柳恒男訳、平凡社、1969年、221頁］。

ある。目の外側には血液や皮膚があるが、視覚は内側にある。寺院をなぜ誇るのか。それら［の財宝］は私のために集めているのであろうに。ナリーマーン（Narīmān）[133] を派遣し、それらを私の国に持ち帰らせよう。」

ナリーマーンはすべてを取り上げ、ファグフールを捕らえ、パフラヴィー家の領土に持ち帰った。

「諸門の門（ダルバンド）（Bāb al-abwāb）」はアラーン地方にある[134]。タバリスターンの地に至るまでの110の門がムスリムの手中にあり、250の門がテュルクたちの手にある。全部で360の門がある。この［諸門の門の］上には花崗岩による砦が築かれ、水中から突き出している。海水が上昇すると、塔は水中に隠れてしまうが、水位が下がると塔の先端が現れ、見えるようになる。この諸門の門は7ファルサング［におよび］、7行程にわたって築かれており、1行程ごとに町が建設されている。各部族の務めとして衛兵が置かれ、門を警備している。あるものは「スールの門（Bāb-i Ṣūl）」と呼ばれ、あるものは「アラーンの門（Bāb-i Alān）」と呼ばれている。また、「シャーブラーンの門（Bāb-i Šābrān）」、「ラズキーの門（Bāb-i Lāzqīya）」、「黄金の玉座の所有者の門（Bāb-i ṣāḥib al-sarīr al-ḏahab）」、「バーリカの門（Bāb-i Bāriqa）」、「サムサヒーの門（Bāb-i Samsaḫī）」、「フィーラーン・シャーの門（Bāb-i Fīlān-šāh）」、「タバルサラーン・シャーの門（Bāb-i Ṭabarṯarān-šāh）」、「イーラーン・シャーの門（Bāb-i Īrān-šāh）」［などがある］[135]。それらはクバード大王（p. 192）が建設した。諸門の後背には360の町がある。あるものは「スールの門」と呼ばれ、あるものは「アラーンの門」、またあるものは「ジハードの門（Bāb al-jihād）」と呼ばれている。ジハードの門の上には2本の石柱があり、2頭のライオンの形をしている。その向かいには、2頭の雌ライオンの形をした2つの石があり、そのそばには1体の男の石像がある。石像の両足のあいだには1匹のキツネがおり、1房のブドウを口にくわえている。「権力の門（Bāb al-imāra）」の上には2匹の犬の石像がある。

「ブルガール（Bulġār）」は広大な地方である。そこには3つの大きな町があり、1つは「サワール（Sawār）」、もう1つは「ブルガール（Bulġār）」、3つ目は「イティル（Itil）[136]」［である］。ブルガールの周囲はすべて、テュルクの不信心者たちが暮らしているが、創造主――**讃えあれ**――は、その区域を不信心者たちの中でお護りになっている。ブルガールに座す王は双角の所有者（イスカンダル）の子孫である。双角の所有者は「闇の世界」から戻ると、ブルガールに留まって居を定め、この世を去ったと言われている。ブルガールの人々は熱情的であり、勇敢で信心深く、うぬぼれや愚かさとは無縁で、好ましい性格をしている。イスラームの人々は、祈りで彼らを援助すべきである。

「ビスターム（Bisṭām）」は祝福された町である[137]。その特徴は、そこでは誰も愛に溺れないこ

133）『王の書』に見られるサームの父で、ロスタムの曾祖父にあたる人物。

134）ダルバンド（現在のロシア・ダゲスタン共和国のデルベント）はカスピ海西岸の港であり、古くから知られた要塞都市である［*EI*²: Bāb al-Abwāb］。

135）これらの門の名称は校訂テキストでは判読し得ないので、イブン・ホルダードベの表記に従った［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, pp. 123–124］。なお最後から2つ目は、テキストでは「タバリスターンの門」である。

136）校訂本ではASLとなっているが、サーデギー本に従い「イティル（Itil）」と読む。イティルについては、川の名称として既出［本訳注（4）、498–499頁］。

137）現在のイランのセムナーン州にある町。「バスターム」とも呼ばれる。なお、アブー・ドゥラフがほぼ同じ情報を伝える［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、36頁］。

とである。誰かを愛している人がその町に入ると、彼の愛情は冷める。ビスタームの水は苦く、口臭に効果があり、痔が癒える。ビスタームでは眼病が少なく、マンガンが採れる。この町の特性の1つは、使徒――**彼に平安あれ**――の町（マディーナ）のように、良い香りが立ち込めることである。だがそこには小さくて跳ねる蛇や有害なハエがいる。町の人々は品行方正である。

「バスラ（al-Baṣra）」は大きな町である。非常に繁栄し、名高い。ウマル・ブン・アル＝ハッターブの時代に造られた。それ以前は、「ヒンドの地（zamīn-i Hind）」と呼ばれていた[138]。ウトバ・ブン・ガズワーン（‘Utba b. Ġazwān）[139] はそこに陣を張り、（p. 193）800人の男を使って木材で［町を］建設した。その後、日干し煉瓦を用いて築いた。マフディー（Mahdī）[140] の時代になると、［建物が］増えた。よそ者がバスラに滞在すると、必ず麻痺（fālij）が起こる。

ウトバ・ブン・ガズワーンは言う。「バスラの征服は次のようであった。我々は、軍を率いて［バスラを］目指した。我々がウブッラ[141] に到着すると、バスラの住民は逃げ出した。我々のところには女たちがいた。彼女らに旗を持たせ、我々の後ろについて土を空中にばら撒くよう命じた。［バスラの住民は］船に乗り込んだ。我々は戦い、ついに彼らは敗走した。我々は、バスラの住民に『どうして逃げ出したのか』と尋ねた。彼らは言った。『あなた方の後ろで大きな土埃が立ちのぼっていました。人々は、「大軍だ。増援が来たのだ」と言いました。これが、我々の敗走の理由です。』」

ウトバは、バスラを［ヒジュラ暦］17年（西暦638年）に築いた。バスラで最初に生まれたのは、アブドゥッラフマーン・ブン・アビー・バクラ（‘Abd al-Raḥmān b. Abī Bakra）[142] である。

バスラにはいくつかの別名がある。「ハルビーヤ（Ḥarbīya）」「バスィーラ（Baṣīra）」「タドムル（Tadmur）」「ムータフィキー（Mu’tafikī）」などである。アブー・ムフリス（Abū MḤLS）[143] は、「バスラ［の名前は］2度変わった。3度目もあるだろう」と言っている。

＜逸話＞

次のように言われている。アリー・ブン・アビー・ターリブはバスラを征服し、フトバの中で「**おお、サムードの民の生き残りよ。おお、あの女の部隊よ**」と言った。すなわち、「おお、アーイシャの軍よ。おまえたちはラクダの鳴き声を聞いて、その従者となった。ラクダを不能にされたので、おまえたちは敗走したのだ[144]。」

138）マスウーディーによると、ウトバはバスラに入って以来、そこを「ヒンドの地」と呼んだという［al-Mas‘ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, pp. 357–358］。

139）ムハンマドの教友で、最も初期に改宗した信者の1人（638年没）。ウマルの時代に下イラクに派遣され、ウブッラを略奪し、ユーフラテス（後のバスラ）の王を殺害した。635年末ごろ、フライバ（Ḫurayba）と呼ばれる場所に陣営を築き、後にこれがバスラの町の中核となった［*EI*²: ‘Utba b. Ghazwān］。

140）アッバース朝第3代カリフ（在位775–785年）。

141）バスラ近郊の町。本訳注（4）、499頁も参照のこと。

142）テキストでは父の名は「アブー・バクル」となっているが、バスラで最初に生まれたのはアブドゥッラフマーン・ブン・アビー・バクラ（アブー・バクルとは無関係）だとバラーズリーがやイブン・ファキーフが伝えていることを踏まえる［バラーズリー著「諸国征服史18」花田宇秋訳『明治学院論叢』566、1995年、103頁; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 188］。

143）Iā 写本では Abū BḤLR、ma 写本では Abū MḤKR、サーデギー本では Abū al-Maḥāsin となるがいずれも未詳。『諸国征服史』で、バスラの名前についての記述が引用されている歴史家アブー・ミフナフ（Abū Miḫnaf, 774年没）の誤りかもしれない［バラーズリー「諸国征服史18」（花田訳）、90頁］

144）この逸話は「ラクダの戦い」の出来事を記しているのだろう。656年、アーイシャはズバイル・ブン・アウワーム、タルハらとともにバスラでアリーに対する兵を挙げた。反乱はあっけなく鎮圧され、ズバイル、タルハは戦死、アーイシャはメディナに連れ戻された。なおサムードは、アッラーの怒りを買って滅ぼされたアラブの部族であり、預言者サーリフに岩からラクダを出すよう求め、ラクダが出るとその膝の腱を切って殺し、預言者を嘘

天から最も離れた土地はバスラである。どの町よりも早く荒廃する。バスラの住民の欠点として、次のことがよく言われる。アーイシャ――**アッラーが彼女に満足されますように**――がアリーとの戦いのためにやって来た。彼女はラクダに乗っていた。ハウアブ（Ḥaw'ab）[145] に着いたとき、1匹の犬がアーイシャに向かって吠えた。彼女は言った。「ここは何という場所なの？」

彼らは答えた。「ハウアブです。」

すると彼女は言った。「追い払って。追い払って。だって私は、使徒が女たちにこう言っているのを聞いたのよ。『**おまえたちの誰に向かってハウアブの犬は吠えるだろうか**』と。（p. 194）私は、それが自分であることを恐れるわ。」

そして、彼女はラクダの方向を変えた。バスラの住民のうち50人の男が「ここはハウアブではない」と嘘の証言をした。

また、バスラの住民は吝嗇家だと言われる。それは、「おまえは肉を食べる」と言って旅人を町から追い出し、ソラマメ売りを、「私たちの子供にソラマメを食べるという無駄遣いを教えるなんて」と言って追い出してしまったほどである。

バスラに居を定めた王は1人もいなかった。ダーラー・ブン・ダーラー（Dārā b. Dārā）[146] はアンバール（Anbār）[147] の町に、ブフトゥナッサルはバービルに、ホスロウはマダーインに、バフラーム・グール（Bahrām-gūr）[148] はハワルナクに、カーブース（Qābūs）とイヤース・ブン・カビーサ（Iyās b. Qabīṣa）[149] はヒーラに、ジャムシードとスライマーンと MRAN はみなファールスに［居を定めている］。

「バグダード（Baġdād）」は偉大で祝福された町である。カリフたちによる栄華がある。「イスラームのドーム（Qubba al-Islām）」であり、正統なるカリフたちの居所である。その住民は世界中で最も聡明な人々である。子供でさえも、他の町の老人ほどに明敏である。バグダードの人々はどの技芸においても切磋琢磨している。

バグダードを築いたのはアブー・ジャァファル・アル＝マンスールである。アリー・ブン・ヤクティーン（'Alī b. Yaqṭīn）は次のように言っている[150]。「私はマンスールと一緒にバスラにいた。彼は町を建設する場所を探していた。修道院があり、そこで1人の隠者が私に尋ねた。『この王は、行ったり来たりして何を見つけようとしているのか？』

つき呼ばわりしたことが『クルアーン』7章73–78節などに見られる［「ラクダの戦い」「サムードの民」『岩波イスラーム辞典』］。

145）バスラ近郊に位置した水場。マスウーディーやヤークートが同様の逸話を紹介している［al-Mas'ūdī, *Murūj al-ḏahab wa ma'ādin al-jawhar*, vol. 3, Beirut, Publications de l'université libanaise, 1965–1979, pp. 102–103; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 2, p. 314］。

146）アケメネス朝最後の王ダレイオス3世を指す（前掲注118参照）。

147）イラク北部、ユーフラテス西岸の町。サーサーン朝時代にはフィールーズシャープールと呼ばれた。ネストリウス派キリスト教徒やユダヤ教徒の中心地でもあった。アッバース朝のアブー・アル＝アッバースはここを拠点としたが、バグダード建設の後は衰退した［*EI*²: al-Anbār］。

148）バフラーム5世とも呼ばれる。サーサーン朝の皇帝の1人で、ヤズダゲルド1世の息子［*EIr*: Bahrām (2)］。

149）タイイ族出身のアラブ人。ラフム朝のヌゥマーンがムスリムに倒された後、サーサーン朝の援助を受けてヒーラを支配した［*EI*²: Lakhmids］。

150）バグダード建設に至る同様の経緯をタバリーが記録している。また、『諸都市辞典』では同様の逸話がアリー・ブン・ヤクティーンから伝えられたものとされている。この人物はハールーン・アル＝ラシードの側近であったようである［Abū Ja'far Muḥammad Ṭabarī, *Tārīḫ al-Ṭabarī*, vol. 4, Beirut, Mu'assasa 'Izz al-Dīn, 1987, p. 310; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, pp. 458–459; al-Mas'ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, p. 346］。

私は言った。『彼は町を建設しようとしているのだ。』

彼は言った。『彼は何と呼ばれているのか？』

『アブドゥッラー・ブン・ムハンマドだ』と私は答えた。

『彼の尊称は何か？』

『アブー・ジャァファルだ。』

『彼の称号は何か？』

『アル＝マンスールだ。』

すると彼は言った。『私が書物から得たものとは違うぞ。［書物によると］この町を建設するのは、「ミクラース（Miqlāṣ）」という名の男だ。』」

アリー・ブン・ヤクティーンは言う。「私はマンスールに伝えた。たちまち彼は下馬して、跪拝し、言った。『私の母は、子供の頃、私をミクラースと呼んでいた。それは、私が乳母の紐を盗んだからだ。私の近所に泥棒がいて、彼の名はミクラースだった。それゆえ、女たちは私をミクラースと呼んでいたのだ。今まで、人からこの名で呼ばれることはなかったが。』

そこで杭を打ち込み、そこに縄を張り、(p. 195)［それを］一周させて円を形作った。こうしてバグダードは建設された。」

［マンスールは］水を得るための水車をつくり、「楽園の宮（Qaṣr al-ḫuld）」を建て、橋を造った。玉座に座すとき、占星術師が星めぐりを見たところ、太陽は人馬宮にあった。［占星術師は］「これは、いかなるカリフもこの町で死ぬことはない、という証です」と言った。

イマーム・アフマド・ブン・ハンバル（Aḥmad b. Ḥanbal）[151] ――**彼にアッラーの慈悲あれ**――は、「**バグダードから出ると、世界全体は村にすぎない**」と言っている。

だが、バグダードの悪口を言う者もいる。それは次のようなものである。「バグダードは4ファルサングの広さがあると言われるが、1ミールごとに1000人の男が、つまり全体で2万4000人が敵から町を守るために必要となる。給料は1人につき10ディルハムとして、毎日24万ディルハムが必要である。仮に1ヶ月その状態であれば、莫大［な出費］である。好まれる町とは、サマルカンドやブハーラーやルームの町々のように、彼らの生活手段が町の中にあるものである。バグダードの浴場は6万軒を数える。それぞれの浴場に4人の番頭がいるとすると、全部で24万人である。他の人々はどれほどになろうか。」

「ブハーラー（Buḫārā）」は幸福な地である。世界中でブハーラーより美しい地方はない。そこの城砦に登ると、世界中が緑に見える。空がまるで緑の絨毯の上に張られたドームのように思え、その中にある砦はガラスのようにきらめいている。ブハーラーの住民は勇敢で、偽善がなく、節度を保つ。この地方では公正が行きわたっている。彼らは進んで公正に手を貸し、不正を自らに近づけることがない。傑出した学識者たちはこの地から現れた。『真正集（*Jāmiʻ-i ṣaḥīḥ*）』を著したイマーム・アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ブン・イスマイール・アル＝ブハーリー[152] のみを挙げるとしても、世界に誇る学者として十分である。彼らの特産品はブハーラー産の布や台（taḫt）であり、すばらしいナシがある。

151）四大法学派の1つ、ハンバル学派の祖。ハディース学者でもあり、法源としてハディースを重要視した［「イブン・ハンバル」『岩波イスラーム辞典』］。

152）ブハーラー生まれの著名なハディース学者（870年没）。スンナ派ハディース集六書の1つに数えられる『真正集』を編纂した［「ブハーリー」『岩波イスラーム辞典』］。

「バルフ（Balḫ）」は吉兆で讃えられた町である。バルマク家（Barāmika）[153] の地である。名高く、寛容な土地である。この町の美点の1つは「ノウバハールの城砦（Qal‘a-yi Nawbahār）」であるが、それについては「ヌーンの項」で記そう。（p. 196）ウスマーン・ブン・アッファーンの時代に征服されるまで、バルフの住民は偶像崇拝者であった。今では人々は信心深く、熱狂的かつ積極的にイスラームのしきたりを遵守している。彼らは信仰のスローガンを確固として抱き、聖戦を行う。テュルクたちに近いところにあり、純粋な信仰心を持っているが、テュルク人の荒々しさも彼らにはある。ジャイフーンの川はこの町から12ファルサングの距離にある。バルフの特産品は、すべてヒンドゥスターンからもたらされる。

「バルダゥ（Barda‘）」はアルメニアの境にある町で[154]、カブクの山にまで至る。ラクズ（al-Lakz）[155]、アッラーン、ルーム、バルダゥの王国は、クバード大王が建設した。アッラーン地方にはバルダゥより大きな町はない。ティフリースとバルダゥでは地震が多い。そこにはハシバミがたくさんある。

「バッズ（Baḏḏ）」はアラスの川岸の町である[156]。ホッラム教徒[157] のバーバク（Bābak）[158] がこの地にいた。［彼は］偉大な王で、マギの王の1人であった。ムゥタスィム・ビッラー（al-Mu‘taṣim bi-llāh）[159] の時代になり、［ムゥタスィムが］彼を殺害した。拝火教徒たちは、救世主はバッズから現れる、と主張している。

ここには世界中で最良のザクロやイチジク、干しブドウがある。窯の中で乾かされるが、それは日光が少なく、いつも曇っているためである。この町には5000の修道院があるが、荒廃している。ラッスの民（aṣḥāb al-Rass）[160] のものである。

ジャールート（ゴリアテ）の軍勢はバッズから来た[161]。ジャールートの墓はバッズにある。ジャールートはダーウードが殺した。そこには塩辛い小さな海があるが、いかなる生きものも住んでいない。

153）アッバース朝カリフ、ハールーン・アル＝ラシード時代に宰相として重用されたイラン系の家系。「バルマク」は、バルフ近郊のノウバハールにあった仏教寺院の神官の称号とされる［*EI*²: al-Barāmika; 「バルマク家」『岩波イスラーム辞典』］。

154）バルダゥについては本訳注（4）、511頁、注147を参照のこと。

155）コーカサスにある地方の名称［*EI*²: al-Ḳabḳ］。

156）アラス河畔にある町。アブー・ドゥラフはバッザイン（al-Baḏḏayn）と呼んでおり、以下の記述はアブー・ドゥラフのものと共通する［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、12–13頁］。

157）マズダク教徒そのものか、もしくはマズダク教の流れを受けた反アラブのイラン系諸集団。マニ教の影響を受け、光と闇の二元論や輪廻転生を信じるとも言われている［「ホッラム教」『岩波イスラーム辞典』］。

158）ホッラム教徒による反アッバース朝運動の指導者（838年死去）。アゼルバイジャンの旧都バッズにおけるホッラム教指導者ジャーウィーザーンの後継者として、816/7年から20年にわたって反乱を指導した。アッバース朝の第8代カリフ・ムゥタスィムが派遣したアフシーン率いる軍勢に敗れ、サーマッラーで刑死した［*EI*²: Bābak］。

159）アッバース朝第8代カリフ（在位833–842年）。即位前から、アナトリアでの軍事活動における才能とエジプトでの支配者としての能力を評価されていた。即位後、数多くの軍事遠征を行う一方、サーマッラーを建設してバグダードから遷都した［*EI*²: al-Mu‘taṣim bi-llāh］。

160）『クルアーン』25章38節、50章12節に見られる民。その居場所については不明［*EI*²: Aṣḥāb al-Rass］。

161）『クルアーン』2章249–251節に、ダーウードが彼と戦い勝利したことが記されている。巨人のアード族やサムード族などと結びつけられる［*EI*²: Ḏjālūt］。アブー・ドゥラフは、彼の墓がイラン北西部のウルミエにあると伝える［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、13頁］。

「ブーリス（Būlis）」はマグリブの領域にある町である[162]。海岸に建てられ、城壁は1000アラシュ［の長さ］である。その町とアンダルスの間は6ファルサングである。［その町は］ロスタム・ザールの子孫の手中にあり、人々はこの王を「信徒の長（amīr al-mu'minīn）」と呼んでいる。この地方には「ベルベル（Barbar）」と呼ばれる場所があるが、それについてはルービーヤ（Lūbīya）[163]の町の項で述べよう。

「バァルバック（Ba'lbakk）」はシャームの町である[164]。その礎は世界の驚異の1つである。［それは］石で造られているのだが、それぞれの石は、一片の幅が20アラシュ、厚さ10アラシュ、長さは45アラシュもある。（p. 197）これほどの石を1つずつ積み上げ、針の通る隙間もないほどに端をぴったりとあわせている。まるで城壁が1枚の岩のようである。これは驚くべきことである。どれほどの時間をかけて造ったのか、このような石をどうやって運び出したのか、［これを造った］人々はどのような種族であったのか、またどれほどの力を持っていたのだろうか。

「パンジュヒール（Panjhīr）」はヒンドとホラーサーンの間にある町である[165]。そこには堕落した者たちがいる。ホラーサーンに比べると、ヒンドゥスターンとより密接に関係している。

「ブスト（Bust）」はイスラームの民に賞賛される町であり、そこの特産品はイチジクとスモモとザクロの実である[166]。またそこからは良質の馬勒や手綱がもたらされる。

「バーミヤーン（Bāmiyān）」はホラーサーンの町で、山の上にある。

「バフライン（Baḥrayn）」は地方［の名］であり、その中心都市はハジャル（Hajar）[167]である。カルマト派[168]の土地である。バフラインに行く者はみな脾臓が大きくなる。これはその町の特性である。ここからは良質の衣服やすばらしい布地がもたらされる。

「バラーサークーン（Balāsāqūn）」はトゥルキスターンの境域にある[169]。大きな町である。また別の町は「バム（Bam）」[170]と呼ばれ、イスラームの民の手中にある。そこではキツネが獲れ、錫や膠などがもたらされる。

162）この地名については未詳。サーデギー校訂本では「プーロス（Pūlus）」と表記される。

163）リビアのこと。町として言及されるのは珍しいが、本書では実際には「リビア」の項はない。

164）レバノン内陸のオアシス都市。古代の遺跡があることで有名。また、軍事拠点として重要であった［*EI*²: Ba'labakk］。

165）現在のアフガニスタン領にあるパンチシール川と、その流域を指す地名。中世には銀の産地として知られていた［*EI*²: Pandhhīr］。

166）アフガニスタンのカンダハール西方にある、ヘルマンド川流域に位置する都市。7世紀にアラブ・ムスリム勢力によって征服された。長くこの地方の中心都市であったが、モンゴルの侵攻によって荒廃した［*EI*²: Bust］。

167）バフラインの主要なオアシス都市の1つ。現在名はハサー（al-Ḥasā）［*EI*²: Baḥrayn］。

168）9世紀から10世紀のシーア派イスマーイール派の一部に対する呼称。イラクで農民を中心に教宣活動を行ったハムダーン・カルマトの名にちなむ。のち、イスマーイール派の指導部と対立し、930年にはカァバの黒石を持ち去る事件が起こるが、988年にバフラインの本拠地ハサー（旧名ハジャル）を攻撃され、弱体化した［「カルマト派」『岩波イスラーム辞典』］。

169）現在のキルギス共和国のチュー（チュイ）川流域にある都市。12世紀にはカラキタイ（西遼）の首都とされた［*EI*²: Balāsāghūn］。

170）イラン南東部には砂漠の町として知られる同名の町があるものの、トゥルキスターンにある「バム」については不明。

「バルカ（Barqa）」はシャームにある大きな町である[171]。そこには石で造られた塔がある。それぞれの石の間に、輪の形をした鉄の臼が突き出ており、［人々は］それに手をかけて上に登る。その塔の上には1つの箱があり、その中にはヤフヤー・ブン・ザカリヤー――**彼に平安あれ**――の頭蓋骨がある。**まことにアッラーは最もよく知りたまう**。これは誤りにちがいなかろうが、私は知り得たことを述べたまでである。

（p. 198）「スライマーン――**彼に平安あれ**――の園（Bustān-i Sulaymān）」は、サランディーブにある庭園である。その長さは40ミールである。白い石でできた壁のように、山がその周りを取り囲んでいる。誰もその庭園の中に入ったことはなく、出ることもできない。人がその中に入ることができないような形になっているのである。その壁の下からは大量の水が流れてきており、さまざまな果実を運び出す。［人々は］船を仕立て、定められた人々が小舟に乗って果実を集める。クルミの季節にはクルミが山ほど取れ、ブドウの季節にはブドウが山ほど取れる。賢人たちは言う。「2人のジンがそこを任され、これらの果実をもいで水中に投げ入れているのだ」と。あるいは、2人の天使だとも［言われている］。**まことにアッラーは最もよく知りたまう**。

「ビルキースの城砦（Qal‘a-yi Bilqīs）」はイエメンにある壮大な砦であり、それ以上に高いものはない。これが造られた理由は次のとおりである。

シャラーヒール・ブン・シャラーハル（Šalāḥīl b. Šalāḥal）[172] は暴君であった。彼は娘を見つけたらどこであれ、その純潔を無理やり奪っていた。［彼には］公明正大な宰相がおり、その名をズー・シャルフ・ブン・アル＝ハドハード（Ḏū Šarḥ b. al-Hadhād）といった。彼はたいそう美しく、ジンたちがさまざまな姿で彼を狙っていた。［宰相ズー・シャルフは］ジンたちの王を殺し、その娘アミーラ・ビント・アミール（‘Amīra bt. ‘Amīr）[173] を手に入れようと誓った。

ある日、［彼は］茂みでアミーラを見た。たいそう美しかった。だが［すぐに彼女は］姿を消した。［彼は］毎日そこに行き、彼女と親しくなり、［父である］アミールに彼女を求めた。アミーラは身ごもり、すぐにズー・シャルフの娘ビルキースを生んだが、［その際に］アミーラは死んでしまった。ビルキースは、見目のよさから「地上の金星（zahra al-dunyā）」と呼ばれた。彼女は成長して、父に言った。「私をジンたちから遠ざけ、人間の国へ連れて行ってください。」

［ズー・シャルフは］言った。「我々の王は圧制者だぞ。」

［ビルキースは］言った。「怖がることはありません。私は堅固な城を造りましょう。」

そしてその中に黄金のドームを造った。ドームの上では風車が風で回り、麝香をまき散らした。

この［城砦の］報せが王に届いた。王は城を目指し、壮大な城砦を見つけ、宰相に言った。「おまえの娘を私によこせ。」

［宰相は］言った。「私の娘はジンから生まれました。人間とはそぐわないのです。」

［王は］言った。「私はおまえの娘を愛している。」

171）バルカはキレナイカ地方と、そこにある都市（現在名マルジュ）を指し、エジプトからイフリーキヤへの途上に位置する［*EI*²: Barḳa; Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 220; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 78; al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, pp. 37–38］。なお、オマーンにも同名の地名がある。

172）この人名は、『ヒムヤルの諸王の冠の書』や10世紀の『冠の書（*Kitāb al-iklīl*）』でビルキースの祖父とされているŠaraḥbīl と関連があるのかもしれない［Ibn Hišām, *Kitāb al-tījān*, p. 147; Abū Muḥammad al-Ḥasan b. Aḥmad al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, Ed. M. al-Ḥawālī, Beirut, Manšūrāt al-Madīna, 1986, vol. 8, p. 267］。

173）校訂テキストでは「息子」となっているが、女性の名前なので「娘（bint）」と読む。

［王は娘に］会わないまま、婚姻の約束をした。ビルキースは（p. 199）言った。「私のもとにはジンの娘たちがいます。彼女たちはあなたの軍を嫌がるでしょう。ひとりで私のところに来ていただけますか？」

王はたったひとりで城砦に行き、ジンの娘たちと、頭に冠を載いたビルキースを見た。［王は］われを忘れて立ちつくした。ビルキースは毒で満たされた盃を彼に与えた。彼はそれを飲み、命を落とした。

ビルキースは城壁のそばへ行き、言った。「兵士たちよ。王は、そなたらの妻をすべて自分に差し出せ、と言っております。」

［兵士たちは］言った。「**承諾しかねる**。〔我々が自身の妻を彼に渡すことなど断じてないぞ！〕」

ビルキースは引き下がった。そして再び現れ、言った。「王は、妻を私に差し出すことを拒んではならぬ、と言っております。」

［兵士たちは］言った。「**承諾しかねる**。〔なんという発言か！〕」

ビルキースは言った。「みなの者よ、王は怒りのままお眠りになりました。そなたらが良しとするならば、私が彼を滅ぼしましょう。私を彼の代わりに戴きなさい。私が女たちを狙うことはないのですから。むろん男たちを狙うことも。」

男たちはみな跪き、言った。「**仰せのとおり、従いましょう**。」

そして彼らは誓いを行った。ビルキースは戻り、王の首をもってきて城砦の上に置いた。みながビルキースに従うようになった。その砦の下にいくつもの宮殿が造られた。彼女はサバー（シバ）の女王であり、やがてスライマーン――**彼に平安あれ**――の妻となった。

＜ター（al-tā’）の項＞

「トゥスタル（Tustar）」は美しい町で[174]、フーゼスターン地域のマスラカーンの川（Nahr al-Masraqān）[175]の岸辺にある。この川は、シャープールがトゥスタルの城門の上に堰（šādurwān）を築き、水がその上を流れるようにしたものである。というのも、トゥスタルの町は丘の上にあるからである。［シャープールは］トゥスタルを石で造り、鉄の砦と何本もの柱を建てた。

ダーニヤール（ダニエル）の遺骸はトゥスタルにある[176]。シューシュの人々の間で飢饉が生じたとき、彼らはダーニヤールの遺骸を［雨乞いのため］求めた。［トゥスタルの人々は］飢饉が去るよう、棺をシューシュに送った。［シューシュの人々は］棺を川の底に隠してしまった。シューシュの長老たちは、「棺はこの町にはない」と誓って言った。だが子供たちに尋ねたところ、子供たちは棺［の隠し場所］を指し示した。そのためこの町では、子供たちの証言を聞く習わしができたのである。（p. 200）さて、この町の驚くべきものはマスラカーンの川に架けられた堰であり、ここの特産品は錦、米、ニンジンボク［である］。

「タドムル（パルミュラ）（Tadmur）」は大きな町であり、スライマーン――**彼に平安あれ**――がそれを建設した。ハーリド・ブン・アル＝ワリードが征服した。その征服の次第は次のようなもの

174）イラン南西部のフーゼスターン州にあるシューシュタル（古名トゥスタル）のこと。サーサーン朝のシャープール時代に建設された水利施設で有名。

175）トゥスタル付近を流れるドゥジャイル川から、トゥスタルまで水をくみ上げていた水路［Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 91; Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-’arḍ*, p. 252］。

176）預言者ダニエルの墓の話は、本書第3部第3章の「シューシュの川」の項も参照のこと。ダニエルの墓がトゥスタルあるいはスース（シューシュ）にあるという説は、アブー・ドゥラフが触れている［本訳注（4）、502–503頁; アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、42頁］。

である。町の門がハーリドに対して閉じられ、ハーリドは困惑して引き返し、言った。「おお、タドムルの民よ。神かけて、もしおまえたちが雲の上に行っても、おまえたちを引きずり降ろし、男どもは殺して家人を奪い取ってやろうぞ。」

そして彼は去った。タドムルの民は後悔し、［ハーリドを］呼び出して、講和した。

イスマーイール・ブン・ムハンマド・ブン・ハラフ（Ismāʻīl b. Muḥammad b. Ḫalaf）は言う[177]。「マルワーン・ブン・ムハンマド（Marwān b. Muḥammad）[178] はタドムルの城壁を壊し、殺された者たちの上に馬を走らせ、肉を骨からひき剥がし、ばらばらにした。その後、墓を1つ見つけ出し、長廊下に行き当たった。玉座があり、そこには7房のおさげ髪をした1人の女がいた。片足ごとに1アラシュの足飾りをつけており、彼女のおさげ髪には黄金の銘板があった。そこには次のように書かれていた。『**慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。神よ、私はハッサーンの娘タドムル**（Tadmur bt. Ḥassān）**である**。私のこの館に入った者は誰しも、卑しめられ打ちのめされて引き返すだろう。』

マルワーンはその穴をこじ開けるように命じたが、［それが開けられたのは］初めてのことであった。数日後にマルワーンは死に、王権は彼から離れた。」

この町には2つの像があるが、それについては彫像の章で述べよう。

「ティフリース（Tiflīs）」はアッラーンの領域にあり、大きく、恩恵に満ちた町である。そこの女たちは帽子をかぶり、店の戸口に座っている。この町には2つの堅固な塁壁がある。［次のように］言われている。ティフリースには40軒の浴場があるが、1つを沸かすと、すべて［の浴場］が熱くなる。火を点けなくとも、自然に温かくなる浴場もある。驚くべきことに、10個の卵をその湯の中に沈めると茹で上がり、9個は見つかるが、1個は消えてしまう。その理由は誰も知らない。

「タブーク（Tabūk）」は砦である[179]。そこには泉が1つあり、クルズムの海に接している。シュアイブ（エセロ）（Šuʻayb）[180] ――**彼に平安あれ**――はその泉から水を汲んでいた。

（p. 201）「タイマー（Taymā）」はアラブにある砦である。

「ティクリート（Tikrīt）」はティグリス河畔に位置している[181]。堅固な城砦があり、水上に聳えている。

「ティンニース（Tinnīs）」はミスルにある水上の町で、大きな丘の上に建設された[182]。［その丘

177）イブン・ファキーフおよびハムダーニーの書に同様の逸話がある［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 110; al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 8, pp. 198–199］。

178）ウマイヤ朝の最後のカリフ、マルワーン2世（在位744–750年）。即位前は、アゼルバイジャンとアルメニアの総督であった。即位後はシリアやメソポタミア地方での度重なる反乱に悩まされ、最後は上エジプトでアッバース朝軍に敗れて死亡した［*EI*²: Marwān II］。

179）アカバ湾に近い、アラビア半島北西部にある都市［*EI*²: Tabūk］。

180）旧約聖書の預言者エセロ。『クルアーン』においては、マドヤンの民に遣わされた預言者とされる［*EI*²: Shuʻayb; Q7: 85–93, 11: 84–95］。

181）バクダードの北方に位置する町で、堅固な城塞がある［*EI*²: Takrīt］。

182）エジプト北東部のナイル・デルタの三角洲にあるマンザラ湖上の島にある町。ここでの記述は、イスタフリーやイブン・ハウカルと共通している［*EI*²: Tinnīs; al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 53; Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-ʼarḍ*, p. 160］。

は］ムーサー――**彼に平安あれ**――より前［の時代］に死者たちが堆積してできたものである。

「チベット（Tubbat）」は中国にある大きくて堅固な町である。それは、預言者ナーシルの息子のアビー・マーリクの息子のトゥッバゥ・アル＝アクラン（Tubba‘ al-Aqran b. Abī Mālik b. Nāšir）王[183]が建設した。そこの民はアラブの服装をしている。チベットの気候は、トゥルキスターンの中では良好である。「チベットに来たものは誰でも、［そこを］出るまで笑い続ける」と言われている。この町の土壌は気晴らしに効果がある。創造主はこのような気候をお創りになり、そこでは顔は美しく、ラクダや馬に至るまで美しい顔をしているほどである。額は広く、切れ長の目をしている。この地とは反対に、エチオピアやハッラ（Ḥarra）[184]では、あらゆる動物は黒く、ロバやイヌやスズメでさえも醜い。チベットにはジャコウネズミ（fārat al-musk）がいる。チベットの麝香は最も上質の麝香である。

「トゥルキスターン（Turkistān）とトゥグズグズ（Tuġuzġuz）」は中国との境にある地方［の名］である[185]。カルルク（Ḫalluḫ）、キーマーク、グズ、ビジュナーク（Bijnāk）、キプチャーク、キルギズ（Ḫirḫīz）がいる[186]。彼らの言語は１つであるが、中国とチベットの言語は多様である。**これがその図である**［図］。

チベットや中国からなるこの集団の王は、ハンダーン（Ḫandān）[187]の町に座している。バーミヤーンやフッタラーン（Ḫuttalān）[188]の町やジャイフーンの川の図は［ここに］作成したとおりである。

トゥグズグズはテュルクのアラブである。預言者――**彼に平安あれ**――のいわく、「テュルクは、私のウンマの領域（mulk）を征服する最初の者である」と。またいわく、「**テュルクを放っておけ。彼らがおまえたちを放っている限りは**」、すなわち［ペルシア語では］「テュルクを狙ってはならない。彼らがあなたがたを狙わない限りは。」

トゥルキスターンの地では、羊は［1度に］4匹の仔を産むが、6匹の仔を産むときもある。〔牛のしっぽのように〕尾を地面に引きずっている。

183）「トゥッバゥ」という称号については前掲注8参照。ここに見える「預言者（payġambar）」という語は、この人物の父祖名に関する混乱が原因と考えられる。イブン・ファキーフは、中国（al-Ṣīn）に侵略し、トゥッバト（チベット）を建設した人物を Tubba‘ al-Aqran b. Ibn Šamir と記し、一方『冠の書』には、Tubba‘ al-Aqran b. Šamr Yur‘aš という人名が見える。同書の別の箇所では、トゥッバゥの父にあたるシャムル・ユルアシュは、「シャムル・ユルアシュ・ブン・マーリク・ナーシル・アル＝ナァム（Šamr Yur‘aš b. Mālik b. Nāšir al-Na‘m）」と表記される。本書の「預言者」は、この中の「ユルアシュ」あるいは「アル＝ナァム」の誤読であろう［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 326; al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 8, pp. 271, 276–277］。ma 写本は「預言者」の部分を BN‘M としており、比較的近い形を保っている。

184）アラビア半島の一角を占める、火山の影響で黒く焼けた溶岩地帯を指す語であり、「夜のハッラ」や「火のハッラ」など広く用いられる。シリアのハウラーン東部からメディナに伸び、黒い玄武岩に覆われている［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, pp. 245–255; *EI*²: Ḥarra］。

185）トゥグズグズの境域は、東は中国、南はチベット、西と北はハルヒーズに接する［*Ḥudūd al-‘ālam*, p. 76］。トゥグズグズについては本訳注（4）、532頁、注260も参照のこと。

186）これらはいずれもテュルク系の諸部族であり、キーマークとグズに関しては本訳注（4）、498–499頁、注96と97を参照のこと。これらの土地の位置は『世界の諸境域』によると次のとおりである。「カルルクは、東はチベットやトゥグズグズ、南はマーワラーンナフル、北はトゥグズグズやチギルに接する。キーマークは、南はアルタシュ川とイティル川、西はキプチャーク、北は荒野に接している。グズは、東は荒野とマーワラーンナフル、南は荒野、西と北はイティル川に接している。ビジュナークは、東はグズ、南はブルタース、西はルースに接している。キプチャークは、南はビジュナークに、その他は荒野に接している。キルギスは、東は中国、南はトゥグズグズとカルルク、西はキーマーク、北は荒野である」［*Ḥudūd al-‘ālam*, pp. 79–81, 85–87］。

187）具体的にどの町のことかはわからないが、『世界の諸境域』では、現在のコーカサス地方にあたる「サリール（玉座）の地」の将軍（sipāh-sālār）のいる場所として同名の地が挙がる［*Ḥudūd al-‘ālam*, p. 192］。

188）本章では、後に「フッタル（Ḫuttal）」の名で説明がある。

「タラース（Talās）」はトゥルキスターンにある町である[189]。カーシュガル、ホータン、ヤールカンド、ジャルジャーム（Jarjām）[190]、これらは（p. 202）すべてイスラームの町である。TNKWR[191]、ハターイ（中国）（Ḫatāy）、タムガージュ（Ṭamġāj）は不信心者の町である。太陽はそこから昇り、これらの町を通り、黒人たちの地に至る。トゥルキスターンの特産品は、白楊、クロテン、リス、テン、キツネ、男奴隷（ġulām）と女奴隷（kanīzak）、羊、フェルト、タカ、ハヤブサ、オオタカ、蛇の石（sang-i mār）である。

「タフテ・スライマーン――**彼に平安あれ**――（スライマーンの玉座）（Taḫt-i Sulaymān）」は壮大な宮殿であり[192]、4本足の動物の姿の上にある。ジンが金や銀から造り上げた。［ジンはスライマーンが］玉座に座っているときは、胸壁から彼の頭上に竜涎香を振りまき、［スライマーンが玉座から］降りると、別の者が玉座の上に立ち、口から火を噴いて、誰もそのそばに近寄らないようにしていた。さらに、2つの隅には2頭のライオン［の像］が造られ、その口からはバラ水が流れ出た。別の2つの隅では2羽の鳥が翼を広げ、スライマーンを誰の目にも触れないようにしていたが、［スライマーンは］すべてを見ていた。［スライマーンが］玉座に座ると、1羽の鳥が飛んできて彼の頭に冠を載せ、それからディーヴたちが（p. 203）居並んだ。

13年間、この玉座は彼とともにあった。彼の時代には、［彼以外の］何人たりとも玉座に座らなかった。ある日、ヤツガシラが告げた。「私は女王を見ました。彼女はサバーの地で玉座に就いています。」

スライマーンは嫉妬し、言った。「**あなたがたの中、かの女の王座をわたしに持って来ることが出来るのは誰ですか**［Q27: 38］、［すなわちペルシア語では］「彼女の王座を私のもとに持ってくる者は誰か？私の治世において、あえて玉座に就こうとする者は誰なのか？」

イフリートが言った。「1回瞬きする間に私が持って参りましょう。」

そして玉座を持ってきた[193]。

この話の意図は次のとおりである。王にはふさわしくとも、王以外の者には分不相応なものというのがある。スライマーンは、女が男のように玉座に就くことを良しとしなかった。

＜ジーム（al-jīm）の項＞

「ジャズィーラ（al-Jazīra）」は地方［の名］である。その境域は、ハフル・アブー・ムーサー（Ḥafr-i Abū Mūsā）[194]からドゥーマト・ジャンダル（Dūmat al-Jandal）[195]とシャームの諸

189）イリ地方を流れるタラス川の流域にあるキルギス共和国北西部の町。有名な751年のタラス河畔の戦いはこの町の近くで起こった。

190）この地名については未詳だが、新彊ウイグル自治区に位置するオアシス都市、チェルチェンを指すか［「チェルチェン」『アジア歴史事典』平凡社、1985年］。

191）タングートの誤りか。タングートは、6世紀から14世紀頃にかけて、中国西北辺境に活躍したチベット系の民族の名称である。9世紀後半頃には、タングートは陝西省のあたりに確固たる地盤を築き、1038年には西夏を建国し、1227年まで存続した［「タングート」『アジア歴史事典』］。

192）ウルミエ湖南東の都市タカーブから30キロメートル北の山中に位置する遺跡群。サーサーン朝時代の拝火教寺院の遺跡がある。現在も「タフテ・スライマーン（ソロモンの玉座）」の名で知られる［*EIr*: Takt-e Solaymān; 本訳注（3）、380頁、注4］。

193）『クルアーン』に見えるスライマーンとビルキースの逸話については、本訳注（1）、213頁、注19参照。

194）「アブー・ムーサーの掘り跡」の意。メッカからバスラに向かう街道沿いに位置し、教友アブー・ムーサー・アシュアリーが巡礼の際に掘った井戸があった［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 146; Ibn Rusta, *Kitāb al-aʻlāq al-nafīsa*, p. 180; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 2, p. 275］。

195）メディナ＝ダマスクス間に位置するアラビア半島のオアシス都市［*EI*²: Dūmat al-Ḏjandal］。

地方やイラクの一部までである。ジャズィーラの驚異の1つは、「敬虔な者たちの聖堂（Kanīsa al-zuhhād）」である。

ジャズィーラにある大きな町はナスィービーンである。ナスィービーンには猛毒のサソリがたくさんいる。ディヤール・アイン（Diyār ‘Ayn）[196]、モースル、ティクリート、ヒート（Hīt）[197]、アンバール、カルキースィヤーや多くの町がすべてジャズィーラの中にある。ジャズィーラ地方の図はこれである［図］。

（p. 204）「チャーチュ（Jāj）」はマーワラーンナフルの町である[198]。チャーチュ産の弓、矢、筵、チャーチュ産の塩、良質の綿布がこの地からもたらされる。

「ジュール（Jūr）」はファールスの町で[199]、アルダシールが建設した。もともとは海であった。アルダシールは、敵に勝利した場所に町を建設しようと願かけをした。ジュールで勝利したので、水路を開いて水路に水を溜め、ジュールの町をその上に建設し、そこに拝火殿を造った。

「ジャーバルカー（Jābalqā）」はマシュリクの境域にある町である[200]。そこより先には、人の住んでいる場所はない。暑さが厳しく、人々は地下室で暮らしている。太陽が昇ると海は煮え立ち、心臓を引き裂くような恐ろしい音が海から生じる。言われているところによると、太鼓を激しく叩き、その音が聞こえないようにする。それは命を奪うほどである。海のはるか彼方から太陽は昇るのだが、あたかも海の真ん中から太陽が昇るように見える。

「ジャーバルサー（Jābalsā）」はマグリブの境域にある町である[201]。［そこには］1012の門があり、毎晩それぞれの門を1000人の男が警護する。

双角の所有者（イスカンダル）はそこに到着し、「闇の世界」を通り過ぎた。彼は「光の世界」に至ったが、それは太陽からの光ではなかった。その後、1つの山を目にした。そこには2本の柱があり、その先には2羽の鳥がとまっていた。鳥たちは歌い、尋ねた。「ああ、人の子よ。姦通や高利貸しは現れたかい？」

［イスカンダルは］答えた。「ああそうだ。」

鳥たちは3分の1ほど下に降りてきて、尋ねた。「漆喰や日干し煉瓦の建物は多くなったかい？」

［イスカンダルは］答えた。「そのとおりだ。」

鳥たちはさらに3分の1ほど降りてきて、尋ねた。「［人々は］穢れの浄めから手を引いてしまったかい？」

［イスカンダルは］答えた。「いいや。」

196）「泉の地方」の意なので場所の特定は困難だが、当時から知られている地名として、カルバラーの西約130キロメートルに位置する都市、アイン・タムルを指すのかもしれない［*EI*²: ‘Ain al-Tamr］。

197）ユーフラテス川のほとりに位置する町で、堅固な城壁で知られる［*EI*²: Hīt］。

198）現在のタシュケントにあたる。シル川以北では最大のアラブ人都市であった［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 480］。

199）現在のイラン南部のフィールーザーバード。ファールス地方の中心都市である［*EI*²: Fīrūzābād］。

200）本書では「マシュリク（東方）」の町となっているが、マグリブ（西方）の果てにある「ジャーバルク（Jābalq）」と同じか、もしくは対をなすものであろう［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, p. 91］。

201）もしくは「ジャーバルス」。この地名は「茶弼沙（沙弼茶）国」として中国や日本にまで伝わっている［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, pp. 90–91; 山中由里子『アレクサンドロス変相　古代から中世イスラームへ』名古屋大学出版会、2009年、196–197頁］。

鳥たちは［先の3分の1の］場所に戻って尋ねた。「信仰上の義務行為から手を引いてしまったかい？」

［イスカンダルは］答えた。「いいや。」

鳥たちは柱の先にとまって尋ねた。「彼らは、**アッラーのほかに神はなし**と唱えているかい？」

［イスカンダルは］答えた。「ああそうだ。」

鳥たちは眠ってしまった。その後、双角の所有者はそこを出て、太陽が人々を焼きつくしているところまで行き、そして引き返した。

「ジュンディー・シャープール（Jundī Šāpūr）」はシャープールが建設した町であるが、最初は林であった。シャープールがそこを通ると、農夫が土地を耕していた。シャープールは言った。「私はここに町を建設する。」

農夫は言った。（p. 205）「私が読み書きできれば、この場所は町になるでしょう。」

その農夫は年老いており、ビール（Bīl）という名であった[202]。シャープールは言った。「神に誓って、おまえがこの町を建設せよ。」

［シャープールは］彼に教師を与え、読み書きを教えた。また、林や木を伐採するよう命じた。老人はしばらくすると読み書きを習得し、シャープールのもとにやってきた。シャープールは笑って、老人をその建設の責任者とした。ついに、その町は完成した。

シャープールの王国にマニ（Mānī）[203]が現れ、ザンダカ主義者の長となり、マニの騒擾が世界中に広まった。アルダシールの息子シャープールは困惑し、マニを懐柔しようとしたが、マニの教義が偽りであることを十分に理解すると、マニを処刑し、その皮に藁を詰めてジュンディー・シャープールの門に吊るした。それは「マニの門（Dār-i Mānī）」と呼ばれている[204]。ザンダカ主義者たちは各地からこの門の参詣にやって来る。**彼らにアッラーの呪いあれ**。

「ジョルジャーン（Jurjān）」は美しい町であり[205]、美しい小川の上に建てられた。そこの特産品は、ナツメヤシ、オリーブ、クルミ、ザクロ、砂糖、絹、盆である。そこには竜がおり、外見は恐ろしいが、他のところのような害はない。

「ジャージャリー（JAJLY）」はヒンドゥスターンの町である。イスカンダルはいかなる町でも征服に難儀しなかった。ただしこの町は別である。というのも［この町は］2つの山の上にあり、半分は海の中に、半分は陸にあるからである。シナモンはここから各地へもたらされる。

202）ペルシア語の「ビール」には「鋤」の意味もある。

203）西暦3世紀の預言者。マニはキリスト教、ゾロアスター教、仏教など先行する宗教の完成形として自身の宗教の布教を始め、さまざまな奇跡を起こして数多くの信者を集め、241/2年にはシャープール1世によってサーサーン朝領域内での布教活動を許された。しかしバフラーム1世（在位273–276年）やゾロアスター教の祭司らからの迫害に遭い、最終的にバフラーム1世の命令で捕らえられ、277年（もしくは274年）に処刑された［*EIr*: Mani, Manicheism］。

204）マニを処刑した王がバフラームではなくシャープールとなっているなど若干の相違はあるものの、本書の内容はビールーニーの伝えるものとほぼ同じである。なお、イブン・ナディームによれば、マニの体は半分に割かれてジュンディー・シャープールの2つの門でそれぞれ磔にされた［Bīrūnī, *al-Āṯār al-bāqīya ʻan al-qurūn al-ḫālīya*, Ed. C. E. Sachau, Leipzig, 1923, pp. 207–209; Ibn al-Nadīm, *al-Fihrist*, pp. 517–518］。

205）カスピ海南東部にあるゴルガーン（Gurgān）のこと。アトラク川とゴルガーン川による肥沃な土地で、繁栄した。以下の記述はアブー・ドゥラフが典拠であろう［*EI*²: Gurgān; アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、37頁］。

「チャガーニヤーン（Čaġāniyān）」はマーワラーンナフルの境域にある地方［の名］である[206]。その地の特産品はサフラン、ソラマメ、矢筒、良馬、ラクダである。

「動く城砦（Qal‘a al-jārīya）」はマグリブの境域にある水上に建てられた砦であり、移動する。そこには多くの集団がいる。イスカンダルがそこに到着すると、砦に近づいた分だけ砦は遠ざかり、犬の鳴き声が聞こえた。［イスカンダルは］驚き立ちつくした。数ヶ月の時が過ぎ、1人の男が城壁のそばに来て、言った。「おい、イスカンダルよ。おまえの目的は何か？」

［イスカンダルは］答えた。「それはおまえたちが神――**至大なれ、崇高なれ**――に従うことだ。さもなくば、おまえたちと戦おうぞ。」

彼らの王は数多の荷を届け、服従（p. 206）した。そこでイスカンダルは引き返した。

次のように言われている。ムーサー・ブン・ヌサイル[207]がマグリブに行った。［人々は］彼に言った。「ある町があり、水の中を漂っているが、沈まない。不思議だ。」

［ムーサーは］それを見ようとそこへ向かった。聾の海[208]に着くと、1つの町があった。町の門にはイーワーンがあり、その上にはアーチ橋が［架かっていた］。さらにその上には、手に弓と矢を持った銅製の偶像があり、人が近づくと矢を射って死に至らしめた。そうして3人の男が殺された。人々が［門の］中に入ると、立派な町があった。町の人々はいかなる言葉も解さなかった。そこで彼らが引き返すと、町の門には次のように書かれていた。「これ以上先に進めば死ぬ。」

ヒンドの境域には1つの地域があり、それは「古城」[209]と呼ばれている。顔の黒いサル（kabīyān）がいる。そこには水の中を動く島がある。その地域の人々はサルに苦しめられるほかなく、［かの地の］税は、毎日［サルのために］食事を作る、というものである。［サルたちは食事を］食べ、帰っていき、翌日までそれで満足している。

「ギーラーン（Jīlān）」は祝福され恩恵に満ちた地方である[210]。そこの人々は貞節で信心深く、熱心で敬虔である。そこには古砦が1つある。毎年決まった時期に、10ディルハム［の重さ］の石でディルハム銀貨1枚が手に入る。いつもそのとおりである。

＜ハー（al-ḥā’）の項＞

「ハドゥル（al-Ḥaḍr）」はジャズィーラにある町である[211]。その王はウサイティルーンの息子サーティルーン（Sāṭirūn b. Usayṭirūn）[212]で、彼がそれを建設した。

206）アラビア語では Ṣaġāniyān と表記。アム川の支流沿いの、ティルミズの北方に位置する［*EI*²: Chaghāniyān］。

207）マグリブやスペインの征服を指揮したウマイヤ朝の軍人（716/7年没）。本訳注（4）、517頁、注187参照。

208）テキストでは AṢMR、またサーデギー本では aḥmar（紅い）とある。ここでは本書第3部の「海の章」に見える「聾の大洋（Qaynas al-aṣamm）」と考える。この海は世界を取り囲む［本訳注（4）、494頁］。

209）テキストは KHND だが、「古砦（kuhandiz）」の誤記と解す。

210）カスピ海に注ぐサフィード川のデルタ地帯を指す。名称は Gēl（「土」の意）人が住んでいたことに由来。北はカスピ海、南はイラン高原北方のアルボルズ山脈に囲まれていること、またその暑く多湿な気候はアラブ、テュルク、ルースの侵入を阻み、独自の文化圏を作り上げた［*EI*²: Gīlān］。

211）イラクの古代都市ハトラ（Hatra）のこと。サルサール川西岸の砂漠にあり、モースルから南西に3日の距離である。サーサーン朝に滅ぼされたが、それがシャープール1世かシャープール2世かは諸説ある。以下の逸話についてはイブン・ファキーフ参照［*EI*²: al-Ḥaḍr; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 129–131］。

212）サーサーン朝のシャープールの時代にハドゥルの王であったと伝えられるダイザーン・ブン・ムアーウィヤ（Ḍayzān b. Mu‘āwiya）（あるいは母の名をとった「ジャブハラの息子（Ibn Jabhala）」）を指す。Sāṭirūn はアッシ

次のように言われている。それを建設したのは、ダイザン・ブン・ジャブハラ（Ḍayzan b. JLHMH）王である。まじないをかけ、誰もそこを征服できないようにした。ただし、茶褐色のハトの血と浅黒い色の女の月経の血は別であった。そこでダイザンはすべての女を1つの井戸（牢）に入れ、監視した。やがて、肩胛骨王シャープールがハドゥルを征服しようとした。ダイザンの娘は月経を迎え、［井戸の］女たちの中に入れられた。彼女は城壁のそばに来て、シャープールを見ると、恋に落ちた。［そこで］彼に手紙を書いた。「女の月経［の血］とハトの血でカモシカの皮に『ハドゥルは開かれる』とお書きください。［それを］小バトの首に結び、（p. 207）ハドゥルの城壁にとまるよう、ハトを放してください。」

シャープールは実行するよう命じた。ハトがハドゥルの城壁にとまると、壁がすべて倒壊した。シャープールは10万ものハドゥルの男たちを殺した。彼はナディーラ（Naḏīra）を自分の妻にした。

ある晩、［シャープールは］眠りについていたが、ナディーラは寝つけなかった。シャープールは尋ねた。「どうしたのだ？」

彼女は答えた。「私の寝床はごつごつしています。」

調べさせると、布団の中にギンバイカの葉があった。ナディーラは言った。「私の父と母は私をミルクとアーモンドの実で育て、絹に包んでくれました。」

シャープールは言った。「どうして彼らを裏切り、自国の人々を剣の餌食としたのだ？父母に対してこのようなことをしたおまえは、私に対してどんな仕打ちをするだろうか。」

そうして彼女の髪を2頭の荒馬に括りつけるよう命じた。馬は荒野に放たれ、彼女は死んだ。

「ヒーラの町（Balda-yi Ḥīra）」は美しいところである[213]。賢人たちは言う。「1昼夜ヒーラにいることは1年の治療に勝る。」

預言者――**彼に平安あれ**――は言った。「私のウンマがヒーラを征服する日が来る。私には見える。ヒーラの女王、シーマー（Šīmā）が砦より降りてくるのが。白いヴェールを頭に纏い、黒い紐を額に結んでいる。芦毛のラバに乗っているが、イスラームの民が彼女を力ずくで引き降ろす。」

カーマク（Qāmak）という名の人物がいた[214]。彼はこの女に恋しており、言った。「ああ、アッラーの使徒よ、もしヒーラを落とすのであれば、その女性を私にください。」

［預言者は］言った。「おまえに与えよう。」

預言者――**彼に平安あれ**――が没すると、アブー・バクルのカリフ統治の番となった。［アブー・バクルは］ハーリド・ブン・アル＝ワリードをシャームに送り、カーマクは彼に同行した。ヒーラの入り口に着くと、カーマクはこの話をハーリドに伝えた。ハーリドは言った。「証人はいるのか？」

彼は言った。「はい。」

アブドゥッラー・ブン・ウマル（‘Abd Allāh b. ‘Umar）[215] が証言した。「私はアッラーの使徒か

リアで「王」を意味するSanatrukesが変化した称号である［*EI*²: al-Ḥaḍr］。テキストでは次のダイザンの親の名前に乱れがあるが、訂正して読む。

213）ヒーラは、633年にハーリド・ブン・ワリードに征服された。638年のクーファ建設以後廃れていくが、覇権没落のモデルとして、10世紀までアラブの詩に謳われた［*EI*²: al-Ḥīra］。

214）テキストでは不明な1語ḪAṢMYを、サーデギー校訂本等に従い、ḫāḍir と読む。なお、この人名は、Qātil, Fātik などの異同がある。

215）第2代正統カリフ、ウマルの息子（693年没）。幼い頃より、ムハンマドの軍に参加し、メッカ侵攻やニハーヴァンドの戦い等に参加した。その後、ウマルの政治を補佐し、カリフに3度推挙されたが、辞退した［*EI*²: ‘Abd Allāh b. ‘Umar b. al-Khaṭṭāb］。

ら聞きました。ヒーラが開かれ、シーマーがそのような身なりで降り立ち、カーマクに妻として与えられる、と。」

ハーリドは誓った。「シーマーが降り立った時こそ、ヒーラの人々と和平を結ぶ時となろう。」

シーマーの兄弟のアブドゥルマスィーフ（‘Abd al-Masīḥ）[216] が何ハルヴァールもの金を捧げてきたが、［ハーリドは］受け入れなかった。そうして砦の扉が開かれ、シーマーが外に（p. 208）出てきた。芦毛のラバに乗り、白のヴェールを纏い、その上を黒い紐で結んでいた。預言者――**彼に平安あれ**――の教友たちはそれを見たとき、［「アッラーは偉大なり」と］神を讃えた。それは、国中が震動するほどであった。アブドゥルマスィーフがシーマーのラバを引いていたが、尋ねた。「あなたがたに何があったのですか？」

彼らは言った。「我らの預言者が知らせていたのだ。シーマーとヒーラの状況がこのようになると。彼が正しいことが明らかとなった。我らはそれに驚き、神を讃えているのだ。」

さて、シーマーはカーマクに委ねられた。シーマーは言った。「ああ、カーマク。私は老いてしまいました。あなたは私を若かりし頃に見たのでしょうが、若さは失われてしまうのです。」

カーマクは彼女を天幕へと連れていき、彼女の前に座った。シーマーは言った。「私を売りなさい。」

カーマクは言った。「おまえを、100 を 10 個で売ろう。」

つまり 1000 ディーナールを意味した。彼はこの数字で十分だと考えた。シーマーは黄金の袋を 10 枚求め、それぞれに 100 ディーナールを入れて彼に渡し、去った。

［このことが］ハーリドに知らされた。彼は言った。「シーマーを呼び戻せ。」

シーマーが来ると、［ハーリドは］言った。「おい、シーマー。愚直な男を欺いたな。彼を［わずか］1000 ディーナールで騙したろう。彼は勘定については何も知らないのだ。」

シーマーは言った。「もしカーマクが自分自身を嘘つきだと考えるならば、あなたの命令に私は背きません。」

カーマクが来て言った。「彼女の言うとおりに［事は］進みました。［そうでなければ］私は自分を嘘つきだと認めることになります。」

ハーリドは言った。「**我々はあることを望んだ。至高なるアッラーは**［別の］**ことを望んだ。**」

ヒーラをシーマーに委ね、彼らは和平を結び、引き返した。

「ハドラマウト（Ḥaḍramawt）」はシャームの小さな町である。預言者フード――**彼に平安あれ**――の墓がこの地にある。そこには 1 つの穴があり「バラフート」と呼ばれる[217]。その底は偉大なる神を除いて誰も知らない。そこには闇の荒野があり、「地獄の谷（Wādi-yi jahannam）」と呼ばれる。その穴には不信心者や不幸な者たちの魂がいる。アバーン・ブン・タグリブ（Abān b. Taġlib）[218] は言っている。「ある人がこの穴の前で眠った。毎晩、声が聞こえた。『ああ、ドゥーマ（Dūma）。ああ、ドゥーマ』と。啓典の民に尋ねると、こう言われた。『ドゥーマは天使の名であり、不信心者たちの魂を任されているのだ。』」

216）「メシア（キリスト）のしもべ」を意味する名をもつこの人物は、6 世紀にラフム朝とシリアの覇権を争った、キリスト教徒のガッサーン部族の関係者であるかもしれない。マスウーディーは、636/7 年にムスリムのクーファ征服に協力した ‘Abd al-Masīḥ b. Buqayla al-Ġassānī なる人物に触れている［*EI*²: Ghassān; al-Mas‘ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, p. 385］。

217）ハドラマウトにある洞窟（本訳注（4）、493 頁、注 69 参照）。なお、本項ではハドラマウトはシャーム（シリア）の町となっているが、イエメンの誤りであろう。

218）メディナで活動したシーア派の学者（758/9 年没）［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 5, p. 300］。

ハドラマウトとオマーンの間は荒野である。商人がそこを通ると、声が聞こえる。「おや、これは、誰それの家の誰それがこれこれの売り物を持って、これこれの値で売ろうとしているよ。」

オマーンに着くと、［その値より］多くも（p. 209）少なくもなく［ぴったりの値で取引される］。

バラフートについては、「墓の章」で十分に説明しよう。至高なるアッラーが望みたまうならば。

「ヒムス（Ḥimṣ）」はシャームの町である。ハーリド・ブン・アル＝ワリードが征服し、17万ディーナールで和平を結んだ。ヒムスとアレッポは、マフル・ブン・ハイス・ブン・アマリーク（Mahr b. Ḥayṣ b. ʻAmalīq）の息子たちの名である[219]。ヒムスの礼拝所の戸口の上に白い石があり、その上には人間の像があるが、下半身はサソリである。そこの泥を取ってその像の上に置き、しばらくして持ち帰り、サソリによる刺し傷にあてると［症状は］治まる。その泥土を水に溶かして飲むと［痛みが］和らぐ。

「エチオピア（al-Ḥabaša）」。エチオピア（ハバシャ）は広大な地方であり、多くの町がある。そこにはたくさんの驚異があり、さまざまな種類のサルがいる。

［逸話］

双角の所有者（イスカンダル）はその地に至ったが、彼らには煩わされた。エチオピアの王は当時女であり、名前はカイダーファ（Qaydāfa）といった[220]。［イスカンダルは］彼女の息子とその妻を捕らえ、縛り、それからカイダーファを狙った。両者の間で戦闘となったが、イスカンダルは形勢不利となった。そこで、自身のワズィール（宰相）を玉座に座らせ、イスカンダル［自身］は使者の格好をしてワズィールの前に立った。カイダーファの息子とその妻ナーヒード（Nāhīd）[221]が処刑のために連れてこられた。使者は［処刑を］させなかった。［玉座上の］ワズィールは言った。「この者は私の使者である。私はおまえたちとともにこの者を遣わすので、彼をカイダーファの前に連れ行くように。そうすれば彼は厚遇されるであろう。［その後で］私に送り返してくれ。」

そこで、彼らはカイダーファのもとに行った。彼女の息子は言った。「この者はイスカンダルの使者です。私たちをイスカンダルの剣から救い、非常によくしてくれました。」

カイダーファはイスカンダルの手を取り、宮殿に連れて行った。宮殿は黒檀で、柱はカンラン石で造られていた。彼女は黄金の玉座に座し、王冠を載いていた。5000人のグラームが居並び、その後食事が運ばれた。カイダーファは言った。「イスカンダルよ、なぜ自身の名を使者に付すのだ。私はそなたの姿を見たことがある。そなたこそイスカンダルぞ。なぜ己の軍を離れ、たった1人で来たのか？」

イスカンダルは言った。「そのようなことを申されますな。王というものは自らを家臣のように見せることはしますまい。」

続いてイスカンダルは緑の館に連れて行かれた。館の天井は紅いルビーでできていた。それは動

219）『諸都市辞典』参照［Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 2, p. 302］。

220）『王の書』ではアンダルスの女王として登場し、本書の内容とほぼ同様の逸話がアンダルスを舞台に描かれる［Firdawsī, *Šāh-nāma*, vol. 4, pp. 1624–1641］。

221）『王の書』ではカイダーファの息子の妻の名は現れないが、「ナーヒード（金星）」という名前は、ルームの王フィールクース（フィリッポス）の娘、イスカンダルの母に与えられている。この娘がイスカンダルを産む経緯は、父がダーラーとの戦いに敗れ、娘をダーラーに差し出し講和した。やがてナーヒードはダーラーの寵愛を失い故郷に帰されるが、子（イスカンダル）を身ごもっており、ルームで出産する。父は孫のイスカンダルを我が子として育てる、というものである［Firdawsī, *Šāh-nāma*, vol. 3, pp. 1561–1566］。

く館であり、車輪の上に置かれ、象に繋がれていた。イスカンダルは（p. 210）すっかり驚嘆した。カイダーファは言った。「イスカンダルよ。そなたは我が息子とその妻によくしてくれた。私もそなたを傷つけはせぬ。そなたが帰るまで、私はそなたを使者と呼ぼう。」

そうしてイスカンダルは戻り、その地方をカイダーファの手に残したのであった。というのもカイダーファの民は彼女に感謝していたからである。

知れ。エチオピアは常に強勢であった。イエメンに侵攻し、幾度か征服した。カァバにも侵攻した。預言者――**彼に平安あれ**――は言った。「カァバはハバシャ（エチオピア）の手によって荒廃し、その宝はハバシャが持ち去るであろう」と。また、「**たとえハバシャの奴隷［の言ったこと］であったとしても、おまえたちはよく聞いて従わねばならぬ**」と言った。預言者――**彼に平安あれ**――のこの言葉は効果があった。

［かの地の］大部分はアミールであり、気高い。エチオピアの特産品は、象、純金、男奴隷と女奴隷である。

「ヒジュル（Ḥijr）」はアサーリス（Aṯāliṯ）山系の中にある町である[222]。家々は、花崗岩（sang-i ḫāra）を削って造られている。サムードの井戸（bi'r-i Ṯamūd）はその地にある。サーリフ――**彼に平安あれ**――の雌ラクダはその山から出てきた[223]。

「アレッポ（Ḥalab）」はシャームにある町で、大きな町である。そこには四角形の塔があり、その先端にイチジクの木が1本生えている。気候がよく、水は美味しく、善良な人々が住む町である。

「野獣の庭（Ḥadīqa al-wuḥūš）」は壮大なイーワーンである。それは、ホスロウ・パルヴィーズが7年かけて1000人の手で造ったものである。彼はその中に多くの［狩猟用の］獲物を集めた。

［逸話］

パルヴィーズはブドウ酒を飲み、酔って妻のシーリーン（Šīrīn）[224] に言った。「何か欲しいものはあるか？」

彼女は言った。「私のためにこの場所に宮殿を造り、2本の川を掘って、1つには混ぜ物のない酒を、もう1つにはミルクを入れてくださいな。」

彼は言った。「そうしよう。」

彼は酔いがさめると、［そのことを］忘れてしまった。シーリーンは歌い手のファフルバド（バールバド）（Fahlbad）[225] に言った。「彼に思い出させて。」

222）アラビア半島のメディナ＝シリア交易ルート上の町。タイマーの南西110キロのところにあり、現在は廃墟となっている。岩壁に彫り込まれた建造物が多く、そのほとんどは墓である［*EI*²: Ḥiǰr］。

223）『クルアーン』によれば、サーリフはサムード族に遣わされた預言者である。彼の系譜はセムを経てノアに遡る。サーリフの雌ラクダ（nāqa）とは、7章71節でサーリフが、アッラーの徴とした雌ラクダを指しているのだろう。サムード族はサーリフに逆らい、このラクダの腱を切ったことで滅ぼされた。雌ラクダはサーリフが岩の割れ目から出した。ムハンマドはこの地を呪われた場所とみなし、遠征の際にこの地の井戸から水を飲むことを禁じた［*EI*²: Ḥiǰr; Ṣāliḥ; Ṯamūd］。前掲注144も参照。

224）パルヴィーズの愛妻で、キリスト教徒であった。家臣のファルハードとのロマンスは、ペルシア語やテュルク語などによる韻文のモチーフとなった。イブン・ファキーフがこれとほぼ同じ話を伝えており、本書と同時代のニザーミーの『ホスロウとシーリーン』にも見られる［*EI*²: Farhād wa Šīrīn; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 158–159］。

225）サーサーン朝下で最も有名な楽師バールバド（Bārbad）のこと。ホスロウ2世（パルヴィーズ）時代に活躍し、

ファフルバドは［パルヴィーズに］歌いかけ、彼に［そのことを］思い出させた。［パルヴィーズは］宮殿を造るように命じ、石で小川をつくり、ブドウ酒をその中に流した。

それは「シーリーンの宮殿（カスレ・シーリーン）（Qaṣr-i Šīrīn）」[226] と呼ばれている。このシーリーンは高貴な血統の女であり、この上ない知性を備えていた。彼女については後述しよう。

（p. 211）「老女の壁（Ḥāyṭ al-ʻajūz）」はミスルにある砦であり、ナイルの岸辺に沿っている。老いた女が［それを］造った。彼女には1人の息子がいたが、ライオンが息子を食べてしまった。彼女は壁を建設し、猛獣がナイルに来ないようにした。そして、そこに猛獣の絵を描き、さらに街道や町をその壁に描いた。やがてミスルの人々の知るところとなった。この壁の長さは、ファラマー（Faramā）の端からアスワール（Aswār）の端まで30ファルサングにおよび[227]、エチオピアとミスルの間を分け隔てた。この壁は世界の驚異の1つである。老女にこれを造るだけの情熱があったというのだから。

さらに［別の］人々は言う。この老女には1人息子がいた。占星術師たちは、「ナイルから現れたワニが彼を殺すであろう」と言った。彼女は自分の地方とナイルの間にこの壁を造り、人々に「ワニとはどのようなものでしょう？」と尋ねた。［人々は］木製のワニを作り、老女のもとに持っていった。彼女の息子はよくそれで遊んだ。ある日、息子はその上に落ち、その木の枝が頭に刺さり、それによって死んでしまった。

＜ハー（al-ḫā’）の項＞

「ハワルナク（Ḫawarnaq）」はクーファの向こう側にある建物であり、ヌゥマーン・ブン・イムルー・アル＝カイス（Nuʻmān b. Imru’ al-Qays）[228] が、その治世の80年をかけて造ったものである[229]。

［逸話］

ルーム出身の男がおり、名をスィニンマール（Sininmār）といった。2年間作業をしては姿を消し、また現れた。人々は言った。「なぜそんなことをしているのか？」

彼は答えた。「建物を安定させるためさ。」

［建物を］計測すると、15アラシュ沈んでいた。やがて完成した。ヌゥマーンはその上に行き、眺めた。正面には海が見え、背後には砂漠が、水の中には魚、荒野にはトカゲやナツメヤシが見えた。ヌゥマーンは言った。「このような建物を私はこれまでに見たことがないぞ！」

ホスロウの愛馬の死を詩で伝えた話がよく知られている［*EIr*: Bārbad］。

226）クルディスターンの都市。現在はイラン領にある。バグダード＝ホラーサーン間に位置する交易拠点であった。郊外にはサーサーン朝末期の宮殿の遺跡がある。アラブの征服後は廃墟になったが、その壮麗さはイスラーム時代の多くの著作に記録されている［*EI*²: Ḳaṣr-i Sh̲īrīn］。

227）ファラマーはナイル川河口の地名。現在のポート・サイードの南に、テル・エル・ファラマー（古代のペルシオン）と呼ばれる遺跡が残る。アスワールに関しては、この逸話を伝えるイブン・ファキーフが、「ファラマーからアスワーン（Aswān）まで30ファルサング」と記述しており、おそらくアスワーンの誤りであろう［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 60］。

228）ラフム朝のヌゥマーン1世。「隻眼（Aʻwar）」「放浪者（Sā’iḥ）」の異名を持つ。イラクのハワルナクに宮殿を建てたことで知られる［*EI*²: Lak̲hmids］。

229）ハワルナクはナジャフの東方にある地名で、実際にはラフム朝の王ムンズィルによって宮殿が建てられた。この宮殿はアッバース朝初期に増築され使用されたが、14世紀には廃墟になっていた。ここでの逸話に見られる「スィニンマールの報い」の諺で知られる。話の典拠については、イブン・ファキーフ参照［*EI*²: al-K̲hawarnaḳ; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 176–178］。

スィニンマールは言った。「私は、この城の中の1つの場所を知っています。もしそこから石を1つ取り去れば、この城は崩れ落ちてしまうでしょう。」

ヌゥマーンは聞いた。「おまえ以外に［その場所を］誰も知らぬのか？」

［スィニンマールは］答えた。「知りません。」

［ヌゥマーンは］スィニンマールを城から下に投げ落とし、彼を殺した。［ヌゥマーンは］言った。「誰かに［そのことを］言って、これを壊すとも限らぬからな。」(p.212)

彼は私を罰した　アッラーが彼に最悪の報いをお与えになりますように

罪がなかったにもかかわらず［罰を受けた］スィニンマールの報いを

その後、ヌゥマーンは何度かシャームに行き、しばらくすると戻った。ある日ハワルナクに行き、庭園を見て回った。ユーフラテスの向かいの細流が、堀のようにハワルナクの周りを巡っていた。彼は驚いて立ちつくし、ワズィールに尋ねた。「これ以上の驚異をおまえは見たことがあるか？」

［ワズィールは］答えた。「いいえ。ですが、1つ欠点があります。永遠には残らないことです。」

［ヌゥマーンは］言った。「永遠に残るものとは何か？」

ワズィールのいわく、「至高なるアッラーのもとにあるものにございます。」

［ヌゥマーンは］言った。「それはどうやって得ることができるのか？」

いわく、「現世の放棄であります。」

ヌゥマーンは粗布を纏い、姿を消した。もはや誰も彼を見ることはなかった。彼の息子のムンズィル・ブン・ヌゥマーン（al-Munẕir b. Nu‘mān）[230] が彼の跡を継いだ。

「碧［の館］(al-Ḫaḍrā)」。碧の館は壮大なドームである。ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーンが20年かけて、大理石でもってシャームに建てた。天井はチーク材で、装飾は金とラピスラズリで、床はモザイクで造られている。

完成すると、1人の男が中に入ってきた[231]。［ムアーウィヤは］尋ねた。「何用か？」

［男は］言った。「もしこの碧の館を、創造主の財から、つまり国庫（bayt al-māl）から建てたのなら、おまえは裏切り者である。また、もし自分の財で建てたのなら、おまえは浪費家である。」

ムアーウィヤは嘆き、言った。「もしこれより前に聞いていたならば、［このようなものを］造りはしなかったのに。」

別の男が中に入ってきて、言った。「**ムアーウィヤよ、人々が避けるような場所は棄てよ**。」

家や宮殿というものはいずれも、まさにそのとおりである。

＜逸話＞

アリー・ブン・アースィム（‘Alī b. ‘Āṣim）[232] は［次のように］言っている。

ヒズル――**彼に平安あれ**――はイスラエルの民の1人の青年と仲が良かった[233]。［当時の］帝王

230）ラフム朝のムンズィル1世。ヌゥマーン1世の後を継ぎ、王国を44年間統治した。ビザンツと戦う一方で、バフラーム・グールの戴冠に尽力するなど、サーサーン朝の内事にも重要な役割を果たした［*EI*²: Lakhmids］。

231）この逸話についてはイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 156］。最後の部分のアラビア語は、イブン・ファキーフや本書巻末の訂正表に基づき、「ムアーウィヤよ、人々が避けるような場所におまえは住んでいる（nazalta）」と解してもよいだろう。

232）アブー・アル＝ハサンとも呼ばれるワースィト出身のハディース伝承者。817年没［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 21, pp. 166–167］。

233）『クルアーン』18章64–81節において、ヒズルはムーサーの前に現れ、彼を試す。ここでイスラエルの民が登場するのは、そのことと関わりがあろう。

は暴君であった。［帝王は］その若者に言った。「ヒズルがおまえのところに来ているが、彼を私のもとに連れて来い。」

［若者は］ヒズルを連れてきた。王はヒズルを見て、言った。「おお、ヒズルよ。そなたに会うことを楽しみにしておったぞ。私に世界の不思議をひとつ話してくれ。」

［ヒズルは］言った。「私はかつてこの町に入り、（p. 213）良い町だと思いました。［そこを］去り、500年して戻ると、荒廃した丘々を見ました。丘の上で羊飼いに会い、私は言いました。『ここに町がなかったかね？』

［羊飼いは］言いました。『いまだかつてなかったよ。』

私は［そこを］去り、500年して戻ると、海がありました。そこに潜水夫たちがいたので、私は尋ねました。『ここに人の住める場所はなかったかね？』

彼らは笑ったのでありました。私は［そこを］去り、500年して戻ると、木が生い茂った林を見ました。［そこを］去り、500年して戻ると、すべてが砂でありました。［そこを］去り、500年して戻ると、すべてが洞窟で、煙が立ち上っていました。［そこを］去り、500年して戻りましたが、［今や］私は人の住んでいる町を目にしています。私は尋ねました。『この町は誰が造ったのか？』

人々は知りませんでした。」

帝王はこの話を聞くと、ヒズルに跪き、言った。「私はあなたにお仕えします。」

ヒズルは言った。「あなたにはできない。だが、この若者に死ぬまで服するがよい。」

「ハザラーン（Ḫazarān）」は、数ファルサングにわたって壁を張り巡らした防壁である[234]。水上に聳え立ち、山頂まで伸びた巨大な防壁である。この上に登ろうとする者は、夜には登ることができる。礼拝をしてからそこへ行くと、無事に戻ってくる。もし昼間にそこに行こうとすると、〔海から1匹の竜が現れ、通らせない〕。

「ホラーサーン（Ḫurāsān）」は地方［の名］である[235]。［そこの人々は］イスラームの援護者である。優美さと威厳を備えており、聡明である。テュルクたちに隣接している。

預言者――彼に平安あれ――は次のように言った。「ホラーサーンからは、ジャーヒリーヤ時代にも、イスラーム時代にも旗は揚がらない。［だが混乱が］極みに達すれば、現れるのだ」、すなわち、「勝利するであろう」と。創造主は、ウマイヤ家の行状を良しとしなかったので、ホラーサーンから軍を起こした。［ホラーサーンの人々は］黒衣を纏い、「我々はウマイヤ家から報復を勝ち取るまで［黒衣を］脱がないのだ」と誓った。彼らは勝ち取り、アッバース一族に［統治を］委ねた。

ムハンマド・ブン・アリー・ブン・アブドゥッラー・ブン・アッバース（Muḥammad b. ʻAlī b. ʻAbd Allāh b. ʻAbbās）[236] は言う。「クーファの民はアリーの党派で、バスラの民はウスマーンの党

234）ハザル（後注249）の付近にあるとされた「ゴグとマゴグの防壁（Sadd Yājūj wa Mājūj）」を指すと考えられる。この防壁と、そこにいる竜についての逸話を、イブン・ファキーフが伝えている［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 298–300］。本文後出のハザルの項や、ヌーシラヴァーンがハザルの海（カスピ海）の向こう側に築いた防壁（本訳注（4）、486頁）、海竜の話（本訳注（3）、390頁）もあわせて参照されたい。

235）歴史的なホラーサーンとは、イラン北東部、アフガニスタンのヒンドゥークシュ北麓地方、トルクメニスタン共和国を構成する地域を指す。651年、アラブ軍に征服される。ウマイヤ朝末期、この地方に駐屯していた軍隊はアブー・ムスリムに指揮され、アッバース朝創設運動の原動力となった［「ホラーサーン」『新イスラム事典』］。

236）預言者ムハンマドのおじアッバースの曾孫で、アッバース朝の初代カリフのサッファールと2代目カリフのマンスールの父親（743年没）。本文とほぼ同内容の発言をムカッダスィーが記す［*EI*²: Muḥammad b. ʻAlī b. ʻAbd Allāh; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, pp. 293–294］。

派である。ジャズィーラの民は反逆者であるハワーリジュ（ḥarūrī）[237] の党派で、アラブたちはカリフ派である。(p. 214) シャームの民はアブー・スフヤーン（Abū Sufyān）[238] に従い、マッカとマディーナの民はアブー・バクルとウマルに属す。おまえたちは、ホラーサーンの人々とともにあらんことを。なぜなら、彼らの数は多く、悪事に関心がないからだ。」

知れ。ホラーサーンは祝福された土地である。そこには立派な町々があり、住民は聡明で、卓越した学識者たちがかの地から輩出されている。信仰の援護者となり、ハディースの徒の支えとなる。他の［地の］人々よりも学問を愛好する。**これがその図である**［図］。

「フッタル（Ḫuttal）」はマーワラーンナフルの地区の１つである[239]。そこにはフルブク（Hulbuk）やムンク（Munk）といった町がある[240]。フッタルの特産品は、フッタル産の馬、フェルト、投げ縄である。王はフルブクに座している。フッタルはヴァッハーンの境域にある。不信心者たちの場所である。ヴァッハーンは銀鉱であり、フッタルの渓谷では金が見つかる。大水の時に、ヴァッハーンの地からもたらされるのである。ヴァッハーンはチベットに近い。フッタルの地は果物が多く、肥沃である。フッタルからは、クヴァーディヤーン（Qubādiyān）[241] やチャガーニヤーンの土地や、ティルミズへと至る。(p. 215) ティルミズはジャイフーン［の川］のほとりにあり、シューマーン（Šūmān）[242] と境界を接している。チャガーニヤーンからはサフランがもたらされ、クヴァーディヤーンからはアカネがもたらされる。

「ホラズム（Ḫwārazm）」は祝福された土地である[243]。人々は信心深く、情熱的で雄々しい。彼らには気品があり、威厳を備えている。そこはきわめて寒冷で、人々は聖戦士（ġāzī）となる。不正を受けつけず、公正な王以外はいかなる王にも満足しない。その地の大きな町はジャルジャーニーヤ（Jarjānīya）[244] である。ホラズムの言葉は難しく、「ゼ」の音を多く含んでいる。そこにはアルダクー（Ardakū）[245] という別の町があるが、［そこの］語彙も難しい。彼らは信徒の長たるアリーの敵である。寒さが厳しく、顔が枕の上で凍りつき、普通の木が裂けるほどである。彼らはあ

237）イスラームにおける最初の政治・宗教的党派。657 年にアリーとムアーウィヤ 1 世が調停しようとした際にアリーのもとを去った人々がもとであり、「脱出した人々（ハワーリジュ）」と呼ばれた。ウマイヤ朝時代にはアラビア半島やイラン南西部にも活動を広げたが、アッバース朝の成立後、イラクでは途絶えた。同派は、アリーをはじめ、同派以外のムスリムをカーフィル（無信仰者）とみなした［「ハワーリジュ派」『新イスラム事典』］。

238）ウマイヤ朝創設者ムアーウィヤの父（653 年頃没）。クライシュ族の指導者で、当初はムハンマドに敵対したが、最終的にイスラームを受け入れた［「アブー・スフヤーン」『岩波イスラーム辞典』］。ここではウマイヤ朝の代名詞として用いられている。

239）フッタラーン（Ḫuttalān）とも言われる。ジャイフーン川の左岸に位置する。豊かな牧草地を有するため、馬の飼育に適しており、フッタルの馬は中国にも知られていた［*EI*²: Khutallān］。

240）これらの地名は『諸都市辞典』等では確認されないが、わずかにイスタフリーが挙げており、フルブクがスルターンの居所であることにも触れている［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 297］。

241）クヴァーディヤーンはアム川の右岸の町と地方の名称。クヴァーディヤーン川（アム川の支流の 1 つ）の盆地を含み、チャガーニヤーンとフッタルの間に位置した［*EI*²: Ḳubādhiyān］。

242）マーワラーンナフルの主要都市の 1 つで、現在のタジキスタン共和国西方にあるヒサールを指す。8 世紀にアラブがこの地を征服したとき、ここに城砦を建設し、それが「シューマーン」と呼ばれた。イスラーム初期にはサフランの産地として知られた。『世界の諸境域』にも、この地がサフランの産地として有名であることが記されている［*EI*²: Ḥiṣār; *Ḥudūd al-ʿālam*, p. 115］。

243）ジャイフーン（アム）川下流地域を指す地名。現在のウズベキスタンとトルクメニスタン両共和国にまたがる。

244）「グルガーンジュ（Gurgānch）」のアラビア語形の呼び名。ホラズム西部に位置し、11 世紀にはホラズム第 2 の都市であった。町の遺跡はトルクメニスタン共和国に残り、現在のウズベキスタン共和国のウルゲンチは 17 世紀以降に新しく造られた町である［*EI*²: Djardjāniyya; Gurgāndj］。

245）ホラズムの町から 1 行程に位置する村と伝えられる［イブン・ファドラーン著、家島彦一訳註『ヴォルガ・ブルガール旅行記』平凡社、2009 年、61 頁］。

まりに着込みすぎているため、馬に乗ることができない[246]。一方はホラーサーンに接し、一方はマーワラーンナフルに接する。ホラズムの地域からホラズムの湖（アラル海）の岸にある山際まで、ジャイフーンの渓谷は夏まで凍結する。ジャイフーンの川とシャーシュの川はこの湖に注ぐ。ホラズムでは、クルミ以外のあらゆる実がなる。ホラズムの人々は旅を好み、グズに対して優勢である。ホラズムの地方には宝石の鉱床はまったくない。ホラズムの特産品は、傷に効く石、クロテン、塩づけの魚、礼拝用の敷物、フェルトの鞍敷き（laḥāf）である。

「フーゼスターン（Ḫūzistān）」は恩恵に満ちた地方であるが、空気は淀んでいる[247]。そこの住民は少しばかり性格が悪く、［人々は］この地方から逃れようとする。イスファハーンの人々は行く先々でイスファハーン出身の同郷の者を見かけるが、［それは］フーゼスターン［の人々］も同様である。理由の1つとしては、彼らが財を集めることに貪欲だからで、もう1つは、人の多さに耐え切れないからである。3つ目の理由は、人は心地よい場所からはあまり移動しないからである。

アリー・ブン・アビー・ターリブは次のように言った。「［偽マフディーの］ダッジャール（dajjāl）[248] はイスファハーンから現れる。彼に先だってミフラーン（Mihrān）という名の男が現れるが、その生まれはフーゼスターンである。彼は、マッカとマディーナと聖なる家（イェルサレム）を除き、（p. 216）世界中を破壊する。」

このため、「世界の荒廃や飢饉はイスファハーンから始まる」と言われている。

フーゼスターンは平らな土地であり、いくつかの川が流れ、凍結することはない。その地の人々は、顔は青白く、痩せて、短気である。特産品は、砂糖、棒砂糖、シトロン、レモン、ニンジンボク、良質の布地、豪華な錦、絹織物、絹などたくさんある。栄えた場所で、多くの町や多くの村があり、［人々は］信仰儀礼に勤しみ、敬虔で信心深い。この地方の図は次のとおりである［図］。

「ハザル（Ḫazar）」は地方［の名］である[249]。そこの人々はすべてユダヤ教徒であった。ゴクとマゴクはハザルの1種である。ハザルには、サマンダル（Samandar）[250] という名の大きな町がある。その真ん中をイティルの川（ヴォルガ川）［が流れ］、4000の庭園があり、「黄金の玉座（Sarīr al-ḏahab）」[251] の地方に［至る］。その地方はファールスの王が支配していたが、バフラーム・チュービーン（Bahrām Čūbīn）[252] の子孫である1人の王が彼から奪い取った。ハザルの隣には、

246）ホラズムの冬の厳しさを伝える逸話は『ヴォルガ・ブルガール旅行記』にも見える［『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（家島訳註）、62頁］。

247）イランの南西部に位置する地域。高温多湿で名高く、居住性はよくない。しかし、カールーン川などが流れているため、水量には恵まれている。このため、サーサーン朝時代から、大規模な灌漑施設や町が営まれて繁栄した［*EI*²: Khūzistān］。

248）「欺く者」の意。最後の審判の直前40日間、あるいは40年間現れて、世界に乱れと圧制をもたらすとされる。彼の出現は終末の予兆の1つである［*EI*²: al-Daḏjḏjāl; *EIr*: Dajjāl］。

249） 7–11世紀に現在の南ロシア、カザフスタン、ウクライナ、北カフカースの地域に成立したテュルク系遊牧民族の国家。679年には国家を樹立し、9世紀に当時流布していたユダヤ教、キリスト教、イスラームのうちユダヤ教を国教に採用した。以下に見られる、ハザルがユダヤ教徒であること、ゴグとマゴグがハザルの1種であるといった話は、イブン・ファキーフの記述と共通している［「ハザル」『岩波イスラーム辞典』; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 298］。

250）650年にアティル（イティル）に移るまで、ハザラの首都であった［*EI*²: Atil］。表記はサーデギー本による。

251）具体的にどの地を指すのかは不明だが、本書第4部第2章の「諸門の門（Bāb al-abwāb）」の項（前出）も参照されたい。

252）サーサーン朝のホルムズ4世（在位579–590年）のもと、対ビザンツ戦や突厥の可汗との戦いで活躍した将軍。戦功があったにもかかわらず彼を冷遇したホルムズに対して反旗を翻し、王の死とともにクテスィフォンで即位した（在位590–591年）。しかしビザンツに逃亡していたホルムズの息子ホスロウ2世との戦いで敗北し、中央アジアに逃走、殺害された。イスラーム時代の文学作品の中では、弓の名手の高潔な英雄として描かれる［*EIr*: Bahrām VI Čōbīn］。

プルタース（Purṭās）と呼ばれる部族がいる。ハザルの地方からは、膠の他に特産品はない。

彼らの王の名称は「ハーカーン（Ḫāqān）」である。（p. 217）彼らは王を即位させるとき、死ぬ寸前まで喉を締め上げて、「何年、統治をするつもりか」と尋ねる。［王が］「何年」と答えると、［王は］その時期まで統治を行う。［その時点で］死んでいなければ、彼らは王を殺す。

「ハーンフー（広東）（Ḫānfwā）」は中国の地方にある大きな町である。町の外には武装倉庫（masāliḥ）があり、男たちがそこを守っている。ハーンフーの王の取り分として、船からは10分の1が取り立てられる。商人の荷物はすべて王の宮殿に運び込まれ、その上に印章が押される。6ヶ月経ち、風が収まり海の波が穏やかになると、品々を別の場所へ送り出す。

ハーンフーの出身者が死ぬと、その者が生まれた日に埋葬する。［埋葬せずに］1年間保管する場合もある[253]。金持ちであれば［遺体に］香料を振り、貧しい者であれば貝殻を撒く。「ナキール（naqīr）」と呼ばれる木があり、それで棺をつくる。その木は1000年経っても朽ちない。ハーンフーは世界の果てである。

「ハビース（Ḫabīṣ）」はケルマーンの境域にある町である[254]。町の中では雨が降らないが、外では降る。城壁の端に行き、手を伸ばすと、雨が手に当たる。そこにはまったく火が点かない木がある。キリスト教徒はそれにメッキを施す。「十字架の香木（‘ūd al-ṣalīb）」と呼ばれている。

「ハーシュ（Ḫwāš）」は、同名の山から7ファルサングのところにある町である[255]。そこからは良質の塩化アンモン石が採れる。真っ暗な洞窟があり、そこからは煙が立ち上り、塩化アンモン石となる。スルターンはその10分の1を取る。

「ホジャンド（Ḫujand）」は町［の名］である[256]。そこの特産品は、乾燥させたアンズ、クルミ、スモモであり、非常に良質で驚くほどである。

＜ダール（al-dāl）の項＞

「ダマスクス（Dimašq）」は美しい町である。気候は快適で、水は美味である。まるで楽園の一隅のようである。［クルアーン］注釈者たちは、「**円柱の並び立つイラム（の都）**［Q89: 7］とはダマスクスのことである」と言っている。アスマイー（Aṣma‘ī）[257]は、（p. 218）「この世の楽園とは、

253）『中国とインドの諸情報』によると、広東では人が死去すると、翌年の命日まで埋葬せず、遺体を棺の中に入れて、家の中に安置する慣習がある［『中国とインドの諸情報』（家島訳註）、第1巻56頁］。本書の場合は、1周忌の命日に埋葬するのではなく、誕生日に埋葬すると考えているため、誕生日が死亡日の直前だった場合などを想定しているのだろう。いずれにせよ、上述の書の情報が錯綜していることに変わりはない。

254）イラン南東部のケルマーン近郊、ルート砂漠南端にあった町。現在のシャーダード（Šāhdād）市の一区名として残る。雨についての同様の記述をイブン・ファキーフが伝える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 207］。

255）イラン南東部のケルマーンとスィースターンの間にある町。いずれの地方にも同名の地名が確認されるが（後者は現在の Khāš）、塩化アンモン石のくだりにおいて本書の記述と合致するものはない［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 206; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, p. 398; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 320–351］。

256）現在のタジキスタン共和国第2の都市。シル川上流のフェルガーナ盆地の入り口にあり、シル川南岸に位置している。9–10世紀のアラビア語文献によってこの名が知られて以降、マーワラーンナフルの代表的都市に数えられる［「ホージェンド」『東洋史辞典』創元新社、1967年］。

257）Abū Sa‘īd ‘Abd al-Malik b. Qurayb のこと。著名なアラビア語文学者・詩人で、ハールーン・アル＝ラシードに仕えた（828年没）。アスマイーのこの発言はイブン・ファキーフの書による［*EI*²: Aṣma‘ī; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 104］。

ダマスクスのガウタとバルフの川とウブッラの川である」と言っている。

ダマスクスは、暴君ザッハーク・ビーヴァラースプが建設した。ディマシュク（ダマスクス）・ブン・カーニー・ブン・マーリク・ブン・アルファフシャド・ブン・サーム・ブン・ヌーフ（Dimašq b. Qānī b. Mālik b. Arfaḫšad b. Sām b. Nūḥ）[258] が建てたとも言われている。

その集会モスクの中には正方形の建物が造られ、中には24個のガラスの盃が置かれている。青銅製の雄鶏がその中をまわり、1時間ごとに盃の中に玉を1つ落とす[259]。それでもって時を数えるのである。夜になるとまた最初から、1番目の時刻には赤玉が［1つ目の］ガラス盃の中に入り、2番目の時刻には2つ目のガラス盃の中に入る。［それは］夜の長さに合わせて［動く］。人々はそれを驚くべきものと見なしているが、その回転は永遠ではない。その装置を管理するよう任されている人がいるのである。永遠の回転とは創造主のお力のうちにこそある。

［逸話］

ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズがルームで巨大な柱を見つけた。彼は言った。「1本でもダマスクスに運んだ者には、同じだけの黄金をやろう。」

1本の柱が運ばれ、金が与えられた。他の者たちも運んできたが、［ウマルは］言った。「私にはもう必要ない。」

彼らはその場に［柱を］残した。［それを］再び持ちあげることはできなかった。

ダマスクスは、ハーリド・ブン・アル＝ワリードが征服した。ダマスクスの城砦はアブー・ウバイダ（Abū ‘Ubayda）[260] に与えられた。ハーリドはクラーキル（Qurāqir）[261] に下馬し、［ヒジュラ暦］14年ラジャブ月（西暦635年8–9月）にガウタに入った。

ダマスクスの驚異は、100年間ダマスクスに暮らしてじっくり見て回っても、毎日見たことのないものを目にするということである[262]。

ハイサム・ブン・アディー（Hayṯam b. ‘Adī）[263] は言っている。「ムアーウィヤは20年間シャームの総督であった。彼は数々のミフラーブや宮殿を造った。大理石でモスクを建て、その天井にはチーク材を施し、ラピスラズリと金で装飾した。ミフラーブは高価な宝石で飾り立てた。壮大な建物をいくつも造った。」

ダマスクスには、美味しい果物がいくつもある。町中を見ても、醜い顔の人や性格の悪い人は見当たらない。

258）本書巻末の訂正一覧およびヤークート等の記述に従い補った［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, p. 464; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 104; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 159］。名前から判断して預言者ヌーフ（ノア）の子孫にあたるこの人物は、ダマスクスのアラビア語発音「ディマシュク（Dimašq）」という名前を持つ。

259）イスラーム世界での水時計はギリシア、ヘレニズム及びイランの着想が結びついたもので、アルキメデスによって考案されたと伝えられる、鳥のくちばしから玉を飛び出させて刻を告げる装置が基本であった［アルハサン＆ヒル『イスラム技術の歴史』（多田他訳）、79頁］。

260）クライシュ族出身の教友（639年没）。初期の改宗者であり、天国が約束された10人のうちの1人である。シリア征服に功績があった［*EI*²: Abū ‘Ubayda al-Ḏjarrāḥ］。

261）ハーリドがシリア遠征途上に立ち寄った場所。イラクのサマーワ近郊とされる［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, pp. 317–318］。

262）同じ記述がイブン・ファキーフに見える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 108］。

263）クーファ生まれの歴史家（821/2年か824年没）。アッバース朝カリフ、マンスールからハールーン・アル＝ラシードの時代にかけて宮廷にも招かれた。彼の著作は、ヤァクービーやタバリー、マスウーディー等に参照されたが、現存はしていない［*EI*²: al-Hayṯham b. ‘Adī］。

「ダームガーン（Dāmġān）」はタバリスターンの境域にある町で、昼夜を問わずいつもそこには風が吹いている[264]。その地には1本の川があり、ホスロウがそれを分割した。［川は］洞窟から流れ出しており、120本に分けられている。各水路はそれぞれ村に流れ込み、1つが別のものより［水量が］多いということはない。かつてある人が120個の（p. 219）クルミをその川に投げ入れたところ、クルミは1個ずつそれぞれの水路を流れていった。

イスカンダルは世界を巡り、ダームガーンに到着したとき、この世から旅立った。彼はイスカンダリーヤに運ばれた。

「ドゥンクラ（Dumqula）」はヌビア（Nūba）の地方にある町で、ナイルの岸辺にある[265]。7つの門を持ち、石で造られている。70日行程にもなる大きさの町で、［全長］900ファルサングにもなる。この地方にはエメラルドの鉱床があり、井戸から土を掘り出して洗い流すと、エメラルドのかけらを得ることができる。

彼らの王の名は「カービール（Kābīl）」である。書簡では「**ムクッラとヌビアの王、カービールより**[266]」と記される。

ナイルの向こう側は「闇の世界」である。

「ダーラーブジェルド（Dārābjird）」はファールスの境域にある町で[267]、そこには堀があり、水はその地の泉からもたらされる。この水堀には草があり、その中に入った人や家畜は巻き付かれ、そこから抜け出すことができない。この町には、ドームのように丸く突き出た山がある。どことも接しておらず、そこに登ることはできない。

「ダミエッタ（Dimyāṭ）」と「ティンニース（Tinnīs）」はミスルにある2つの町で、水の中にある[268]。そこでは農業も牧畜も行われていない。そこには船に乗る以外に行く手段はない。その地には「イルカ（dulfīn）」がいるが、それは革袋のようなものである。ミスルからルームまで10日行程である。その地の町には、アスカラーン（‘Asqalān）やクース（Qūs）、キナー（Qinā）、アイン・アル＝ザーブ（‘Ayn al-ḏāb）がある[269]。そこの特産品は亜麻布と葦筆[270]である。

264）テヘラン＝マシュハド間のホラーサーン街道上にある都市。ダームガーンの風やホスロウ（キスラー）時代に造られた水路については、アブー・ドゥラフ参照［*EI*²: Dāmghān; アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、37–38頁］。

265）Dunqulaとも表記される。現在はスーダン領にあり、キリスト教国ムクッラ（al-Muqurra）の都であった。前半部分の町の大きさなどについては、イブン・ファキーフの記述と一致する［*EI*²: Dongola; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 78］。

266）『諸都市辞典』のヌビアの項を参考に、“min Kābīl malik Muqurra wa Nūba” と読む［Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, vol. 5, p. 309］。

267）ダーラーの父ダーラーブ（ダレイオス）によって建設されたと伝えられる町。イラン南方のファールス州に位置する。現在のダーラーブ。古い町跡の中心には突き出た塩の山があり、円形の市壁に囲まれる。水路についてはイスタフリー参照［*EI*²: Dārābjird; al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 123］。

268）『世界の諸境域』では、ティンニースとダミエッタがティンニース湖上にある2つの町として挙げられているが、実際にはダミエッタはナイル河口近くにある陸上の町である。ダミエッタはイスラームの征服以前から重要な拠点として栄えた町で、ビザンツ帝国や十字軍の攻撃に幾度となくさらされた［*EI*²: Dimayāṭ; *Ḥudūd al-‘ālam*, pp. 54–55］。ティンニースは既出（前掲注182参照）。

269）アスカラーン（アシュケロン）はパレスチナ南部の地中海沿岸の都市。ファーティマ朝下で繁栄し、十字軍とエジプトの支配者の間で繰り広げられた戦いの前線となった。本章のアインの項に見られる（テキスト250頁）。クース（古名ゲサ）は上エジプトのナイル川の東岸に位置し、ルクソールの北約30キロメートルにある。キナー（現在のケナー）はクースの北、同じくナイル川の東岸にある［*EI*²: ‘Asḳalān; Ḳūs; Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 332］。アイン・アル＝ザーブは不明。

270）原語はqaṣabであり、ここでは「筆」と採ったが、「サトウキビ」や「金銀刺繍」などの意味もある。

「コガネムシの修道院（Dayr al-ḫanāfis）」はディヤールバクルにある。砦が1つあり、ハズィーラーン月[271] 15日には、1億匹のコガネムシがそこにやってくる。壁や天井が内側も外側も真っ黒になるほど、修道院はコガネムシで一杯になる。夜になると、すべて飛び立ち、去ってしまう。翌年まで1匹も目にすることはない。

（p. 220）＜ザール（al-ḏāl）の項＞

「ザマール（Ḏamār）」はイエメンの境域にある町である[272]。そこには「ザムーラーン（Ḏamūrān）」と「ダラーン（Dalān）」と呼ばれる2つの村がある[273]。その地には、他のいかなる土地にもいないほど美しい顔した背の高い女たちがいる。姦通がおおっぴらに行われており、堕落した輩どもがあちこちからこの地に向かう。言われているところによると、ザムーラーンとダラーンは2人の帝王であった。彼らは世界中から女を選りすぐったので、美しい子供が生まれるのだ、と。彼女たちが美しいのはこのためである。

「蹄の塔（Ḏāt al-aẓlāf）」はハマダーンの近くにある場所［の名］で、「蹄の墓場（Gūr-i sunba）」とも呼ばれる。それは野ロバの蹄で造られた塔である。肩胛骨王シャープールが、それ以上にはあり得ないほどに美しい構図で建てたものである。長い時間が経ち、激しい風や雨に晒されても傷1つつかなかった。これを建造した理由は次のとおりである。シャープール・ブン・アルダシールが狩りをしようとやってきた[274]。その地に住む人々は、野ロバの被害について訴えた。［シャープールは］野ロバをすべて根絶やしにするまでは立ち去らないと約束した。そうして野ロバを殺し、その蹄を長い釘で結び合わせ、この塔を築いたのである。

＜逸話＞

次のように言われている。占星術師たちはシャープールに言った。「あなたは辛苦と貧困に陥るでしょう。［ですが］あなたが金のパンを銀の卓上で食べるとき、王権があなたのもとに来るでしょう。」

やがてシャープールは狩猟［の際］に道に迷って、この地方にやって来た。衣服と王冠を皮袋に隠し、1人の農夫に預けた。［シャープールは］農作業を行い、農夫の娘をめとった。時が過ぎ、ある日シャープールの妻は、彼に渡そうとキビの丸パンを2つ持ってやって来た。シャープールは川の向こう側にいた。彼は鍬を真っ直ぐに伸ばし、（p. 221）丸パンがその上に置かれた。それを食べようとしたとき、鍬の上に黄色いパンが載っているのが目に入った。［とっさにシャープールは］銀の卓上の金のパンのことを思い出した。そこで王冠を頭に載せ、鞭を村の門から垂らし、彼の軍を集めた。人々は彼に跪いた。シャープールはあの農夫にたくさんの褒美を与えた。

271）シリアの暦法上での第9月。夏の始まりの日にあたる［*LN*: Ḥazīrān］。

272）アラビア半島南部、サヌアーとアデンを結ぶ街道上の地方および町の名。この地は肥沃で、庭園が広がり、「イエメンのミスル」とも呼ばれた。サヌアーから16ファルサングの距離にある［*EI*²: Dhamār ; Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 138; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 112］。

273）校訂本ではDalānとなっているが、fā写本に従った。ザムーラーンとダラーンはザマール地方の地名で、南アラビアで最も美しい女性がいると言われていた［*EI*²: Dhamār］。

274）対アラブの懲罰遠征で捕虜の肩をひもでつないだことから「肩胛骨王（Ḏū al-aktāf）」の異名をもつシャープールは2世であり、一方アルダシールの息子のシャープールはシャープール1世であるが、ここでは同一人物とみなされている。

その後、人々はシャープールに尋ねた。「いかがお過ごしでしたか？」

［シャープールは］言った。「野ロバのせいで私はいっときも休まらなかった。昼間は農作業にいそしみ、夜は疲れ果てていた。野ロバが私を休ませてはくれなかったのだよ。」

軍は彼のために、各自1頭の野ロバを捕まえた。［シャープールは］その蹄で、高さ30ギャズ、周囲20ギャズの塔を建てた。

そしてシャープールは大工に言った。「おまえは誰かのためにこのような塔を造ったことがあるか？」

彼は答えた。「いいえ。」

［シャープールは］言った。「命じられれば、造るのか？」

［大工は］答えた。「はい。」

王は彼を殺害するよう命じた。大工は言った。「私をこの塔の上にやってください。塔の扉を閉めれば、私はそこで死ぬでしょう。」

［大工は］1本の木を持ってきて、言った。「太陽に苦しめられないよう、日除けにします。」

彼を塔の中に押しやり、扉を固く閉ざした。大工はその木で2枚の翼を作り、胸に結びつけて、夜のうちに塔から飛び去った。

その塔を見る者は誰しも、志の大きな王が多くの銀を費やして造ったと思うであろう。

「黄金のドーム（Qubba al-ḏahab）」はナイル河岸にある。次のように言われる[275]。ハーイド・ブン・アバーシャールーム・ブン・アル＝イース（Ḥā'id b. Abāšālūm b. al-'Īs）はある王から逃げ出した。30年間ナイルに沿って進んだが、荒野の中を行くばかりであった。さらに30年かけて［ようやく］「緑の海（Baḥr al-aḫḍar）」[276]にたどり着いた。彼は、リンゴの木の下で礼拝している男に出会った。［男が］尋ねた。「何をしに来たのか？」

［ハーイドは］言った。「ナイルの水源を確かめたいと思ったのです。」

男は言った。「私はイムラーン・ブン・アル＝イース（'Imrān b. al-'Īs）だ。私も同じ理由でやって来た。創造主は私に命じた。『巨大な動物がいる場所に留まれ。その頭は見えるが、尾は見えない。それは、太陽が昇ると動き出し、太陽を飲み込もう［と追いかけていく］。おまえはその背に座れ。そうすれば、おまえを海の向こう側へと連れて行ってくれるだろう』と。」

彼（ハーイド）はその動物の背に乗り、それは彼を向こう側へと連れて行った。彼は金や銀の大地を見た。また、金や銀からなる木々が植えられていた。黄金の城壁と黄金のドームがあり、そこには4つの扉があった。ドームの上からは水が（p. 222）流れ出し、4つの扉に流れ落ちていた。彼は1人の天使に出会った。［天使は］カンラン石のようなブドウの房を彼に差し出し、言った。「これは天国のブドウです。［ここから先は］道がないから、引き返しなさい。」

彼は引き返し、あの動物の背に乗った。［動物は］彼をこちら側に連れ帰った。リンゴの木にたどり着いたとき、イムラーンは死んでいた。1人の老人がいた。老人はハーイドに言った。「リンゴを食べよ。」

［ハーイドは］言った。「私にはブドウで十分だ。」

275）以下の人名は写本によって若干の異同があるが、逸話については、ムカッダスィーおよび『歴史と物語の要約（*Mujmal al-tawārīḫ al-qiṣaṣ*）』がより詳しく述べている［al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, pp. 21–22; *Mujmal al-tawārīḫ al-qiṣaṣ*, Ed. Malik al-Šu'arā Bahār, Tehran, Dunyā-yi Kitāb, 1381s, pp. 474–476］。

276）通常はナイルの主流である青ナイル川を指す言葉であるが、ここでは青ナイルの水源であるエチオピアのタナ湖のことかもしれない。

［老人は］言った。「食べよ。」
［ハーイドがリンゴを］食べると、［リンゴは消えてなくなり］歯が手に突き刺さった。「こやつはイブリースだ」という叫び声が聞こえた。
もし彼がブドウで満足していれば、彼は死ぬまでそれで十分だったであろう。

私はこの話が数多の書物に記されているのを見たが、その信憑性については保留する。**まことにアッラーは最もよく知りたまう。**

ところで、聖なる家（イェルサレム）にある「黄金のドーム」については、ダーウードが15年かけてそのドームを造った。そこには2本の（p. 223）真鍮の柱があり、それぞれ18アラシュである。それぞれの柱頭には2つの風車がある。その［ドームの］中には、銅製の貯水槽が置かれている。また、2体の天使像があり、その表面は金で覆われている。1体は祭壇（qurbān-gāh）の右に、もう1体は左にあり、翼が影をつくっている。天使はそれぞれ11アラシュの高さである。これが黄金のドームの図である［図］。

ザンジバルにも黄金のドームがあり、その中には金の輪を持った偶像がある。その偶像の前には、7つの果実のなる1本の木がある。［すなわち］ブドウ、イチジク、ダイダイ、リンゴ、シトロン、カリン、ザクロである。毎年2度、実を結ぶ。その木の先端には、三日月型をした鉄製の鉤があり、ザンジュの民は自身の首をそこに差し出し、この像の前でぶら下がる。頭は一方に、体はもう一方に投げ出される。ヒンドの人々はこういったやり方で偶像の前で祈祷する。ときには自らを火に投じ、燃えてしまうこともあり、ときには腹ばいのまま数ファルサング先から偶像寺院にやって来ることもある。

［問答］
もし、「1本の木に7つの果実［がなること］はあり得るのか」と尋ねられたら、「**アッラーは最もよく知りたまう**」と答えよう。最初に7本の若木があり、地面から伸びてくると、互いを結わえつける。そして、7つが一緒になるように世話をすると、人々の目にはそれが1本の木に見えるようになる。それは、もともとは7本の木なのである。ヒンドの人々は偽装しごまかしているのである。

＜ラー（al-rā’）の項＞
「ルーム（al-Rūm）」は広大で恩恵に満ちた地域である。シャームの脇にあり、ジャズィーラと隣り合う。ルームの地は、西風の吹く西方にある。その境は、アンタキアからシチリア（Suqlīya）までと、コンスタンティノープルからトゥーリヤの境域までである[277]。アゼルバイジャンにあるこちら側半分を除いては、全土がキリスト教徒である。とりわけイスラーム風の絵画がある[278]。ルームの人々は聡明である。呪物や絵画や錬金術の技術が彼らの聡明さを証明している。ルームの

277）同様の記述がイブン・ファキーフの書に見える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 136］。なお北極の下にあるトゥーリヤについては、本訳注（4）、487頁参照。

278）ḫaṣṣa ṣūrat-garī kī islāmīst というこの一文の文意は不明。「イスラーム風の（islāmī）」という箇所が、「唐草模様の（islīmī）」や「人物の（insānī）」の誤りの可能性もあるが、決め手に欠ける。サーデギー校訂本にはこの一文は見られない。

図はこのとおりである［図］。(p. 224) この地方にはたくさんの呪物がある。水は美味で、多くの山がある。

ルームの帝王は、コンスタンティノープルにいる。ちょうどヒンドの帝王がカナウジュ(Qanawj)[279] に、中国とチベットの帝王が「ハンダーン」の町にいるように。ヤフヤー・ブン・ハーリド・アル＝バルマキー（Yaḥyā b. Ḫālid al-Barmakī）[280] は言っている。「王にはいくつかの種類がある。家財の王は中国にあり、家畜の王はトゥルキスターンに、財宝の王はアラブにあり、象の王は〔ヒンドにあり〕、万能薬（iksīr）と錬金術の王はルームにある。」

ルームは「黄色の一族（banū al-aṣfar）」と呼ばれる。なぜなら、［あるとき］ルームの王は全員死んでしまい、1 人の女が残った。みなが集まり、「どんな星が昇っても、それが王である」と合意した。突然、逃げてきたエチオピア人が現れたので、人々は娘をその男に与えた。彼女は黄色い男の子を生んだ。［それゆえ］彼らは「黄色の一族」と呼ばれている。

ルームの民には 3 つの玉座[281] がある。1 つはルームの町（ローマ）にあり、1 つはアンタキアに、1 つはキプロスにある。別の玉座は聖なる家にある。

「ルームの町（ローマ）（Madīna al-Rūmīya）」は大きな町である。そこからコンスタンティノープルまでは 1 年の道のりである。(p. 225) 聖なる家にある財物はみな、今はルームの町にある。この町の大きさは、「鳥の市場」が 1 ファルサングにもなるほどである。ルームの町には 6 万の浴場と、驚くべきいくつかの呪物がある。

ワリード・ブン・ムスリム［・ディマシュキー］（Walīd b. Muslim [al-Dimašqī]）は言う。「私はルームの町の海岸に降り立ち、ある山の上に登った。海の底のような緑色をした何かが見えた。私は『神は偉大なり』と唱えた。ある人が『何かありましたか？』と尋ねた。私は言った。『私たちは、海を見ると必ず神の偉大さを讃えるのです』と。ルームの町の人は笑って、言った。『あれは海ではなくて、ルームの町の［家々の］屋根ですよ。どれも宝石で飾られているのです。』」

知れ。ルームの町の外周は (p. 226) 40 ミールであり、1 ミールごとに 12 の塔がある。ルームの町の壁に沿って 1220 の塔が建てられ、10 の塁壁がある。よそ者がここにやって来たら、［その広さに］困惑し、骨折ることだろう。**その図は左のページに描かれている**［図］。

そこからは、錦、綾絹、マフフーリー織り[282]、辰砂がもたらされる。町の 3 方向が海である。とりわけ 2 つの石壁があり、それぞれの壁の厚さは 20 アラシュにもなる。その 2 つの壁の間には大きな川があり、それは「クスティーター（QSṬYṬA）」と呼ばれている。［川は］全体が銅板で覆われている。銅板は 1 枚が 40 アラシュであり、4 万 2000 枚の銅板がある。その深さは 96 アラシュである。

ワリード・ブン・ムスリムは言う。「ルームの町の門を入ると、獣医の市があった。階段を上がると、〔酒屋の市があった。私は 1 人の若者に『両替商はどこか』と尋ねた。［若者は］『町の中にある』と言った。私は町の方へ向かった。〕両替商の市があった。町の中心に向かって 6 ミール行

279) デリーの南東 200 キロメートルほどにある町。8–12 世紀にかけて複数の王朝の首都になった。12 世紀末にゴール朝に征服されてからはかつての繁栄を失った。

280) バルマク家のハーリドの息子。ハールーン・アル＝ラシードの教育係であり、ハールーンの即位後はワズィールに任じられたが、803 年に処刑された［「バルマク家」『岩波イスラーム辞典』］。なお、以下の発言はイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 136］。

281) ここでの “kursī” は「司教座」のことだろう。

282) マフフール（Maḥfūr）産の織物。絨毯などに用いられる。ペルシア語辞典によると、マフフールはルームの海沿いにある町とされるが、初期のアラビア語の地理書類からは確認されない［*LN*: Maḥfūrī; Maḥfūr］。

くと、そこには教会があった。そのミフラーブは東方を向いていた。」

その地からは、金刺繍の錦、男奴隷と女奴隷、マフフーリー織り、香辛料がもたらされる。その町には賢人がたくさんいる。

「レイ（al-Ray）」。レイは壮大な町である[283]。そこからはすばらしい恵みがいくつも得られる。綿、レイ産のグミ、テヘラーン産のザクロ、ブドウ、ツゲの盆［などである］。

ライ（レイ）・ブン・サイラーン・ブン・イスファハーン・ブン・フィルージュ（Ray b. Ṯaylān b. Iṣfahān b. Filūj）がレイを建設した[284]。それをウマル・ブン・アル＝ハッターブが征服した。

［ウマルは］アンマール・ブン・ヤースィルに命じた。「ウルワ・ブン・ザイド・アル＝ハイル・ターイー（‘Urwa b. Zayd al-Ḫayl Ṭā’ī）[285] を1万8000の兵士とともにレイに送れ。」

レイの人々は彼に味方し、彼は［その町を］征服した。

マンスールの時代に［息子の］マフディーがその町を建て［直し］、［ヒジュラ暦］158年（西暦774–75年）にはモスクを建設した。かつてレイは「アラーズィー（Arāzī）」[286] と呼ばれていたが、［その古いレイは］地面に埋没した。［レイから］ハール（Ḫwār）[287] への途上12ファルサングのところには、まず「ムハンマディーヤ（al-Muḥammadīya）」と「ハーシミーヤ（al-Hāšimīya）」が建てられた。

（p. 227）アムル・ブン・マァディーカリブ（‘Amr b. Ma‘dī-karib）[288] はその地のルーダ（Rūda）地区で亡くなった。それは「ケルマーンシャー（Kirmānšāh）」と呼ばれている場所である[289]。同様に、ハッジャージュ・ブン・アルター（Ḥajjāj b. Arṭā）[290] とアリー・ブン・ハムザ・アル＝キサーイー（‘Alī b. Ḥamza al-Kisā’ī）[291] も［この地で死んだ］。サイード・ブン・ジュバイル（Sa‘īd b. Jubayr）[292] はその地に行き、ザッハーク（Ḍaḥḥāk）[293] と会い、彼について説明している。

283）テヘラン南郊の古都。ギリシア語では「ラガー（Raghai）」と呼ばれていた。この項目の前半部分はイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 268–270］。

284）この人物とその祖父の名前に「レイ」と「イスファハーン」というイラン高原の2つの主要な地名が入っていることは興味深い。イブン・ファキーフやムカッダスィーでは名前に若干の異同がある［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 268; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 385］。

285）ウルワはタイイ族出身の武人。この部分はバラーズリーに基づいていよう［バラーズリー著「諸国征服史17」花田宇秋訳、『明治学院論叢』557、1995年、36頁］。

286）テキストはARARYだが、レイの古名に近い「アラーズィー」を採る。他にもAZARY, ARAZY, AZADYなどのバリアントがある［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 269］。

287）レイ＝ニーシャープール間に位置する小さな町［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, pp. 208–209; Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-’arḍ*, p. 279］。

288）イスラーム最初期の名高い戦士の1人。631年にメディナに赴き、イスラームに改宗した。預言者の死後離反して、リッダ平定の戦いにおいて捕虜となったが、解放されてヤルムークの戦いやカーディスィーヤの戦いに参加し、いずれかの戦いで戦死した。戦いを主題とする詩作でも知られる［*EI*²: ‘Amr b. Ma‘dīkarib］。彼の埋葬地については、レイとニハーヴァンドの2説がある［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 269; アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、28頁］。

289）この部分には情報の混乱が見られる。本来ルーダ（Rūda）は、レイ＝ハマダーン間にある町で、実際にはハマダーン寄りであるが、「レイのルーダ」と表現されることがある。一方ケルマーンシャーはハマダーンからさらに西方の町であり、両者が同一視されることは考えられない［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, pp. 196, 210; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 401］。サーデギー本では、「アムルはアルマーンシャー（Armānšāh）と呼ばれる場所にある門のところで亡くなった」となっている。

290）アッバース朝のマンスール時代にバグダード建設に携わった4人の建築家のうちの1人［*EI*²: Baghdād］。

291）クーファ出身の詩人、クルアーン朗唱者（804/5年没）。アッバース朝カリフのアミーン時代に活動した。トゥース死亡説もある［Ibn Ḫallikān, *Wafayāt al-a‘yān*, vol. 3, pp. 295–297］。

292）クーファ出身の書記。イスファハーンなどで活動した。710年代にハッジャージュによって処刑された［Ibn Ḫallikān, *Wafayāt al-a‘yān*, vol. 2, pp. 371–374］。

293）『王の書』等で有名な暴君ザッハークではなく、クーファのクルアーン学者、ザッハーク・ブン・ムザーヒム（722/3年没）のことであろう。

アスマイーは「**レイは世界の花嫁である**」と言う。また『**トゥーラー**』には「**レイは人々を従えるもの**」と書かれている、と言われている。イスハーク・ブン・スライマーン（Isḥāq b. Sulaymān）[294] は、「レイは、最初は敵意（sibr）の源であったが、それゆえ盾（sipar）の源にもなる」と言う。ハディースには、「**レイは呪われており、〔その墓は呪われしダイラムの者たちの墓である。〕それは海上の塵であり、真理を受け入れることを拒絶する**」とある[295]。すなわちこれは、悪しき信仰を持つ者たちについて述べられているのである[296]。いかなる町も邪教徒たちから逃れられるわけではない。

レイでは多くの恵みがあるにもかかわらず、［物価が］高い。住民は信仰のために互いに反目している[297]。とはいうものの、イスラームの町であり、立派で意義深い様相を呈している。そこの人々は寛大さを常とし、気前が良いことで有名である。彼らの言語や言葉づかいは正しく、賞賛に値する。預言者――**彼に平安あれ**――と、預言者の一族――**アッラーが彼らに満足されますように**――を大切にし、良き信仰を保っている。

「ルーヤーン（Rūyān）」は、タバリスターンの境域にある孤立した地域である[298]。多くの町がある。ウマル・ブン・アル＝アラー（ʻUmar b. al-ʻAlā）[299] がそこを征服した。ルーヤーンとダイラムの中からは、5万人の戦士を送り出すことができる。

サイード・ブン・アル＝アース（Saʻīd b. al-ʻĀṣ）[300] が［その地を最初に］征服し、20万ディルハムでジョルジャーンの王と講和した。信徒の長のマームーンは、ルーヤーンとダマーヴァンドをマーズヤール・ブン・カーリン（Māzyār b. Qārin）[301] に委ね、その名前を［ムスリム名の］ムハンマドとした。マームーンがこの世を去るまで彼はその地で総督を務めた。［カリフの］順番がムゥタスィムに至ると、マーズヤールはムゥタスィムを裏切った。アブドゥッラー・ブン・ターヒル（ʻAbd Allāh b. Ṭāhir）[302] がマーズヤールを捕らえ、サーマッラー（Surra man ra'ā）に連行した。［マーズヤールは］ムゥタスィムの前に投げ出され、杖で何度も打たれて死に、梁から吊るされた。

294）エジプト出身ユダヤ教徒の医師、哲学者。彼の著作はラテン語にも翻訳されている。955年頃没［*EI*²: Isḥāḳ b. Sulaymān al-Isrāʻīlī］。彼の以下の発言は、SBR ／ SPR という文字をかけた語呂合わせで、意図はよくわからない。別写本では、両方に SYR（旅行・運行・行状・帯・ニンニク等の意）が用いられているが、意味が広くこちらも文意は把握しがたい。

295）『諸都市辞典』に同じ伝承が記されているが、典拠は不明［Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 3, pp. 118–119］。

296）カスピ海南西岸のダイラム地方は、アッバース朝によって弾圧されたシーア派勢力の拠点となったため、シーア派が多数派であった。彼らはアッバース朝勢力にたいしてしばしば反乱を起こし、9世紀にはザイド派のアリー朝が成立している［*EI*²: Daylam］。ここでは、スンナ派の著者トゥースィーによる、シーア派のダイラム人に対する否定的な見解が述べられている。

297）これは、12世紀当時のレイにおいて、スンナ派と12イマーム・シーア派間の宗派・学派対立が激しかった事情を踏まえているのだろう。本書の著者の同時代性を反映する貴重な見解である。レイでの宗派対立については、下山伴子「『反駁の書』の論理構造――537/1142–3のアシュアリー派弾圧をめぐって」『オリエント』42（2）、1999年、129–145頁参照。

298）カスピ海南東岸のマーザンダラーン地方の西半分に当たる地域［*EI*²: Rūyān］。

299）テキストでは「アムル」だが、イブン・ファキーフ等に従う。レイの出身で、758年にルーヤーンを征服し、タバリスターンに併合した［*EI*²: Rūyān; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 305; バラーズリー「諸国征服史17」（花田訳）、82頁］。

300）ウマイヤ家出身の武将。649/50年にクーファ総督に任じられ、アゼルバイジャンとカスピ海沿岸への遠征で活躍した。678/9年没［*EI*²: Saʻīd b. al-ʻĀṣ］。

301）サーサーン朝のホスロウ時代から続いたタバリスターンの地方王朝カーリン朝の末裔。マームーンによって823/4年にタバリスターンの総督に任じられたが、838/9年に反乱を起こし、839/40年に処刑される［*EI*²: Ḳārinids］。

302）ターヒル朝の創始者ターヒル・ブン・フサインの息子（844年没）。829/30年に、兄弟タルハの後を継ぐかたちでホラーサーンに任じられた。ニーシャープールに拠点を置き、レイからホラーサーンまでをほぼ独立して支配した［*EI*²: ʻAbd Allāh b. Ṭāhir］。

［ムゥタスィムは］ルーヤーンをアブドゥッラー・ブン・ターヒルに与えた。

「ラース・アル＝アイン（泉の源）（Ra's al-'Ayn）」はジャズィーラの町である。そこには綿がたくさんある。そこからは300（p. 228）の泉が流れ出し、すべてが集まり、大河となる。それは「ハーブールの川」と呼ばれている[303]。

「ラーム・ホルムズ（Rām Hurmuz）」はフーゼスターンの境域にある美しい町である[304]。そこでは良質の錦が織られている。ザンダカ主義のマニはその地で殺され、吊るされた。一部の人々は、マニはバフラームの牢獄で死に、その後、首が切り落とされた、とも言っている。

「鉛のドーム（Qubba al-raṣāṣ）」はルームの荒野にある。

次のように言われている。ある男が捕らえられてコンスタンティノープルにやって来た。その男が『クルアーン』を詠んでいたところ、コンスタンティノープルの王が気に入り、「我がもとに来い」と言った。［男は］王のもとに行き、鉛のドームを見ることを王に願い出た。この男は王と一緒に出かけた。その場所に着くまで長い時間がかかった。高いドームが見えた。そのドームから〔ヤツガシラが〕外に出てきて、一部の人々を死に至らしめた。さらに1体の偶像があった。［その像は］手を伸ばし、そこには「**すべての王は己の王国を去る。いと高く偉大なるアッラーを除いては**」と書かれていた。また、「私を掘り起こさない限り、何人たりともこのドームに入ることはできぬ」［とも書かれていた］。

［王は］命じ、彼らはその像を苦労して掘り出した。［すると］戸口が見つかった。中に入ると、1000の皿の載った食卓が目に入った。50アラシュもの銘板が大きな墓の上に置かれていた。そこには、「死を恐れよ。死がくる前に急ぎ行え。死は口で言うにはたやすい。［信仰に］服することで［死に］対応せよ。なんとなれば、死の天使は従順な者には親切なのだから」と書かれていた。また別の面には次のように書かれていた。「**敵意のもとは欺瞞である。増進のもとは感謝である。衰退のもとは放縦である。熟練のもとは勤勉である。憎悪のもとは嫉妬である。親愛のもとは贈物である。兄弟愛のもとは微笑みである。決裂のもとは非難である。貧困のもとは浪費である。親愛のもとは気前よさである。必要を満たすのは思いやりである。卑しさのもとは物乞いである。喪失のもとは怠惰である。階級は位階を持つ者との交際にある。成功のもとは思慮深さである。善良な者はみな知性〔と恥じらい〕のうちにある。知性なき者は恥じらいがない。**（p. 229）**恥じらいなき者には知性がなく、そのような者は付き合うに値しない。**おお、アーダムの子らよ。この食卓で1000人の王が食事をしたが、みな片目であり、他の者たちのことは勘定できなかった。おお、アーダムの子らよ。これはラービル・ブン・アービル（Lābir b. 'Ābir）王の墓である。何年もの間、帝王の位にあり、1000の町を征服し、1000人の娘をめとった。［だが］死を癒し対応することはできなかった。これをじっくりと見る者は誰しも教訓を得るだろう。このドームからは何も持ち出すなかれ。私はこのドームに逃げ込み、これは私の墓となったのだ。」

これを見たとき、王の糧食は少なくなっており、彼らは引き返した。

303）本訳注（4）、501頁および同注112参照。

304）イラン南西部のフーゼスターン州の町。旧名はサマンガン（Samangan）。交通の要衝として古くから栄えた。マニは、ジュンディー・シャープールの門に吊るされたことになっているが（本章「ジュンディー・シャープール」の項参照）、本項目で述べられているマニの死に関しては、イスタフリーの記述がある［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 93］。

私は鉛のドームについて、その有用さゆえに語った。**まことにアッラーは正しきことを最もよく知りたまう。そのお方こそ、帰するところであり戻るところである。**

＜ザー（al-zā'）の項＞

「ザランジュ（Zaranj）」はスィースターンの地方にある大きな町である[305]。そこには砦があり、5つの門がある。また、堡塁が1つあり、15の入り口がある。建物はすべて漆喰でできている。というのも、木だと腐るからである。その地には赤い砂があり、その移動する砂に人々は苦しめられている。荷車を作り、砂を荒れ地に運び出すが、毎日舞い上がり、町の城壁を越えて中に入ってくる。もし放っておくと、町は、［周辺の］村ともども砂で一杯になってしまう。町の中には大きな川があり、「ヒンドミード」と呼ばれている。［川は］グールの境域を通って、ザランジュの境域まで流れてくる。

「ザウラー（al-Zawrā'）」は美しい場所である。今では、その地にマンスールが築いたバグダードがある。「平安の都（Madīna al-salām）」と呼ばれている。ティグリスは「平安の谷（Wādī al-salām）」と呼ばれている。アブー・ジャァファル・アル＝マンスールが築き、道にアーチ橋を架けた。

最初の日干し煉瓦を置いたのはマンスールであり、自らの手で置き、「**アッラーの御名において**」と言った。そしてアブー・ハニーファにそこに立つように命じたが、彼は受け入れなかった。マンスールは立たせようと誓った。やがてアブー・ハニーファは、「私が煉瓦を数えましょう」と言った。そうして［ヒジュラ暦］149年（西暦766–67年）に完成した。（p. 230）この町のことを昔は「ザウラー」と呼んでいた。

「ザンジバル（Zangbār）」は、「ザンジュ（Zanj）」とも呼ばれる。大きな町々があるが、土地は乾燥しており、恵みは少ない。建物は少なく、ファールスの海の端にある。わずかなものを除き、緑も植物もない。ザンジバルの人々はいつも戦争をしている。強情な人々である。ザンジバルに行った者は誰でも戦闘的になる。ザンジバルの人々には学識も聡明さもない。卑しく、堕落し、無知で、放縦で、陽気な部族である。ヒンドの人々とテュルクの中間にあり、彼らと同様に顔は大きく、目は細く、あごひげがない。ザーバジュは彼らに近い部族である[306]。

「ザーヴリスターン（Zāwulistān）」はスィースターン地方の町である[307]。サームの息子ザール（Zāl b. Sām）[308]の家がその地の大きな城砦の中にある。また、ロスタム・ザールの家は町の外にあり、荒廃している。ロスタムの墓と彼の父（ザール）の墓は「サマンジュール（Samanjūr）」[309]

305）紀元1世紀から栄えており、イスラーム時代にはスィースターン地方の中心都市であった。現在はイラン＝アフガニスタン国境のアフガニスタン側の町である。ザランジュの砦と門については、イスタフリーが詳しく述べている［*EI*²: Zarang; al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, pp. 240–242］。最後に見えるヒンドミードについては、本訳注（4）、505–506頁参照。

306）ザーバジュについては本訳注（4）、496頁、注82参照。

307）現在のイラン東部およびアフガニスタン西部の、ガズナからザーボルにかけての地域を指す。中心都市ザーボルは、イラン＝アフガン国境のイラン側の町である［*EI*²: Zābul, Zābulistān］。ザーヴリスターンは『王の書』の英雄ロスタムの誕生地として知られる。

308）イラン伝説上の人物。スィースターンの王子であり、英雄ロスタムの父。『王の書』では、白髪で生まれたためにアルボルズ山に棄てられるが、霊鳥スィーモルグに育てられて成長し、カヤーン朝の王に仕えて活躍する［*EIr*: Zāl］。

309）『諸都市辞典』ではニーシャープールの地名として挙がるが、ここではインド洋方面の町とされているので合わ

の町にある。［その町は］ヒンドゥスターンの海の岸辺にある。彼らは、敵が彼らの体を辱めないように、かの地に埋葬するよう遺言した。なんとなれば、彼らには多くの敵がいたからである。

＜スィーン（al-sīn）の項＞

「スィースターン（Sīstān）」は広大な地域であり、祝福され、恵みに満ちた場所である。その境域はホラーサーンからケルマーンの荒地とバーミヤーンまでである。グール、アスフィザール（Asfizār）[310]、ブスト、ザランジュといった美しい町々がある。その地の最大の川はヒードマンド（Hīdmand）の川[311]であり、ゼレの湖に注ぐ。ゼレ［の湖］は小さな海であり、その周囲は30ファルサングである。そこには、たくさんの魚がいる。スィースターン地方全域において［山らしい］山は1つである。町の門のそばにあり、その名は「タッタ（NBH）」[312]である。次のように言われている。1匹の蛇が天から追い出され、その山の上に落ちてきた。その蛇はいまだに生きており、赤と緑の2枚の翼を持つ。そのため、この地域には猛毒の毒蛇が［たくさん］いるのだ、と。いつの時代でもこの蛇は目撃されている。（p. 231）左ページにあるこれがスィースターンの図である［図］。

「サマルカンド（Samarqand）」は大きな町である。それはイスカンダルによって建設された。古く、名高く、イスラームの民の町である。その地の人々は勇敢で知識を好み、ウラマー（学者）にしてガーズィー（聖戦士）である。ジハードの遂行者であり、法学者としての資質がある。彼らはカァバ［への巡礼］と預言者――**彼に祝福と平安あれ**――［の墓］への参詣を熱望する。彼らの振る舞いにはイスラームの光がはっきりと現れている。

サマルカンドの周囲は12ファルサングで、町の中には12ファルサングにわたって庭園や水車や耕地がある。町の城壁には、アーチや屋根つき回廊や塔や鉄製の門が戦に備えて設けられている。町の中には1万ジャリーブ[313]の土地があり、川や谷がたくさんある。

シャミル・ブン・イフリーキース・ブン・アブラハ（Šamir b. Ifrīqīs b. Abraha）[314]は50万人を従え［その地を］包囲し、勝利した。そしてそこを破壊した。それゆえ、その地は「シャミルが破壊した（Šamir-kand）」と呼ばれた[315]。トゥッバゥ・アル＝アクラン・ブン・アビー・マーリク・ブン・ナーシルの代になり、彼は町を再度建て直した。

サマルカンドはサイード・ブン・ウスマーン・ブン・アッファーン（Sa‘īd b. ‘Uṯmān b.

ない［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 253］。

310）アフガニスタンのヘラートの南に位置する、ヘラート＝ザランジュ間の主要都市。Isfizār とも綴られる。「ヘラートのサブザワール」とも呼ばれた［*EI*²: Sabzawār］。

311）ここでは「ヒードマンド（Hīdmand）」として現れるが、第3部第3章「川と小川の驚異」にて「ヒンドミードの川」として既出［本訳注（4）、505–506頁］。現在のヘルマンド川のこと。

312）NBH（もしくはBNH）表記の地名は不詳だが、本文後出「ヒンド」の項でも同様の表記があり、そこではパキスタン南部のスィンド地方の町であるタッタ（Thatta）と判断し得るため、ここでもその見解に従う。

313）面積の単位。1ジャリーブは1592平方メートル。

314）イエメンの諸王の1人で「翼をもつ者（ḏū al-janāḥ）」の名を持つ。中央アジアに遠征し、マーワラーンナフルを征服・略奪した後に中国へ行ったとされる。サマルカンドの征服者・破壊者として初期の地理書や史書に名前が挙がる［*LN*: Šamir; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 326; Ibn Hišām, *Kitāb al-tījān*, pp. 442–443］。なお、この段落の内容はイブン・ファキーフの記述とほぼ同じである。

315）19世紀のサマルカンドの地方史『サマリーヤ（*Samarīya*）』には、種々の史書に見られる説として、サマル（Ṯamar）という人物が濠をめぐらせて町を建設（もしくは破壊）したことが、「サマル・カンド（サマルが掘った／サマルが壊した）」という町の名の由来となったことを伝える［Abū Ṭāhir Ḫwāja Samarqandī, *Samarīya*, Ed. I. Afšār, Mu’assasa-yi Farhangī-yi Jahāngīrī, Tehran, 1367s., pp. 136–137］。

‘Affān）[316] によって征服された[317]。彼は「［征服するまでは］引き返さない」との誓いを立て、征服できない場合は、1つの門から（p. 232）入り、別の門から出て、クハンディズ（Quhandiz）[318] に岩を食らわせ、王の息子の1人を人質に取ろうとした。彼は町に入ると、岩をクハンディズに向けて投げつけた。岩はそこに命中し、納まった。サマルカンドの人々は憤慨して、「アラブの支配が定まった」と言った。

クタイバ・ブン・ムスリムは、拝火殿にあるものは何でも持ち出すという条件で講和した。［すべてを］持ち出すと、偶像を集めて燃やしてしまおうとした。人々はそれらを巨費で［売り払うよう］求めたが、彼は「私は偶像を売りはせぬ」と言って、自らの手でそれらの偶像に火をつけた。9万ディーナールもの純金が熔けた黄金の釘針から現れた。

「ソグド（Sugd）」はサマルカンドの1地域であり、美しい庭園や水辺がある。マームーンはある者にサマルカンドのことを尋ねた。いわく、「サマルカンドの町はまさに円い月のごとく、そしてサマルカンドの小川は天の川（majarra-yi āsmān）のごとく、サマルカンドの村々は星のごとしです。」

シャァビー（Ša‘bī）[319] は言う。「私はクタイバ・ブン・ムスリムのもとにいたが、サマルカンドの門のところで1枚の銘版を見た。そこにはヒムヤル語[320] で、［次のように］書かれていた[321]。『アッラーの御名において。おおアッラーよ。この書はアジャムとアラブの王で、高貴な生まれの王たるシャミル・ユルアシュ（Šamir Yur‘aš）[322] のものである。この地に至る者はみな私と同等であり、ここを越える者は私より偉大である。ここに至らない者は私より卑小である。』」

クタイバはここから中国の領域へ行こうと誓った。中国の王は［そのことを］知り、ルビーの王冠を作り、土でいっぱいの皮袋を彼に送った。［王は］言った。「王者の冠を私はあなたに贈ります。私は、この地方の、この土の上であなたに準じる者であります。戻りなさい。あなたの［征服という］誓いは実現するのですから。私は毎年あなたに地税を納めます。」

クタイバは承諾し、賜衣を纏って王冠を頭に戴き、偶像を焼いた。そして中国の地方へ向かうのを止めた。

クタイバにはいくつもの勝利があった。トゥルキスターンとマーワラーンナフルを征服し、幸運で、征服者にして勝利者たるアミールであった。アッラーの慈悲が彼にあらんことを。

316）第3代カリフ、ウスマーンの息子。676年にソグド攻略を行った［*EI*²: Kish］。

317）以下の逸話についてはバラーズリーに同様の記述がある［バラーズリー著「諸国征服史20」花田宇秋訳、『明治学院論叢』606、1998年、48–49頁］。

318）「旧城砦（kuhna-diz）」と同義。カルア（qal‘a）ともいい、アラブ侵攻以前の土着支配者の居住した城館を意味する。イスラーム時代の地理学者たちが観察したときにはほとんどすべてが荒廃していたためにこの名でよばれた［小松久男「中央アジア」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究』東大出版会、1991年、269頁］。

319）有名な初期の法学の専門家にしてハディース伝承者。没年は721年から728年の間とされ、イエメンの小王の末裔と言われる。生涯のほとんどを過ごしたクーファにおいて、最も影響力のある法学の専門家であった。一時期クタイバ・ブン・ムスリムのもとで庇護されていた［*EI*²: Sha‘bī］。

320）ヒムヤルは、1世紀初頭から3世紀末にかけてアラビア半島南部のサバーを併合し、ハドラマウトを征服した部族連合体のことで、4世紀後半には偶像崇拝からユダヤ教に転じた。彼らの使用したヒムヤル語はアラビア語の一方言である。この銘板についてイスタフリーは、サマルカンドのケシュ門に書いてあった文字を誰も読めなくなっていたと伝える。桑山正進氏はこの文字を「Ḥimyarī とするが、実際はソグド文字で書かれたソグド語に違いない」と指摘している［*EI*²: Yaman; al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 318; 桑山正進（編）『慧超往五天竺國傳研究』臨川書店、1998年、168頁］。

321）同様の文言が『ヒムヤルの諸王の冠の書』に見える［Ibn Hišām, *Kitāb al-tījān*, p. 443］。

322）巻末の訂正表に従う。前掲注314と同一人物。注183も参照のこと。

「サランディーブ（セイロン島）（Sarandīb）」はヒンドゥスターンにある大きな町である。［この］世界に造られた最初の町は、この町である。80の街区があり、それぞれの街区は1ファルサングである。その町では、黄金はマン単位で量られており[323]、金や銀は重視されない。その町の貨幣はルビーであり、かの地の黄金は小銭（pūl）のようなもの（p.233）である。

サランディーブは1辺が海と接しており、それは「クルズム（紅海）」と呼ばれている。その水は苦くて黒い。さらに進むと水は碧がかる。そこでは船は進まず、そこに落ちた者はみな2度と浮き上がってこない。もう一方の端は30ファルサング先で「闇の世界」と接する。別の1辺はカーフの山があり、4つ目の端は太陽の昇る場所である。「闇の世界」の門のところには、双角の所有者が天幕を張った場所が見える。彼の家畜小屋の鉄製の楔がいまだに打ちつけられて残っており、人々は石油でもってそれを維持している[324]。

アーダムの墓はクルズムの海の岸にあり、半分は海の中に、半分は水の上にあると言われている。その周囲は100ファルサングにわたって荒廃しており、キャラバンは彼の［墓への］参詣に行くことができない。

その地からは沈香や高価なルビー、ダイヤモンドがもたらされる。その［地の］人々の慣習として、王が死ぬと、［彼を］台に載せ、町を練り歩く。そして彼の妻がほうきを手に持ち、台の上を掃きながら、「王は王国を去ったが、至高なる神は永遠である」と言う[325]。4日目、彼を4つに引き裂き、4つの寺院で燃やし、風にさらす。これがサランディーブの町の慣習である。

サランディーブは地方［の名］であり、アーダムの墓はロフーンの山にあるとも言われている。

「スルーシャナ（Surūšana）」はヒンドの地方にある町で[326]、中国の領域近くにある。そこには真鍮で造られた偶像寺院があり、黄金の玉座の上に偶像が置かれている。その像に手を触れると、大きな叫び声が像からわき上がり、口から火を吐き、その者を焼いてしまう。ヒンドの人々はみなその像に魅せられており、それを誇り、「このようなものは［世界中の］どこにもない」と言う。まことにアッラーこそは最もよく知りたまうのだが、そこには揮発油を用いた仕掛けが施されているのである。

その町の特産品は、泥土と鼈甲（kašaf）と凝乳チーズ（tarf）である。

「サクスィーン（Saqsīn）」は、トゥルキスターンにおいてそれより大きな町はないほどの町であり[327]、その周囲は6ファルサングある。他の町はサマルカンド、ウーズカンド（Ūzkand）[328]、ブーンジキャス（Būnjikaṯ）[329]である。この地方は栄えているが、イェメク（キーマーク）（Yimik）

323）重量単位の1マンは約3キログラムであり、この単位で量られるほど豊富に産することを意味する。

324）イブン・バットゥータはルフーン（ロフーン）の山において双角の所有者に由来する岩屋と泉地の存在を伝えており、そのことを指しているのかもしれない［イブン・バットゥータ『大旅行記6』（家島訳注）、293頁］。

325）この部分は『中国とインドの諸情報』に記される王の葬儀の記述を簡略にしたものであると考えられる。また、王の遺体を4つに引き裂き火葬するという記述はイブン・ファキーフにも見える［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第1巻67頁；Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.10］。

326）ウスルーシャナ、ウシュルーシャナとも表記される。初期の地理書類では一般にマーワラーンナフルの地域とされており、ヒンドと関連づけられるのは珍しい［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p.474］。

327）11世紀後半にトルコ語＝アラビア語辞典を編纂したカーシュガリーなどがブルガールと対にして紹介している都市。ウラル川流域にあると考えられているが、正確な場所は不明である［*EI*²: Saḳsīn］。

328）フェルガーナ盆地の東に位置する町。カラハン朝の首都であった［*EI*²: Özkend］。

329）校訂テキストにはBJKNDとあるが、ソグドの中心地であるサマルカンドと、フェルガーナの中心地であるウーズカンドと並んで表記されている点から見て、『世界の諸境域』でスルーシャナの中心地とされるブーンジキャスを指すと判断した［*Ḥudūd al-ʿālam*, p.111］。

とキプチャークの騎兵に苦しめられる[330]。この地方には、(p. 234) イティルの川を除き、水場はない。その岸には天幕暮らし［の遊牧民］(ḫargah-nišīn) がいる。これらの町の人々はみなムスリムたちのしきたりを有しているが、毎年シャァバーン月とラマダーン月に［のみ］礼拝を行う。私は数人の商人からこのように聞いた。彼らは錫で取引する。

「サディール (Sadīr)」はよく知られた宮殿であり[331]、ナジャフ (Najaf) とカスカル (Kaskar)[332] に至るヒーラの川の間にある。アイン・アル＝タフ ('Ayn al-Ṭaf)、［アイン・］アル＝サイド (al-Ṣayd)、〔クトゥクターナ (al-Quṭquṭāna)〕といった泉がある[333]。

サディールはバフラーム・チュービーン・ブン・ヤズダゲルド・ブン・シャープールによって建てられた。理由は次のとおりである。ヤズダゲルドには［バフラーム以外］誰も子が残らず、さらにバフラームが水腫 (istisqā') に罹った。人々は医者たちに尋ねた。「美しい場所で良い空気があるのはどこだろうか？」

彼らは答えた。「サディールです。」

［ヤズダゲルドが］命じてサディールの宮殿が建てられ、バフラームはそこに運ばれた。彼はこうして回復した。驚くべき場所である。

「スィンジャ (Sinja)」は大きな城砦である[334]。アリー・ブン・ザッリーン ('Alī b. Zarrīn)[335] は、「最も堅固な城砦はトゥルキスターンにあるスィンジャである」と言っている。［それは］ある王によって建てられた。その壁は 40 アラシュの大きさがあり、二重になっている。煉瓦で造られ、2 つの壁の間には砂が一杯に詰められている。敵が穴を開けると、砂が流れ出す。また、2 番目の壁の中には水が貯められており、［敵が襲うと］水が流れ出す。その上には大きな砦がいくつも設けられている。トゥルキスターンではよく知られている。

「サミーラーン (Samīrān)」はジャバル地方にある砦である[336]。その城砦には〔2800〕の館があり[337]、ムハンマド・ブン・アル＝ムサーフィル (Muḥammad b. al-Musāfir)[338] が所有し、中に莫

330) ma 写本に拠り、ḥayl-i (wa) Yimak wa Qifjāq とする。『世界の諸境域』においては、イェメク（キーマーク）の地はキプチャークの地の一部とされており、両者は近しい部族であった［*Ḥudūd al-'ālam*, p. 85］。キーマークについては、前掲注 186 および本訳注 (4)、498–499 頁、注 96 を参照のこと。

331) イラクのハワルナク（前出）の近隣にあった城砦。三重のドームを有し、ペルシア語で "Se-dele（3 つの心臓）" と呼ばれていたものが、アラビア語で「サディール」となった。ハワルナクと並び、詩でよく謳われた［*LN*: Sadīr］。ここでの逸話はイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 178］。

332) ワースィトを中心都市とする地域［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 39］。

333) イブン・ファキーフは、ヒーラの川とサディールの間に、これらと同様の泉があると伝える。クトゥクターナの読みはサーデギー校訂本とイブン・ファキーフに拠る［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 187］。

334) トゥルキスターンで同名の町や城砦は確認されないが、『諸都市辞典』は、ガルチスターンに「スィンジャ (Sinja)」という町があると伝えており、おそらくこの町のことであろう。また「サンジャ」という読みをすると、ユーフラテス上流のディヤール・バクル方面に同名の町と「サンジャの石橋 (qanṭara)」として知られる橋がある［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 123–124; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, p. 265］。

335) この名前の人物は未詳。fā 写本にある「アリー・ブン・ザイド」と採ると、『バイハク史（*Tārīḫ-i Bayhaq*）』をはじめ 70 以上もの書を記したサブザワール生まれの著作家 Ẓahīr al-Dīn Abū al-Ḥasan 'Alī b. Zayd Bayhaqī (1169/70 年没) を指すか［*EI*²: al-Bayhaqī］。後者の人物は著者トゥースィーとほぼ同時代である。

336) カスピ海南岸のジバール（ジャバル）地方のターロム地域にあった城砦で、ダイラム人の王の主要な城砦の 1 つに数えられる［*EI*²: Musāfirids; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 224］。

337) テキストでは 2600 だが、ma および lā 写本を採る。10 世紀後半に実際にこの地を訪れたアブー・ドゥラフは「大小 2850 戸余」と述べている［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、11 頁］。

338) ターロム地方を支配したムサーフィル朝の君主。次段落の記述は、941 年に、ムハンマドが息子たちによって監禁された事件を指している。この事件の結果、ムサーフィル家は 2 つに分かれ、一部が 10–11 世紀にアゼルバイ

大な財宝を蓄えていた。彼は圧制者であった。民の子供たちを捕らえては、手工業に従事させた。彼はムスリムの子供たちを捕虜同然に扱っていた。

ある日、ムハンマド・ブン・アル＝ムサーフィルが狩りに出かけると、彼らは城砦の門を閉めてしまった。［ムハンマドは］あらゆる手を尽くしたが、彼らが門を開けることはなかった。みなが彼を拒絶したのである。敵対者たちが狙ってきたので、彼は逃亡し、放浪の身となった。サミーラーンの人々は彼の圧制から解放された。彼の王国は、自らの圧制と不正という災いによって滅んだ。

「双角の所有者の防壁（Sadd-i Ḏī al-qarnayn）」はゴグとマゴグとの間にある防壁である。イスカンダルがその地にやって来ると、（p. 235）MRNĀ b. ʻĀBS 王[339] が伺候し、言った。「我々の向こう側には、背が低く、額が大きな部族がおり、我々の地方を荒らしています。」

イスカンダルは言った。「なぜそのようなことを？」

［王は］言った。「彼らは根っからの戦好きだからです。我々から彼らに危害を加えたことはありません。」

イスカンダルは2万人の鍛冶屋を集めた。彼らは何層にも鉄と錫を混ぜ合わせ、銅の層と硫黄の層を山の頂き［の高さ］にまで積み上げた。その後、何年も薪を集め、それらの両側に置いた。そしてそこに火を放った。すると錫は熔け、鉄と銅の層が合わさって1つになり、防壁全体が一枚岩となった。

その防壁には次のように書かれている。「我々は、この防壁を創造主のお力で建造した。この防壁において、アラブのムハンマドの死後860年が過ぎ、血縁の絆が断ち切られ、［人々の］心が無情になり、不当に血が流され、姦通や高利貸しが横行し、男たちが女のように、女たちが男のように振舞うようになったとき、この防壁は崩落するであろう。たくさんの足の短い者（kūtāh-pāy）が現れる。彼らは世界を奪い取り、あらゆるものを喰らい、荒廃させる。その後、シャールース（Šālūs）[340] の地に行き、彼らは死ぬ。」

＜逸話＞

次のように言われている[341]。信徒たちの長ワースィク・ビッラー（al-Wāṯiq bi-llāh）[342] はある夜、夢で「双角の所有者の防壁」が崩壊するのを見て、恐れ慄いた。彼は通訳官のサッラーム（Sallām al-tarjumān）を大軍とともに派遣し、「黄金の玉座」の王とアラーンの王にそのことに関する書簡を書いた。

サッラームは語る。「私たちは進み、黒い大地にたどり着いた。猛烈な悪臭が漂ってきた。ハザ

ジャンからコーカサス地方を支配した。この話はアブー・ドゥラフが記録しており、典拠は同書であろう［*EI*²: Musāfirids; アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、11頁］。

339）この王については不明。『クルアーン』には「かれ（双角の所有者）が2つの山の間に来た時、かれはその麓に凡んど言葉を解しない一種族を見付けた。かれらは言った。「ズ・ル・カルナインよ、ヤァジュージュとマァジュージュ［ゴグとマゴグ］が、この国で悪を働いています。それでわたしたちは税を納めますから、防壁を築いて下さいませんか」［Q18: 93–94］とのみある。

340）タバリスターンに同名の都市があるが、具体的な関連性は不明。なお、ゴグとマゴグがイェルサレムに到達すると、天に向かって矢を放ち、神の怒りを買って絶滅させられる、という説がある［*EI*²: Yāḏjūḏj wa Māḏjūḏj; Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 119; Ibn Rusta, *Kitāb al-aʻlāq al-nafīsa*, p. 150］。なおサーデギー校訂本では、「シャープールの地にやってきて」となっている。

341）イブン・ホルダードベがほぼ同様の内容を伝えるが、数字や曜日など細部は異なり、本書では相当に省略されている［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, pp. 162–163］。

342）第9代アッバース朝カリフ（在位842–847年）。

ルの王は私たちに命じた。『酢を取り出して、［酢の］匂いをあたりに散らしなさい。そうすれば害を被ることはありません。』

私たちは長い時間をかけて、大きな建造物にたどり着いた。それは鉄と銅と真鍮で造られていたが、その［大きさは］長さも幅もわからないほどであった。そこには［高さ］70アラシュの扉がついており、錠がかけられていた。錠の長さは7アラシュもあった。そこには1本の鍵が鎖で吊るされており、［鍵には］14本の歯がついていた。

（p. 236）その地には1人の王がいた。彼は毎週金曜日に騎兵とともに騎乗し、重い〔鉄製の〕棍棒でその扉を叩いた。それは、扉の向こう側に、こちら側には衛兵がいるのだ、ということを知らせるためであった。扉を叩き、耳を扉に押し当てると、向こう側からは大きな叫び声が起こった。彼らは言った。『［あれが］ゴグの叫び声だ。』

私は尋ねた。『あなたがたのうち、誰かこれまでにゴグを見た人はいますか？』

彼らは言った。『これこれの時期に、数人［のゴグ］がこの防壁の上に昇りました。黒い風がわき起こり、［そのうちの］1人がこちら側に吹き飛ばされました。』

数えてみると、それはワースィク・ビッラーが夢を見た夜のことであった」と。

その後、［サッラームは］引き返し、2年と4ヶ月かけてサマルカンドに到着した。

「サリーラ（シュリーヴィジャヤ）の町（balad-i Sarīra）」は大きく有名な町でヒンドにある[343]。そこには1本のミナレットがある。先端には鳥かごがあり、さらにその上には黄金の雄鶏がいる。誰かがそれに手を出そうとすると、鳴き声をあげて人々に知らせる。救世主（マフディー）の時代になり、彼が現れるときまで誰も奪い取ることはできない、と言われている。

「スィーラー（新羅）（Sīlā）」は中国にある町で、誰であれそこに入った者は出てくることはない[344]。出て行こうとは思わないのである。

一方トゥルキスターンに入る者は体に疥癬が生じる。

「サラフス（Saraẖs）」は美しい町である[345]。荒野の中に位置し、ザッハークの時代に造られた。彼は順々に人間を食べ、町々から人々を連行した。それは、彼の肩から生えている蛇の餌食にするためであった。何人かの者は逃亡した。彼らがこの荒野に至ったとき、ザッハークが殺されたという知らせが届いた。彼らは腰を落ち着け、町を建設した。「サラフス」という名前は、「物乞いやみすぼらしい者たちの町」という意味である。

「サングーヤ（Sangūya）」は城砦であり、ヒンドの海に浮かぶ島にある。そこに行った病人は3日で全快するか、死ぬかのどちらかである、と言われている。そこには大きな柱がいくつもある。

343）家島氏によると、スマトラ島東部のパレンバンを中心に栄えたシュリーヴィジャヤを指して「サリーラ（Sarīra）」と表記するのは誤写であり、本来は、Y は bā の、2つ目の R は zā で、「サルブザ（Sarbuza）」が正しいとされる。ただし、「サリーラ」表記も先行地理書に見られるため、ここでは本書原典に則る［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第2巻44、143–144頁］。

344）Šīlā とも綴られる。「スィーラー」は朝鮮半島の「新羅」の音写で、「スィーラーの島々」は台湾や沖縄列島、朝鮮半島などを指すとされる。そこに入った者は出てこないという記述はイブン・ホルダードベに見える［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第1巻75、202–203頁 ; Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 70］。

345）ホラーサーン北部の町。トゥースから大マルヴに至る途上、テジェン（Tejen）川の東岸にある。現在はイラン＝トルクメニスタンのイラン側にある国境の町。10世紀には、温暖な気候の大きな町として多くの地理書で紹介されている。なお、サラフスはアフラースィヤーブが建設したとする説もある［*EI*²: Saraḫs］。

それはマーズニーンとマーズィーナ（Māznīn wa Māzīna）[346] が造った。彼らは夫婦であった。今日までこれほどの力を持つ者は現れていない。それぞれの柱は1000人がかりでも（p. 237）動かすことはできない。まことに驚異的な話である。

「サールーク（Sārūq）」はハマダーンにある砦であり[347]、ジャムシードが建設した。その小砦の高さは300アラシュである。パフラヴィー家のたとえ話に、「サールークはジャムシードが起こし、バフラームが腰帯を締め、ダーラー・ブン・ダーラーが集めた[348]。この3人の王によって完成した」というものがある。その意図するところは、「ジャムシードが着工し、バフラームが残り半分を造り、ダーラーが完成させた」である。**ゆえに、ハマダーンこそは最も古くに建設された町であることを示している。**

＜シーン（al-šīn）の項＞

「シルマーフ（Širmāḫ）」は宮殿である。山岳地帯のアブー・アイユーブ（Abū Ayyūb）の村[349]にある。大きな砦で、1本の川が流れている。

次のように言われている[350]。1人の女が子供を胸に抱きながら［川を］渡っていた。ヌゥマーン・ブン・ムンズィルの軍が川の中に駆け入った。女は服を脱いでいたので、恐れて［水の中に］倒れ落ちた。子供は溺れてしまった。ヌゥマーンは心を痛め、そこに橋を造ることを誓った。ホスロウに許しを求めたが、［ホスロウは］認めなかった。ヌゥマーンがその地方において影響力を持つことがないようにするためであった。バフラーム［・チュービーン］がパルヴィーズとの戦いのためにやって来たとき、パルヴィーズはヌゥマーンに援軍を求めた。ヌゥマーンは、「アーチ橋を私が造ってもよいということを条件にお助けしよう」と言った。［パルヴィーズは］許可を与えた。こうしてヌゥマーンはこの立派なアーチ橋を造り、シルマーフをその地に建設したのである。

「バゥワーン渓谷（Ši‘b-i Bawwān）」はファールスにあり、美しさで特筆される場所である。木々が多く、豊かな地域であり、一面が庭園である。

ムバッラド（Mubarrad）[351] は言う。「私はバゥワーン渓谷で1本の木を見た。そこには次のように書かれていた。**『落ち込んでいる人が城砦の上からバゥワーン渓谷を見下ろせば、悲しみから立ち直れる。』**」

346）この2人の名はペルシア語辞書の表記に従う［*LN*: Sangūya; Māznīn; Māzīna］。

347）語末の外来語辞を取った「サールー（Sārū）」とも表される。ジャムシードは人類の祖から数えて4代目のイランの神話伝説上の王ゆえ、本項目の最後の結論に至るのだろう。イブン・ファキーフがハマダーンのこの砦に触れているが、イブン・ルスタは、同名の砦はイスファハーンにあると述べる［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 219; Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 162］。

348）『歴史と物語の要約』にほぼ同じ言葉があるが、バフラームではなくバフマン（Bahman）となっている。一方、『諸都市辞典』には「サールーをジャムシードが建て、ダーラーが帯を締め（用意し）、イスファンディヤールの子バフマンが終えた（bi-sar āvard）」というペルシア語の引用が見える［*Mujmal al-tawārīḫ wa al-qiṣaṣ*, p. 521; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 170］。なお、sārū には「モルタル」の意味があるので、「ジャムシードがモルタルを捏ね」と訳すこともできる。

349）アブー・ドゥラフの旅行記にもこの村に関する記述がある。それによれば、この村の名前はジュルフム族の1人で村を建てた人物にちなんでつけられた［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、23–24頁］。

350）以下の逸話はアブー・ドゥラフ参照［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、24頁］。ラフム朝のヌゥマーンが架けた橋は、「ヌゥマーンのアーチ橋（Qanṭara-yi Nu‘mān）」として知られていた。

351）バスラ出身の著名な言語学者（900年頃没）。860年にカリフ、ムタワッキルからサーマッラーの宮廷に招かれた。後にバグダードに移り、多くの弟子を指導した［*EI*²: al-Mubarrad］。

バゥワーン渓谷とサマルカンドのソグドの美しさについては、世界中でたとえに引かれている。

「シャァバル（Ša‘bar）」はシャームにある大きな城砦で、高い山の上にある[352]。その頂上に幅広の盾のような岩があり、城砦はその岩の上に建てられている。いかなる方向からもそこに至る道はない。1人のクルド人がそこに居を定め、一方の側にのみ道をつくった。そして［山から］下りては街道を襲っていた。(p. 238) マリク・シャー（Malik Šāh）[353] は何度か軍を派遣したが、すべて撃退された。マリク・シャーは為すすべがなかった。やがて［自ら］シャァバルを攻撃しようと、すべての道を塞ぎ［城砦を包囲した］。シャァバルは［自分が］命を失うであろうことを悟った。彼には城砦に美しい妻がいた。彼女を殺し、城砦から身を投げたが、足が折れただけであった。彼はマリク・シャーの前に連れてこられた。［マリク・シャーは］言った。「なぜ、私のもとへ来なかったのか？それになぜ自ら身を投げたのか？」

［シャァバルは］言った。「私には美しい妻がいました。私は［妻が］敵の手に落ちることを恐れ、彼女を殺しました。それから、彼女なしで生きることは味気ないと思い、自ら身を投げたのです。」

マリク・シャーは言った。「おまえは［我が］軍を敗走させるほど勇敢であり、妻を殺害するほど情熱的で、城砦から飛び降りるほど大胆である。私はおまえを殺しはしない。」

［マリク・シャーは］彼に賜衣を与え、城砦を委ねた。

「シャーム（al-Šām）」は祝福された地域であり、使徒や預言者たち――**彼らに平安あれ**――の場所である。ジブリール――**彼に平安あれ**――が何度も降臨したことのない土地は、そこでは1アラシュたりとも見つからない。12万4000人の預言者たちのキブラであり、預言者たちの移住地である。「**われは彼**［イブラーヒーム］**とルートを、われが祝福した地に救い出した**［Q21: 71］」**と至高なるお方のお言葉**［にあるように］。大地は、マッカとマディーナと聖なる家（イェルサレム）を除き、荒れ果てる。復活はそこで起きる。そこには岩があり、［復活の日に］世界中のものがそこに集まる。

シャームの境域はクーファからラムラ（Ramla）[354]、バーリス（Bālis）[355]、マルタ（Maltīya）[356]までであり、豊かな町々がある。これがシャームの図である［図］。

バラー・ブン・アーズィブ（Barā’ b. ‘Āzib）[357] は、「私は預言者――**彼に平安あれ**――とともに16ヶ月の間、聖なる家の方角に向けて礼拝を行った」と言っている。預言者――**彼に平安あれ**――が聖なる家に向かって行った最初の礼拝は、午後の礼拝であった。［マッカの方向に］キブラ

352）おそらく、ユーフラテス河畔のラッカ近郊にある砦ジャァバル（Ja‘bar）の誤りであろう。砦の名は、セルジューク朝時代にここを拠点としたジャァバル・ブン・サービクにちなむ。史実では、マリク・シャーは彼から砦を奪い、自らの部下に委ねた［*EI*²: Ḏja‘bar; Ibn al-Aṯīr, *al-Kāmil fī tawārīḫ*, Ed. C. J. Tornberg, E.J. Brill, 1851–1871 (repr. Dār al-Ṣādir, Beirut), vol. 10, p. 149］。

353）セルジューク朝第3代スルターン（在位1072–1092年）。ニザーム・アル＝ムルクを宰相とし、セルジューク朝の最大版図を築いた［「マリクシャー」『岩波イスラーム辞典』］。

354）イェルサレムの西北西、約40キロメートルにある沿岸の町で、カイロ＝ダマスカス間の交易ルート上に位置する。ウマイヤ朝時代に建設された［*EI*²: Ramla］。

355）北シリアにかつてあった町。ユーフラテス川西岸の港であり、またジャズィーラ地方の玄関口でもあった［*EI*²: Bālis］。

356）マルタ島はイタリア半島の南に位置するが、地中海航路上はシリアとイベリア半島の間にあると考えられていたのであろう。本章後出の「トレド（トゥライトゥラ）」の項目も参照のこと。

357）ムハンマドの教友（691/2年頃没）。バドルの戦いを除いた多くの遠征においてムハンマドに随行し、またラクダの戦いの際にはアリーを支持した。有名なハディースである「フンムの泉での指名」は彼に拠る。レイ、カズヴィーンなどを征服した［*EI*²: al-Barā’］。ここでの彼のハディースは、ムハンマドが当初はイェルサレムに向かって礼拝していたものとしてよく引用される［ブハーリー『ハディース』（牧野訳）、上巻128–129頁］。

を変更すると、［預言者は］ユダヤ教徒たちに厳しくあたった。

シャームの驚異はたくさんある。［それらは本書の］いくつかの項で言及されており、［たとえば］アリフの項ではイーリヤー（エリヤ）の説明の中で一部述べてきた。

（p. 239）「シルヴァーン（Širwān）」は美しい町である[358]。公正なるヌーシラヴァーンがバランジャルや諸門の門（ダルバンド）とともにその町を建設した。その理由は、ハザルが略奪を繰り返し、モースルやハマダーンの境域にまで侵入したからであった。やがてヌーシラヴァーン王の治世になると、彼はハザルの王のもとに人を送り、その娘を求めた。［ハザルの王は］娘を彼に与え、［2人の王は実際に］対面することを申し合わせた。

ヌーシラヴァーンは300人の兵を潜伏させ、ハザルの軍を襲撃させた。ハーカーンはヌーシラヴァーンに、「略奪が起こっているぞ」と書きつけを送ったが、［ヌーシラヴァーンは］「私は知らない」と言い、そして何度も略奪を行った。

ヌーシラヴァーンは言った。「何らかの敵が、我々の間に敵意が生じることを望んでいるのだ。このようにしてはどうか。私とおまえの領地の間に壁を築くのだ。そうすれば、私の領地には私を必要とする者が来るだろうし、おまえの領地には（p. 240）おまえを必要とする者がやって来よう。」

ハーカーンは同意して帰っていった。ヌーシラヴァーンは諸門の門を大理石と鉛で造った。その大きさは300アラシュである。まず革袋に空気を入れて［ハザルの海に投じ］、牛の革を水面に［入れて革袋の上に］敷いた。そしてその上に地面に達するまで［壁を］築いた。その後、山の頂に達するほどに［さらに］築き上げ、鉄の扉をそこに設けた。そして一団の者たちをその壁の見張りに任じた。

また、彼はシルヴァーンを建設した。ヌーシラヴァーンがたとえ世界中［の各地］でこのような善行をなしたにせよ、［説明するにはこの一事でもって］十分である。

「シューシュ（スーサ）の町（Madīna-yi Šūš）」はフーゼスターンの町である。イブン・ムカッファウ（Ibn Muqaffaʿ）[359]は、「ヌーフの大洪水の後に最初に築かれた城壁は、シューシュとシューシュタルの城壁である」と言っている。また、「サーム（セム）・ブン・ヌーフが築いた」とも言われている。

この町は、ウマル・ブン・ハッターブの時代にアブー・ムーサー・アル＝アシュアリーが征服した。そこには300もの宝物庫が設けられていたが、［アブー・ムーサーはそれらを］奪い取った。彼は、幕がかけられている建物を1つ見つけ、それをも奪おうとした。宝庫係は泣きながら、「そこにはダーニヤール――**彼に平安あれ**――の棺以外には何の財宝もありません」と誓言した。ゆえに、［アブー・ムーサーは］それには手をつけなかった。［これについては］墓の章で述べよう。

358）コーカサスのクラ川沿いの地域・都市名。ここでの逸話は、ヌーシラヴァーンとトルコ王のものとしてバラーズリーが記す［バラーズリー著「諸国征服史11」花田宇秋訳、『明治学院論叢』494、1992年、99–102頁］。以下の城壁の話は、主に「諸門の門（Bāb al-abwāb）」と呼ばれるダルバンドのことである。

359）イランのファールス地方出身で、マニ教からイスラームに改宗したアラビア語著作家（756年頃没）。パフラヴィー語の多くの文学作品をアラビア語に翻訳した。『王の書』なども翻訳したとされるが散逸している。特に有名なものに、インドの動物説話『パンチャタントラ』のパフラヴィー語訳からの重訳である『カリーラとディムナの書』がある［*EI*²: Ibn al-Muḳaffaʿ;「イブン・ムカッファア」『岩波イスラーム辞典』］。

［逸話］

次のように言われている。預言者――**彼に平安あれ**――がウマル・ブン・ハッターブと歩いていると、1人の子供が道で泣いていた。ウマルはその子を抱き上げてなだめ、泣きやませた。そして預言者――**彼に平安あれ**――の後を追った。モスクに着いたとき、預言者がウマルに言った。「あの子を見たか？世界はあの子の手で滅びるのだ。」

ウマルは言った。「どうしてですか？」

［預言者は］言った。「あの子がダッジャール（偽マフディー）だからだ。」

［ウマルは］言った。「私は戻ってあの子を殺してきます。」

ウマルは戻ったが、［子供は］見つからなかった。

使徒は［ウマルに］言った。「ああウマルよ、あの者は世界を手にするだろう。私のウンマのために、1つの町があれの手によって征服されるだろう。」

時が過ぎ、預言者は亡くなった。ウマルはアブー・ムーサーをフーゼスターンに派遣した。［アブー・ムーサーは］シューシュを包囲したが行き詰まり、その地方をうろうろしていた。修道院の入り口で1人の僧を目にした。［僧は］尋ねた。「あなたは何をしに来たのですか？」

［アブー・ムーサーは］言った。「シューシュを征服するためだ。」

［僧は］言った。「帰りなさい。シューシュを征服するのは偽マフディーをおいて他にありません。」

アブー・ムーサーは注意を払わなかった。（p. 241）シューシュの門の前で下馬し、［どう攻略するか］途方に暮れた。

突然、1人の男が現れてシューシュの門のところで立ち止まり、シューシュの門を足で蹴った。［男は］言った。「おい、シューシュよ、開け！」

たちどころにすべての門が開き、崩れ落ちた。軍は勢いづいて［町に］突入した。男の姿は見えなくなった。

軍は「アッラーは偉大なり」と唱えた。というのも「偽マフディーが私のウンマのために町を征服する」という預言者――**彼に平安あれ**――の言葉が真実となったからである。

「シーズの町（Madīna-yi Šīz）」はマラーガ（Marāġa）[360] とザンジャーン（Zanjān）[361] の間にある町で、山々の中に位置している[362]。そこには金、鉛、雄黄、水銀、アメジストの鉱床がある。だが薪が貴重で［あるため］、銀はわずかしか精製されない。

町の城壁は小さな湖を取り囲むように築かれている。大きな拝火殿とカイ・ホスロウの玉座がそこにあった。真鍮の玉座が1つ、2台の巻き上げ機で引き上げられ、その地に置かれていた。［そこには］世界を映す杯［もあった］。ゾロアスター教徒たちの時代が終わりを迎え、イスラームが出現した。ゾロアスター教徒たちはそれ（杯）が奪われることを恐れ、シーズにある湖の中に投げ入れた。誰も再びそれを目にすることはなかった。**まことにアッラーは最もよく道理を知りたまう。**

360）アゼルバイジャン地方の中心都市の1つ。タブリーズの70キロメートルほど南に位置する。マラーガという呼び名は、「牧地の村（Qarya al-marāġa）」の省略形とされる［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 164–165］。イル＝ハーン朝のフレグ（在位1256–1265年）はここを拠点とし、1259年には天体観測のための天文台を設けている。

361）イランのタブリーズとカズヴィーンのちょうど中間にあり、ザンジャーン川沿いに位置する都市。

362）シーズについては本訳注（3）、380頁、注4を参照のこと。この項の典拠はアブー・ドゥラフであろう［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、7頁］。

＜サード（al-ṣād）の項＞

「チーン（中国）（Ṣīn）」は広大な地域である。全土を不信心者たちが占めている。一方の境域はヒンドと接している。チベットの王は中国（Čīn）の王に税を納める。

中国には良質の真珠があり、1粒が10万ディーナールに値する。それは淡水にある。塩辛い海の真珠はより良質で透きとおっているが、一方、淡水にあるものはより大きくなる。真珠貝というのはハトの雛と同じように動物であり、2枚の貝がそこに生えており、決まった時期の夜［水面近くに］現れて貝が開く。そして春雨の粒を数滴受けると、貝は閉じあわさり［水中に］沈んでいく。雨粒は真珠貝の中で貝の色を受けとり、真珠となる。［真珠については］宝石の項で述べよう[363]。

中国では王は公正である。池を造り、そこに鎖を張った。不正を被った者が訴え出るとき、この鎖を揺り動かす。［すると］王は不正を被った者がいることを知り、その者は入るのを許可され、公正な裁決を得る。かの地には裁判官がおり、（p.242）牢獄もある[364]。

また、羊を［殺すときには］その頭を何かで叩き打ち、死ぬと食べる。彼らは不浄を浄める沐浴をせず、ゾロアスター教の慣習を持っている。ヒンドゥスターンの隣にあるが、ヒンドのほうがより広大である。中国には馬が［たくさん］おり、象を不吉なものと考える。中国全土を見ても醜い者や片目の者はおらず、みな美しい顔をしている。冬でも夏でも人々は絹を纏い、空気は暑く、土地は湿気がある。人々は米と豚肉を食べ、女たちは裸で出歩き、象牙の櫛を頭に挿している。彼らの家は木造で、男色［行為］が許されている。彼らの医術は焼きごて（鍼灸）（dāġ）である[365]。中国の特産品は絹[366]、種々の錦、「中国の木（シナモン）（dārčīnī）」、クサノオウ草、中国紙、中国陶器、金糸の組みひも、ヒヤシンスであり、熟達した絵師たちがいる。

［逸話］

ある者が1枚の錦の布を織り、それを自慢するために家の戸口にぶら下げた。［それを見た］1人の奴隷男が言った。「この布には欠点があります。」

中国の王が言った。「どのような欠点があるのだ？」

［奴隷男は］言った。「これには孔雀がナツメヤシの枝をくわえている絵柄が描かれていますが、孔雀はナツメヤシの枝を［口で］摑むことはできません。もし別の町に持っていったならば非難されてしまうでしょう。」

別の者も［戸口に］布を吊るしていた[367]。それには大きな鳥が穂先にとまっている絵が描かれていた。［奴隷男は］言った。「弱い穂は鳥を支えることはできません。また［穂は］曲がり、先は下を向くでしょう。」

王は布を引き裂くように命じ、その奴隷男に賜衣を与えた。この話の意図は、［絵を描くことに］これほどまでに考えを巡らせている、ということである。

363）真珠に関する同じ解説が「石の章」でなされている［本訳注（4）、539頁］。

364）中国の王に直訴するために設けられている紐（ダラー）や中国の法官については、『中国とインドの諸情報』に記述がある［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第1巻57–58、60頁］。

365）これらに類した記録が『中国とインドの諸情報』に散見される［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第1巻44–45頁、第2巻70–75頁］。

366）テキストでは「羊毛」だが、巻末の訂正表に従う。

367）『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第2巻31–32頁参照。

中国の町々の果てはチベットである。「チーン（中国）」という名は、チーン・ブン・ファグフール・ブン・カマーリー・ブン・ヤーフェス・ブン・ヌーフ（Čīn b. Faġfūr b. Kamārī b. Yāfiṯ b. Nūḥ）[368] の名に由来して呼ばれている。

「スーの町（Madīna-yi Ṣū）」はヒンドにある町である[369]。そこには1体の偶像があり、その名を「マナート（Manāt）」[370] といった。スルターン・マフムード・ガズニーがこのマナートを引き倒そうと企てた。

マナートは青い石であり、［もともとは］カァバに置かれていた。預言者――**彼に平安あれ**――がカァバから偶像を一掃したとき、マナートは［カァバの］外にうち捨てられた。（p. 243）1人の男が［マナートを］持ち去り、ヒンドゥスターンへ持っていった。彼らは［マナートを］同じ重さの黄金で買い取り、スーに運び込んだ。人々は預言者――**彼に平安あれ**――に、「マナートはヒンドゥスターンに持ち去られました」と伝えた。すると［預言者は］「私のウンマの中の1人の男がそれを取り返すであろう」とおっしゃった。

その後、スルターン・マフムードがこれを引き抜いたとき、ヒンドの人々は何ハルヴァールもの黄金でもって買い取ろうとしたが、［スルターンは］売り渡さなかった。スルターンは斧を持ち、自らの手で引き剥がした。というのも、［マナートの石は］黄金の石臼の上に置かれていたからである。それをガズナへ持ち帰り、言った。「私の父が偶像を彫らなかったのに、私が偶像を売るものか！」

そしてこの石をガズナにあるマドラサの敷居のところに置いた。そうすれば人々が［通るときに］足をこの上に置くからである。

人々はこのマナートをスー［の町］に結びつけて［その町を「ソームナート」と呼んで］いる。

「サヌアーの町（Madīna-yi Ṣan‘ā）」はイエメンの地域にあり、大きくてすばらしく、恵みの多い町である。**至高なるアッラーは、「土地は立派で、主は寛大であられる」**［Q34: 15］**とおっしゃっているが**、［これは］サヌアーを示しておられるのである。サヌアーの建設者は、サヌアー・ブン・アラーク・ブン・〔ヤクタン〕（Ṣan‘ā b. Arāk b. [Yaqṭan]）である[371]。

［逸話］

ムハンマド・ブン・アル＝ハサン・ブン・アリー（Muḥammad b. al-Ḥasan b. ‘Alī）は次のように言う[372]。「ダーウードの子スライマーンは、イスタフルでディーヴたちに数々の厄介な仕事を命

368）これと類似する人名が『諸都市辞典』に見える［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 444］。父祖の名にある「ファグフール」は中国の「天子」を指し、「ヤーフェス・ブン・ヌーフ」はノアの子ヤペテのことである。この名前は、中国の王を旧約聖書由来の人類の系譜の中に位置づけようとするものであろう。

369）以下の逸話から、この町はインド西部グジャラート州のカーティアーワール半島に位置するシヴァ派の聖地ソームナート（Somanātha）を指していると考えられる。著者は「ソームナート」を「スー」と「マナート」に分解して解釈しており、この見解は著者とほぼ同時代の歴史家ギャルディーズィーの史書に基づく。一方ガズナ朝のスルターン・マフムードは、1015/16年にソームナートを攻略して莫大な財宝を獲得し、その地にあった偶像の破片をメッカとメディナに送ったと伝えられる［*EI*²: Sūmanāt; 近藤信彰「八〇〇年後の「復讐」――西南アジアにおける「ソームナートの門扉」の歴史」永原陽子編『生まれる歴史、創られる歴史』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年、31–53頁］。

370）ジャーヒリーヤ時代に、メッカの民によって崇拝された3女神のうちのひとつ。マナートは、メッカとメディナの中間にある谷の黒石に宿る神である［「アニミズム」『新イスラム事典』］

371）イブン・ファキーフやヤークートによると、サヌアーの建設者は Ṣan‘ā b. Azāl b.Yaqṭan であり、本書とは父親の名前のみがわずかに異なる［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 34; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 326］。

372）逸話を伝える人物については未詳だが、この話は『クルアーン』34章（サバア章）12–21節に見られる、スラ

じ、彼らへの報酬を［建設者の］サヌアーに渡していた。ディーヴたちはイブリースに不平を漏らし言った。『我々は苦しみのうちにあり、どうしようもない。』

イブリースは［答えて］言った。『**今や試練は膨大になった。すでに解放が到来した**』、すなわち［ペルシア語では］『試練は甚だしくなった。解放［の時］が近づいたのだ。』」

また、ムアンマル（Mu‘ammar）[373] は、「私はシャームやホラーサーンやイラクに行ったが、サヌアーのようなところは［他に］なかった」と言っている。サヌアーの人々は、［1年に］夏を2回、冬を2回過ごす。アデンやハジャルの人々も同様である。

預言者――**彼に平安あれ**――はおっしゃった。「遠からず、サヌアーはアラブの国となるであろう。そこから1人の男が現れる。その名はワフブ（Wahb）という。創造主は彼に英知をお与えになろう。」

イブン・アッバース（Ibn ‘Abbās）[374] は、「サヌアーはターウース（Ṭāūs）[375] で、［ターウースは］イエメンの人々の学者である」と言い、ムジャーヒド（Mujāhid）[376] はヒジャーズの学者であると言い、サイード・ブン・ジュバイルはイラクの学者であり、ワフブ・ブン・ムナッビフは世界の学者である［と言った］[377]。

「真鍮の砦（Ḥiṣn-i ṣufr）」はアンダルスの荒野にある青銅の城砦である[378]。双角の所有者がそれを建設し、（p. 244）そこに書物や財宝を納め、呪文をかけた。誰もそこに入れないようにするためである。砦の内部は石で造り、また壁は銅であった。ここへやって来てこの砦を目にする者は、誰しも笑いすぎて死んでしまう。

預言者――**彼に平安あれ**――はおっしゃった。「マグリブには銅で造られた町がある。そこには銅像がいくつかあり、その長さは2ミールで、『クリーウス（QRYWS）』と呼ばれている。門のところには山があり、長さは130ミールである。そこには1つの部族がおり、72種類の言語で話をする。」

また言われているところによると、この砦はアンダルスにあり、1ファルサング手前まで行くと、犬の鳴き声がけたたましく聞こえる。［だが］前に進むほど、［声は］小さくなり、町の中に入る

イマーンがジンたちを働かせて神殿を建立させたことに対し、スライマーンの死後、彼らがイブリースの呼びかけに応じてアッラーに背いたことに基づいていよう。

373）バスラ出身のムゥタズィラ派の神学者、Mu‘ammar b. ‘Abbād al-Sulamī のことか。ムゥタズィラ派の同輩に告発されてバスラからバクダードへ移住した。神学上の論争を行うために、ハールーン・アル＝ラシードによってインドへと派遣されたが、その途中に毒殺されたとされる［*EI*²: Mu‘ammar b. ‘Abbād al-Sulamī］。

374）アブドゥッラー・ブン・アッバースのこと（686–688年没）。アッバース朝初代カリフ、アブー・アル＝アッバース（在位750–754年）の祖父で、当代で最も偉大な学者でもあった。大征服時代、北アフリカやエジプトに軍を率いるなど、軍事・政治ともに活躍した［*EI*²: ‘Abd Allāh b. al-‘Abbās］。

375）ハディース伝承者の1人である Ṭāwūs b. Kaysān Jundī を指す。イラン出身であるが、40回のメッカ巡礼を行い、イエメンの信者たちの中にあったと伝えられる。724年没［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 16, p. 412; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-ḏahab*, vol. 4, p. 39］。

376）クルアーン朗詠者（718–723年頃没）。上述のアブドゥッラー・ブン・アッバースのもとで学び、メッカで死去した［*EI*²: Muḏjāhid b. Ḏjabr al-Makkī］。

377）この箇所は、‘ALM（「世界（‘ālam）」もしくは「学者（‘ālim）」）という語の解釈でテキストそのものにかなりの乱れが生じている。またおそらくは著者あるいは写字生が、学者であるターウースを知らず、語の本来の意味である「孔雀」と判断し、「サヌアーは世界の孔雀である」と解したと考えられる。ここではイブン・ファキーフの伝える次の言葉に従い、語を補いつつ訳出する。「イブン・アッバースはよくこのように言っていた。『ムジャーヒドはヒジャーズの人々の学者であり、サイード・ブン・ジュバイルはイラクの人々の学者であり、ターウースはイエメンの人々の学者であり、ワフブは人類全体の学者である』と」［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 34］。

378）アンダルスの青銅の町については、本訳注（4）、517–518頁も参照されたい。

と、1匹の犬も目にすることはない。

知れ。人の住んでいる土地の境目では、あらゆることが驚異である。同じような話に、ナイルの源流に関するものがある[379]。言われているところによると、2人の貧しい兄弟がナイルの岸に沿って進み、40年かけてある場所にたどり着いた。彼らは黄金の壁と穴だらけの地面を見つけた。ナイルの水は壁の下から出て、この地面に流れ込んでいた。2人は言った。「この壁の向こう側はどうなっているのだろう？」

［兄弟の］1人が何とかしてこの壁の上にのぼった。［すると］いきなり笑い出し、壁の向こう側へ身を投じてしまった。再び彼の姿を見た者はいなかった。もう1人の兄弟も［向こう側へ］行きたいと思ったが、壁に次のように書かれているのが目に入った。「**ここまでが人の子の道である。これを越えた者は、戻ることはない。**」

彼は［ここが］人の住む地の果てだと知り、引き返した。彼らが笑った理由は、神のみがご存じである。

＜ザード（al-ḍād）の項＞

「ザラワーン（Ḍarawān）」はイエメンの境域にある町で[380]、驚くべき建物がある。それは、スライマーン――**彼に平安あれ**――のために、ディーヴたちが建てたと言われている。その後、トゥッバゥの主（Ḏī Tubba‘）は、ビルキースをスライマーンに与えた[381]。

＜ター（al-ṭā’）の項＞

「ターイフ（Ṭāyf）」は美味な水の川があり、空気が清らかな町である[382]。「大地のこぶは（p. 245）ターイフである」と言われている。そこでは、オリーブ、良質のブドウ、干しブドウ、なめし革、カンビール樹（qanbīl）[383]、ザクロがあり、世界中に運ばれる。1年に1度、夜に風が吹き、皮をなめしにする。その晩、スハイル（カノープス）が昇る頃、なめし革の上にカンビール樹［の実］が降ってくる。世界の他の場所では降ることはない。

ターイフは次のような理由で「ターイフ」と呼ばれている。ダムーン・ブン・アブドゥルマリク（Damūn b. ‘Abd al-Malik）は〔おじの〕息子を殺し、ハドラマウトへと逃げた。そしてウルワ・ブン・マスウード（‘Urwa b. Mas‘ūd）[384]の娘を求め、サキーフ（Ṯaqīf）[385]［の民］に言った。「私はあなたがたのために囲い（ṭawf）をつくりましょう。」

そして壁をめぐらした。ターイフは「ワッジュ（Wajj）」と呼ばれていたが、その後ここは「ター

379）この話については、前出の「黄金のドーム」の項参照。

380）テキストはḌRWAḤだが、サーデギー校訂本に従う。『諸都市辞典』によると、ザラワーンと呼ばれる涸れ川のそばにあった町で、涸れ川と同じ名前で呼ばれた。サヌアーから4ファルサング［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 456］。この地にあった庭園の逸話が、次章の「逆転した土地」の中に見られる。

381）一説によると、スライマーンはハムダーン部族のトゥッバゥの1人にビルキースを与えたとされており、上述の話の内容とは逆になっている［*EI*²: Bilḳīs］。なお、「トゥッバゥ」はイエメンの王の称号であり、ここでのズィー・トゥッバゥは「トゥッバゥの主」という表現によるイエメンの支配者を指すと解す。

382）メッカの南東に位置する町。肥沃な大地と豊富な水に恵まれて、農業が盛んである。小麦や野菜や果実を産する。メッカの果物の供給地として知られ、なかでもブドウは有名である［*EI*²: al-Ṭā’if］。

383）イエメン地方に産し、実が染料に使用できる植物。

384）ムハンマドの有名な教友の1人（630年没）。ターイフのサキーフ族の有力者であり、クライシュ族の側についていた。630年にイスラームに改宗した直後、部族の者によって殺害される［*EI*²: ‘Urwa b. Mas‘ūd］。

385）ターイフを根拠としていたクライシュ族の1氏族。クライシュの息子であるサキーフを祖とする［*EI*²: Ṯaḳīf］。

イフ（囲うもの）」と名づけられた[386]。そこには「ワフト（Waḥṭ）」という驚くべき庭園がある。そのことについては［後で］述べよう[387]。この町の干しブドウは世界各地に運ばれる。

「タイイバ（Ṭayyba）」は預言者――**彼に平安あれ**――の町（マディーナ）のことである。「ターバ（Ṭāba）」とも呼ばれる。というのも、いつもそこからは芳しい香りが立ち上るからであり[388]、［それは］麝香の匂いよりも良い。土や石や果実から動物の毛皮や皮膚にいたるまで、良い香りを放つ。

「トレド（Ṭulayṭula）」はマグリブの境域にある町である[389]。高い山の上にあり、岩と錫で造られている。この町の周囲には7つの山があり、そこには人々が暮らしている。町の周囲をティグリスのように川がめぐっている。この川は「アナージール（ANAJYR）」[390]と呼ばれている。この町の近くにある別の町は、トルトーサ（Ṭurṭūsiya）[391]、マルタ、コルドバである。だが驚異的なのはトレドである。

「タルスース（Ṭarsūs）」は不信心者の町である。［町は］破壊され、人々は襲撃され、大火が起こり、女や子供はこの火の中に投げ込まれた。大惨事となり、この町は滅んだ[392]。やがてハールーン・アル＝ラシードの治世となり、テュルクのアブー・スライマーン（Abū Sulaymān）[393]が派遣された。彼は［ヒジュラ暦］170年（西暦786–87年）に［町を］再建し、城壁を築いた。［現在］町の人々は聖戦士である[394]。

「トゥース（Ṭūs）」はホラーサーンの境域にある。アリー・ブン・ムーサー・アル＝リダー（ʻAlī b. Mūsā al-Riḍā）[395]の墓がその地のとある庭園の中にある。（p. 246）ハールーン・アル＝ラ

386）アラビア語の「ターイフ」は、「囲う、めぐる（ṬWF）」という動詞の能動分詞形である。イブン・ファキーフが同様の話を伝える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 22］。

387）本章「ワーウの項」参照。

388）「ターバ」「タイイバ」ともにアラビア語の動詞 ṬYB（良い、芳香を放つ）の派生形である。

389）イベリア半島中央部にあるトレドは三方をタホ川に囲まれ、丘の上に位置する。714年に征服されると、イベリア半島におけるイスラームの政治・文化の中心地となり、後ウマイヤ朝では戦略上の要衝となった。1028年に再征服された後もイスラーム文化は存続した［*EI*²: Ṭurṭūsha; 「トレド」『新イスラム事典』］。

390）タホ（Tajo）を音写した語が誤って伝わったのだろう。川に関して本書とほぼ同じ内容を記す『世界の諸境域』では、川の名前は「タージャ（Tāja）」（あるいは「タージョフ（Tājuh）」）である［*Ḥudūd al-ʻālam*, pp. 52, 181; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 4, pp. 39–40］。

391）バルセロナとバレンシアの中間地点にあり、エブロ川流域に位置する。714年にムスリム軍に征服された［*EI*²: Ṭurṭūsha］。

392）初期イスラームの征服時代に東ローマ軍がシリアから撤退する際、アラブ軍が東ローマ領域にさらに侵攻することがないように住民を伴って後退し、すべての都市・城砦を破壊したとされている［太田敬子「スグール・シャーミーア再建史考――ムスリム勢力の拡大の一プロセスとして」『オリエント』36（1）、1993年、22頁；太田敬子『ジハードの町タルスース――イスラーム世界とキリスト教世界の狭間』刀水書房、2009年、19、94–95頁］。

393）正しくは、ハールーン・アル＝ラシードの廷臣（ハーディム）であったテュルク系軍人、アブー・スライム（Abū Sulaym）のこと。彼はハールーンから、タルスースをはじめとするビザンツ境界域にある諸都市の再建事業とその方面への遠征の指揮を委ねられていた［バラーズリー著「諸国征服史9」花田宇秋訳、『明治学院論叢』473、82–83頁；太田敬子『ジハードの町タルスース』、21–25頁］。

394）ハールーン・アル＝ラシードは、カリフ即位以前の779/80年、781/2年、カリフ即位後の797年、803年、806年と、5回にわたり対ビザンツ遠征を指揮した。征服後のタルスースは軍営都市として大規模に再建され、ホラーサーン兵を中心に5000人規模の入植が行われた［*EI*²: Hārūn al-Rashīd; 太田敬子『ジハードの町タルスース』、22–23頁］。

395）シーア派12イマーム派の第8代イマーム。メディナに生まれ、818年にトゥースで没した。816年に、当時のアッバース朝カリフのマームーンは彼をマルヴに呼び、後継者に指名して「リダー（al-Riḍā）」（ペルシア語では

シードの墓も同様である。

［逸話］

ハールーンは次のような夢を見た。ある人が手のひら一杯の赤土を彼に差し出し、言った。「おまえの墓の土だ。」

時が過ぎ、［ハールーンは］トゥースに行き病気になった。ある庭園でくだんの夢を思い出し、言った。「この庭園の土を持ってまいれ。」

従僕のマスルール（Maṣrūr）がその庭園の手のひら一杯分の土を彼に差し出した。ハールーンは言った。「この土だ。それにこれが夢で見たあの手だ。」

そして自分の墓を［そこに］造り、その墓のところに行き、『クルアーン』を詠んだ。やがてこの世を去ると、彼はそこに埋葬された。

トゥースにはこのようなすばらしい偉人たちがいる。［すなわち］かの地に眠るこれら2人の人物のことである。一方たとえトゥースから、ニザーム・アル＝ムルク（Niẓām al-Mulk）[396] 以外には誰も現れ出なかったとしても、［彼1人で］十分誇るに値する。その上、ハサン・フェルドウスィー（Ḥasan Firdawsī）[397] のように、ホラーサーンの他の町々に名の知れた賢人もいる。

この町の人々は敬虔で、寛容である。

「タラーズ（Ṭarāz）」はイスラームの町々の最果てであり、中国の境域のほうにある[398]。［人々は］美しい顔をしており、体つきもすばらしい。タラーズはムスリムとテュルクたちの間にある帳である。周囲にはいくつかの砦があり、タラーズに属している。その地には竜がいる。彼らの向こう側にはキーマークの国があり、みな天幕の中で暮らしている。そこを越えると、カルルク系のテュルクの境域に至る。これらはすべてチャーチュ（タシュケント）（Šāš）の境域の中にあり、マーワラーンナフルのうちに数えられる。その地からは男奴隷と錦がもたらされる。

「ターラカーン（Ṭālaqān）」は山上に建てられた町である[399]。そこの特産品はフェルト、粗綿の敷物、帳幕である。

「レザー」）の称号を与えた。しかし、これは政治の中心をバグダードから東方に移すことを意味したため、イラクで反発が起こり、マームーンは政策転換を余儀なくされた。マームーンは818年にマルヴからバグダードに移動したが、アリー・アル＝リダーはその途上トゥースで病死し、ハールーン・アル＝ラシードの墓の傍らに埋葬された［*EI*²: ʿAlī al-Riḍā］。

396）セルジューク朝のアルプ・アルスラーンやマリク・シャーなど、最盛期を現出した時代の宰相（1092年没）。セルジューク朝の国家体制の基礎を築き、領土内の各地に自身の名を冠したニザーミーヤ学院を設立した。シーア派の一派であるニザール派に暗殺されたとされる［「ニザームルムルク」『岩波イスラーム辞典』］。

397）イスラーム時代のペルシア語詩人（1025年没）。ハキーム（賢人）・フェルドウスィーとも呼ばれる。980年から30年かけて作成した『王の書（シャー・ナーマ）』をガズナ朝のマフムードに献呈したが、良い反応が得られず失意のうちに没したと言われる。『王の書』はイラン歴代の王や英雄の生涯や戦いを綴った、ペルシア文学史上最高の民族叙事詩とされる［「フィルダウスィー」「シャー・ナーマ」『岩波イスラーム辞典』］。

398）タラス川の岸辺にイスラームの征服以前からあった町。現在のカザフスタン共和国内に位置する。町の正確な場所は不明であるが、おそらく後代のアウリヤー・アタ（Awliyā Atā）、現在のジャンブル（Dzhambul）の付近にあったと推測されている。既出のキルギス共和国内にある「タラース（Talās）」（「ター（tāʾ）」の項参照）とは異なる［*EI*²: Ṭarāz］。

399）本訳注（4）、501頁、注107参照。同名の地名は3ヶ所あり、ここでもどの町のことかは不明だが、次項と関連するならば、カズヴィーンの北に位置するアルボルズ山中のターラカーン（現在名はシャフラク（Šahrak））を指すのだろう。

「タバリスターン（Ṭabaristān）」は地域［の名］であり、その境域はアッラーンの領域からジョルジャーンまでである。一方の境界はハザルの海からターラカーンまでであり、アーモル（Āmul）[400] やタミース（Ṭamīs）[401] など、多くの町がある。「**タバリスターンは喜びであり、庭園である。平地があり、林がある。山があり、海もある。その山々は諸王にとっての砦であり、その林は人々にとっての宝庫であり、その海は商いの場であり猟場である。庭々は旅人を緑の絨毯の上に安らがせる**」と言われている。［ペルシア語での］意味は次のとおりである。「タバリスターンには平野もあり、山もあり、林もあり、海もある。諸王の城砦があり、宝庫がある。林があり、海がある。商人たちにとっては商品がある。その平地は（p.247）まるで緑の絨毯である。」

タバリスターンとダイラム地方（Daylamān）の間にはいくつもの要塞があり、31の砦を数える。その各々に2000人の兵がいる。これがタバリスターン地方の絵である［図］。

タバリスターンの最初の町はタミースである。［その地方は］ジョルジャーンとターラカーンまでである。そこには大きな城門がある。タバリスターンの人々はその城門を通らない限り、ジョルジャーンに行くことはできない。というのも、山から海の真ん中まで高い城壁がめぐらされているからである。それを建設したのは公正なるヌーシラヴァーンであり、テュルクからの攻撃を防ぐ塁壁となるようにした。タバリスターンの特産品は、麻布、腰巻き、羊毛織り、ツゲ、魚、靴、米、盆、ダイダイ、絹である。

［逸話］

ムアーウィヤがタバリスターン地方をマスカラ・ブン・フバイラ（Maṣqala b. Hubayra）[402] に与えたとき、2万人の兵が彼とともにいた。彼はタバリスターンにやって来た。（p.248）峠道を通っていると、いくつもの岩が山の上から転がってきて、彼の軍隊を滅ぼした。マスカラは殺された。諺では、「**マスカラがタバリスターンから戻るまでこれこれのことはあり得ない**」と言われている[403]。

彼の死後、ヤズィード・ブン・アル＝ムハッラブ（Yazīd b. al-Muhallab）[404] がホラーサーンからタバリスターンにやって来て、ダイラムのイスパフバド（Iṣfahbad）[405] と戦った。その後［ヤズィードは、イスパフバドが］毎年40万ディルハム銀貨と、400ハルヴァールのサフラン、そして毎年1人あたり1つの銀の盾と銀の盃をもった男を400人［送るという条件で］彼と講和した。

その後、アブー・ジャァファル・アル＝マンスールの代になると、彼らは反逆した。マンスール

400）テキストはAHLMだが、ma写本に従う。カスピ海南東岸のマーザンダラーン地方の西側部分にある町。サーサーン朝時代から存在し、イスラーム時代には同地域の中心都市となった。歴史家タバリーの生地でもある［*EI*²: Āmul］。

401）Ṭamīsaとも呼ばれる。タバリスターンの東端に位置する町［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 375］。

402）カリフ・アリーの時代にペルシア湾岸のスィーラーフ周辺のアーミル（徴税官）を務めていた人物。のちにアリーから離反してムアーウィヤ側につき、いくつかの要職を任された。以下の逸話はバラーズリー参照［*EI*²: al-Khirrīt; バラーズリー「諸国征服史17」（花田訳）、74頁］。

403）マスカラは死んでしまっているので、実際には起こり得ないことのたとえとして用いられている。

404）ウマイヤ朝時代の高名な武将ムハッラブ・ブン・アビー・スフラの息子の1人。716年にクタイバ・ブン・ムスリムの後任としてホラーサーン総督に任じられ、ゴルガーン（ジョルジャーン）を征服し、タバリスターンにも侵攻した［*EI*²: Iran］。

405）イスラーム以前のペルシア帝国において、軍司令官（army chief）を指した現地語の称号のアラビア語表記。この称号はカスピ海沿岸地方ではモンゴル侵入の頃まで使われていた。アラブ勢力がイランに進出したとき、サーサーン朝東部地域のイスパフバドはタバリスターンの砦に拠り、亡命してきた皇帝ヤズダゲルド3世を匿っている。この称号はカスピ海南西・南東のダイラム人たちの間でも見られたほか、ヒジュラ暦1–2世紀にはホラーサーンの北部・東部やカスピ海東岸でも用いられていた［*EI*²: Ispahbadh; Ispahsālār, Sipahsālār］。

はハーズィム・ブン・フザイマ（Ḫāzim b. Ḫuzayma）[406] をマルズーク・アブー・アル＝ハスィーブ（Marzūq Abū al-Ḫaṣīb）[407] とともに送ったが、［ダイラム人たちは］彼らを通そうとしなかった。アブー・アル＝ハスィーブは自分の頭とあご髭を剃り落として逃げ、イスパフバドのもとにやってきた。彼は砦の入り口で泣いた。

イスパフバドが言った。「彼は困っているぞ。」

アブー・アル＝ハスィーブは砦の入り口に連れてこられた。彼は、「イスラームの軍が私を痛めつけ、私をこのような身なりにさせました」と訴えた。

彼はダイラム人たちと親しくなり、やがて彼らは［彼に対して］用心しなくなった。彼は1通の書をしたため、矢に結びつけて放った。イスラームの軍はその書簡を受け取った。そこには「これこれの夜に私が城砦の扉を開ける。全軍でそこに来るように」と書かれていた。

軍は［指定された］夜にやって来た。［アブー・アル＝ハスィーブは］扉を開き、軍が中に入った。イスパフバドはターリク（Ṭāriq）の山[408] のダイラム人たちのもとに逃げた。1年後、彼は死んだ。アブー・アル＝ハスィーブはその地に留まり、〔サーリー（Sārī）[409] に居を定めた〕。彼の支配は2年間であった。

その後、マンスールはハーリド・ブン・バルマク（Ḫālid b. Barmak）[410] を送った。王たちは逃げ、ハーリドは勝利を収めた。いくつかの城砦を征服し、エメラルドをちりばめた王冠と腰帯を手に入れた。ハーリドの威信は定まった。ハーリドのところにあった盾や投石機に、ハーリドの絵姿が描かれるほどであった。イスパフバドは恐れ、毒をあおった。妻子にも毒を与えたので、［みな］死んでしまった。マスマガーン（Maṣmaġān）[411] は妻や娘たちを連れて現れ、ハーリドの前で地面に座った。ハーリドは慈悲をかけ、彼らを信徒たちの長であるマンスールのもとに送った。［マンスールはマスマガーンの］娘の1人を［息子の］マフディーに与え、1人をアッバース・ブン・ムハンマド（‘Abbās b. Muḥammad）[412] に与えた。その娘はイブラーヒーム・ブン・アッバース（Ibrāhīm b. ‘Abbās）を産んだ。マフディーに与えられたシャクラ（Šakla）はイブラーヒーム（Ibrāhīm）を産んだ[413]。

要するに、タバリスターンは近づきがたく、恵みに満ちた地域である。

406）アッバース朝初期の武将。752年に、当時オマーンにあったイバード派の初代イマーム、ジュランダー・ブン・マスウードを討伐したことで知られる［*EI*²: al-Ḏjulandā］。

407）カリフ、マンスールの被護民（マウラー）であり、タバリスターン遠征で活躍したとされる人物［バラーズリー「諸国征服史17」（花田訳）、81–82頁］

408）タバリスターンにある洞窟のある山［*LN*: Ṭāriq］。同名のジブラルタル海峡とは異なる。

409）カスピ海南東岸のマーザンダラーンの州都。アーモルの東に位置する。

410）アッバース朝初代カリフ、サッファーフから軍とハラージュ税のディーワーン監督職を委ねられたのち、あらゆる部局の管理を任され、ワズィールになったとも伝えられる。マンスールの時代には、しばしば「カリフの右腕」と称されたが、アブー・アイユーブの策略で失脚した。マンスールの死後はモースルの統治を行った［*EI*²: al-Barāmika］。

411）イランのダマーヴァンド地方にあったゾロアスター教徒の王朝、またはその支配者を指す。アッバース朝初期に、マスマガーンの王の兄弟アバルヴィーズ（パルヴィーズ）は王と不仲になり、カリフ・マンスールのもとに亡命した［*EI*²: Maṣmuḫān］。本訳注（4）、522頁も参照のこと。

412）アッバース朝カリフ・サッファーフとマンスールの兄弟。759年にマンスールからジャズィーラ地方の総督に任じられた。775/6年にはマフディーが派遣した対ビザンツ遠征軍を率いて小アジアに進軍し、多大な成功を収めた。802年没［*EI*²: al-‘Abbās b. Muḥammad］。

413）758/9年、アッバース朝軍はまずイスパフバドを、次いでマスマガーンを破った。マスマガーンの2人の娘、バフタリーヤ（Baḫtariyya）とサミュル（Ṣamyr）（あるいはシャクラ）は捕虜となり、1人はマフディーの妻に、もう1人はアリー・ブン・ライタの女奴隷の子の妻になったという［*EI*²: Maṣmuḫān］。ただし、ここでは2人の妻の子供の名がどちらもイブラーヒームであり、テキストに乱れがある。

（p. 249）「タバリーヤ（Ṭabarīya）」はマグリブにある町である[414]。そこには多くのサソリやカメがいる。シャープールの時代に、その地に1頭のライオンが現れ、被害をもたらしては逃げていた。［シャープールは］命じて、そのライオンの巣穴の入り口に武器を持ったシャープールの像を作らせた。ライオンはそれを見ているうちに［像に慣れて］大胆になり、ある日［巣穴から］外に出てきた。シャープールは像を投げ倒し、像の代わりに［そこに］立って、ライオンを打ち殺した。そして拝火殿とともにこの町を建てた。

＜アイン（al-‘ayn）の項＞

「イラク（al-‘Irāq）」は世界の中心であり、この世のへそである。なぜなら、ヒンドの人々がバービル（バビロン）をこの世のへそと定めたからである。第4気候帯に属す。アラブのジャズィーラはイラクにある。イラクの住民は、ルームやスラヴの人々のみすぼらしさや、ハバシャ（エチオピア）の黒さ、テュルクたちの性悪さや、中国の人々の激烈さといった欠点が［まったく］ない。このような理由からカリフたちはイラクの中心であるバグダードを選んだのである。

イラクの境域は、山岳地帯の端から砂漠地帯（bādīya）[415]、クーファ、ディヤール・バニー・シャイバーン（Diyār-i Banī Šaybān）[416] までと、ファールスの海までである。イラクの偉大な町々はバグダード、バスラ、クーファ、ヒーラ、カーディスィーヤ（Qādisīya）、ハーナキーン（Ḫānaqīn）[417] である。ティグリスはその間を流れており、［川の］一方はアラブに、もう一方はアジャムに属している。マダーイニーは、「イラクの境はヒートから中国やヒンドとスィンドまで、またレイやホラーサーンやダイラムやジバールやイスファハーンまでである」と言っている[418]。またイブン・アッバースは、「バフラインはイラクの一部である」と言っている。

イラクには冬がない。山岳地帯に夏がないのと同じである。同様に、オマーンには落雷がなく、ティハーマでは膿傷（damāmīl）がなく、ジャズィーラでは疥癬（jarab）がなく、ザンジバルでは疫病（ṭā‘ūn）がなく、シャームでは熱病（tab）がなく、ハイバル（Ḫaybar）[419] では脾炎（ṭuḥāl）がない。バフラインでは地震がなく、スィーラーフにはサソリがいない。アフワーズには竜がおらず、スィースターンやミスルには[420] 大蛇やワニがいない。同様に、イラクの人々はこれら［すべて］の災厄から守られている。よくわかるように、イラクの図を示そう［図］。

（p. 250）「アスカラーン（‘Asqalān）とアッカ（‘Akka）」はシャームにある。祝福された町々で、「聖なる家」の境域にある。アブドゥッラー・ブン・サラームは、「この世の王冠はシャームであ

414）本章の「ヨルダン」の項に同名の町が見られるが（前掲注79）、別の町である。こちらの「タバリーヤ」については不詳。サーサーン朝に関連することやゾロアスター教の拝火殿があることから、「マグリブにある」という見解は誤りと思われる。

415）イラクの南西部からアラビア半島にかけて広がるネフド砂漠の一帯を指すのだろう。

416）シャイバーンはアラブの1部族の名。「バヌー・シャイバーンの地」とは、イスラーム以前にこの部族が夏営していたユーフラテス川の上～中流域を指すか［*EI*²: Shaybān］。

417）バグダード＝ケルマーンシャー間に位置する町。現在はイラク＝イラン国境のイラク側にある。

418）マダーイニーのこの発言はイブン・ファキーフが記録している［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 161–162］。

419）メディナの北方約150キロメートルに位置するオアシス。預言者ムハンマドによってメディナを追放されたナディール族が亡命した［「ハイバル」『岩波イスラーム辞典』］。

420）「ミスル（エジプト）には」の語は文末に来ており、場合によっては「スィースターンには大蛇やワニがおらず、ミスルには」と続くものの、単語が欠落している可能性がある。巻末の訂正表では、「スィースターンには大蛇がおらず、ミスルにはワニがいない」という読み方が例示されている。

る。シャームの王冠はアスカラーンである。この町は、ウマル・ブン・アル＝ハッターブのカリフ時代にムアーウィヤが征服した」と言っている[421]。また預言者――**彼に平安あれ**――は、「昼も夜もアスカラーンにいて不信心者と戦い、60歳を過ぎて死ぬ者は、誰しも殉教者として死ぬ」とおっしゃっている。

アスカラーンはルームの海の岸辺にある。不信心者との国境であり、聖者たちの場所である。

「アンムーリーヤ（‘Ammūrīya）」はルームにある町で[422]、44の塔がある。町はムゥタスィムが征服した。

［ムゥタスィムは］いくつもの投石機を町に向けて配したが、どうしても征服することはできなかった。ある夜、［ムゥタスィムは］アンムーリーヤのまわりを巡回していた。すると〔2人の〕不信心者が塔の上で釜を火にかけていた。1人が言った。「イスラームの王はアンムーリーヤの攻め方を知らないのだ。」

もう1人が言った。「この話がおまえとどんな関係がある？王のことは彼らに任せておけ。」

一刻が過ぎたが、ムゥタスィムは［立ち去らずに］待っていた。やがて、その男が「どうやって征服するのか？」と尋ねると、［先の男が］言った。「投石機が散り散りに配されているが、すべてを1つの塔に向けて配備すれば、破壊することができる。それから軍に命じてその土を取り除き、中に入ればよいのだ。」

ムゥタスィムは「**アッラーは偉大なり。天から助けが来た**」と言って帰った。そして投石機を1つの塔に向け、石を打ち込み、塔を破壊した。中に入ると、アンムーリーヤに火を放ち、その扉を取り外してバグダードに持ち帰った。

＜逸話＞

次のように言われている。そこには1人の修道士がいた。ムゥタスィムの軍の中の1人に「あなた方はアンムーリーヤを征服することはできません」と言った。「なぜだ？」と聞くと、［修道士は］言った。「私生子たちがアンムーリーヤを燃やすだろう、と書物の中で読んだことがあるからです。」

この言葉がムゥタスィムのワズィールに届いた。彼は腹を立て、ムゥタスィムに知らせた。ムゥタスィムは言った。「修道士の言うことは正しい。私のグラームらは何千もの私生子だ。」

ムゥタスィムのもとには金で購入した1万人のテュルクの男奴隷（グラーム）たちがいた。彼らはアンムーリーヤを破壊し（p. 251）燃やした。そして一対の鉄の扉を何台もの荷車でバグダードに持ち帰った。世界の驚異の1つがこの扉である。それは、1片が200マンの［重さの］鉄板が何枚もあわさり、鉄の腕木ひとつで1枚に合わさっている。どうやって［鋳型に］流し込んだのか、あるいはどうやって打ち延ばしたのか、誰にもわからない。その驚異は神のみがご存じである。

「ムクラムの軍営（‘Askar-i Mukram）」はフーゼスターンにある町である。ムクラム[423]がそれを

421）カリフ・ウマルの治世期の640年にムアーウィヤは講和によってアスカラーンを征服した。ここでの発言はイブン・ファキーフが伝える［*EI*²: ‘Āsḳalān; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 103］。

422）「アモリウム（Amorium）の城砦」として知られ、ビザンツ帝国軍が利用したコンスタンティノープルからキリキアに至る街道上にあった。イスラーム勃興後、何度もイスラーム軍に包囲され、最終的に838年にムゥタスィムによって征服された［*EI*²: ‘Ammūriya］。

423）同様の逸話を伝えるバラーズリーによると、ムクラム・ブン・アル＝ファズルを指す［バラーズリー著「諸国征服史19」花田宇秋訳『明治学院論叢』584、1996年、111–112頁］。

建設した。彼は、ハッジャージュ・ブン・ユースフが〔フッラザード・ブン・バース（Ḫurrazād b. Bās)〕[424] と戦わせるために派遣した人物である。フッラザードを捕らえると、彼が身につけていた帽子の中に2つの真珠があった。［ムクラムは］それをハッジャージュに送った。その地には荒れ果てた村があったが、［ムクラムは］それを再建し、その名を「ムクラムの軍営」とした。祝福された町であり、そこからは絹や良質の錦、サトウキビ、ダイダイなどがもたらされる。

「オマーン（‘Umān)」。その主邑はスハール（Ṣuḥār）である[425]。海岸沿いにあり、商人たちの場である。船はそこで停泊し、そこで荷が解かれる。その区域は300ファルサングに及ぶ。ムハンマド・ブン・アル＝カスム・アル＝シャーミー（Muḥammad b. al-Qasm al-Šāmī）がムゥタディド・ビッラー（al-Mu‘taḍid bi-llāh）[426] のためにそこを征服した。そこには真珠のバーザールがある。

＜ガイン（al-ġayn）の項＞

「グール（Ġūr)」は峻嶮な山の上にある町で、彼らの言葉はホラーサーンの言葉とは異なる。ガズナの町の反対側にある。そこから［ゼレの］湖まで川が1本流れている。ザランジュはグールと湖の間にあり、プーシャング[427] がその境域にある。［一方］ヘラートはホラーサーンの町々に属す。

［かつて］ホラーサーンの人々はグールの人々を軽蔑していた。グールの人々はニーシャープールでごみ集め（kannāsī）をなりわいとしていた。［ニーシャープールの人々は］彼らを他の仕事に就かせることはなかった。忌わしき不当な扱いは、グールが優勢となり、ニーシャープールが荒廃するという事態を引き起こした。金や銀や真鍮製の品々、驚くべき調度品や装飾品といったその町の財物は、駄馬の背に乗せてグールの町に持ち去られた。ニーシャープールは今も荒廃している。

（p. 252）「ガルチスターン（Ġaršistān)」はテュルクの地域にある[428]。ヴィーサの子のピーラーン（Pīrān-i Wīsa）[429] 王はアフラースィヤーブの代官であった。彼はグーダルズ（Jūdarz）[430] に次のような手紙を書いた。「トゥールの子孫であるテュルクの王、アフラースィヤーブの代官から、カヤーン家一族の者であり、イーラーンの境界を護るキシュワードの子グーダルズへ。おお、天から王冠を授けられた賢者よ。私がそなたに書き記すことについて熟考せよ。カイ・ホスロウ王はスィヤーヴァシュの復讐を求めているが、すでにアフラースィヤーブは大地を分割し、境域を細分し、テュルクを送り込んだのだ。人口が多く、偉大なるガルチスターンに。そして山に守られた

424）歴史家タバリーが、ハッジャージュと講和を結んだホラズムの王と伝える人物であろう。ただしテキストではいずれの写本も父親の名は「ファールス（Fārs)」と伝える［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 3, p. 547］。

425）この箇所は本書巻末の訂正表およびサーデギー本に従う。スハールは、9–10世紀の重要な交易港であり、イスラーム以前の時代には「マズーン」と呼ばれていた。633/4年に講和によってムスリムの支配下に入った［*EI*²: Ṣuḥār; 『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第1巻116頁］。

426）アッバース朝第16代カリフ（在位892–902年）。

427）本訳注（4）、113頁、注137参照。

428）アフガニスタンのヘラートの東にある山岳地帯を指す［*EI*²: Ghardjistān］。

429）本書巻末の訂正表に従う。ヴィーサの息子ピーラーンは、『王の書』に登場するトゥーラーンの勇者で、アフラースィヤーブの軍の指揮官である。イーラーンの王子スィヤーヴァシュがアフラースィヤーブに殺害された後、スィヤーヴァシュの妻ファランギースとその子カイ・ホスロウを保護した［フェルドゥースィー著『王書』黒柳恒男訳、平凡社、1969年、254、280–285頁］。

430）本書巻末の訂正表に従う。グーダルズもまた『王の書』に登場するが、彼はイーラーン側の勇者であり、スィヤーヴァシュの血を受け継ぐカイ・ホスロウを取り戻すため、息子のギーヴをトゥーラーンに派遣する［フェルドゥースィー『王書』（黒柳訳）、296–298頁］。なお、以下のアラビア語の引用もすべて巻末の訂正表に拠る。

ターラカーンに。アーファリードゥーンが拝火殿を建て、ライオンを住まわせたブハーラーに。そして高き山々の中で高く開けた土地である、光輝く偉大なるバルフに。文面ここまで。」

ガルチスターンの特産品はフェルト、粗布、剃刀（ḥafīfa）とガルチスターン産の布である。

「ガズナ（Ġaznīn）」はヒンドゥスターンの境域にある大きな地方［の名］であり、また大きな町［の名］でもある。そこにはアブー・ハニーファとシャーフィイー――彼ら２人に満足あれ――の学派の徒に属する１万2000のマドラサがある。イスラームの境界の端である。ヒンドゥスターンにあるイスラームの町はガズナとラホール（Lahāwar）である。ガズナの特産品は松かさ（jilġūza）、男奴隷、サル、ラーラス織り（lālas）[431] である。

この町には１万2000のモスクと１万2000の浴場がある。旧市街は２つに分かれており、町の真ん中には大きな山がある。スルターン・マフムード・ブン・サブクテギーンの玉座の置かれた場所であった。マフムードの死後、王権は彼の娘の子のホスロウ（Khusraw）[432] に渡った。そこからラホールまでは160ファルサングである。それら［の町］の向こう側は、すべてイスラームの領域の境界である。

ガズナには「シューラ（ŠWLH）」と呼ばれる街区がある。［その街区の］広場の端に鉄製の槍が突き立てられている。槍の先端は三叉になっており、ロスタム・ブン・ザールのものであった。人々はそれを誇りにしている。また、広場の反対側の端にはもう１本の鉄製の槍があり、二叉になった槍先が地面に突き立てられている。それはマフムード・ブン・サブクテギーンのものである。スルターン・サンジャルがそこにやって来たとき、彼は驚愕し、それをホラーサーンに持ち帰ろうとした。［だが］どんな駄馬もその槍を引き抜くことはできなかった。それゆえ［サンジャルは］その場に置いたままにした。

知れ。ガズナは（p.253）穏やかな気候である。そこの人々は美しく、信心深い。賢明さと結びつけられている。ガズナのマフムードの公正さのもと、英知において［有名な］サナーイー（Sanā'ī）[433] がその地から現れた［とみなす］ならば、彼らにとってはこの偉人ひとりで［誇るに］十分であろう。

＜逸話＞

次のように言われている。イマーム・ムハンマド・ブン・ヤフヤー・ニーシャープーリー（Imām Muḥammad b. Yaḥyā Nīšāpūrī）[434] は、いつもサナーイーを「ザンダカ主義者」「無神論者」と呼んで非難し、彼の詩に耳を傾けることはなかった。ある夜、彼は夢で預言者を見た。預言者は彼に対して腹を立てており、言った。「サナーイーは私のことを良い言葉で語っているのに、おまえは彼

431）校訂ではLALASとなっているが、ラーラス（lālas）と読む。ラーラスは絹織物の１種で、赤色の良質な布地である［*LN*: Lālas］。

432）マフムードの死後、実際にガズナ朝君主の位に就いたのは、ともにマフムードの子であるムハンマドとマスウードであった。ホスロウという名の君主としては、12世紀中葉の17代目のホスロウ・シャーと18代目のホスロウ・マリクがいるが、彼らはマフムードの直系子孫ではあるものの、ここで述べられているような「孫」には当たらない［*EI*²: Ghaznawids］。

433）主にガズナ朝治下で活躍した、最初の本格的なペルシア語神秘主義詩人（1074–1134年）。ガズナで生まれ、官僚層や宗教関係者、軍人などさまざまな階層の人々から保護を受けた後、バルフやヘラートなどを旅した。神学や哲学、医学など諸学を学び、ハナフィー派法学と深い関わりを持った。スーフィーであり、後世のペルシア語神秘主義詩に大きな影響を与える［*EI*²: Sanā'ī］。

434）ガザーリーの弟子であり、ニザーミーヤ学院の長であったアブー・サイード・ムハンマド・ブン・ヤフヤーを指すか。1153/54年にグズがニザーミーヤ学院を破壊した際に殺害された［R. Bulliet, *The Patricians of Nishapur*, Harvard University Press, 1972, p.255］

のことを悪しざまに言っている。」

［イマームは］夢から覚めると泣きぬれて、とうとうガズナまでやって来た。サナーイーの墓の脇に座ると、しばし許しを乞い、悔い改めた。すると夢で［サナーイーと］出会った。彼は言った。「あなたはサナーイーでしょうか？」

答えていわく、「いかにも私は、そなたが言っていたザンダカ主義者のサナーイーだ。悔い改めるか？」

［イマームは］言った。「悔い改めました。」

いわく、「そなたは言葉に注意を払わなかった。行け。［今後は］ペンに注意するがよい。キブラの人々を非難してはならぬぞ。」

［イマームは］戻り、ホラーサーンの境域にやって来た。スルターン・サンジャルの軍が宿営しており、彼はサンジャルの前に連れて行かれた。サンジャルは尋ねた。「民が反抗し、謀反者となるならば、その者には何が必要か？」

イマームは言った。「そのような者たちはハワーリジュ派でありましょう。彼らの血［を流すこと］は合法です。」

［サンジャルは］言った。「グズの軍は私の臣下であり納税者であったが、謀反を起こした。」

イマームは彼にファトワー（法裁定）を与え、「彼らの血は合法である」と書いた。

グズが［サンジャルに］勝利すると、そのファトワーはグズの手に落ちた。イマームは捕らえられ、口に土を詰め込まれて殺された。

このようなことが言われている。言葉に注意することは幸運を招く。**まことにアッラーは最もよく知りたまう。**

「グムダーン（Ġumdān）」は驚くべき城である[435]。ヒシャーム・ブン・ムハンマド・アル＝サーイブ・アル＝カルビー（Hišām b. Muḥammad al-Ṯā’ib al-Kalbī）[436]は次のように言う。「リーシャルフ・ブン・ヤフスィブ（Līšarḥ b. Yaḥṣib）[437]がサヌアーとタバリーヤの間に城を建てようとした。［土地を］測るために1本の綱を張った。［すると］1羽のハゲタカが飛びかかり、綱を奪うと別の区画に投げ落とした。そこは（p. 254）『グムダーン』と呼ばれている場所であった。リーシャルフはそこに城を建てた。」

［城には］4つの面があり、それぞれの面は別々の色によるジャルーブ石で造られた[438]。「ジャルーブ」とはヒムヤル語で石を意味する。城の内部は7層になっており、各階の高さは40アラシュであった。城の影は40ミール先まで及び、天井は1枚の大理石で造られていた。各々の柱にはライオンの像があり、風が［像の］口から入り、尻から出ていた。城の中で灯りをつけると、その透明感から城の外にまで明るさを供した。遠くから［城を］目にしたならば、稲妻だと思うほど

435）ここで述べられるグムダーンの建設の経緯は、『諸都市辞典』がイブン・カルビーを典拠として述べているものと同様である。そこでは、グムダーンはサヌアーとティーワの間とされている。なお、イブン・ファキーフは、グムダーンはスライマーンがビルキースのために建設したという説を紹介する［Yāqūt, *Mu’jam al-buldān*, vol. 4, p. 210; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 35］。

436）イブン・カルビーのこと。本訳注（1）、433頁、注90参照。

437）『冠の書』ではグムダーンの城を建設した王の名はシャルフ（al-Šarḥ）だが、上記『諸都市辞典』の表記に従う［al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 8, p. 60］。

438）以下のグムダーンの形容やウスマーン・ブン・アッファーンの逸話はイブン・ファキーフの記述とほぼ同様である。石はテキストではḤZWBだが、イブン・ファキーフは白、黄、赤、緑の「ジャルーブ（jarūb）」と記す。jarūbには「削られた石」「黒い石」の意味があり、ここでは「加工された石」と採る［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 35; *LN*: Jarūb］。

であった。「サヌアーで［激しい］稲妻を目にする」とも言われていた。驚くべき城であった。

またかつて1個の石が見つかった。その石には［次のように］書かれていた[439]。「**ブドウの木や樹木のそろったサフバドの谷（Wādī al-ṢHBD）のようなものを見たと言う者、またグムダーンのような外観をしたものやスィールダーンのようなものを見たと言う者は嘘つきである。**」

ウスマーン・ブン・アッファーンが「グムダーンを破壊せよ」と命じた日、1本の棒が見つかり、それには「**グムダーンに平安あれ。汝の破壊者は殺されよう**」と書かれていた。［この内容が］ウスマーンに告げられた。［ウスマーンは棒を］そのままにしておき、［グムダーンを破壊した後に］そこを繁栄させるよう命じた。人々は、「これほどまでにあなたが破壊したのです。7年分のシャームの税をもってしても繁栄しないでしょう」と彼に向かって言った。数日後、ウスマーンは殺された。

またそこについては次のように言われる[440]。

私が伝え聞いたグムダーンとは　山の頂高くに建てられたものだ
鋭い光がそこで瞬く　夜ともなれば稲妻の閃光のごとし
かつて新しきものも後に灰となり　炎火がその美しさを変えてしまった

＜ファー（al-fā’）の項＞

「ファールス（Fārs）」は祝福され、幸運で、栄えている地域である。諸王に選ばれし場所であり、ホスロウたちの地である。そこには多くの町々があり、豊かな恵みがある。**預言者――彼にアッラーの祝福と平安あれ――は、「イスラームから最も遠い人々はルームだ。もしイスラームが昴の高みにまで届くなら、ファールスの男がそこを占拠するだろう」と言った。**［すなわちペルシア語では］いわく、「ルームはイスラームから遠い。もしイスラームが星にまで達するならば、ファールスの者がそこにやって来るだろう。」

公正なるヌーシラヴァーンは、ファールスの男1人を、5人のテュルクやダイラム人の上に立たせ、またファールスの男1人を（p. 255）30人のヒンドの男や10人のルームの男の上に立たせていた。

ファールスの人々はイース（エサウ）（‘Īṣ）[441]の子孫である。また「**イスタフルの民は、美徳において最も高貴なる人々である。彼らは諸王であり、諸王の息子たちである**」と言われている。

ファールス・ブン・タフムーラス（Fārs b. Ṭahmūraṯ）[442]は公正な王であり、彼には10人の息子がいた。［すなわち］ジャム（Jam）、シーラーズ、イスタフル、ファサー、ジャンナーバ、カスカル、カルワーザー（Kalwāḏā）、キルキースィヤー、アカルクーブ（‘Aqarqūb）、ハンナーヤー（Ḥannāyā）である[443]。彼の王権は300年間であった。

439）このアラビア語文中に現れる地名はグムダーンを除いて確認されず、アラビア語の意味も把握しづらい。特に文末に見られるMN ḎR‘Aは、ġumdān manẓalan, sīrdān munḏari‘anと対をなし、韻を踏んでいるように思われるが、分かち書きされており、このままでは文法的には意味をなさないので省略する。いずれにせよ、外観の威容を誇ったグムダーンに言及されていることから、いずれもそれ以上にすばらしい場所や似たような建物は世界中に他にないことを表現しているのだろう。

440）これ以降の1文はテキストではアラビア語の本文として編集されているが、『諸都市辞典』においてここから韻文になっていることを踏まえる。途中省略もあるが、アラビア語詩の読みはすべて『諸都市辞典』の記述に従う［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, p. 210］。

441）ヤークーブ（ヤコブ）の双子の兄。旧約聖書においては、イスラエルの民と対立していた狩猟民エドム人の祖である［「エサウ」『新カトリック大辞典』］。

442）父親のタフムーラスは、イランの神話では、カユーマルス、フーシャングに次ぐ人類3番目の王である。

443）すべてファールス地方およびイラクにある都市の名でもある。ジャム（もしくはジャンム）はペルシア湾岸のスィーラーフ近郊の町であり、ファサーもまたシーラーズの東南150キロメートルに位置する町である。ジャ

ファールスの最初の王はアルダシール・ブン・パーパク・ブン・サーサーンであった。**彼はハドゥルを征服した者であった**[444]。ファールスの城砦の中で最も大きいのはイスタフルである。ファールスには1000軒[445]の家が建てられ、5000の砦が造られたが、たった1つでさえ征服できるなどと言う者はいなかった。ファールスの特産品は、麻布、亜麻布、鉱蝋、バラ水、カンゾウ、ミズハッカ、硫黄、石油、オリーブ、鳥たちの水（āb-i murġān）[446]、サフラン、錦である。

ファールスの王は、ザッハーク、ジャムシード、アーファリードゥーン、シャープール、バフラーム、［カイ・］クバード、カイ・ホスロウ、カイ・カーウース、スィヤーヴァシュ、ホルムズ、フィールーズ、パルヴィーズ、公正なるヌーシラヴァーンである。預言者の中では、スライマーン――**彼に平安あれ**――がイスタフルで謁見を行っていた。彼は玉座に座り、野獣や鳥やディーヴや妖精といった多様な種族が彼の御前に列をなした。世界の四方八方から、すなわちルーム、サランディーブ、中国、タラーズ、アンダルス、マグリブ、イラク、ホラーサーン、ダルバンドなどから税がファールスにもたらされ、「ファールスが繁栄すれば、世界中が繁栄する。ファールスが荒廃すれば、世界中が荒廃する」と言われている。

［逸話］

サルマーン・ファールスィー（Salmān-i Fārsī）[447]は［サーサーン朝の］騎兵団（asāwura）の子孫であった。禁欲に励み、原初の書物を知っていた。［書の中で］彼は、預言者が終末時にヤスリブで説法を行うことを知った。彼はヒジャーズを目指して進んでいき、「ドルードの谷（Wādī al-Durūd）」[448]へと至った。1頭のライオンが彼に飛びかかった。［サルマーンは］身動きが取れず、言った。「おお神よ。あなたは私が預言者を求めてやって来たのをご存じであられる。彼の栄光と尊厳にかけて、私をこの敵から救いたまえ。」

突然1人の騎兵が現れてライオンに切りかかり、一撃のもとに［ライオンを］真っ二つにした。サルマーンは救われた。預言者に会い、［イスラームの］信仰に帰依した。

ムアーウィヤとアリー――**アッラーが彼ら2人に満足されますように**――の間に戦いが生じたとき、サルマーンは［当初］ムアーウィヤの部隊の中にいた。アリーのところに行くと、アリーが言った。「サルマーンよ、ドルードの夜を覚えているか？」

［サルマーンは］言った。「はい。」

［アリーは］言った。「（p.256）ライオンを真っ二つにした騎兵は誰であったか？」

ンナーバはペルシア湾北部の町で現在のゴナーベ（Gunāva）のアラビア語旧名であり、カスカルはワースィト付近の地名、カルワーザーはバグダード近郊の町、アカルクーブは主に「アカルクーフ（‘Aqarqūf）」と呼ばれ、バグダード西方30キロメートルにあるバビロニア時代の遺構であり、イスラーム時代にもよく知られていた。ハンナーヤーは不明だが、モースル近郊にal-Ḥannāna という地名が見られる［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p.32, 39, 67 etc.; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol.2, p.310］。

444）本章の「ハドゥル」の項では、征服者はシャープールとなっている。

445）数が少ないので、各城砦に1000軒、もしくはhazār hazār（100万）など単位が間違っていよう。

446）現代小説『不思議の国』によると、イスファハーンの南のサミーラムとコムシェの山地にある泉の水で、イナゴ駆除に効果があるという［A.J. ハーンサーリー、サーデク・ヘダーヤト著『ペルシア民族史』岡田恵美子、奥西峻介訳注、平凡社、1999年、274–275頁］。

447）ムハンマドの教友の1人。イスファハーン近郊の地主の家に生まれた。はじめゾロアスター教を学ぶが、のちイスラームに改宗する。ムハンマドの死後はアリーを支持し、アリーによりマダーインの知事に任命された［「サルマーン」『岩波イスラーム辞典』］。ここではファールス出身者を示す「ファールスィー」という名前にちなんで逸話が挙げられているのだろう。

448）いくつかの地理書に見られる、カズヴィーン＝ハマダーン間の「ドルーズ（Durūḏ）」という地名が該当すると思われるが、サルマーンはファールス出身者とみなされているので、上述の場所では地理的に合致しない［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p.22; Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p.168］。

［サルマーンは］言った。「おそらくヒズルでしょう。」

［アリーは］「私だったのだよ」と言った。

［サルマーンは］「あなたの言っていることは真実だ」と言い、馬から下りてアリーの足に口づけし、彼に付き従うようになった。

知れ。世界を支配する者はみなファールスから現れた。サーサーン家はバフラームの子孫たちであり、4000年間王権は彼らの家系にあった。ファールスの海は、中国の境域で周海の一隅を占め、ヒンドにまで至る。ファールスの海を除き、船で海の中を突き進み、王国の境界から外に出られるところはない。ファールス地方の図はこのとおりである［図］。

「バフテガーンの海（Daryā-yi Baḫtigān）」はこの地方にある湖であり、長さは20ファルサングで、水は塩辛い。〔ジュール[449]の湖（Buḥayra-yi Jūr）〕もまたその地にあり、カーゼルーン（Kāzirūn）[450]に近く、その長さは10ファルサングである。

ファールスの境界はフーゼスターンやターロム（Tārum）[451]までであり、またスィーラーフからイスタフルまでである。

この地の古い町はジーロフト（Jīruft）[452]である。さまざまな果物の木がある。1本の木があり、「ジャム（jam）」と呼ばれている。それはクルミのようで、その実は「タマル・ジャム（ジャムのタマリンド）（tamar-jam）」と呼ばれている。いくつもの緑色の房があり、腹痛の薬となる。またイヌチシャとヘンナの木があり、（p. 257）100歩先まで匂いがする。ジーロフトは、マルズバーンの娘のシャーフヴァール（Šāhwār bt. Marzbān）が建てた。彼女は男奴隷の何人かと姦通し、その償いのためにそこに拝火殿を建てた。

「フィラスティーン（パレスチナ）（Filasṭīn）」はシャームにある大きくて古い町である。その町は、フィラスティーン・ブン・カスルーヒーム・ブン・サドゥキヤー（Filastīn b. Kaslūḫīm b. Ṣadqiyā）[453]が建設した。パレスチナのハラージュ税は50万ディーナールで、多くの町がある。そこにはオリーブがたくさんある。

「フスタート（Fusṭāṭ）」はミスル地方にある町で、ナイルの河岸にはそれより大きな町はない。そこには大トカゲ（saqanqūr）がいる。それは2本の手と2本の足のある魚である。［雄には］2つの雄性器があり、雌には2つの雌性器がある。そこからは「陸の真珠（durr-i barr）」であるカンラン石がもたらされる。また、ムカッタムの山はフスタートの近くにあり、その向かいにはイマーム・シャーフィイー――アッラーが彼に満足されますように――の墓がある。

449）ジュールはフィールーザーバードの古名。サーサーン朝のアルダシールによって円形の外壁や拝火殿が築かれた［*EI*²: Fīrūzābād］。

450）ザグロス山脈の南麓にあり、シーラーズの西方約120キロメートルに位置する町。サーサーン朝のフィールーズによって建設されたと言われる。近郊の都市シャープール（ビーシャープール）が衰退した後、10世紀終わり頃に繁栄し、麻や綿製品で有名であった［*EI*²: Kāzarūn］。

451）ケルマーン地方との境界に位置する町。シーラーズからダーラーブジェルド（現在のダーラーブ）を経由してスールーの港へと抜ける交易路上にあり、蜂蜜の名産地でもあった［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 292］。

452）ケルマーン地方南部の都市であり、ここでジーロフトの説明がなぜ出てくるのかは不明。

453）イブン・ファキーフやヤークートの表記に従う。テキストでは父親の名はḤLWSWRḤM。ヌーフ（ノア）やハムの子孫とされる［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 103; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 4, p. 274］。

「フェルガーナ（Farġāna）と〔ガーナ（Ġāna）〕」もまたマグリブの町である[454]。そこの特産品は金、銀、銅、石油、ラピスラズリ、フッタル産の馬である。フェルガーナでは、広い家を持っている者ほど多くの黄金を有する。［なぜなら］毎朝家を掃除し、その土埃を集めて熔かすと、家の広さに応じて金が採れるからである。

「フィランジュ（フランク）（Firanj）」は海岸にある地方で、長さと幅は700ミールである。その地の都（sarīr-gāh）は「マーリーヤ（Mārīya）」[455]という名の町である。そこには堅牢な砦がいくつかあり、サーバルース（Sābalūs）、ルースタ（Lūsta）、シャーミーヤ（Šāmīya）といった町がある[456]。一部［の町］にはムスリムが暮らし、一部には不信心者が暮らしている。ある場所では［イスラームの］礼拝の呼びかけが行われ、ある場所では［教会の］鐘が鳴らされる。

「ファッロハーン（Farruḫān）」[457]はレイにある大きな城砦であり、高楼の建物である。そこに［関する］ガタンマシュ・アル＝ザッビー（Ġaṭammaš al-Ḍabbī）[458]の詩集があった。かの地の驚異の1つは、毎日そこでは声が聞こえるが、何度聞いても探してみても誰も見つからなかった、というものである。次の対句[459]を読む［声が聞こえても］、誰の姿も（p.258）見えなかった。

レイにある呪われたジャウサク城において
その頂きで死を招く者は倦むことなく輝き続ける

［その城砦は］やがて荒廃した。

「ファラオの宮殿（Fir‘awūnīya）」はメンフィス（Manf）[460]にある城で、そこにはファラオのものであった玉座がある。メンフィスはミスルにあるファラオの町である。4本の川がその中を流れ、1ヶ所で合流する。これはハーマーン（Hāmān）[461]が造り、天上の人々と戦おうとしたファラオが拠った宮殿である。「［ファラオのいわく］**ハーマーンよ、わたしのために高い塔を建てなさい**」［Q40: 36］**と至高なるお方のお言葉**［にあるように］。この城には巨大な柱が何本もあり、それぞれの柱には銅の輪が1つ付いている。柱のうちの1本は錫でできており、その輪の下から水が流れ出している。［水は］柱の半ばまでくると穴の中に入る。水は止まることもなく、穴から溢れ出すこともなく、1滴も地面に落ちることはない。メンフィスには驚くべきことがいくつもある。

454）巻末訂正表では、ガーナの誤りだろうとしているが、内容を見ると中央アジアのフェルガーナとアフリカのガーナの両者が混同されているようである。

455）イスタフリーや『世界の諸境域』がアンダルス最大の都市とするメリダ（Mārida）か［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p.43; *Ḥudūd al-‘ālam*, p.182 （Minorsky comment, p.418）］。

456）これらの地名は写本によってバリエーションがあり、同定が困難である。イブン・ホルダードベの記述と突き合わせると、最初のサーバルースはスペインのサラモン（Sālmūn）、2番目のルースタはバレンシア（Bilansiya）が崩れたものかもしれない［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.80, 108］。

457）「レイのジャウサク（小砦）（Jawsaq）」とも呼ばれた。ブワイフ朝のファフル・アル＝ダウラ（在位977–997年）の名にちなむ［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.305; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp.215–216］。

458）al-Ġaṭammaš b. al-A‘war b. ‘Amrū al-Ḍabbī は、Šaqira b. Ka‘b b. Ṯa‘liba b. Ḍabba の一族に属す詩人とされる［al-Balāḏurī, *Futūḥ al-buldān*, Mu’assasat al-Ma‘ārif, Beirut, 1987, p.447; *Lisān al-‘arab*, vol.6, p.325］。

459）巻末の訂正表およびバラーズリーの記述に従い、アラビア語の一部を読み替えた。

460）イブン・ホルダードベやイブン・ファキーフが「ファラオの町」として触れている［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p.161; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.73］。

461）ハーマーンは『クルアーン』に登場するファラオの大宰相。旧約聖書の「エステル記」では、ペルシア王の宰相とされる。

＜カーフ（al-qāf）の項＞

「カズヴィーン（Qazwīn）」は古い町である。シャープールがそれを建設し、同じくアブハル（Abhar）[462] も建てた。バラー・ブン・アーズィブ――**アッラーが彼に満足されますように**――が［カズヴィーンを］征服した。彼は町の門の前に陣取り、人々がジズヤ（人頭税）を払うという条件で講和したが、カズヴィーンの住民は受け入れなかった。彼は命じて町を破壊させた。ようやく彼らはジズヤを受け入れた。バラー・ブン・アーズィブはそこを再び栄えさせた。カズヴィーンの人々［の気質に］は激しさや勇敢さがあり、危険と隣り合わせで［不信心者との］境界にいる。

＜逸話＞

ある日、ハールーン・アル＝ラシードがカズヴィーンにあるドームの上に登り、バーザールを眺めていると、ダイラム人のラッパ［の音］が響いた。人々は扉を閉め、武器を身につけた。［ハールーンは］町の人々に憐れみを覚え、彼らからハラージュ税を免除した。そして命じて集会モスクを建設し、いくつかの私有地をそこに寄進し、自身の名をそのモスクの扉に刻んだ。

カズヴィーンの賞賛すべき点は以下に尽きる。すなわち、［その町の人々は］邪教徒やダイラム人の前に立ちはだかり、彼らを叩きのめそうとしている。イスラームの民に恩恵を施しているが、(p. 259) それは彼ら（邪教徒）の害悪を他の人々から遠ざけているということである。このために「カズヴィーンは天国の門である」と言われている。ムスリムのいるすべての場所で、カズヴィーンの人々を助け、［不信心者との］境界にいる他のすべての人々とともに彼らに対して良き祈りを送るのはムスリムの義務である。カズヴィーンの住民は信心深く、美しく威厳があり、勇敢で熱意ある人々である。また、世界中でカズヴィーン出身者のいない町はないほどに数が多い。彼らの特産品は干しブドウや果物、良質の布地である。

「カーディスィーヤ（Qādisīya）」はクーファの境域にある場所で[463]、何本かの川が流れている。そこはカーディス・ブン・ハラート（Qādis b. Harāt）[464] に関連づけられている。また、イブラーヒーム――**彼に平安あれ**――がその地を通り過ぎ、草木や花々を目にし、町のために祈願して「**汝は神聖である**（qadasti）」と言った、と言われている。

「カルミースィーン（ケルマーンシャー）（Qarmīsīn）」は恵みに満ちた町で、ハマダーンの近くにある[465]。クバード・ブン・フィールーズが建設し、そこに何本もの柱で 1000 の庭園のある宮殿を建てた。だが彼がマダーインに滞在すると、風がそれをなぎ倒してしまった。アポロニウスがそこに派遣され、寒さや風やサソリや熱病を防ぐまじないをイーワーンにかけた。すると風は止み、サソリは少なくなった。

「［盗賊たちの］宮殿（Qaṣr）」はこの［同じ］境域にある町で、カンガヴァル（Kangawar）とも

462）イランのザンジャーンとカズヴィーンの中間に位置する都市。

463）サーサーン朝のヤズダゲルド軍とムスリム軍が戦った土地のことであろう。アラビア語の意味は「神聖なところ」［*EI*²: Ḳādisiyya］。

464）『諸都市辞典』に同名の人物が見える［Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 4, p. 291］。名前から判断すると、父親はヘラートの町にちなむ。

465）現在のイラン西部のケルマーンシャーのこと。サーサーン朝時代に建設された。多くの君主がここに滞在し、ブワイフ朝のアドゥド・アル＝ダウラはここに宮殿を築いた［*EI*²: Kirmānshāh］。

呼ばれる[466]。驚くべき建物で、石が積み上げられているが、それぞれの石の重さは計り知れない。これをどのようにして造ったのか、またどれほどの力で積み上げていったのかは創造主のみがご存じである。それを［自身の］目で見るほかはなかろう。

この町には泉があり、そこには耳（エラ）に輪をつけた黒い魚がいる。寿命が長く、これもまた驚異である。なぜなら、魚の耳に輪を取りつけようとしても魚は水の外ではじっとしておらず、また水の中では魚の耳に輪をつけることなどできないからである。

「コム（Qum）」は美しい町であり、「ザフラー（光の輝き）（zahrā）」とも呼ばれている[467]。そこではシーア派の者たちが多数を占めている。ルートの民の町々がひっくり返された日、ジブリールはコムに降り立ったと言われている。この町には不治の病に効果のある水場がある。イーサー――**彼に平安あれ**――はコムにあるその水で泥を（p. 260）捏ね、その泥で死者を生き返らせ、泥でつくった鳥が動き出すようにしたと言われている。また、イスハークの子羊[468]はそこから運ばれてきた。気候は穏やかで、大都市の様相を呈している。彼らはアリーとその家系への愛着において度が過ぎている。預言者の他の教友たちを罵ったりしなければ、誉むべき人々であっただろう。

「カイラワーン（Qayrawān）」はマグリブにある町で、それより大きな町は［マグリブには］ない。カイラワーンはハッサーン・ブン・ヌゥマーン・アル＝ガーティー（Ḥassān b. Nuʻmān al-Ġātī）[469]が征服した。彼はベルベルの軍に打ち負かされると、カイラワーンの町にやって来て、［ヒジュラ暦］84年（西暦703年）のラマダーン月に［そこに］集会モスクを建て、バルカの地方に居を定めた。その後、ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズは彼を罷免し、ムーサー・ブン・ヌサイルを彼の代わりに派遣した。［ムーサーは］タンジャや「最果てのスース」に聖戦に赴き、マグリブ地方やカイラワーンを平定して征服した。

「カイサーリーヤ（Qaysārīya）」と「キンナスリーン（Qinnasrīn）」はシャームにある2つの町で、イスラームの町である[470]。

「カマール（Qamār）」はヒンドの町で[471]、その特産品はカマール産の沈香、クジャク、竜涎香である。

466）ハマダーンとケルマーンシャーの間にある町。古代から交通の要所であった［*EI*²: Kinkiwar］。アナーヒーター（アルテミス）女神の神殿とされる遺跡が残る。おそらくその遺構を指す「盗賊たちの城（Qaṣr al-luṣūṣ）」については、本書の次の章にも言及がある。

467）イラン中央部に位置するコムは早くからシーア派の町として名高い。ここにはシーア派第8代イマーム・リダー（レザー）の妹であるファーティマ（ファーテメ）の墓廟があり、「ザフラー」はこのファーティマの称号である。

468）イブラーヒームの息子であるイスハーク（イサク）の身代わりとして犠牲とされた羊のことであろう。ただし、イスハークが身代わりとされたとするのは旧約聖書の教えであり、イスラームでは長男のイスマーイールが犠牲を命じられたとみなしている［「イスマーイール」『岩波イスラーム辞典』］。

469）イフリーキヤ征服において活躍したウマイヤ朝の将軍。*EI*では、彼のニスバは「ガッサーニー」とされており、カイラワーンのモスクを改修したが、ルームで699/700年に没しているので本文の年代と合わない。伝承が何通りかあるようなので、著者が誤った情報に基づいている可能性が高い［*EI*: Ḥassān b. al-Nuʻmān］。

470）カイサーリーヤはパレスチナの海岸部に位置する都市。640年にムスリムによって征服された［*EI*²: Kaysāriyya］。キンナスリーンについては、本訳注（4）、493頁、注64参照。校訂本の綴りはQNSWYであり、サーデギー本に従う。

471）校訂本ではQamīrとなっているが、その後に「カマール産の沈香」という表現も出てくるため、サーデギー本の表記に従った。カマール（カーマルーン）は、沈香の産地として知られる、インドのアッサム高原のカーマルーパ王国に由来する地名と推察される［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第2巻78、182–183頁］。ただし、本章後出のカーブルの説明では、カマールとカーマルーンは別の場所のように表記されている。

「カリータース（QRYṬAS）」は海岸にある町で、そこにはたくさんのサルがいる。サルはまったく狩りをしないが、姦通をする。水夫はこの町に来ると、サルと姦通する。サルは人間の子を宿し、忌まわしい子を産む。［水夫は］妊娠しているうちに［その子を］殺す[472]。

「カーリーカラー（エルズルム）（Qālīqalā）」は〔アルメニア〕の境域にある地方である[473]。そこでは寒さが厳しく、空気は荒れやすい。その地の特産品は、良質の剣、豊富な蜂蜜、テンの毛皮である。険しい山々や美味な水の川、すばらしい泉がいくつもあり、緑が生い茂っている。

「コンスタンティノープル（Qusṭanṭīnīya）」は大きな町であり、ルームの国都である。カァブ・アル＝アフバールは次のように言う[474]。聖なる家（イェルサレム）が荒廃したとき、コンスタンティノープルの人々は喜び、コンスタンティノープルを「誇るべきもの（mustakbirīya）」と（p. 261）呼んだ。［コンスタンティノープルもまた自ら］「**わが主の玉座が水の上にあったのなら、私は水の上の家である**」と言った。至高なるアッラーは、［コンスタンティノープルに］次のように警告した。「そこで雄鶏が鳴くことのないほど荒廃させ、キツネの棲み処としてやろうぞ。3つの火をそこに送ろう。1つは樹脂の、1つは石油の、1つは硫黄の火だ。その叫びが天の雲に届くほど、そこを荒れ地となしてやろう。そうなったときには12人の王がその財宝を持ち去り、〔捕虜たちに〕分配するであろう。」

知れ。コンスタンティノープルはあまりにも壮大な町なので、そこでは数々の驚異やまじないが生み出されていることもあり得よう。コンスタンティノープルでは蛇が這い回っているのを見ることは決してない[475]。この町の半分は水の中にあり、高い塔がいくつも空に伸びている。もう半分は陸地にある。366の門があり、金製の門が1つと銀製の門が1つ、その他は真鍮や鉄でできている。この町は常に錦で飾られており、ルーム［の人々］はこの町を誇りとしている。

「コンヤ（Qūnīya）」はルームの中にある町である。コンヤからコンスタンティノープルまでは7日行程であり、ムスリムたちが支配している。町の王は公正で、不正を働く者を追い払っている。この町には3つの砦があり、その周囲はすべて不信心者である。彼らは王にジズヤ税を支払っている。

「クッライス（Qullays）」はサヌアーにある城砦で、エチオピアの王アブラハが建設した。人間の頭のような木像[476]を作り、砦の内部に美しい色を施し、ドームの突端に金の被り物を載せた。そして人々に、カァバのようにそこに参詣するよう強要した。1人のアラブ人が出かけて行き、クッライスで悪事を働いた。アブラハは［報復に］カァバを破壊しようとやってきたが、石が彼ら

472）『インドの不思議』の中に、これとほぼ同じ内容の逸話がムハンマド・ブン・バービシャードという名の船乗りがカークラ（Qāqula）付近で実際に体験した出来事として記録されている［ブズルグ『インドの不思議』（藤本訳注）、47–49頁］。

473）本訳注（4）、513頁、注166参照。

474）以下は、イブン・ファキーフが記録している内容を簡略化したものである［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 146］。

475）この文意は不明。蛇が這わないほど都会化されているということか、あるいは魔術で蛇を遠ざけているということか。

476）校訂では jūy-hā（小川）となっているが、クッライスに「木像（ḫašab）」があったという『諸都市辞典』の記述から čūb-hā（棒木）と読む［Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 4, p. 395］。

に降りかかり、全員が死んでしまった。

「ガラス張りの宮殿（Qaṣr al-qawārīr）」は、スライマーンがビルキースのために建てたものである。［スライマーンは］彼女をサバーの地から連れてきた。彼女は聡明で賢い女であった。彼女を妬む者たちは次のように言った。「ビルキースはこれほどまでにあらゆる美を兼ね備えているのに、彼女の脛は毛むくじゃらだ。創造主は体毛の濃い女を好んではおられない。体毛の濃い男は好んでおられるが。」

スライマーンは彼女の足を見たいと思い、ガラスで宮殿を造った。それはビルキースに（p. 262）水だと思わせるためであった。ビルキースは中に入り、裾をたくし上げた。彼女の足があらわになった。「スライマーンは言った。『本当にこれはガラス張りの宮殿です』」［Q27: 44］。スライマーンには［噂が事実に］反していることが明らかとなった[477]。

世間では、ガラス張りの宮殿はディーヴがビルキースのために建てたものである、と言われている。スライマーンはビルキースを妻とした。

「宮殿の中の宮殿（Qaṣr al-quṣūr）」と「花嫁の宮殿（Qaṣr al-‘arūs）」は、ムタワッキル・アラー・アッラー（Mutawakkil ‘alā Allāh）[478] が建てたものである。彼はそれらに3000ディルハムを費やした。

また、「イブラーヒームの城（Jawšaq-i Ibrāhīmī）」や「ジャァファル［の宮殿］」があり、［他にも］「遠方（‘azīb）［の宮殿］」、「シャッダード［の宮殿］」、「美形の（ṣabīḥ）［の宮殿］」、「塩（malīḥ）［の宮殿］」[479]、「首輪の宮殿（Qaṣr al-qalāyid）」［がある］。

塔（burj）の中では、「ジャウサク城」、「王のファイド（Fayd-i malikī）」[480]、「石膏の宮殿（Qaṣr-i jaṣṣ）」[481]、「地下宮殿（maṭāmīr）」[482]、「アンムーリーヤ［の宮殿］」や「ハーカーン［の宮殿］」［がある］。

これらは純金10万ディーナールをかけて造られた珍奇である。ハールーン・アル＝ラシードはサーマッラーに「吉兆の宮殿（Qaṣr-i mubārak）」を建設した。だがこれらの宮殿は見捨てられ、土の下に埋もれてしまった。10万ディーナールもの純金がそれらに費やされたとも言われているが、結局［みな］死んでしまったのである。

＜カーフ（al-kāf）の項＞

「クーファ（al-Kūfa）」。クーファはクーファと名づけられた。なぜならカウファーン（kawfān）

477）話としては『クルアーン』27章22–44節に基づくが、本来は、ガラス張りの宮殿建設はスライマーンがビルキースをアッラーへ帰依させるために起こした奇跡であり、ビルキースの脛を見るためでは決してない。

478）第10代アッバース朝カリフ（在位847–861年）。第8代カリフ、ムゥタスィムとホラズム人女奴隷の間に生まれ、兄ワースィクの死後カリフとなり、官僚と軍人支配の打倒を目指して強権を振るった。しかし彼の強引な政策はテュルク系軍人の反感を招き、彼らと共謀した息子ムスタンスィルによって殺害される。彼の死後、アッバース朝カリフの権威は著しく低下し、領域内に混乱が広がった［*EI*²: al-Mutawakkil ‘alā Allāh］。

479）レイ＝ニーシャープール間にある「塩の宮殿（Qaṣr milḥ）」のことであろう［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 201］。

480）ファイドはクーファからメッカへの途上にあったとされる町の名であるが、塔や宮殿などについては知られていない［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, pp. 282–283］。

481）アッバース朝カリフのムゥタスィムがサーマッラーの近くに建設したとされる巨大な宮殿［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, pp. 356–357］。

482）イブン・ホルダードベが挙げているアンダルスの地名に同じものがあり、またイラクのハルワーン地方の村名としても挙がるが、maṭāmīr のもとの意味は「地下に掘られた場所」の複数形であり、あえて同定する必要はなかろう［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 107; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 148］。

とは円形のことだからである。クーファは大きな町である。クーファの周囲にはいくつもの庭園がある。ムギーラ・ブン・シュゥバ（Muġīra b. Šu‘ba）[483] は言う。「ヒーラの人々は次のように言っている。イスラーム以前、この地には火が灯っていた。［だが］近づくと、見えなくなった。ヒーラの王はホスロウにこのことを書き送った。［ホスロウは］『その土を私に送りなさい』と言った。［王が］ホスロウにその土を送ると、呪術師（kāhin）たちが［それを］見て言った。『この土で町が建設されるならば、［その町は］優越したアラブの手によって征服されるであろう』と。」

その後、ズィヤード［・ブン・アブー・スフヤーン］（Ziyād [b. Abū Sufyān]）[484] の時代に焼き煉瓦でクーファが建設された[485]。ウマル・ブン・アル＝ハッターブは、彼らの戦士の数に見合ったモスクをクーファに建設するよう命じた。6 万の男たちがいた。柱はアフワーズの町からもたらされた。サルマーンはクーファを見て、「これぞイスラームの天蓋である」と言った[486]。

クーファの人々には数多くの勝利があった[487]。［たとえば］ヒーラ、トゥスタル（シューシュタル）、アイン・アル＝タムル（‘Ayn al-Tamr）[488]、ドゥーマ、アンバールの征服である。ハーリド・ブン・アル＝ワリードとともにシャームで行ったものとしては、ナスィービーン[489]、フサイド（Ḥuṣayd）[490]、クラーキル、アラーク（Arāk）[491]、（p. 263）タドゥムル（パルミュラ）の征服がある。これらはすべて、誠実なるアブー・バクルのカリフ時代のことである。ウマル・ブン・アル＝ハッターブの時代には、アブー・ウバイダの橋［の戦い］の日[492] とミフラーン、カーディスィーヤ、マダーイン、ジャルーラー（Jalūlā）[493]［の征服があった］。

次のように言われている[494]。カタ―ダ（Qatāda）[495] はカタン・ブン・ハリーファ（Qaṭan b.

483）ムハンマドの教友でサキーフ族出身。サキーフ族のイスラーム改宗に貢献した。ウマルのカリフ期にバスラ総督、のちにクーファ総督となる。ウマイヤ朝成立後も、シーア派やハワーリジュ派の活動が激しかったクーファを統治し続けることに成功した。イブン・ファキーフが以下の彼の発言を記す［*EI*²: Mugẖīra b. Shu‘ba; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 162–163］。

484）ターイフ族の娼婦の息子として生まれ、父の名が分からないためズィヤード・ブン・アビーヒ（彼の父の息子ズィヤード）と呼ばれていた。バスラ総督ウトバ・ブン・ガズワーンやムギーラ・ブン・シュゥバらに仕えた後、ウマイヤ朝カリフ・ムアーウィヤの信頼を得て、バスラ総督やクーファ総督を歴任した。さらにムアーウィヤによって異母弟として認知され、ズィヤード・ブン・アブー・スフヤーンと名乗るようになった［*EI*²: al-Kūfa; Baṣra; 嶋田襄平『初期イスラーム国家の歴史』中央大学出版部、1996 年、380–382 頁］。

485）それまでクーファでは多くの建物は葦や日干し煉瓦で建てられていたが、ズィヤードの総督時代（670–673 年）に集会モスクや砦、上流階級の家屋が焼成煉瓦を使って改築された。またズィヤード着任当時、クーファのディーワーン登録者は 6 万人であり、軍営都市であるクーファは、実態はともかく理念としてはその成員すべてが軍人であった［*EI*²: al-Kūfa; 清水和裕『軍事奴隷・官僚・民衆――アッバース朝解体期のイラク社会』山川出版社、2005 年、163–164 頁］。

486）イブン・ファキーフは、この発言を「信徒の長」（おそらくはアリー）のものとして伝える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 166］。

487）以下の引用はイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 165］。

488）カルバラーの西約 130 キロメートルに位置する都市［*EI*²: ‘Ain al-Tamr］。

489）テキストでは NṢYḤ。イブン・ファキーフのテキストではムザッヤフ（al-Muḍayyaḥ）とされるが、バリアントが多い［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 165］。ここではシリア北部に位置するナスィービーンと考える。

490）シリアとクーファの間にある渓谷。ハスィード（Ḥaṣīd）とも呼ばれる。634 年にアラブ勢とサーサーン朝の戦闘が行われた［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, pp. 266–267］。

491）「アラーク」はイラン中央部にある町の名前なので、アラク（Arak）の誤りであろう。アラクはタドゥムル（パルミュラ）の近くに位置し、ハーリド・ブン・ワリードが征服したとされる［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 153］。

492）634 年にヒーラ近くのユーフラテス川にかかる橋においてイスラーム軍とサーサーン朝軍の間で生じた戦い。この戦いでアブー・ウバイダ（前注 260）は敗れ、殺害されたが、のちにバビロニア征服を記念する日として「橋の日」と呼ばれるようになった［*EI*²: Ḏjisr; *LN*: Jisr］。

493）637 年のヤズダゲルド敗走の際に征服されたイラクの町。バグダードからホラーサーンへ至る街道上に位置した。現在のキジル・リバート（Qizil Ribāṭ）に比定される［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 62］。

494）イブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 166］。

495）おそらく盲目の伝承者 Qatāda b. Di‘āma を指す。ベドウィン出身でありながらもバスラに暮らし、ハサン・バスリーやイブン・シーリーンの弟子であった。諸々の学識に長けていたという［*EI*²: Ḳatāda b. Di‘āma］

Ḫalīfa）[496] と［クーファとバスラについて］互いに自慢し合っていた。カタンは言った。「クーファへは70人ものバドルの戦いの参加者（badrī）が向かった。バスラに行ったのは、ウトバ・ブン・ガズワーンだけである。」

クーファの人々には、ユーフラテスの水、立派な生ナツメヤシなど多くのものがある。クーファは大地の心臓であり、マッカとマディーナの間の旗印である。この町からはイマーム・アブー・ハニーファが出ているので、彼らの栄誉はこの上ない。

「カーブル（Kābul）」はヒンドゥスターンにある町で、山の中にある。周囲を山が輪のように取り囲んでおり、その周囲は30ファルサングに及ぶ。許可証がなければ、誰も中に入ることはできない。狭い場所があり、そこには関所（dar）が1つあり、衛兵が任じられている。ミロバランの実はこの町にある。その周囲には、カーマルーン（Qāmarūn）[497]、サイムールーン（Ṣaymūrūn）[498]、カマールの町々（Qamāriyān）、マンドゥールキーン（MNDWRQYN）[499] といった町々がある。カーブルの特産品は白檀と樟脳である。サイムールにはトルコ石でできた偶像がある。

「クーラム（Kūlam）」はヒンドゥスターンにある町で[500]、チーク材、竹、サンダラック樹脂の産地である。チークは大きな木で、ヒンドの人々はその葉からシャツやズボンを作る。

「ケルマーン（Kirmān）」は大きく、祝福された地方である。その地の人々はおおむね信心深く、彼らの王は公正である。多くの町があり、大きなものはジーロフトやスィールジャーン（Sīrjān）[501] である。ケルマーンからスィースターンまでは130ファルサングであり、カルクーヤ（Karkūya）[502]、ハイスーム（Haysūm）[503]、ザランジュ、バーシュトルード（Bāšt-rūḏ）とカルニーン（al-Qarnīn）[504] がその地にある。また、激昂するロスタムの厩舎（marbaṭ）、ナールーン

496）カタンという名のハディース学者が何人かいるが特定できない。なお、イブン・ファキーフのテキストではこの人名はフィトル（Fiṭr）である［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 166］。

497）アッサム地方のカーマルーパ王国に由来する地名［『中国とインドの諸情報』（家島訳注）、第1巻78、182–183頁］。前出のカマール（Qamār）の注471も参照のこと。

498）『世界の諸境域』におけるṢMURと同じものであろう。ミノルスキーは、ムンバイのコラバ海岸近くに位置する港チャウル（Chaul）としており、『諸都市辞典』でもヒンドの町と伝えられる［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 66（Minorsky comment, pp. 244–245); Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 3, p. 440; *EI*²: Hind］。

499）『世界の諸境域』ではŪršifīnと呼ばれる場所があり、それは「島のように海に突き出た地方の町。空気が悪い。その海は湾の海（Baḥr al-aġbāb）と呼ばれる」とされる。註釈者のミノルスキーによると、本書のMNDWRQYNによく似た綴りの地名について、「サランディーブやカマールと対面している国で、M.ndūrfīnを支配するあらゆる王はal-Qaydayと呼ばれる」とマスウーディーが伝えているという。ミノルスキーはこれをインド南東のマァバル海岸（コロマンデル海岸）の港とする説に触れているが、地理的にはかなり離れている。なお、現在ではŪrīsīnはインド南東部のオリッサに比定されており、本書のMNDWRQYNは、むしろインド南部のラーマナータプラム県のマンダパム（Mandapam）と同定されているMandarībīnという名称が近いかもしれない［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 66（Minorsky comment, pp. 243–244); *EI*²: Hind］。

500）インドのケーララ州のクイロン（Quilon）のこと［*EI*²: Baḥr al-Hind］。

501）ケルマーン地方の中心都市の1つ。

502）ザランジュの北に位置し、巨大な拝火殿があった［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 341–342］。

503）校訂テキストではHYSTWMであり、イブン・ファキーフのテキストに従って読むが、他の地理書には見られない地名である［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 208］。

504）校訂テキストでは最後の2つの地名を併せて「双角の所有者のNASWR（NASWR-i Ḏū al-qarnayn）」となっているが、NASWRが意味を為さないので、イブン・ファキーフの記述に基づく。バーシュトルードはヘルマンド川の5大支流の1つであり、この川にも種々の表記がある［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 208; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 339; *LN*: Bāšt-rūd］。

(Nārūn) 山系[505]、カーフーン (Kāhūn)[506] やカルダガーン (Kardagān)[507] の町がある。ケルマーンの境界は、ファールスの海とホラーサーンの荒地、マクラーン、ターロムまでである。ケルマーンの特産品は、ウイキョウ、ナツメヤシ、ヒメウイキョウ、キビ、水袋 (rakwa)、革布 (naṭʿ)、(p. 264) 天幕、綿布である。

次のように言われている。ダーラー・ブン・ダーラーは世界を征服すると、妻と子を山岳地帯にある「真っ白な砦」に連れて行き、[彼らを] そこに残してイスカンダルとの戦いに赴いた[508]。彼はケルマーンで殺され、世界はイスカンダルの支配するところとなった。

「キーシュ (Kīš)」は海上の島にある町で、山の上にある[509]。広さは 4 ファルサングである。そこには耕作地もなければ植物もない。スィーラーフの町から食糧が運ばれ、[人々は] それによって生活している。[それでも] 彼らは故地を捨てない。

「カーシュガル (Kāšġar)」はトゥルキスターンの町であり、ムスリムが支配している。ホータンもまたその地にあるが、この時代は、不信心者が支配している。タングート (TNKWR)[510]、トゥンカト (Tunkat)[511]、タムガージュ (Ṭamġāj)[512]、バラーサーグーンも同様である。テュルクの地方にあり、山岳地帯である。1000 ファルサングにわたって、丸く山々がその周りを囲んでいる。木々が生い茂り、リスやテンがいる。藪があり、ハシバミが自生する。リスやテンはその樹上で暮らしている。猟師は弾を撃ち、1 匹ずつ下に落としていく。そうしてすべてを撃ち落とすので、1 匹たりともハシバミの木から逃れられない。ここを通り過ぎると、2 ヶ月で「クロテンの国 (Wilāyat-i samūr)」[513] に着く。

カーシュガルの町の中を 1 本の川が流れ、「タマンドの川 (Nahr-i Tamand)」と呼ばれている。この地方では、雪が降ったあとにテンを捕まえると言う者もいる。テンは餌を求めてやって来る。雪の中にもぐり込むが、黒い尾が出ている。猟師は出かけて行き、1 匹ずつ [尾を] 引っ張って捕まえる。

＜ラーム (al-lām) の項＞

「ライス (LYS)」は肩胛骨王シャープールが建てた町である。彼は前哨地を築いたが、それは見張りのためで、砂漠側の町の近くにある。[シャープールは] その周囲に運河を造った[514]。[そ

505) ナールーンはイラン＝パキスタン国境付近のザーヘダーンの南にある山麓の村名 [*LN*: Nārūn]。テキストでは QARWN のため、lā 写本に拠る。

506) カハン (Kahan) のことか。ゼレ湖に注ぎ込むファラフ川にかかるファラフ橋とジュヴァインの間に位置した [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 341; Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 4, p. 433]。

507) ファールス＝ルーダーン間に位置すると伝えられる [*Ḥudūd al-ʿālam*, p. 129]。

508) 本章の「ハマダーンの真っ白な (アブヤド) 砦」の項参照。

509) ペルシア湾のホルムズ海峡近くにある島。12 世紀にスィーラーフが荒廃した後、交易の中心地として栄えた。付近の海岸には真珠の養殖場があったとされる [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 257]。

510) TNKWR は『世界の諸境域』の TNKWY と同じものと考えられる。続く TNKT とともにタングートに比定される [*Ḥudūd al-ʿālam*, p. 60 (Minorsky comment, p. 228)]。前注 191 も参照のこと。

511) チャーチュ／シャーシュ (タシュケント) の東方にあったイーラーク地方の州都 [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 483]。

512) 初期の地理書類には見出せない。東トゥルキスターンの地域あるいは都市の名前とされる [*LN*: Ṭamġāj]。

513) ここでは「サムール」の訳語である「クロテン」と採るが、サムールはコーカサス地方からダルバンド近郊でカスピ海に注ぐ川の名称でもあり (本訳注 (4)、505 頁、注 128)、その流域を指している可能性もある。

514) イラクにある「シャープール運河 (Ḫandaq-i Šābūr)」を指す。これはサーサーン朝のシャープール 2 世によって掘削された運河で、ムスリムによる征服の時代にはまだ残存していた。起点はヒートで終点はウブッラである

れは］ヒートから砂漠の向こう側を通ってカーズィマ（Kāẓima）[515] に至る。また運河沿いに、ハジャルやヒート、アーナート（‘Ānāt）[516] に至るまで、いくつもの見張り塔を建設した。

（p. 265）「ラホール（Lahāwar）」はヒンドゥスターンの境域にある町である。他の町々とともにムスリムが支配している。ガズナまでは160ファルサングである。ラホールは壮大な町で、ヒンドゥスターンの枢軸である。9000もの村々がある。そのうちの1つは「カーブリスターン（Kābulistān）」と呼ばれる[517]。それぞれの村には王が1人ずついる。

ラホールでは、毎日1万頭の水牛が殺され、食される。また1万頭の象が食糧としてガズナに運ばれる。その地にはラクダがいない。ラホールの人々は抜け目がなく、体が白い。その特産品は、砂糖、藍、良質のターバンである。

＜ミーム（al-mīm）の項＞

「マッカ（メッカ）（Makka）」――**至高なるアッラーがそれを護られんことを**――は高貴なる町である。町の名は「バッカ（Bakka）」、「村々の母（Umm al-qurā）」、「ナッサーサ（Nassāsa）」、「ハーティマ（Ḥāṭima）」［とも呼ばれる］。ハーティマやバッカと呼ばれるのは、誰かが悪しき考えでそこに向かおうとすると、必ずや打ち砕かれるからである[518]。

この地には、ザムザムの泉とイブラーヒームの足跡石の間に、サーリフ、シュアイブ、フードの墓がある。天に最も近い大地の場所はマッカである。

預言者――**彼に平安あれ**――はマッカの出であり、マッカで生まれた。マッカの人々が彼を追い出したとき、彼は「ハルーラ（ḤRWRH）」と呼ばれる場所にたどり着き、マッカのほうを向いて、言った。「**至高なるアッラーにとっても、私にとっても、おまえ（マッカ）が最も愛すべき町であることを私はよく知っている。もしもおまえの民が私を追い出すことがなければ、私は出て行かなかっただろうに**」。

マッカは世界中のどの町よりも敬すべきであり、最も気高い。その地にはイブラーヒームの足跡石がある。イブラーヒーム――**彼に平安あれ**――は、ヌーフ――**彼に平安あれ**――に続く預言者の系譜上にある。マッカはどの王にも征服されず、何者にも税を支払うことがなかった。また、決してマギの教えを受け入れることもなかった。［マッカの人々は］婚資（ṣadāq）と証人たちによって婚姻を行い、「離縁だ（ṭalāq）」と3回言った[519]。彼らは宴席好きであり、能弁で、抜け目のない人々であり、干し魚（qubāb）とパンくず（ṯarīd）［を常食とする］民であった。［カァバがあるため］世界中の人々が彼らを訪ねるが、彼らのほうからは誰も訪ねることはない。彼らにはナツメヤシ酒（nabīd）があり、人が来ると飲むことを習慣としていた。マッカの特産品は、ザムザムの水、革布、ヤシの繊維（līf）、［解毒用の］蛇の脊椎石（bād-muhra）、オリーブ、（p. 266）サンダル、マッカ産の砂、［樟脳色の］白キジバト、血統の良いアラブ馬、マッカ産のダチョウ、アラブ犬、チーターである。あまりにも尊崇すべき場所であるため、［他の］町々から聖域（ハラム）にやっ

［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, p. 392; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 65］。

515）バフラインからバスラへの道中にある地名［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 151］。

516）ユーフラテス川沿いのシリア国境に近いイラクの町。‘Āna とも綴られ、現在名はアナ（‘Anah）。

517）アフガニスタンのカーブルのこと。

518）「ハーティマ」の語根 ḤTM は「壊す、砕く」、「バッカ」の語根 BKK は「押しつぶす、破る」という意味である。

519）イスラーム法においては、夫が3回「おまえを離縁した」と宣言すると離婚が成立する。ここでもまたそれと同じことではあるが、おそらくはこの慣習がメッカでは古くから行われていたことを示しているものと考えられる。

て来た人は誰しも石を持ち帰り、どこへ行ってもキブラをつくり、［マッカに向かって礼拝する］。

ハフス・ブン・アブドゥッラー（Ḥafṣ b. ‘Abd Allāh）[520] は次のように言っている。トゥッバゥがマッカを破壊しようと企てたところ、朝、彼の両目は、頬に落ちてしまっていた。彼は呪術師たちを呼んだ。彼らは、「もしや、マッカに対して悪しき考えを抱いたのではありませんか？」と言った。［トゥッバは］「そのとおりだ。だが私は悔い改めた」と言った。彼の目は元の場所に戻り、回復した。［それ以来、彼は］毎年カァバを錦で覆った。

カァバのすばらしさはモスクの章で言及される。

「マディーナ（メディナ）（al-Madīna）」。マディーナ――**至高なるアッラーがそれを護られんことを**――は、「貧しい地（Miskīna）」、「おとめ（‘Aḏrā）」、「回復させる地（Jābira）」、「誇り高き地（Jabbūra）」、「ヤスリブ（Yaṯrib）」、「〔愛される地（Muḥibba）〕」、「大食漢（Akkāla）」、「祝福された地（Mubāraka）」、「囲まれた地（Maḥfūfa）」、「打ち砕く地（Qāṣima）」、「聖なる地（Muqaddasa）」、「香り高き地（Ṭayyba）」、「栄光の地（Šānīya）」とも呼ばれる[521]。この町はヤスリブ・ブン・カーニー（Yaṯrib b. Qānī）[522] が建設した。創造主はこの町を「真実の入り口（madḫal-i ṣidq）」と呼んでおられる[523]。

［マディーナは］預言者――**彼に平安あれ**――の移住地であり、そこには彼の吉兆なる墓がある。イスラームはここから興り、信仰はこの地で確かなものとなった。世界中にある善はいずれもこの地から生じた。ダッジャール（偽マフディー）はイスファハーンの境域から現れ、マディーナの地にやって来て亡きものとなる。また、預言者の墓と彼のミンバルの間には「天国の園（Rawḍa-yi bihišt）」があり、そこには彼と、彼の妻や子供たちの墓がある。世界は、すべて剣によって征服されたが、マディーナは別である。イスラームはこの地から興隆した。

ワフブ・ブン・ムナッビフは次のように言っている。「ある書物の中で私は、預言者――**彼に平安あれ**――の移住先は『タバータバー（Ṭabāṭabā）』と呼ばれる、と読んだ。しばらくそう思っていたが、やがて私にはわかった。マディーナは『タイイバ・ターバ（Ṭayyba wa Ṭāba）』と呼ばれているのだ、と。」

ハムザ・ブン・アブドゥルムッタリブの墓はその地にある。知れ。ユダヤ教徒たちは、マディーナを［居住地に］選んだ。なぜなら、マディーナに預言者が現れるという記述が『トーラー』の中に見つかったからである。その後、彼らはハイバルに居住した。

（p. 267）＜逸話＞

ムーサー・ブン・ムハンマド（Mūsā b. Muḥammad）は次のように言う。「ムアーウィヤはマディーナに来ると、使徒――**彼に平安あれ**――のミンバルを取り外して、シャームに持っていこうとした。［だがミンバルを］動かすと、太陽は隠れ、世界は暗黒となり、強風が吹きつけた。彼は

520）伝承学者 Abū ‘Amr al-Sulamī（824/5 年没）のことであろう。ブハーリー、アブー・ダーウード、ナサーイー、イブン・マーッジャが彼からのハディースを伝えている［al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfī*, vol. 13, p. 101］。

521）メディナの別名は、イブン・ファキーフや『諸都市辞典』でも列挙されている。最後の「栄光の地（Šānīya）」は、「シャーフィーヤ（癒しの地）（Šāfīya）」の誤記か［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 23; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 83］。

522）『黄金の牧場』では、Yaṯrib b. Qātiya b. Mahlīl である［al-Mas‘ūdī, *Murūj al-ḏahab*, vol. 2, p. 280］。いずれにせよ、他の町同様、建設者の名前に町の名がちなんでいるケースである。

523）『クルアーン』17 章 80 節「主よ、わたしを正しい入り方（mudḫal ṣidq）で入らせ、また正しい出方で出させ」を踏まえた言い回し。

思いとどまった。ジャービル・ブン・アブドゥッラー（Jābir b. ‘Abd Allāh）[524] は、『災厄がムアーウィヤに降りかかるだろう』と言っていた。たちまち彼は顔面麻痺を起こし、マディーナから出て行った。」

マディーナからはいつも芳しい香りが漂っている。ファールスのシャープール（Sābūr）[525] の香りよりも良い。この芳しい香りはマディーナの本質のうちにあるので、ナツメヤシの種からでさえも良い香りがする。マディーナでかく汗はバラ水に匹敵する。マディーナでは決して疫病が起こらない。その地の人々は、他の場所［の人］の半分ほどしか食べない。その地からは、良い香りがするワサビノキの実（ḥabb al-bān）と「サイハーンのナツメヤシ（ḫurmā-yi Sayḥānī）」[526] がもたらされる。また、彼らの雄弁さにかなう者はいない。

「マグリブ（al-Maġrib）」。マグリブは広大な地域である。そこには、ブーリス、バルカ、カイラワーン、アンダルス、イフリーキヤといった多くの町がある。ムアーウィヤの時代にウクバ・ブン・ナーフィゥ（‘Uqba b. Nāfi‘）[527] がこれら［の地］を征服した。タンジャと「近接のスース（Sūs al-adnā）」[528] は、ハサン・ブン・アリー（al-Ḥasan b. ‘Alī）[529] の子孫の手中にある。

イドリース・ブン・イドリース・ブン・アブドゥッラー・ブン・アル＝ハサン・ブン・アル＝フサイン・ブン・アリー（Idrīs b. Idrīs b. ‘Abd Allāh b. al-Ḥasan b. al-Ḥusayn b. ‘Alī）[530] はマグリブに落ち延びた。アッバース家の手から逃れ、タンジャのリーラ（Līla）[531] の町に行き着いた。サーリフ・ブン・マンスール（Ṣāliḥ b. Manṣūr）の被護民であったワーズィフ（Wāḍiḥ）はその地で彼を匿った。ハールーン・アル＝ラシードの代になると、［ハールーンはワーズィフを］吊るした。

［逸話］

次のように言われている。［ハールーンは］医者のシャンマーフ（Šammāḫ）[532] をイドリースのもとに送り、イドリースを殺すよう命じた。［シャンマーフが］しばらくそこに留まっていると、

524）ムハンマドの教友（697年没）。アカバの誓いを行ったメディナのムスリムの1人。最初期の軍事遠征において活躍し、スィッフィーンの戦いではアリー側についた。ウマイヤ朝時代にはメディナに留まり、そこで没した。多くのハディースを伝える［*EI*²: Ḏjābir b. ‘Abd Allāh］。

525）イランのファールス州にあるビーシャープール（Bīšāpūr）のこと。サーサーン朝のシャープール1世によって建設され、ヴァレリアヌス帝とともに連行されたローマの捕虜たちが建設に携わったと言われている。ファールス地方にあるシャープール川上流の盆地に広がる地域およびその中心都市だったが、10世紀には既に荒廃し、多くの住民は近隣のカーゼルーンに移住していたという。近郊の川岸には戦勝記念壁画などサーサーン朝期の6点の壁画が残る。芳香については、『諸都市辞典』においても、町中に芳香が漂っていたという記述が見られる［*EIr*: Bīšāpūr; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 262; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 168］。

526）メディナにあるナツメヤシの名前。その木にサイハーン（またはスィヤーフ）という名の雄羊がくくり付けられていたことに由来する［*LN*: Ṣayḥānī］。

527）ウマイヤ朝の北アフリカ総督（683年没）。アムル・ブン・アル＝アースの甥。リビアからチュニジアの征服に従事し、チュニジアにカイラワーンを建設して北アフリカ征服の拠点とした［「ウクバ・ブン・ナーフィー」『新イスラム事典』］。

528）モロッコ北部の地域を指す。モロッコ南部を指す「最果てのスース」に対応した呼び名［*EI*²: al-Sūs al-Aḳṣā］。

529）アリー・ブン・アブー・アル＝フサイン・アル＝カルビーの息子。ファーティマ朝カリフ、カーイムとマンスールの対ハワーリジュ派戦において活躍した。彼の一族は、11世紀までシチリアを統治した［*EI*²: Kalbids］。

530）イドリース朝の創始者。彼の名には諸説ある。786年に生じたアリー派によるアッバース朝に対する反乱に参加したが敗れてエジプトに逃亡した。788年までには、ベルベル系のアウラバ部族の保護を得てワリーラ（Walīla）という町に拠点を置き、789年にアウラバ部族からバイアを得てイドリース朝を創始した［*EI*²: Idrīsī］。

531）おそらく前注にある「ワリーラ」の誤りであろう。

532）ハールーン・アル＝ラシードの命により、791年にイドリースを殺害したスライマーン・ブン・ジャリール・ジャザーリーを指すか［*EI*²: Idrīsī］。

イドリースの歯が痛みだした。この医者は毒を混ぜた薬をイドリースに与えた。薬が歯に効くやイドリースは死に、シャンマーフは逃亡した。ハールーンはミスル地方をシャンマーフに与えた。

今日、マグリブはウマイヤ家の手中にある。マグリブの人々は、彼に対して「**あなたに平安あれ、カリフの息子よ**」と言う。そして、カリフ位は彼にあり、両聖地も彼の支配下にあるべきだと考えている。

ベルベル人は、マグリブの境域の出（p. 268）である。かの地の国都はフィラスティーン（パレスチナ）である。彼らの王はジャールート（ゴリアテ）であったが、ダーウードが彼を殺害した[533]。ベルベル人はルービーヤ（リビア）や近接のスースの町へ流浪した。

タンジャや最果てのスースの向こう側に町があり、それは「カムーニーヤ（Qamūnīya）」[534] と呼ばれる。マグリブ全域は、ターリク・ブン・ズィヤードが征服した。カイラワーンの地は 2050 ミールに及ぶ。そこからは、男奴隷、ロバ、蘇合香（may‘a）がもたらされ、マグリブからは、サンゴ、金箔細工（muẕahhab）、エメラルド、サフラン、錫、鉄、バイケイソウ（kundus）［がもたらされる］。

［逸話］

アナス（Anas）[535] は、［ある日］ベルベル人の男奴隷を連れて預言者――**彼に平安あれ**――のもとに来た。［預言者は］言った。「もし 1 ディーナールにでもなるのなら、［ベルベル人の］奴隷を売りなさい。ベルベル人は、預言者を殺し、煮て、食べたのだから。」

マグリブの人々は気性が激しく、吝嗇である。そこには綿がなく、［人々は］羊毛（ṣūf wa pašm）を纏っている。

＜逸話＞

イスカンダルがその地に至ったとき、ある民が［マグリブの］向こう側から彼に宛てて手紙を書いてきた。「**恩恵と力の持ち主たるアッラーの名において。アッラーを必要とする貧しき者より、アッラーによって高められしイスカンダルへ。我々は困窮している。我々のもとに財貨などない。どうぞお引き取りを。**」

イスカンダルは 100 人の騎兵とともにその地に行った。マグリブと彼らの間には砂地があり、そこを目指す者は誰しも［砂に］沈んでいった。［砂地には］波が立ち起こっていたが、土曜日の夜には静まった。イスカンダルはその地で 1 つの町を見た。家々は整然と同じように立ち並び、家の扉の傍らには墓があった。［イスカンダルが］それについて尋ねると、人々は言った。「我々の目の前に［墓を］置き、死を忘れないようにするためだ。」

［イスカンダルは］尋ねた。「最も悪い人間とは誰か？」

彼らは言った。「現世の事柄のみを行い、来世の事柄をなおざりにする者だ。」

533）ジャールートがフィラスティーンにいたベルベル人の王であること、彼らがダーウードに敗れてマグリブに向かったことは、『黄金の牧場』にも記述がある。ここでのベルベル人は、旧約聖書のペリシテ人と同一視されているのであろう。ペリシテ人は紀元前 12 世紀から地中海東岸地域に居住していた民族であり、パレスチナという地名はペリシテ人に由来している［al-Mas‘ūdī, *Murūj al-ḏahab*, vol. 2, p. 245;「ペリシテ人」『新カトリック大辞典』］。

534）現在のチュニジアに位置するカイラワーン（ケルアン）を中心とする地域［*EI*²: al-Ḳayrawān］。

535）ムハンマドの教友、アナス・ブン・マーリク（709 年頃没）を指すと考えられる。アナスは 10 歳からムハンマドに仕え、数多くのハディースを伝えている［「アナス・イブン・マーリク」『岩波イスラーム辞典』］。

［イスカンダルは］尋ねた。「陸と海のどちらが古いのか？」
彼らは言った。「陸だ。」
［イスカンダルは］尋ねた。「昼と夜はどちらが古いのか？」
彼らは「夜だ」と答え、そして尋ねた[536]。「何が欲しいのか？」
［イスカンダルは］言った。「永遠の命だ。」
彼らは、「我々の手元にはない。だが我々は宝石を持っている。そなたにあげよう」と言うと、イスカンダルの手を取り、ルビーで満たされた小川に連れていった。彼らは言った。「こんなものはすべて我々のもとでは石ころにすぎない。」

マグリブの図は、一部この紙片に貼付されているとおりである［図］。

（p. 269）「マルヴ（Marw）」。マルヴは、タフムーラスが1000人の男手で建設した[537]。食事のためのバーザールを造り、毎夜、1人につき1ディルハムを与えた。［男たちは］それを食事に費やした。翌日には1000ディルハムが王の国庫に納められていた。［それゆえ］その［町の］建設には1000ディルハム以上はかからなかった。
さらに［タフムーラスは］マルヴに古砦（クハンディズ）を建設し、ヒンドゥスターンに町を建設した。［町の］名はアウク（AWQ）[538]といい、山頂にある。
アルダシール・ブン・イスファンディヤールの娘ハマーナー（Ḫamānā）がマルヴを建設した、とも言われている。

＜逸話＞
アブー・イスハーク・ターラカーニー（Abū Isḥāq Ṭālaqānī）は次のように言う[539]。「ある日、古砦から1本の柱が落ちてきた。それには人の頭を模した柱頭があった。その歯の1本を引き抜くと、2マン［もの重さが］あった。」

マルヴは400年かけて建設されたとも言われる。マルヴには「カイ・マルズバーン（辺境防衛者の王）（kay-marzbān）」という名の建物があった。4体の像の上に建てられ、2体は男で、2体は女である。内部には驚異的な図像が施されていたが、それが何であるかは誰にもわからなかった。一部の者たちが、「これは我々の王だ」と主張し、この建物を打ち壊した。［すると］飢饉が起こり、災厄が相次いだ。
マルヴの人々は吝嗇と結びつけられる。**寛大な者いわく、「マルヴの雄鶏は雌鳥から穀物を奪い取る」**。
知れ。マルヴの人々は清らかな信仰心をもち、礼拝を遵守し、信仰の民である。マルヴの町はホラーサーン地方において「イスラームの天蓋」と呼ばれる。バルマク家は最も寛大な人々であったが、マルヴの出身であった。この町の偉人は、アブドゥッラー・ブン・アル＝ムバーラク（‘Abd

536）後の文脈から、ここで問答の順序が入れ替わっていると解釈し、後半部分の主語と動詞の人称をすべて読み替える。
537）以下の話はイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 319］。
538）イブン・ファキーフの書でもAWQという表記があるが、同テキストではアフラク（AFRQ）が採られている［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 319］。いずれにせよ場所や名称は不明。
539）伝承者のターラカーニーついては不明だが、この発言はイブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 321］。

Allāh b. al-Mubārak）[540] をもってすれば十分であろう。そこには〔ヒンドゥスターン〕のように糸状虫病（‘illat-i rišta）がある。**アッラーよ、それより救いたまえ。**

「ミスル（エジプト）（Miṣr）」はアムル・ブン・アル＝アースが征服した場所の１つである。ミスラーイム・ブン・ハーム（Miṣrāyim b. Ḥām）[541] が建設した。**それは「泉の湧き出る安静な丘」**［Q23: 50］**である**。ミスルの地は 40 日行程分である。［ミスルは］『クルアーン』の中で数ヶ所言及されている。**お言葉――「わたし［ユースフ］をこの国の財庫（の管理者）に任命して下さい」**［Q12: 55］。**お言葉――「エジプト［ミスル］国土は、わたし［ファラオ］のものではないのですか」**［Q43: 51］。

ミスルの境域はシャジャル（Šajar）[542] からアスワーン（Aswān）[543] までで、幅はバルカからアイラまでである。ミスルはファラオたちの場所である。ギリシアでは（p. 270）ミスルを「マケドニア（Maqdūnīya）」と呼んでいる[544]。かの地では、ユースフ（ヨセフ）・ブン・ヤァクーブ、［イスラエル］諸部族、ムーサー、ハールーン（アロン）（Hārūn）[545] が生まれた。イーサーは、ミスルの領域内にあるアフナース（Ahnās）の山[546] で生まれた。ファラオの魔術師[547]、使徒――**彼に平安あれ**――の息子イブラーヒーム（Ibrāhīm）の母であるコプトのマルヤム（Māriya al-qibṭīya）[548]、イスマーイールの母であるハージャル（ハガル）（Hājar）[549] ――**彼ら２人に平安あれ**――はこの地の出身である。この地には「マルヤムのナツメヤシ」[550] がある。また、バッジャ（Bajja）という名のエメラルドの山があり、ムカッタム［の山］に連なっている。ミスルでは雨が降らない。もし降ると、それは飢饉の兆候である。種が地中で腐るからである。

そこにはカーヒル・ビッラー（Qāhir bi-Allāh）という王がおり、町を建設した。その町は「カーヒラ（カイロ）（Qāhira）」と呼ばれている[551]。ミスルには、いずれの方角にも涸れ川があり、水

540）8 世紀に活躍し、広く旅をしながらアブー・ハニーファらに学んだ、商人・ハディース学者、イブン・ムバーラクのことであろう。彼は 4000 人のシャイフから、2 万に及ぶ伝承を収集したと言われる。イラクのヒートで死去［*EI*²: Ibn al-Mubārak］。

541）イブン・ホルダードベらはより簡潔に Miṣr b. Ḥām b. Nūḥ とする。『諸都市辞典』には Miṣr b. Miṣrāyim b. Ḥam b. Nūḥ というバリエーションがある［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 80; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 56; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 193; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 137］。人名にちなんだ町の名である。

542）初期の地理書では、ミスルの地の始まりを「シャジャラタイン（2 本の木）（al-Šajaratayn）」だと伝える［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 83; Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 330］。

543）ナイル川上流の東岸に位置するエジプトの町。7 世紀のムスリムによる上エジプト征服後に軍営都市として造営され、フスタートに次ぐエジプト第 2 の軍事拠点となった［*EI*²: Uswān］。

544）イブン・ファキーフが同様の記述を行っている［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 57］。

545）『クルアーン』に登場する預言者の 1 人で、ムーサーの兄。旧約聖書のアロン。『クルアーン』では、ムーサーの補佐役として預言者に選ばれ、ムーサーよりも雄弁であるとされているため［Q28: 34］、補佐役を代表する人物とみなされる［「ハールーン」『岩波イスラーム辞典』］。

546）イブン・ハウカルが「マルヤムのナツメヤシ」（後出）があると伝えている場所［Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-’arḍ*, p. 150］。

547）『クルアーン』10 章 75–81 節に見られる、真理をもたらしたムーサーに対抗してファラオが呼びだした老練な魔術師を指す。

548）「コプトの乙女」とも呼ばれる。エジプトからの贈り物としてムハンマドのもとにもたらされた少女。ムハンマドは彼女をめとり、彼女はイブラーヒームという息子を生んだが、その息子は幼くして死去した［*EI*²: Ḳibṭ］。

549）旧約聖書のハガル。旧約聖書ではイブラーヒームの妻サーラーの女奴隷だが、『クルアーン』ではイブラーヒームの女奴隷とされている。アラブ人はイブラーヒームとハージャルの間に生まれたイスマーイールを祖と見なしており、ハージャルはアラブ人たちに敬愛されている［「ハガル」『岩波キリスト教辞典』;「ハージャル」『岩波イスラーム辞典』］。

550）『クルアーン』において、マルヤム（マリア）はナツメヤシの幹の下でイーサーを分娩したとされており［Q19: 23–27］、そのナツメヤシを指すのだろう。

551）カーヒル・ビッラーはアッバース朝第 9 代カリフ（在位 932–934 年）。一方、現在のカイロはファーティマ朝第 4 代カリフのムイッズ（在位 953–975 年）が 969 年にエジプトを征服した際に建設したものであり、カーヒルと

も植物もない。あらゆる場所にいる貴官（najīb）や案内人（dalīl）が王に報せをもたらす。［ミスルの境域は］一方はマグリブに、一方はシャームに、一方はヌビアに接している。ナイルの川があるのはミスルであり、バルサム香（balsān）の木がある［のもミスルである］。

知れ。地上のミスルは、天国の中の楽園[552]のようなものである。ナイルが増水すると、世界中の川は減水し、ナイルが減水すると世界中の川は増水する。かつてはナイルが増水すると、生娘を川に投げ込んでいた。ウマルの時代に、このことに関する書簡が届いた。ウマルは陶器に、「**おお、ナイルよ。もし汝が思うがままに流れるのであれば、我々は汝を必要としない。もし汝がアッラーの命によって流れるのであれば、流れ、流れ続けよ**」と刻んだ[553]。復活の日まで［ナイルの流れが］止まることはない。この町には多くのバーザール[554]がある。

知れ。今日まで、ミスルはイスマーイール派の者たち（Ismāʿīliyān）が支配しており、白い旗が掲げられていた。だがついに、援助者にして公正なる王、聖戦士サラーフ・アル＝ディーン（Ṣalāḥ al-Dīn）[555]の手によって征服された。

［サラーフ・アル＝ディーンは］彼らの指示がない限り、グズをミスルに入れさせないという約束を彼らと交わした。［しかし］彼らがサラーフ・アル＝ディーンに道を開けたので、［グズの］軍は彼とともに［ミスルに］入り、ミスルを占領した。［サラーフ・アル＝ディーンはミスルに］シフナ官[556]を置き、イスラームのしきたりを公にし、金貨には「**王権を求めるもの、アジャムとテュルクの征服者、ユースフ・ブン・アイユーブ**」と刻んだ。彼は善行と公正を行い、シフナ官を置き、［ミスルから］引き上げた。［すると］ミスルの人々はシフナを殺害した。［サラーフ・アル＝ディーンは］改めてシフナ官を派遣したが、彼もまた殺されてしまった。ついには24人のシフナ官が殺された。サラーフ・アル＝ディーンは戻ってミスルに入り、言った。「私は、卑しきを受け入れないあなた方の気高さを知っている。あなた方は何を望むのか？」

（p. 271）彼らは言った。「我々にはアリーの子孫であるカリフがいた。彼らがカリフ位になければ、我々は従いはしない。」

［サラーフ・アル＝ディーンは］言った。「あなた方のカリフに望ましい人を選びなさい。あなた方に3日間の猶予を与えよう。」

彼らは、それ以上に尊敬しうる者のいない40人の男たちを選び出して、言った。「この40人から誰か1人を選べ。」

［サラーフ・アル＝ディーンは］宴を用意し、40人それぞれに賜衣を与え、夜になると、「1人を選び出すのだ」と［言って］全員をもてなした。翌朝、40人全員を真っ二つにすると、体の半分を天幕の片側に、もう半分を別の側に置いた。そして軍に武具を装備させると、正午には、1万2000人の男がミスルで殺されていた。ミスルは［サラーフ・アル＝ディーンに］委ねられ、イス

は無関係である［「カイロ」『岩波イスラーム辞典』］。カイロのアラビア語読みの「カーヒラ」と、カーヒルという名の君主による、同名ゆえの混乱が生じたものと考えられる。

552）「天国」と「楽園」の関係については、本訳注（2）、409頁、注18参照。

553）同様の記述として、イブン・ファキーフ参照［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 65］。

554）lā写本に従い、bāzān（「タカ」の複数形）をbāzārと読む。

555）アイユーブ朝初代スルターン（在位1169–1193年）。ザンギー朝下のアレッポやダマスカスでの活動後、ファーティマ朝の宰相となって実権を握り、アイユーブ朝を創始した。対十字軍戦の英雄、エジプトでのスンナ派復興の立役者として知られる。ヨーロッパ世界では「サラディン」と呼ばれた［「サラーフッディーン」『岩波イスラーム辞典』］。

556）都市の治安維持のために任命される軍事行政官であり、警察長官とも訳される。セルジューク朝時代にイラクに配置されて以降一般的になった［*EI*²: Shiḥna］。

ラームの旗が掲げられた[557]。これがミスルの図である［図］。

「マーワラーンナフル（Mā warā' al-nahr）」は、イスラーム［の諸地域］において、それ以上恵み豊かな地方はないほどの地域である。バルフと境界を接し、ガズナ、タラーズ、ホラーサーンにまで至る。マーワラーンナフルの人々は（p. 272）勇敢かつ寛大で、善良である。その土地は祝福されている。たとえある地域で数回飢饉が生じても、そこでは1度しか起こらない。また生じたとしても、長引きはせず、貯えが十分にできるほどである。マーワラーンナフルには美味な［水の］川がいくつもある。鉄、金、銀、水銀、銅、塩化アンモン石の鉱床がある。そこからはチベット産の麝香が各地にもたらされる。マーワラーンナフルの人々は誰しも来客のための館を設けていた。

ヌーフ・ブン・アサド（Nūḥ b. Asad）[558] はムゥタスィムに手紙を書いた。「マーワラーンナフルには30万もの村があります。仮にそれぞれの村から騎兵と歩兵を1名ずつ徴用したとすると、60万人になります。そのすべてを殺したとしても、マーワラーンナフルには何の損害もないでしょう。」

創造主がすべてのイスラームの町々とともにそこをお守り下さいますように！

その図は次のページにあるとおりである［図］。

（p. 273）「マドヤン（Madyan）」はマグリブの海の岸辺にある町である[559]。ムーサーは怒ってミスルを去った[560]。彼はマドヤンに着くと、マドヤンの大門の傍で水場と、羊たちに水を与えている一団を見た。シュアイブの2人の娘が羊たちとともに立ち止まっていた。ムーサーは言った。「なぜあなたたちは羊に水をやらないのですか？」

彼女たちは言った。「男たちが帰るまで［私たちは自分の羊に水をあげることができません］。」

そこでムーサーはその羊たちに水を与えた。シュアイブの娘たちはムーサーに感謝した。シュアイブは娘の1人をムーサーに与えた。マドヤンは預言者たちの安住の地である。

「マフラ（Mahra）」はアラブの地にある領域である[561]。そこの城砦はシフル[562] と呼ばれている。彼らの言葉は誰にも理解できない。この地方には多くのジンがいる。

「マッスィーサ（Maṣṣīṣa）」はサイハーンの川のほとりに築かれた町である。その上に非常に驚異的なアーチ橋が架けられている[563]。この町で断食すると気が触れてしまう。あらゆる病気が空

557）この記述は、ザンギー朝（1127–1251年）のヌール・アル＝ディーン（在位1146–74年）没後に、十字軍の援助を求めてサラーフ・アル＝ディーンに対抗しようとした一派が制圧された出来事を背景にしていると考えられる。イブン・アスィールはこの出来事を1174年のことと伝えており、本書の執筆時期に最も近い事件であろう［Ibn al-Aṯīr, *al-Kāmil*, vol. 11, pp. 398–401］。

558）サーマーン朝（873–999年）の初代スルターン、ナスル1世のおじ（841/2年没）。819年にアッバース朝によってサマルカンドのアミールに任じられた。彼の死後、その地位は兄弟のアフマド、さらにその息子ナスルに引き継がれた［*EI*²: Sāmānids］

559）アラビア半島北西のアカバ湾の東岸から内陸に入った、ヒジャーズ＝シリア間の巡礼路の途上に位置する町［*EI*²: Madyan Shu'ayb］。

560）ムーサーが人を殺めてミスルを去り、マドヤンに来る以下の話は『クルアーン』28章15–28節に基づく。

561）マフラは、ハドラマウト＝オマーン間のインド洋沿いとその後背地に居住していた部族の名。マフリー（Mahrī）と呼ばれる独自の言語を持っていた［*EI*²: Mahra］。

562）巻末の訂正表に従う。シフルは第3部「オマーンの海」の項に既出［本訳注（4）、452頁、注53］。

563）マッスィーサとサイハーン川の対岸のカファルバイヤー（Kafarbayyā）は石橋で繋がれていたという［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 317］。マッスィーサについては、本訳注（3）、391頁、注37参照。

腹から生じ、満腹になると回復する。これがこの町の特性である。

「マグーン（Maġūn）」はケルマーンにある町である[564]。城砦の中で藍とヒメウイキョウが栽培されている。ワラーシュゲルド（Walāšjird）[565] 地方の境域にまで至る。その地からは良質のザラメがもたらされる。

「ムルターン（Mūltān）」はスィンド地方の町である[566]。それは「黄金の館のある黎明の地（Farj-i bayt al-ḏahab）」と呼ばれる。その町には1体の偶像があり、ヒンドの人々はそれを崇めている。彼らはヒンドの最果てからでさえムルターンへ巡礼し、そこに財をもたらす。偶像は「ムルターン」と呼ばれる。この偶像は宮殿の中にあり、男の姿をしており台座の上に置かれている。頭には金の王冠を戴き、2本の指を合わせ、4つに組んでいる[567]。ヒンドの人々がスィンドを征服しようとすると、スィンドの人々はいつも偶像を持ってきて、「像を壊すぞ！」と言う。［すると］ヒンドの人々は撤退する。

イスラームの民がムルターンを征服し、そこから多くの財宝を獲得したとき、［イスラームの地は］飢饉であったが、［ムルターンからの財宝で］イスラームの民の事態は改善した。［そのため］その地は「黄金の館のある黎明の地」と名づけられた[568]。

ムルターンの帝王はサーム・ブン・ルアイイ（Sām b. Lu’ayy）[569] の子孫のクライシュ族の者である。彼は象に乗って金曜礼拝に行く。

「マンスーラ（Manṣūra）」もまたスィンドの町の1つである[570]。大きな町である。ミフラーン（インダス川）の入り江が（p. 274）その周囲を巡る。その地はクライシュ族の子孫であるムスリムたちが支配している。暑さが厳しく、そこからは砂糖が産出する。彼らには1体の大きな偶像があり、「この像は天から来たのだ」と言っている。彼らはそれに惑わされて［不信心者となって］しまった。偶像の高さは20アラシュもある。ヒンドの人は自ら［の体］に油を塗り、その偶像の前で自らに火をつけ、燃えてしまう。これがスィンドの町々の図である［図］。

564）テキストではM‘WNとなっているが、位置や産物を考慮して読み替える。ムカッダスィーは、果樹園が多く、藍が採れると伝える［al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 467］。

565）マグーンの南西約32キロメートル、マヌージャーン（マヌーカーン）の北約80キロメートルに位置し、ジーロフトからホルムズに至る交易路上にあった町。城壁を備えていたとされる［al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 467; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 317, 321］。

566）インダス川の支流、チェナーブ河畔に位置する都市。711–714年に行われたムハンマド・ブン・アル＝カースィムのインド遠征によって征服された都市であり、後出のマンスーラと並んでムスリムの西インド支配の中心地となった。ムスリム征服時には、ムルターンには重要な寺院があり、ヒンドゥー教の巡礼の要地であった。ムスリムはこの寺院を破壊せず、そのかわりに寺院の収益の大部分を徴収した［*EI*²: Multān］。

567）イスタフリーはムルターンの叙述の中でこの偶像について詳しく言及しており、「［偶像は］4を数えるように手全体を握っている（wa qad qabaḍa kulla yadin li-hi ka-mā taḥsubu arba‘ata）」と表現している［al-Iṣṭaḫrī, *Masālik al-mamālik*, p. 174］。本テキストの “‘aqd-i čahār” はそれと同様のことを表していると解すが、具体的な形状は不明。

568）Farj（黎明）という語句については、イドリースィーがこれに言及しており、「farj は ṯaġr（異教徒との境）のことである」としている［Idrīsī, *Kitāb nuzhat al-muštāq fī iḫtirāq al-āfāq*, Ed. A. Bomaci et al., Istituto Universitario Orientale di Napoli, Leiden, 1970–84, vol. 2, p. 177］。

569）クライシュの子孫であるサーマ・ブン・ルアイイ・ブン・ガーリブ（Sāma b. Lu’ayy b. Ġālib）を指す。イブン・ルスタやマスウーディーも同様の情報を伝える［Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 135; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-ḏahab*, vol. 1, pp. 113, 119］。

570）アラブ支配下のスィンド地方における主要都市。アラビア語で「征服された（町）」の意。スィンドの征服者ムハンマドの息子アムル（もしくはウマル）によって738年もしくはそのすぐ後に建設された。パキスタンのハイダラーバードの北東にある［*EI*²: Manṣūra］。

「マフディーヤ（Mahdīya）」はマグリブの境域にある町で[571]、錫の柱でもって山上に築かれている。その［山の］下では、4000 隻もの船で人々が町の中に入ってくる。「船の先駆け（sābiq al-marākib）」と呼ばれる 1 羽の白い鳥がおり、船より先に現れ、2 種類の鳴き声をあげる。1 つは吉報であり、［町の］人々は［船の］人々が無事だと知る。もう 1 つの鳴き声をあげると、人々は船が沈んだことを知る。

「マフルバーン（Mahrubān）」はオマーンにある町である[572]。その地には 1 体の偶像がある。首には金の首輪をいくつもかけ、（p. 275）腕には多くの腕輪をはめている。首飾りは 80 個ある。1000 年ごとにその首に首輪が 1 つかけられる。その偶像はブラフマン（Barahman）[573] の時代から存在し、「8 万年もの間、その偶像はマフルバーンにある」と言われている。彼らはこういった［たわいもない］ことを主張している。彼らはこれに惑わされ、道を誤っている。

「モースル（Mawṣil）」は古い町である。ビーヴァラースプの息子〔ラーヴァンド〕（[Rāwand] b. Bīwarāsb）[574] が岩でもって建設した。60 の大きな塔を有し、各塔の間には 9 の小塔がある。各塔の向かいに宮殿があり、その傍には浴場がある。モースルの特性の 1 つは、その地に滞在する旅人は自身の体内に力がみなぎると感じることである。**まことにアッラーは最もよく知りたまう。**

＜ヌーン（al-nūn）の項＞

「ニハーヴァンド（Nihāwand）」はコヘスターンの町である。恵みに満ち、良質の果物がある。ブドウなどからシロップが得られ、各地にもたらされる。シロップはいずれも〔腐りやすい〕が、ニハーヴァンドのシロップは別で、黒胆汁（sawdā’）に効く。ここからまろやかな酢蜜が作られ、心臓に効果がある。というのも彼らのブドウは干しブドウ（kišmiš）の 1 種だからである。

ニハーヴァンドはクーファによって征服された場所の 1 つであり、ディーナヴァル（Dīnawar）[575] はバスラの征服地の 1 つである。**ニハーヴァンドはクーファの町**（Māh al-Kūfa）[576] **と呼ばれ、ディーナヴァルはバスラの町**（Māh al-Baṣra）**と呼ばれた**[577]。

ニハーヴァンドは古い町である。ヌーフ――**彼に平安あれ**――が建設したので、それは「ヌーハーヴァンド（ヌーフの玉座）（Nūḥ-āwand）」と呼ばれている。

571）モロッコのラバトの近郊にあり、大西洋岸のセブー（Sebou）川の河口に位置する。かつてはマァムーラ（Ma‘mūra）と呼ばれ、断崖の上にあったとされる［*EI*²: Mahdiyya］。

572）ペルシア湾の奥に位置するファールス地方の港町。オマーンにあるとの記述は何らかの誤解による。アラビア語の地理書類では「マフルーバーン（Mahrūbān）」と綴られることが多い。ムカッダスィーは大きな市場があったと伝える［al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 426; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 233］。

573）ブラフマンは中世ムスリム著作家の間ではヒンドゥー教との関わりで語られる。たとえばマスウーディーは、ヒンドゥー教徒はブラフマンという王の子孫であり、彼が賢者たちの補佐を得てヒンドゥー教や天文学、他の科学を打ち立てたと考えている［*EI*²: Barāhima］。

574）テキストでは ZAWYD だが、「モースルのラーワンド」という場所を建設したと伝えられる Rāwand b. Bīwarāsf の誤記と考える［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 128］。

575）中世期のジバール（コヘスターン）地方の最も重要な町の 1 つであり、ケルマーンシャーの北東に位置した［*EI*²: Dīnawar］。イブン・クタイバやアブー・ハニーファなどの学者を輩出している。

576）Māh の語義については諸説ある。一部の初期イスラーム時代の著作家は Māh を「町」や「首都」を意味するペルシア語と解し、10 世紀の歴史家バルアミーは「州」や「王国」を意味するパフラヴィー語としている。Māh の語が付され、所在がはっきりしている地名はいずれもメディア王国の地域に属するため、古代王国メディアを意味するという説もある［*EI*²: Dīnawar］。

577）実際は逆で、ニハーヴァンドがバスラのメディア（町）、ディーナヴァルがクーファのメディアと呼ばれた［*EI*²: Dīnawar; バラーズリー著「諸国征服史 16」花田宇秋訳『明治学院論叢』553、1995 年、117–118 頁］。

［ヒジュラ暦］11年（西暦632–33年）[578] に、［アラブ軍は］その地でアジャムに対して勝利した。フザイファ・ブン・アル＝ヤマーン（Ḥuḏayfa b. al-Yamān）[579] が町を包囲し、大規模な戦闘を行った。スィマーク・ブン・〔アブスィー〕（Simāk b. ‘YS）[580] が1人の男を捕らえた。男は武器を捨て、言った。「私をアミールの前に連れて行ってください。彼と講和を結びましょう。」

フザイファは言った。「名を何という？」

いわく、「マーフ・ディーナール（Māh Dīnār）です。」

フザイファはハラージュ税を条件に彼と講和を結んだ。ニハーヴァンドは［破壊されず］救われた。そこで［フザイファは］ニハーヴァンドを「ディーナールの町（Māh-i Dīnār）」と名づけた。

その地には殉教者や預言者――**彼に平安あれ**――の教友たちの墓がある。ニハーヴァンドの水は消化によい。その地からはポロのスティック（čawgān）[581]、ランプの油、（p. 276）砂糖菓子（nāṭif）、立派な果実、シロップがもたらされる。

「ニーシャープール（Naysābūr）」は「イーラーン・シャフル（Īrān-šahr）」と称される町である。そこには古砦（クハンディズ）が1つある。ホラーサーンにおいて、この町よりも偉大な町はなかった。トルコ石の山があるのもこの地であった。この町は［ヒジュラ暦］555年（西暦1160年）にグズの手によって荒廃した[582]。驚異的な集会モスクがあり、その中には銅製の水場が設けられ、400人もの人々がその周りにやってきては小沐浴を行っていたものであった。またドームの中には真鍮製のランプが1つ吊るされていた。［ランプには］400本の管があり、それぞれの管に1マンずつの油が注がれていた。グズはこれを破壊し、何頭ものラクダに乗せて持ち去ってしまった。

この町（ニーシャープール）や他の町々が荒廃した理由については次のようにも言われる。2人の下働き人が1個のマクワウリを巡って反目し、互いに殴り合った。そしてそれぞれがそれぞれのアミールのもとに庇護を求めた。双方のアミールの間にも相手に対する敵意が芽生え、1人はグズのもとへ行き、もう1人はスルターン・サンジャルのもとへ行った。両者は軍を率い［戦争となった］。このため一帯が荒廃したのである[583]。

今日、ニーシャープールは［荒れ果て］狼やジャッカルの棲み処である。

「ナスィーリーン（Nasīrīn）」はマグリブの町である。そこからは竜涎香がもたらされるが、それ

578）アラブ軍がサーサーン朝を撃退したニハーヴァンドの戦いは639年末から642年の間に起こったとされ、特に642年説が有力である。ここではヒジュラ暦21年（西暦642年）の誤りか［「ニハーワンドの戦い」『岩波イスラーム辞典』］。

579）ムハンマドの教友の1人（657年没）。ニハーヴァンドの戦いにおいて、司令官のヌゥマーン・ブン・ムカッリンが戦死した後にムスリム軍の指揮を執った。カリフ・ウマルによってマダーインに任じられ、そこで没した［*EI*²: Madā’in; *LN*: Ḥuḏayfa］。

580）バラーズリーによる同様の記述の中で、スィマーク・ブン・ウバイド・アル＝アブスィー（Simāk b. ‘Ubayd al-‘Absī）とあることに拠る［Barāḏrī, *Kitāb futūḥ al-buldān*, Ed. De Goeje, Leiden, 1968, p. 305（バラーズリー「諸国征服史16」（花田訳）、116頁）］。

581）アブー・ドゥラフはニハーヴァンドの記述の中で、「またそこにはポロのスティックの材料となる柳の木があり、その堅さ、立派さにおいて他の地には匹敵するものはない」としている［アブー・ドゥウフ『イラン旅行記』、28頁］。

582）セルジューク朝のスルターン・サンジャルは、1153年にグズに使節を送って貢納を求めたが、拒否された。そこでグズに親征したサンジャルは敗北し、逆に自らが捕虜となった。その後グズはホラーサーンの主要都市で略奪を行った［Bulliet, *The Patricians of Nishapur*, pp. 76–77］。ここでの記述はそのことを伝えており、著者が本書を執筆した12世紀最後の四半世紀の直前の出来事として同時代性が高い。

583）12世紀半ばのニーシャープールでは、ハナフィー派、シャーフィイー派それぞれに属する有力家系が党派を拡大させていた。12世紀半ば以降は両派の対立が深刻化し、互いのマドラサに焼き討ちをかけるといった事件が頻発していた。これがニーシャープール荒廃の主要な原因であったとされる［Bulliet, *The Patricians of Nishapur*, pp. 76–81］。

は水に［流れて］やって来る。また「錦の駄獣（dābba al-dībāj）」がもたらされるが、その毛は絹よりも良質で、それでもって布地が編まれる。その価格は［きわめて］高い。

「ナスィービーン（Naṣībīn）」は大きな町である[584]。高い山上に造られ、繁栄している。そこには猛毒のサソリがいる。

「ヌビア（Nūba）」は恵みに満ちた地方である。国都はドゥンクラで、7つの塁壁がある。ナイルの水源の向こう側にある地域で、エチオピアと境界を接する。そこにはサイやキリンがいる。それらについては動物の章で言及しよう。また水が黒檀の木を運んでくるが、誰もそれがどこに生えているのか知らない。ナイルの河岸では、すべてのウンマ（共同体）がイスラームの敵である。ヌビアとコプトは除くが、フランク、スラヴ、エチオピア［の人々］などはキリスト教徒である。ドゥンクラからはエメラルドがもたらされる。

（p. 277）「ナバティア（Nabaṭ）」は悪しき地方である[585]。その地の部族は忌わしい。**預言者――アッラーが彼に祝福と平安を授けられんことを――は、「ナバティア人は信仰の災厄であり、預言者たち――彼らに平安あれ――の殺害者である」と言った。**アウン・ブン・アブドゥッラー（‘Awn b. ‘Abd Allāh）[586]は、「もしイブリースが人間であったならば、ナバティア人であっただろう」と言う。

伝えられるところによると、シャイターンが1頭のブタを愛した。そしてブタと交わり、ブタを妊娠させた。［ブタは］雄の子を産んだ。子の名前は「マシュヌー（MŠNW）」といった。彼の一族が増えたとき、スライマーンは彼に言った。「おまえの子供たちはどこにいるのか？」

彼は言った。「ナバティアにいる。」

また彼らは暑さ寒さに最も耐え得る人々である。文責は伝え手にある。ナバティアの国の境界は、アンバールからアーナートやカスカルを経て、砂漠地帯に至る。「坑の住人（aṣḥāb al-aḫdūd）」は彼らの中から出た[587]。彼らの最初の帝王はセンナケリブ（Sinḥārīb）[588]であり、彼らの最後の帝王はブフトゥナッサルであった。ナバティアの支配期間は3000年であった。

「ヌーシラヴァーンの要塞（Ḥiṣn-i Nūširawān）」は巨大な要塞である。ベフベフード・ブン・アル＝カルダマーン（BHBHWD b. al-Qardamān）が築いた。

ヌーシラヴァーンはそこに入ると、嘆き、死を思い起こした。そして言った。「もし誰かこの宮殿の欠点を知っているならば、話してくれ。」

1人の貧者が言った。「この宮殿の欠点とは次のとおりです。まず［宮殿が］くぼ地にあり、遠くからは見えないことです。2つ目に、女たちの館が高台にあり、女が上位にあることを示してい

584）本訳注（4）、514頁、注175参照。

585）ナバティア人には、アラビア半島北部のアラブ系集団とメソポタミアに居住したアラム系集団の2種類があったが、本書での既出箇所同様、ここでも後者を指しているのだろう［本訳注（3）、388頁、注31］。

586）ハディース学者アウン・ブン・アブドゥッラー・ブン・ウトバ（728年没）のこと［al-Mas‘ūdī, *Murūj al-ḏahab*, vol. 4, p. 24］。

587）『クルアーン』85章4節で言及されている。不信仰によって、坑に投げ込まれて焼き殺された人々を指す。

588）新アッシリア王国の王でサルゴン2世の息子（在位前704–前681年）。前703–前701年にはシリア・パレスチナ地域の反乱を平定し、イェルサレムを攻略、前689年にはバビロンを征服し徹底的に破壊した［「センナケリブ」日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店、2004年］。

ます。さらに宮殿の中庭は広いのですが、人がおりません。諸王の宮殿とは人で溢れてこそ美しいものです。他にも欠点がありますが、［それは］言わないでおきましょう。」

ヌーシラヴァーンは言った。「私はこの宮殿にかけた諸費を国庫から捻出したわけではない。そうではなく槍先で集め、それを宮殿に費やしたのだ。」

貧者は言った。「結局のところ、ここに費やしたディルハム貨1枚1枚のために、あなたは年長者を1人ずつ殺したのです。ディルハム貨は替えがききますが、年長者たちはそうはいきません。これは何よりも悪い欠点です。」

ヌーシラヴァーンは言った。「［おまえの］この訓告から私は教訓を受け取った。」

［ヌーシラヴァーンは］別の賢人に尋ねた。「この宮殿について、おまえは何と言うか？」

［賢人は］言った。「すばらしいものですが、欠点があります。」

［ヌーシラヴァーンは］言った。「どんな欠点か？」

［賢人は］言った。「そこには裂け目が1つあります。」

［ヌーシラヴァーンは］言った。「裂け目など1つもないぞ。」

［賢人は］言った。「死という裂け目です。」

［ヌーシラヴァーンは］言った。「どんな裂け目でも閉じることはできるが、死という裂け目だけは別である。」

（p. 278）「ノウバハール（Nawbahār）」はバルフの町の中にあった[589]。それはバルマク家の人々が建てた。

ウマル・ブン・アル＝アズラク（‘Umar b. al-Azraq）[590] は次のように言う。バルマク家は偶像信仰の徒（‘abada al-awṯān）であった。彼らはカァバの名を、そしてその偉大さを耳にすると、カァバのような建物を建てた。そしてその周囲に偶像を置き、火を焚く寺院（bihār-afrūz）を造った。アジャム［の人々］はこの建物を大切にし、その上にドームを配し、ドームの頂に何本もの旗を立てた。高さは100アラシュあり、幅100アラシュで、円形の回廊が設けられていた。あるとき、風が絹布を吹き飛ばし、ティルミズの町に落とした。［その距離は］12ファルサングにもなる。この砦は［カァバを模して］「最も偉大なる門番（sādin al-akbar）」と呼ばれていた。ヒンドや中国の諸王やカーブル・シャー（Kābul-šāh）[591] がそこで跪拝し、そこに私有地を寄進していた。

やがて信徒の長ウスマーンの時代となり、［寺院の］管長職（sidāna）はハーリド・ブン・バルマク（Ḫālid b. Barmak）へと渡っていた。ハーリドはムスリムになり、アブドゥッラーと名づけられた。彼は二度と戻ることはなかったので、人々は彼の息子をバルマク（管長）[592] としたが、砦を息子から奪い取ってしまった。タルハーン（Ṭarḫān）の王[593] はハーリドに、自身の信仰に［再

589）ノウバハールは、サンスクリットの「Nava Bihāra（新しい僧院）」がその語源である。この単語はバルフのノウバハールに限られて使われたものではなく、当時有名であった仏教寺院に付けられていたもののようである。バルフのノウバハールについては、7世紀に玄奘三蔵が記録を残しているとされる［*EI*²: Barāmika］。

590）ケルマーン出身で、タバリーの著書においてアッバース朝カリフのハーディー（在位785–786年）、およびハールーン・アル＝ラシード時代の情報提供者として名が挙がる。逸話についてはイブン・ファキーフ参照［C.E. Bosworth, “Abū Ḥafs ‘Umar al-Kirmānī and the Rise of the Barmakids”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 57-2, 1994, pp. 268–282; Ibn al-Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 322–324］。

591）7世紀半ばにスィースターンまで進出したアラブ・ムスリム軍に対して激しく抵抗し、その後のアラブの北進を阻んだとされるテュルク系の支配者。ザーブリスターンでアラブ軍に抵抗していたイルテベル（Iltāber）王とは兄弟であったと考えられている［稲葉穣「七－八世紀ザーブリスターンの三人の王」『西南アジア研究』35、1991年、39–60頁］。

592）前出「バルフ」の項の注153を参照のこと。

593）イブン・ファキーフの書ではNāzik Ṭarḫānなどいくつかのバリアントが見られるが、いずれもヒンドゥークシュ

び］戻るよう申し送った。ハーリドは言った。「私はイスラームに進んで改宗したのだ。おまえたちの信仰は不完全だ。」

タルハーンはハーリドとの戦いに赴き、ハーリドを、彼の子孫ともども殺害した。唯一、カシュミールに逃れたバルマクは助かった。のちに［バルマクは］戻り、父の跡を継いだ。ノウバハールは彼に委ねられた。彼はチャガーニヤーンの娘をめとり、［娘は］ハサン（Ḥasan）を産んだ。ブハーラーの王がバルマクに与えた女奴隷は息子を産んだが、その名はカール・ブン・バルマク（Kāl b. Barmak）である。また娘を1人産み、その名はウンム・〔アル＝カースィム〕（Umm ［al-Qāsim］）であった[594]。やがてすべてをムスリムたちが征服した。

＜ハー（al-hā'）の項＞

「ハマダーン（Hamadān）」は祝福された区域である。コヘスターンの中心地であり、諸王の国都であり、多くの恵みがある。水は美味で、空気は清浄である。4ファルサング四方である。アルヴァンドの山からザイヌーアーバード（Zaynūābād）［村］のある場所まで両替商が列をなし、サンジャーバード（Sanjābād）からバリーシュカーン（Barīšqān）の村までは反物商が列をなしていた[595]。（p. 279）圧制者たちの不正によって荒廃した。やがてアルプ・アルスラーン（Ālb Arslān）王[596]の時代となり、現存している程度にまで要塞化された。

かつては「真っ白な［アブヤド］城砦」があった[597]。それはダーラー・ブン・ダーラーが築いたもので、8つの大門があり、大門の間には塔が設けられていた。城砦の中には別の砦があり、1万2000人の男がそこを警備していた。この砦の入り口には高楼のアーチがあり、「［キリスト教徒の］シリア人のイーワーン（Īwān-i sūrī）」と呼ばれていた。［アーチの］片方の柱は砦の入り口のところにあり、もう片方の柱はシリア人街区の小路のところにある。このアーチの大きさは1000アラシュで、アーチの高さは1500アラシュである。

＜逸話＞

次のように言われている。スライマーン――**彼に平安あれ**――がそこを通りかかったとき、このアーチの上に1羽のハゲタカがいるのを見た。ハゲタカは言った。「私がこのアーチの上にいて300年になる。私の父は1000年生き、祖父もまた同様であった。［それにもかかわらず］誰がそれを建てたのか知る者はいなかった。」

大きなアーチであったにちがいない。私はその柱の礎石部分を［実際に］見た。50年もの間、そこから四角い石が切り出され、運び去られた。それこそがこのアーチの建設者の志の高さを示

山脈南側で出土した貨幣に名前の見えるネーザク・シャー（Nēzak Šāh）のことである。「ネーザク」は7–8世紀頃に、南トハーリスターンの支配者が帯びていた称号であり、651年にマルヴでのヤズダゲルド3世の暗殺に関わった人物や、710年にクタイバ・ブン・ムスリムが捕らえたエフタルの支配者にその称号を確認できる［Ibn al-Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 423–424; *EIr*: Nēzak; 稲葉穣『南西アジアにおけるイスラーム伝播ルートと初伝伝説の基礎的研究』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）、3–5、31–33頁］。

594）これと同様の記述がイブン・ファキーフに見られる［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 322–324］。

595）ここに挙がる3つはすべてハマダーン近郊の村である［Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 5, p. 410; *EI*[2]: Hamadān］。

596）セルジューク朝第2代スルターン（在位1064–1072年）。マラーズギルドの戦いでビザンツ軍に大勝したほか、多くの対外遠征を行った［「アルプ・アルスラン」『岩波イスラーム辞典』］。

597）前出「アリフの項」の最後に挙がる。

していよう[598]。

また次のように言われている。この地方には雪がよく降り、この城砦の周辺では特に多かった。そこには高い木々があったが、城砦から見ると、木々の先が棒のように見えるほど雪が降り積もったという。やがて、アポロニウスが石のライオン像でまじないをかけた。今でもそれは「獅子門」の大門のところに置かれている[599]。

冬を除き、ハマダーンの周辺には常に王たちが居住した。私の父は100年生きたが、「夏に王がいないのは見たことがない」と言っていた。

［逸話］

たまたま、私が軍営地でイマーム・マジュド・アル＝ディーン・アブー・アル＝フュトゥーフ・アル＝ターイー（Imām Majd al-Dīn Abū al-Futūḥ al-Ṭā'ī）[600] とともにアミール・アッバース（Amīr ‘Abbās）[601] のもとに伺候していたとき、［アミール・アッバースが］「おお、イマームよ。私は地上でこのような地方を見たことがない」と言った。

［イマームは］言った。「アミールのお言葉はご慧眼ゆえでありましょう。［ですが］何についておっしゃったのですか？」

（p. 280）アミールは、「私には6000人の兵がおり、イスラームのスルターンには1万人の兵がいる。アブドゥッラフマーン・ブン・トガー・ヤラク（‘Abd al-Raḥmān b. Ṭuġā Yarak）[602] とピーシュキーン（Bīškīn）[603] やアミールたちには、それぞれ数千の兵士を数えることができよう。［つまりは］数千頭もの馬を連れたおよそ10万人もの兵がいるのだ」と言い、さらに続けて言った。「我々がここに滞在して6ヶ月になる。我々が降り立った日にパンの値段を尋ねると、1ダーングあたり8マンであった。今日も同様に〔1ダーング〕8マンである。我々が来ようが立ち去ろうがまったく影響がないのだ。」

知れ。最も美味な水とは、西から来て東へ流れ、北側［の地］が開けており、よく冷えている水

598）本書の著者はハマダーン出身か、本書執筆時にハマダーンに暮らしていたと考えられる。このアーチの話もまた、アルヴァンドの「ギャンジュ・ナーメ碑文」と並び、著者が実際に目撃したものの話である。著者の時代にはアーチの礎石部分しか残っていなかったが、何十年にもわたって石材が持ち出されて再利用されるほどに多くの建材を用いて造られた建築物だということをここでは伝えようとしている。

599）このライオン像（全長2.5メートル）はもともと対になっており、町の門に設置されていたが、10世紀にダイラムのズィヤール朝創設者Mardāvij（935年没）によって1体は破壊された。もう1体もさほど原型はとどめていないが、「石のライオン（Šīr-e sangī）」と呼ばれハマダーン市内の一角に現存する。

600）この人物の詳細は不明であるものの、イブン・アスィールは、1160–70年頃のハマダーンの長にMajd al-Dīn al-‘Alawīという人物がいたと伝えており、関連するかもしれない［Ibn al-Aṯīr, *al-Kāmil*, vol. 11, pp. 267, 381–382］。

601）セルジューク朝のスルターン・サンジャルによってレイの支配を委ねられていたジャウハル（ゴウハル）のマムルーク。のちにアッバース自身がレイの支配権を握った。1145/06年に、他の有力アミールと呼応してスルターン・マスウード（在位1134–1152年）に対して反乱を起こしたが、カーシャーン近郊の戦いで敗れた。その後、侍従（ハージブ）長代理としてバグダードの宮廷にいたが、1146/07年マスウードの命により暗殺された［C.E. Bosworth, “The Political and Dynastic History of the Iranian World (A.D. 1000–1217)”, *The Cambridge History of Iran: The Saljuq and Mongol Periods*, Ed. J. A. Boyle, Cambridge, 1968, vol. 5, pp. 131–132; *LN*: Amīr ‘Abbās］。

602）‘Abd al-Raḥmān Tuġan-Yürekのこと。トガン・ユレクはセルジューク朝のスルターン・マスウードの宮廷において侍従長を務めた。1145/06年のアミール・アッバースらによる反乱では、反乱軍寄りの立場であったと考えられる。1146年にアッラーンとアゼルバイジャンの支配権を授与され、マスウードの子マリク・シャーのアターベクとなって権勢を振るったが、1147年にマスウードの命でコーカサスのガンジャにおいて暗殺された［Bosworth, “The Political and Dynastic History”, pp. 126–132］。

603）モースルを支配したセルジューク朝のイッズ・アル＝ディーンのこと。同時代のニザーミーは詩の中で彼のことを称賛している。『諸都市辞典』では、アゼルバイジャン地方のウナールの町の支配者とされている［*LN*: Pīškīn; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 257］。

である。この区域（ハマダーン）ではそのような水が得られる。もしクーファやバスラで病人に「何が欲しいか？」と尋ねるなら、彼は「冷たい水をひと口」と答えるであろう。ハマダーンやコヘスターンの住民は、バスラの暑さ、バグダードのハエ、バターイフの蚊、クーファの蚤やハチ、ミスルの竜、アフワーズのサソリ、ホラーサーンの血液の炎症（ḫūn-i sūḫta）[604]、ヒジャーズの熱病、ザンジバルの疥癬、バフラインの脾炎、ハイバルの灼熱から守られている[605]。

私は歴史書で次のようなことを読んだ。ハマダーンとイスファハーンは双子である。イスファハーンの人々は助けあい、協力しあうが、イスファハーンの土地は困窮、飢饉、旱魃、窮乏に陥りやすい。一方ハマダーンの人々は意地悪で金払いが悪いが、ハマダーンの土地は豊かさや快適さや恩恵を備えている。要するに、いかなる場所にも称賛すべき部分と非難される部分があるのである。

［逸話］

ところでザヒール・アル＝ディーン・アブー・ナスル・カッシャーニー（Ẓahīr al-Dīn Abū Naṣr Kaššānī）――**彼にアッラーの慈悲あれ**――は卓越した学識者の１人であり、バグダードの出身であった。彼は70年間ハマダーンで教鞭をとった。彼のもとには１人の優れたナキーブ（naqīb）[606]がいた。［ザヒール・アル＝ディーンは］彼に毎日５マンのパンと１マンの肉と半ディーナールの金を与えていた。［しかし］何年も経った後、［ザヒール・アル＝ディーンは］彼を遠ざけるようになった。どれほど人々がとりなしても、彼は聞き入れなかった。ある日、すべてのイマームたちの中の１人が彼に尋ねた。「［ナキーブを］遠ざけた理由は何でしょう？」

［ザヒール・アル＝ディーンは］言った。「ある日、あの男が『ハマダーンの住民は似非信者（mušabbih）だ』と言っていた。その言葉で私は不快になった。なぜ私が、(p.281）キブラに向かって祈り、信仰告白の言葉を口にする20万人の男女について中傷し、彼らを不信心だと非難するような男を世話せねばならないのだ？」

知れ。良いことや悪いことはあらゆる場所に存在する。ハマダーンには、ファラオ以上に悪い男もいれば、その者の恩寵によって世界中の人々が安心して暮らせるような男もいる。［このようなことは言ってもきりがないので、］場所そのものについて話を進めよう。

ジャリール・ブン・アブドゥッラー・アル＝ナハイー（Jarīr b. ‘Abd allāh al-NḪ‘Y）[607]は、「第４天（太陽天）ではハマダーンは『護られた［地］（maḥfūẓa）』と呼ばれている」と言う。

他方、ある男がしばらくの間ヘラート（Harīw）に滞在し、糸状虫病や血液の炎症に罹ったり、

604）1208/09年に書かれた『世界の書（*Jahān-nāma*）』によると、ニーシャープールの町およびその周辺でよく見られる病気で、足の指や足が落ちる病気とされる［Muḥammad Najīb Bukrān, *Jahān-nāma*, Ed. M. A. Riyāḥī, Kitābḫāna-yi Ibn-i Sīnā, Tehran, 1342s., p. 77］。

605）これらの項目のいくつかは、イブン・ファキーフの記述と共通する［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.233］。

606）「ナキーブ」とは本来、部族あるいはその他の集団の長・指導者を指す言葉であるが、10–11世紀以降は主に「サイイドの長（naqīb al-ašrāf）」を指した。ナキーブは国家によって任じられ、その任務は管轄下のサイイドたちの血統の記録・統制、結婚を含めた社会生活の監督、サイイドが関わる係争での裁判権の行使、サイイドを受益者とするワクフの運営に関与することであったとされる［*EI*²: Naqīb; Naqīb al-ashrāf; 森本一夫「サイイドとシャリーフ――ムハンマドの一族とその血統」『世界歴史10　イスラーム世界の発展』岩波書店、1999年、305–307頁］。

607）ジャリール・ブン・アブドゥッラー・バジャリー（Jarīr b. ‘Abd Allāh al-Bajalī）の誤りか。ジャリールはムハンマドの晩年に改宗し、バジーラ族を率いて大遠征に参加した。イブン・ファキーフは彼がハマダーンの長官（wālī）であったと伝える［*EI*²: Baḏīra; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.280］

あるいはナスィービーンでサソリに噛まれたり、あるいはクーファでハチの被害にあったら、日中外に出ようとはしないであろう。そうして各地の間にある相違がどれほどのものか知るであろう。つまり、どんな場所であれ、あら探しをしてはならないのである。たとえ災厄を免れた場所があったとしても、死という災厄からは、いかなる場所も免れることはできないからである。

コヘスターンの境界は、サイマラ（Ṣaymara）[608]、シャープール・ハースト[609]、シャフラズール、アルディスターン（Ardistān）[610]、（p. 282）ハザルの海までである。この地方の図は次のページに描かれている［図］。**まことにアッラーは最もよく知りたまう。**

「ヘラート（Hirāt）」は古く美しい町であり、人々は信心深い。町から2ファルサングのところに山があり、そこには拝火教徒たちが「セレシュク（涙）（SRSK）」と呼んだ拝火殿がある[611]。そこには銀山があり、サラフスへの道からヘラートの境界まで［一帯に］銀の鉱床がある。また巨大な古砦（クハンディズ）もある。

ヘラートとマルヴはイスラームの軍営地である。ファールスの王たちの王国（サーサーン朝）はこの地で阻まれ、ヤズダゲルドはマルヴにある水車場で殺されてしまった。また、アッバース家の王朝（dawla）はその地から興った。ムアイト家のアブー・アル＝ナジュム（Abū al-Najm al-Muʻaytī）[612]の一族の館で衣服が黒く染められ、アッバース家の者たちは［その服を］着た。［それゆえ］彼らは「黒衣を身につけた者（musawwida）」と呼ばれた。彼らは、「カリフ位をマルワーン一族から奪うまで、私たちは黒衣を脱がない」と言った。彼らはカリフ位を得たが、［黒衣を着る］その慣習は今も変わらない。

ヘラートやマルヴには良質の果実がある。とりわけ干しブドウとマクワウリがよい。そこの人々は信仰心が篤く、意志が固い。

「ヒンド（al-Hind）」は大きな地域である。一方の境界は中国に接し、一方はスィンドに接している。そこには大きな町々がある。［たとえば］キーカーン（TYQAN）[613]、タッタ（Tatta）[614]、マクラーン、カンダハール（Qandahār）[615]、ダイブル（Daybul）[616]、QTALY、カンバリー

608）イランのロレスターン地方にあった都市で、アブー・ムーサー・アル＝アシュアリーが講和によって征服した。その後、872年には地震による大きな被害を受けたものの、アラブ人、ペルシア人、ロル人といったさまざまな集団が交流する地点として繁栄した［*EI*²: Ṣaymara］。

609）同じくロレスターン州の町。本訳注（4）、513頁、注167参照。

610）イスファハーンの北にある町。町の北東には、ヌーシラヴァーンに帰される遺跡がある。

611）この拝火殿はイスタフリーやイブン・ハウカルが触れている。ヘラートの北の山頂にあり、多くの拝火教徒がここを訪れていたという［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 265; Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-ʻarḍ*, p. 317］。

612）イスタフリーによると、アブー・アル＝ナジュムはアブー・ムアイトの被護民であった［al-Iṣṭaḫrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 260］。

613）キーカーンはKījともKīzともKīzkānānとも呼ばれ、バルーチスターン地方のナハング川の東側の地域を指す［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 125 （Minorsky comment, p. 373）］。もしくはビールーニーが“Kunkan”と記す、インドの西ガーツ山脈西麓のコンカン（Konkan）海岸の可能性もある［Abū Rayḥān Bīrūnī, *Kitāb fī taḥqīq mā li-l-Hind*, Majlis Dāʼirat al-Maʻārif al-ʻUṯmānīya, Hyderabad, 1958, p. 162］。

614）校訂本ではNBHあるいはTYHとなっているが、サーデギー本に従う。タッタはインダス川の河口近く、現在のカラチの東に位置する町である。

615）アフガニスタン南部の中心都市。あるいは、キャンベイ湾に注ぐダーダル川の河口近くに位置する港町（別名ガンダール）か［*Ḥudūd al-ʻālam*, p. 67 （Minorsky comment, p. 245）］。

616）インダス川の河口付近にあった港町。スィンド遠征を行ったムハンマド・ブン・カースィムが最初に征服した場所である［*EI*²: Daybul］。

(Qanbalī)[617]、ŠHBAH[618]、SAWNDY、マンダル(Mandal)[619]、スィンダーン(Sindān)[620]、カンバーヤ(Kanbāya)[621]、KYRḤ[といった町]がある。これらの町の向こう側は海である。船がそこを進むと、シャイターンのような雲が立ち込め、炎の舌を突き出し、船を水の中に引きずり込む。そして海が沸騰する。もし船が難を逃れて通り抜けると、中国の海に至る。[中国の海には]山々があり、間隔は狭く両側からせり出している[622]。中国の町の多くは、ハーンフー(広東)やBLĠMANのように、この海の岸辺に築かれている。王はそこに居住している。ヒンドと[ヒンドの]海の図は反対側のページに描かれているとおりである[図]。

(p. 283)知れ。ヒンドはアーダム――**彼に平安あれ**――の国都であり、彼は最初そこに降り立った。彼の恩寵により、彼らには聡明さや賢さ、長寿、薬草やその他多くのものがある。その地方では、彼らの王は「トゥルスール(ṬRSWL)」[623]と呼ばれている。多くの町がある。その向こう側にはマーンド(al-MāND)の国[624]があり、中国と接している。さらに先にはザーバジュの国がある。多くの島があり、シャラーヒトの島からはクベバの実(kibāba)[625]と竜涎香がもたらされ、ファンスールの島[626]からは樟脳と藍がもたらされる。またカラフ[627]、アランカバールース(ANKLYANWS)[628]、BLWRAN[629]の町からは竹がもたらされる。

ヒンド地方にはトラがいる。また、ヒンド産の家禽(dajāj al-hindī)[630]は1羽が30マン[もの重さ]がある。そこには、象、D'QL[631]、オウム、クジャクがおり、いろいろな薬草がある。

[逸話]

イスカンダルがこの地にやって来たとき、彼はヒンドの王フール(Fūr)[632]に、「服従せよ」と

617)『世界の諸境域』でイラン南東部のマクラーン地方の町の1つとして挙げられている[*Ḥudūd al-'ālam*, p. 124]。

618)ビールーニーの伝える、インドのカナウジュの南西に位置するSahanīyaのことか[Bīrūnī, *Kitāb taḥqīq mā li-l-Hind*, p. 161]。

619)沈香の産地として知られる。マンダル産沈香は最高品質とされ、多くのアラビア語地理書で紹介されている。マンダリーはサムンダルと並んでガンジス・デルタ付近に位置した沈香の積出港であったと考えられる[家島彦一『海域から見た歴史――インドと地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、2006年、511頁]。

620)『世界の諸境域』ではスィンダーンはカンバーヤなどと並列されており、ムスリムとヒンドゥー教徒が住んでいたとされる[*Ḥudūd al-'ālam*, p. 66]。

621)現在のキャンベイ(Cambay)の町を指す。グジャラート地方の最も重要な交易港で、キャンベイ湾の最奥部、マヒー・サーガル川の河口近くに位置する。

622)『中国とインドの諸情報』によれば、インドから中国に向かう途中にサンハイという海がある。そこには「シナの門」と呼ばれる、その間を船が通れるだけの狭路の開いている海の岩礁があるという。船がその門を通過すると、淡水に入って広東に到着する[『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第1巻40–42頁]。

623)『世界の諸境域』ではṬūsūlと表記され、中国に接する広大な地方とされる。註釈者のミノルスキーはこれをビルマにあったピュー族やモン族の王国に比定する説を紹介している[*Ḥudūd al-'ālam*, p. 65(Minorsky comment, p. 242)]。

624)『世界の諸境域』などに見られ、上述のṬūsūlと中国に隣接する[*Ḥudūd al-'ālam*, p. 66(Minorsky comment, pp. 242–243)]。

625)インドやスリランカ産の胡椒科の香辛料。Java pepperとも言われる。和名はヒッチョウカ(畢澄茄)。

626)本訳注(4)、「ファンスールの山」(525頁)の項および同注233を参照のこと。

627)本訳注(4)、「カラーフバールの海」(496頁)の項および同注81を参照のこと。

628)イブン・ホルダードベの地名表記に従う。この地名はバンカールース(Bankālūs)あるいはランジャバールース(Lanjabālūs)とも記され、ニコバル諸島を指すとされる[Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 66;『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第1巻29、99頁]。

629)『世界の諸境域』に見えるBLHARYと同じものか。ミノルスキーは、インド中央部を西に流れるナルマダ川流域のマーニャケータに都をおいたバッララーイ王と関連づけている[*Ḥudūd al-'ālam*, p. 67(Minorsky comment, p. 246)]。

630)巻末のミーノヴィー氏の註釈によると、カメレオンのこととされるが、ここでは直訳する。

631)前後と同じく動物名と考えられるが、不明。サーデギー本にはこの単語はない。

632)アレクサンドロスの東征時にインドにいた3人の王の1人で、カナウジュの王とされる。『王の書』では、この王とイスカンダルとのやりとりが詠われる。最後はイスカンダルに殺されるが、それはアジャムの王であった西方でのダーラーの殺害と対比される。この逸話は『王の書』がもとであろう[Firdawsī, *Šāh-nāma*, vol. 4, pp. 1613–1621]。

いう書簡を書き送った。［フールは］言った。「イスカンダルよ、ダーラーに勝利したからといって、他の者にも勝つと思うなかれ。もし宰相たちがダーラーを殺さなかったとしたら、はたしておまえは彼を殺すことができたであろうか。」

そうして両者は相まみえた。フールの軍は象とライオンであり、（p. 284）イスカンダルの軍は馬であった。馬たちは怯え怖がった。イスカンダルは退却し、命じて2万体の人形を鉄で作らせ、中身はすべて油と硫黄で満たして戦列に置いた。［イスカンダルは］中央に進み出た。「さあ、おまえと戦おうぞ。」

象が彼らに向かっていったが、象の鼻が燃え、総崩れとなった。イスカンダルは単身真ん中に進み出た。「私は、フールよ、おまえと戦おう。兵士たちの命は我々の首にかかっている。どちらかが殺された瞬間に、王国は相手のものになるのだ。」

フールは進み出たが、自軍から声が聞こえたために、うしろを振り返った。［その瞬間］イスカンダルは彼に傷を負わせ、彼を亡きものとした。そしてヒンドゥスターン地方を手に入れた。

知れ。ヒンドの地域は土壌がよく、美点に満ちている。あるイラクの学者がヒンドゥスターンにやって来て、諸々のすばらしいものを目にして言った。「創造主は良きものすべてをヒンドにお与えになった。［人々の］顔においては地獄の住人のようだが、国としては天国の住人のようである。」

ヒンドには盲も唖も老人も病人もいない。ヒンドの中心は「カナウジュ（Qanawuj）」と呼ばれる。ヒンドの端にはハーンフー（広東）がある。カラフは中国の門である。もう1つの境域はサランディーブである。ヒンドの長さは1万2000ファルサングである。そこには荒野があり、天国からもたらされた3粒の小麦をアーダムがその地に蒔いた。1粒は隅に、1粒は真ん中に、そしてもう1粒は自身のそばに［蒔いた］。毎年実りの時期になると、それぞれから700本の穂が伸び、それぞれの穂には700粒の実がつき、それぞれの実はクルミほどの大きさになる。ヒンドゥスターンの王は自らのためにそれらを徴収する。その1粒を病人に与えると回復する。

「ハラマーン（2つのピラミッド）（Haramān）」は、ミスルの境域にある2つの大きな城砦である[633]。砦の長さは400アラシュで幅も400アラシュであり、ガラスと〔蝋と〕大理石と錫で造られている。創造主によって与えられた知識に基づき、膠とツタを調合し、接着剤（ma‘jūn）を作った。10アラシュ四方の石を髪の毛1本さえ（p. 285）通らないほどの建築技術（handasa）で積み上げ、互いに溶接した結果、砦が一枚岩のようになっている。それぞれの石には医術や魔術による驚異が施されている。それは2つのドームだが、内部は［つながり］1つのようである。小さな扉があり、恐ろしい風が中から外に吹きつけ、誰も中に入らせない。内部は真っ暗である。

扉のそばには石でつくられた巨大な2羽の鷲の像があり、口を開けている。そこを通ろうとする者は鷲の口に石を1つ投げ入れる。石はどこにも出てこないが、［鷲の口が］一杯になることもなく、石がどこへ行くのか知る人もいない。そこには、「**2羽の鷲が巨蟹宮にあるときにハラマーンは建造された**」と書かれている。つまり［ペルシア語では］、ハラマーンは「落ちていく鷲（ヴェガ）」と「飛ぶ鷲（アルタイル）」が巨蟹宮にある時期に建設された、という意味である[634]。現在、それらは磨羯宮にあるので、この砦が造られてから2万年［が経つ］という計算になる。それは太

633）クフ王とカフラー王の2つを指すとされる。

634）同じ表現が本書の「天界の章」でなされている。本訳注（2）、419–420頁参照。

陽に焼かれることもなく、風に吹き飛ばされることもなく、大嵐で水没することもなく、雷で焼け落ちることもなく、暴風や砂嵐に耐えて残っている。

マームーンはそこへ行き、名を残すために、7万ディーナールを費やしてそれに穴を穿とうとしたが、かなわなかったと言われている。

また、アリストテレスは揺り紐（bāzinj）で吊りランプを作り、それにあかりを灯して［ハラマーンの］中に入った。彼は蟻などに至るまでの世界中の動物の姿を目にした。それらは天の［十二］宮の数に分けられ、それぞれの上昇宮がどの宮かが示されていた。イスカンダルは［それを］破壊しようとしたができなかったので、「これは石や鉄ではなく、何らかの［特別な］物質（jawharī）からできているのだ」と言った。その構造は、下が狭く、上に向けて徐々に広がっている。誰もその上に登ることはできない。

1人のならず者が鷲の口の中に入るという賭けをした。3日間進み、その後、石の間から頭を出して言葉を発したが、誰も理解できなかった。彼は姿を消してしまった。

ハラマーンでは石臼ほどの［大きさの］歯が石棺の中から見つかった。棺には、「これはハラマーンを建設した者たちの歯である」と書かれていた。また1本の柱には、「王権を主張する者は、できるものならこのハラマーンを破壊してみよ。破壊することは建造することよりもたやすい」と書かれている。

（p. 286）［ハラマーンの］中と外にはアーチがある。ディーヴが占有しており、そこに入る者はみな錯乱し、死んでしまう。

またこれは、ユースフ――**彼に平安あれ**――が飢饉の時代に穀物壺の［保管の］ために造った、とも言われている。彼は預言者たる力と帝王たる力でもって、あれほどの高さにまで石を積み上げ、ドームの上には石の屋根を2つ据えた。どちらも山のようであったが、その両方に穴があり、穴の上には何千マンもある石臼が［置かれた］。そうして［ユースフは］石の1つを下に落とし、石に「**私はこれを自らの王権と財で建造した。力があると主張する者よ、この石をもとの場所に引き揚げてみよ**」と刻んだ。人の力や能力では、石臼1つをその場所で持ち上げることさえできないのに、どうやって屋根［の上に］他の石を［運べようか］。ゆえにこれこそは、預言者たる力と奇跡の力をもつユースフ以外にはなし得ないことの証左となろう。

私はミスルの人々にハラマーンについて尋ねたことがある。彼らは言った。「それは石でできた2つの塔で、神がお創りになった。丸く、その高さは300アラシュあり、遠くの場所からでも見える。人間にそれを造ることなど不可能である。」

要するに、世界の驚異の1つはこれである。ハラマーンについてはこの程度のことを述べておこう。

＜ワーウ（al-wāw）の項＞

「ワースィト（Wāsiṭ）」はクーファとバスラの間にある町である[635]。ハッジャージュ・ブン・ユースフが10年かけて建設した。ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズはこの町を破壊しようとして、「ハッジャージュはクーファとバスラに損害を与えようとしていたのだから」と言った。［しかしワースィトは］その後も捨て置かれることはなく、人々は「一団の者がそこに住みついている」と言った。アブー・スフヤーン・アル＝ヒムヤリーは、「［ワースィトは］**凶兆の町である。こ**

635）クーファとバスラはイスラームの大征服時代に造られた軍営都市（ミスル）であり、ワースィトのアラビア語語根 WSṬ は「あいだに位置する」を意味する。

の町は凶兆の男が築いた」と言っている。

ハッジャージュは死に、ワースィトに埋葬された。彼の牢獄では、罪なくして投獄されていた男たちが3万3000人にのぼる。また12万人のムスリムが不当に殺された。［ハッジャージュは］ワースィトの地を力ずくで奪い、4万3000ディーナールをそこに費やした。100アラシュ四方もある宮殿を建設し、長さ300アラシュ、幅100アラシュの水場も造った。

［ハッジャージュが］犯した罪の1つは、アブドゥッラー・ブン・（p. 287）ズバイルを殺害し、吊るしたことである。また投石機で石弾をカァバに打ち込み、破損させてしまった。彼は、どの信徒の心にも友愛の情をとどめることはなかった。しかし彼は、ヒンドとスィンドを征服し、ホラーサーンとスィースターン［を征服した］。イスラーム［の地］で町を造った最初の人物であり、［その最初の町が］ワースィトである。また、「**言え、彼はアッラーである**」と刻まれたアハディー銀貨（diram-i aḥadī）は、彼が鋳造した[636]。兵士を誰の家にも［不当に］入らせることはなく、金の純度を減じさせることもなかった。1000もの食卓にパンを用意した。食卓ごとに10人［が座り］、1人ずつに焼いた肉片や魚や蜂蜜入りの器が朝と夜に［供された］。

「ワフト（Waḥṭ）」はターイフの地にある庭園である[637]。アムル・ブン・アル＝アースは、「100万個の木片の上にある庭園である。木片はそれぞれ1ディルハムで購入された」と言う。

スライマーン・ブン・アブドゥルマリク（Sulaymān b. ‘Abd al-Malik）[638]は巡礼に出かけ、ワフトを通った。彼は、「美しい庭園だ。もっともこの黒い山々がその真ん中になければの話だが」と言った。すると、人々は言った。「これは山ではなく、収穫したブドウを積んだものです。」

カスィー（Qasī）[639]は何とすばらしい者か、どのような巣でその喜びを確立させたことか。カスィーとはサキーフ［の民］である。すなわち、このような場所に落ち着くとは、サキーフは聡明だということである。

＜ヤー（al-yā’）の項＞

「ヤマーマ（Yamāma）」は、タスム（Ṭasm）［の民］とジャディース（Jadīs）［の民］の居地である[640]。また、アード［の民］の居地はアフカーフであり、アマーリーク（‘Amālīq）［の民］の居地はサヌアーである[641]。ヤマーマ［の名］は、ムッラの娘ヤマーマ（Yamāma bt. Murra）[642]に由来する。

ニムルード（ニムロド）（Nimrūd）[643]はヤマーマの出である。彼は、イブラーヒーム［の時代］

636）ハッジャージュは、「神は唯一にして永遠なり（Allāh aḥad Allāh al-ṣamad）」という語を初めて銀貨に入れたと伝えられている。「唯一（aḥad）」と刻まれていたために「アハディー貨」と呼ばれたのであろう［バラーズリー著「諸国征服史　完」花田宇秋訳『明治学院論叢』668、2001年、225頁］。

637）この項の記述は『諸都市辞典』参照［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 386］。

638）ウマイヤ朝第7代カリフ（在位715–717年）のことであろう。

639）カスィー（Qasī b. Munabbih）はサキーフ族の祖であるサキーフの兄弟とされる［*Lisān al-‘arab*: Qasī］。

640）ヤマーマはアラビア半島中央部に位置する高原地帯、ナジュド（Najd）を指す。また、タスム族とジャディース族はともに、最初にアラビア語を話すようになったとされるアラブの伝説上の部族である。両者がヤマーマに住むようになった経緯を語る伝説が残されている。なお、この項目はイブン・ファキーフの記述の抜粋であると考えられ、登場する人名もほぼ同じである［*EI*²: al-Yamāma; Ṭasm; Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 27–30］。

641）旧約聖書のアマレク人。アラブの伝説では、タスム族やジャディース族とともに、最初にアラビア語を話すようになった部族とされている［*EI*²: ‘Amālīḳ］。アードとアフカーフについては、本訳注（4）、506頁、注135参照。

642）イブン・ファキーフのテキストではṬasm bt. Murraである［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 27］。

643）聖書のニムロド。彼は、ムスリムの伝承ではイブラーヒームの少年期の物語に出てくる。タバリーは彼を、スライマーン・ブン・ダーウードや双角の所有者と並ぶ世界統治者として描く。イスラーム側の史料では、ニムルードは、唯一神を信仰するイブラーヒームを火に投じるが彼を害することができず、さらにイブラーヒームの

のファラオであった[644]。ユースフ［の時代］のファラオは、名をライヤーン・ブン・アル＝ワリード（Rayyān b. al-Walīd）といった。ムーサー［の時代］のファラオは、その名をアル＝ワリード・ブン・ムスアブ（al-Walīd b. Muṣ‘ab）といった。暴君ザッハークはアマーリーク［の民］の出であり、ムーサーとダーウード――**彼ら２人に平安あれ**――の間［の時代］にアジャムの王国に［君臨し］、ブルス（Burs）[645] の村に居住した。

ヤマーマには２つの川があり、北の水源に発し、南へと流れる。その地には山があり、「ダーム（Dām）」と呼ばれている。２つの陸と２つの海の間にある[646]。ヤマーマには、「ラクダ手綱の主（Ḏū al-nusū‘）」として知られる城がいくつかある。これは、ハーリス・ブン・ジャブラ（Ḥāriṯ b. JBLH）が建設したものである。ホスロウがサワードを略奪した後、ヌゥマーン・ブン・アル＝ムンズィルがヤマーマでそれを再建した。

ヤマーマの人々は（p. 288）女たちの美しさを誇りに思っている。ヤマーマの出身者は10万ディーナールの価値がある。また、ターサール（ṬASAR）[647] 産の小麦を誇っている。それは「ヤマーマの白（bayḍā’ al-Yamāma）」と呼ばれ、大量に売られる。天水の土地に生え、カリフたちに献上品としてもたらされる。ヤマーマのナツメヤシは非常に良質である。アゥシャー（A‘šā）[648]、ファラズダク（Farazdaq）[649]、アッジャージュ（‘Ajjāj）[650] はヤマーマの出身である。一方はバフラインに接し、もう一方はオマーンとハジャルに接している。ヤマーマは「ナジュド（高地）の肝（kabid-i Najd）」と呼ばれる。水は美味で、空気は心地よい。

「イエメン（al-Yaman）」。イエメンは祝福された地方であり、アラブの中心である。**預言者――アッラーが彼に祝福と平安を授けられんことを――は言った。「信仰はイエメンの人にあり、英知はイエメンの地にある」。また、上述のお方――彼に平安あれ――は、「まさしく私は、イエメンのほうから［吹く］慈悲あまねきお方（神）の風を見た」と言った。**

グムダーンとマーリブ（Ma’rib）[651] の城があるのはこの地である。イエメンの境域はクルズムからファールスまでである。ヌゥマーン・ブン・アル＝ムンズィルが、ホスロウに「あなたはアラブ部族の出身ではない」と言うと、［ホスロウは］「アラブには砂漠はあるが、町がない」と言った。すると［ヌゥマーンは］「我々にはイエメンの町々がある。世界中でこれに匹敵するものはない」と言った。

神を攻撃するがそれも果たせず、ついに１匹のハエによって死に追いやられる［*EI*²: Namrūd］。ニムルードのこの逸話は、次章の「逆転した地方と転覆され埋められた土地について」で述べられている。

644）イブン・ファキーフのテキストでは、イブラーヒームの時代のファラオは Sinān b. ‘Alawān とされている。これ以降も、両者のテキストで固有名詞には異同が多く見られる［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 27］。

645）現在はビルス（Birs）と呼ばれる。イラク南方のヒーラの南西に位置し、アラブの伝承ではニムルードの宮殿とされる遺跡がある［*EI*²: Birs］。

646）すなわち、アラビア半島とメソポタミアの陸地、およびペルシア湾と紅海（もしくは字義通り「バフライン」）を指すのだろう。なお「ダーム」という山の名は、イブン・ファキーフのテキストでは al-Rām である［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 28］。

647）この名称では見あたらないが、『諸都市辞典』の「バスラ」の項に「ターサーン（Ṭāsān）」という地名が見える［Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 430］。

648）多くのアラブ詩人がこの名で知られるが、おそらく「バクル（カイス）のアゥシャー」と呼ばれるマイムーン・ブン・カイスを指す（625年以降没）。リヤードの南のオアシスで生まれ、そこで没した。ヒーラで学び、また、シリア、南アラビア、アビシニアなどを訪れた［*EI*²: al-A‘shā］。

649）有名なアラブ詩人（728年あるいは730年没）。ヤマーマで生まれ、バスラで没した。ウマイヤ朝宮廷で重用され、賛詩と風刺詩で知られる［*EI*²: al-Farazdaḳ］。

650）タミーム族の詩人（715年没）。主にバスラに住んだ。ウマイヤ朝カリフなどへの賛詩が伝わっている［*EI*²: al-‘Adjdjādj］。

651）サバー王国の中心都市。多くの遺跡や碑文が残されており、「マーリブの堰」は特に有名である［*EI*²: Mārib］。

この地には、アンチモン、目薬（barūd）、真珠、ルビーがある。山からは、オニキス、メノウ、水晶が産出する。その地の植物はモクセイソウ（wars）である。

アル＝アスマイーは、「世界は4つのもので一杯になった。それら4つはすべてイエメンにある。［すなわち］モクセイソウ、インディゴ（ḫaṭar）、乳香、ツタである」と言う[652]。

イエメンは非常に暑い。その境界は300ファルサングにおよぶ。多くのサルがイエメンにはいるが、彼らには1匹の長がいる。またその地には、グール（鬼）（ġūl）と「ウダーラー（ʻudārā）」がいる。ウダーラーは、人間に近づき、体内に入ってしまうジンである。アブー・ウバイダは次のように言っている。「イエメンの人々には、3つのものがある[653]。キブラにあるイエメン産の柱、天空にあるイエメンのスハイル星（カノープス）、諸々の海の中にあるイエメンの海である。」

［逸話］

知れ。イエメンにある多くの城砦のなかに、マサーニゥ（Maṣāniʻ）の城砦がある[654]。難攻不落の地であり、その高さゆえに決して征服されることはなかった。やがてホスロウ・パルヴィーズの時代となり、マルヴァザーン（Marwazān）という名の人物がこのマサーニゥの周囲を巡ったが、どこにも抜け穴を見つけることができなかった。［城砦の］向かいには山があった。彼はその山頂に登り、マサーニゥを観察し、山頂からマサーニゥに跳ぼうと決意した。そして、アラビア産の馬に跨り、自身の軍を山に集めた。［マルヴァザーンは］言った。「私はマサーニゥに跳ぼうと思う。おまえたちは（p.289）私のこの馬に対して鬨の声をあげよ。」

マルヴァザーンは馬に轡をかませた。軍は馬に対して鬨の声をあげ、マルヴァザーンは馬を煽り、かかとで蹴り、そして馬に向かって咆えた。［馬は］マサーニゥに向かって跳んだ。［マルヴァザーンは］剣を抜き、見張りを襲い、彼を殺害して城門を開いた。彼の軍が中へ入り、そしてマサーニゥを征服した。

この報せがパルヴィーズのもとに届くと彼はたいそう驚き、マルヴァザーンに人を送り、「マサーニゥを代官に委ね、私のもとに来るように。私は彼に封土（iqṭāʻ）を授けよう」［と伝えさせた］。マルヴァザーンはマサーニゥを自身の代官に預け、ホスロウのもとへ向かったが、その道中に亡くなってしまった。ホスロウは悲しみ、彼を黄金の棺に入れた。そして彼の棺に「これは、私の時代に、某の山からマサーニゥに跳び移った男である」と記し、墓に埋葬した。

知れ。イエメン地方には多くの驚異がある。アラブ地方の図を見れば、イエメンがアラブの中心にあることがわかるだろう［図］。

（p.290）私は、そこに驚異や英知がある有名な町々の一部について述べてきた。次の章では、埋没した場所や逆転した場所に言及しよう。そうすればそこから教訓が得られるだろう。そしてまた、それらの末路を知るがよい。すなわち、人生の最期は「死」であり、繁栄したあらゆる土地の終焉は「荒廃」である。「**かれらは、如何に多くの園と泉を残したか。また（豊かな）穀物の畑と、**

652）イブン・ファキーフがこの発言を残す［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.36］。

653）本文では「4つ」となっているが、後ろの文章とのつながりを考え、サーデギー校訂本に従い「3つ」とする。なお、イブン・ファキーフは同様に「4つ」と記しており、この誤りが踏襲されたのかもしれない［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p.35］。

654）直訳すると「マサーニゥ」は「建造物（複数形）」となる。イブン・ホルダードベは、ズー・ハワール（Ḏū Ḥawāl）一族の城砦と伝え、またイムルー・カイスがこの城について詠んだ詩を紹介している［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, pp.142–143］。

幸福な住まいを」[Q44: 25–6] という一節を唱えよう。

読者諸氏は知るがよい。これらの地域や町を祖先が残すことはなかったのであるから、子孫もまた残すことはないだろう。ゆえに、現世における繁栄ではなく、来世における繁栄に努めるべきなのである。まことにアッラーこそは最もよく知りたまう。

[第4章] 逆転した地方と、転覆され埋められた土地について

[焼かれた庭園について]

至高なるアッラーのいわく、「アッラーは2人の男の比喩をあげられた。1人に対し、われは2つの園を与えた」[Q18: 32] [655]。

知れ。ザラワーンはイエメンの境域のサヌアーにあった庭園のことであり、世界中でそれについてのたとえ話が語られていた。至高なるアッラーのいわく、「そしてかれは、邪(な心)を抱いて、自分の園に入った」[Q18: 35]。この庭園は12ミール[の大きさが]あり、楽園のように果実で一杯であった。1人の貧者が[園の所有者の男に]食べ物を求めたが、彼は与えずに、言った。「私には、おまえに善行をなす義務などない。」

翌日、男が外に出て、庭園のほうに向かうと、火と煙が立ち上っているのが見えた。庭園を見ると、それは黒焦げになっていた。それを見たとき、彼は「手のひらを握りしめて悔しがり」[Q18: 42]、拳で拳をたたきつけ、「この庭園に何が起こったのか」と嘆き呻いた。

その火はそこで300年間燃え続けた。今もまだ、[園は]真っ黒なまま残っている。そこでは草木が1本も生えず、鳥は1羽もその地を飛ばない。鳥はこの近くに来ると、方向を変えてしまう。サヌアーからザラワーンまでは4ファルサングである。

この園の主は、サフワーン(Ṣafwān)という名であった。[その後]彼は喜捨(zakāt)を施すようになったので、彼の庭園は美しくなった。(p. 291)サフワーンが死ぬと、彼の息子は喜捨を拒絶した。その結果、この楽園は地獄のようになってしまった。

イエメンには「ドゥーラーン(Dūlān)」と呼ばれていた村があった[656]。そこにはブドウがたくさんあったが、創造主のお怒りが達したときにひっくり返ってしまった。それは「転覆された土地(mu'tafika)」と呼ばれている[657]。そこには峻嶮な山がある。その山頂には、原初の時代の人々によってつくられた偶像がある。だが誰もそこにたどり着くことはできない。

「ハゲワシの谷(Wādī al-nasr)」と「オオワシの谷(Wādī al-'uqāb)」はイエメンにある。ハゲワシの谷からはサヌアーに蜂蜜がもたらされていた。「スィルワーフ(Ṣirwāḥ)」[658] と呼ばれる町[に

655)『クルアーン』18章(洞窟章)の原文は、「かれらのために2人の者の比喩を上げなさい。1人に対し、われは2つのブドウの園を与え、ナツメヤシの木でそれらを囲み、両園の間に畑地を設けた」である。この話は、ブドウ園を与えられた男が高慢となって自分を優位にみなし、土地を与えてくれたアッラーに感謝せず、友人の諫めにも耳を貸さなかったところ、結局はブドウ園が全滅し、荒廃に帰した、というたとえ話となっている[Q18: 32–44]。本書以下では、この庭園の名が「ザラワーン」として語られている。

656)『諸都市辞典』ではアラブのウムラーン族の土地とされているが、具体的な場所は不明である[Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 2, p. 486]。

657)『クルアーン』では「転覆された諸都市(mu'tafika)」という表現で、ソドムやゴモラのことが示唆されている[Q53: 53;「ソドム」『岩波イスラーム辞典』]。

658) テキストではDRWAḤだが、イエメンのマーリブのそばにあるスィルワーフの宮殿と考える。スライマーンあ

あったが、今では］荒廃している。オオワシの谷は、水がその地中に沈みこんでしまった。まさに、「**あるいは園内の水が深く沈む**」［Q18: 41］と言われているとおりである。神の怒りがこの地に達し、干上がってしまったのである。

「悪臭の谷（Wādī al-muntina）」はシャーム地方にある。そこには洞窟があり、その中には石を削って造られた家々がある。そこには死者たちの骨がある。それぞれの家は20アラシュほどである。その中では人が鼻を手でふさぐほどの悪臭が生じている。この死者たちは、「陰惨な日（Yawm al-ẓulla）」[659] の懲罰を下され、これらの洞窟に逃げ込んだ人々である。彼らはそこで火の熱に焙られ腐乱した。いまだにその腐臭が残っている。

「暗黒の地方（al-Diyār al-muẓlima）」はイエメンの境域にある。ファラオの地方であった。双角の所有者（イスカンダル）はハドラマウトに至り、暗く真っ黒な40ミールの大きさの町を見た。そこにはいくつもの像があり、黄金と宝石の扉があった。王たちは玉座に座し、頭に冠を載せていた。侍従たちが立ち並び、肩には柱を担いでいた。すべてが真っ黒な石になっており、闇が彼らの頭上に立ち込めていた。双角の所有者は中に入った。彼は白い宝石を持っていた。それが光を与え、彼は［闇の中を］歩き回った。その中にはいくつものバーザールがあった。職人も女や子供もみな石になっており、彼らの頭上にも闇が立ち込めていた。それが何なのかは誰も知らない。ある者は「太陽が彼らから隠れているのだ」と言い、ある者は「大量の蒸気が地面から立ちのぼり、（p. 292）そこに堆積しているのだ」と言う。

［双角の所有者は］大きな石版を見つけた。そこには次のように書かれていた。「我らはサムード一門の末裔であった。我らにはすばらしい愉悦があった。創造主は我らにハンザラ（Ḥanẓala）[660] を使徒として遣わされたが、我らは彼を殺してしまった。［創造主はその報いとして］我らをこのような状態になされたのである。」

双角の所有者は大いに泣き、外へ出た。町の門には、「**この町を建てた最初の者は、ジャワーブ・ブン・ワーディゥ・ブン・シャディード・ブン・アード（Jawāb b. Wādi‘ b. Šadīd b. ‘Ād）である**」と書かれていた。なんと多くの王がこの町々を統治したことか。［だが］みな石になってしまった。**至高なるアッラーのいわく、「そのあるものはなお存在するが、あるものは消滅した」**［Q11: 100］。［すなわちペルシア語では］あるものは現存しているが、あるものは崩れ落ちてしまった。あるものは眠りについているが、あるものは［そこに人々が］暮らしている。

「焼かれた双庭園（al-Jannatayn al-muḥtaraqatayn）」。双庭園（al-Jannatayn）はサバーの町の2つの庭園であった[661]。1つは町の右側に、もう1つは左側にあった。夏と冬に実がなり、そこには蛇もサソリも蚊もいなかった。人が盆を頭の上に載せて［庭園の］木々の間に分け入ると、手を伸ばさなくとも、盆は果実で一杯になった。創造主は彼らのもとに1人の使徒を遣わした。「感謝を捧

るいはビルキースが建設したという伝説があった［Ibn Faqīh, *Muḫtaṣar kitāb al-buldān*, p. 34; Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 144］。

659）預言者シュアイブを嘘つき呼ばわりしたために、その民には「陰惨な日」にアッラーの懲罰（「それは本当に厳しい懲罰の日であった」［Q26: 189］）が下された［Q26: 177–189］。

660）ハンザラは、ラッスの民に使徒として送られた人物とされる［Q25: 40］。ラッスの民は、彼を殺したために神の怒りを買い、滅ぼされた［*EI*²: Ḥanẓala b. Ṣafwān］。『クルアーン』においてサムードの民やアードの民とともに登場するため、この部分では同一の集団のように扱われているのであろう。

661）類似した逸話をイブン・ルスタが記す［Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, pp. 114–115］。

げ、貧しい人々の取り分をわかち与えよ。」

彼らは言った。「[この庭園は] 私たちに遺産として伝えられたものだ。」

創造主は洪水を起こし、彼らの庭園を根こそぎにした。かつてはそこからチューリップやハナズオウの香りが漂ってきていたが、現在では土埃とタールの匂いが立ちのぼっている。そこに行った誰もが笑ったものだが、今では涙を流す。サバーの人々はそれを見ると、嘆き悔い改めた。創造主は当時の預言者に啓示を下した。「われは [彼らの] 改悛を受け入れよう。だが彼らは二度とこのような [恵まれた] 地区を目にすることはない」と。**至高なるアッラーのいわく、「われはかの2つの園を、苦い実を結ぶ園に変えた」**[Q34: 16]。

彼らはみな放浪の身となった。それら [の果実をつける木々] のかわりに、イバラやギョリュウの木が生えた。かの地の鳥はフクロウやミミズクである。人がその地に行くと、恐怖のあまり泣きだしてしまう。

「タールの砦 (Qal'a al-qaṭrān)」はマグリブにある大きな町である。スライマーン――**彼に平安あれ**――は、この世の驚異について風に尋ねた。[風は] 彼に「タールの砦」のことを知らせた。アーダムの子シース (セツ) (Šīṯ b. Ādam) ――**彼ら2人に平安あれ**――が (p. 293) 大きな石と、泥のかわりにタールを使って建設した。そこにはカンラン石でできた偶像がある。スライマーンは「フィンティス (FQṬS)」[662] という名のディーヴを呼んで命じた。「その砦を持ち上げて運んでこい。」

ディーヴのフィンティスは、肩の上にそれを乗せて運んでくると、スライマーンの前に置いた。スライマーンはその黒い町、[すなわち] タールで造られた町の中にいる民を見て、言った。「おお、民よ。おまえたちのこの町はなぜ黒いのか？」

彼らは言った。「私たちは水がとても多い地域にいるため、どんな建物も保ちません。ですが、タールは水に耐性があります。腐敗しないようにと、シースは [タールで] この町を造ったのです。」

スライマーンは言った。「おまえたちは今どこにいるのか？」

彼らは言った。「タールの砦に。」

[スライマーンは] 言った。「しかし、おまえたちは連れてこられたのじゃ。ここからおまえたちの国までは2年もの道のりがあるぞ。」

彼らには、片目で片足の王がいた。[王は] 言った。「おお、スライマーンよ。もし私の片目、片足を治してくれるならば、あなたを信じよう。」

スライマーン――**彼に平安あれ**――は祈り、[王の目と足は] 治った。王はスライマーンに帰依した。スライマーンは命じ、そのディーヴは再び町をマグリブへと戻した。

＜ひっくり返った地方について＞

逆転した地方 (al-Diyār al-maqlūba) は、ルート (ロト) (Lūṭ) の民の町々であった。7つの大きな町であった。彼らは男色に耽り、女には手を出さず、少年を求めた。彼らはルートに背いた。創造主はジブリールを遣わした。彼は7つの町を掴み、地の底から天まで持ち上げた。天使たちは彼らの雄鶏が鳴く声や犬たちの叫び声を耳にしたが、[町の人々の] 誰1人として目を覚ますことはなかった。ジブリールは言った。「神よ、ひっくり返してしまいましょうか？」

662) finṭīs には、「鼻腔の大きな鼻と照り上がった頭」「生まれが卑しい男」といった意味があるので、それに近づけて読む [*LN*: Finṭīs]。

［神は］言った。「まだ夜明け前だ。［夜明け前は］慈悲の時である。夜が明けるまでそのままにしておけ。」

夜が明けると、彼は［それを］ひっくり返した。「**われはその（町を）上を下にして転覆した**」［Q15: 74］。地の底から火が噴き出し、彼らに石が降り注いだ。**至高なるそのお方のお言葉**［にあるように］「**不義を行う者の上にも降りかかるのである**」［Q11: 83］。

「地獄の谷（Wādī-yi jahannam）」はバルフのサマンガーン（Samangān-i Balḫ）[663] にある埋められた谷である。［そこには］恐れを知らず、不正をなし、嘲り笑っていた人々がいたが、［その地は］一度に沈んでしまった。石を（p. 294）その陥没地に投じても、誰もその果てを見ることはない。この陥没地には、奇妙な鳥たちが無数の巣を作っている。これらの鳥がどこから飛んできたのかは誰も知らない。

同様のものに、イエメンにある「ザーウラーンの谷（Wādī-yi Zāwulān）」がある。地震がそこを反転させた。その［谷の］端に山がある。その頂には1体の偶像があり、指で天を指している。この偶像のへそから水が流れ出している。いつも流れているが、山の中腹まで来ると干上がる。この場所は、人が住むことを決して受け入れない。

「灰の谷（Wādī al-ramād）」はバルキーヤ（Barqīya）の山[664] にある、灰で一杯になった地方である。黒い土が7ファルサングにわたっている。その近くに、ニムルードのものであった投石機が埋もれている。彼は火を放ち、イブラーヒームを投石機に据え、火の中に投じた。創造主はその火を［イブラーヒームのために］冷たくした。ニムルードは数日後、ハーマーンとともに柱のところにやって来た。火の中をのぞくと、イブラーヒームが草地に座り、彼の頭上にジブリールが立っているのが見えた。ニムルードは言った。「私はわずか1人を火に投じたが、今は2人いるのが見えるぞ。」

ハーマーンは火を崇拝していた。彼は言った。「イブラーヒームは私の従兄弟であり、私は火を崇拝しています。火は、私の意を酌んでイブラーヒームを焼かなかったのです。」

すると、ひと塊の炎がそこから飛び出し、ハーマーンに降り落ちた。彼もまた、その場で焼けてしまった。ニムルードはそれを見ると、石を投石機に据え、イブラーヒームめがけて投げつけた。至高なるアッラーはイブラーヒームを救い出した。

その地方はひっくり返った。木々や家々は石灰となってしまった。それらの灰がその地方に残っている。［そこには］水もなく、植物もない。山ではチーターがたくさんの巣を作っており、チーターがいるため、誰もそこに行くことはできない。

＜［イスカンダリーヤの］土手（al-ṣaʻīd）[665] における埋没（ḫasf）について＞

663）サマンガーンはバルフの南東の山岳地帯にある都市で、スィミンジャーン（Siminjān）とも綴られる［al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 303］。

664）この名称は初出であり、諸史料からは確認されないが、本章の「アフラーム」および「バルカ」の項で言及される「バルカ（Barqa）」と同一であろう。前掲注111と171を参照のこと。

665）「サイード（ṣaʻīd）」はもともと「土」を意味し、地名としてはアスワンなどナイル上流地帯か、もしくはフスタート南部の肥沃な地方を指す［Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 3, p. 408］。イスカンダリーヤでは地名としては確認されないため、ここでは一般名詞として捉えるが、定冠詞がついていることから著者はおそらく「サイード」という地名とみなしていると思われる。

イスカンダリーヤの土手にモスクがあり、そこにはイマームやミフラーブや子供たち［の石像］がある。あらゆる種類の人々からなり、揺りかごの中の赤ん坊や井戸の脇でバケツを引いている男もいる。［それらは］すべて石になっている。彼らは堕落した民であった。ある日、彼らはキャラバンを襲撃し、(p. 295) 年老いた男の娘を奪い、彼女を犯そうとした。その年老いた男が彼らを呪うと、すべてが石となった。こうして彼らは世の教訓となったのである。

＜バスラの地における埋没＞

バスラの埋没は次のような次第である。その地には、ジャーイル（Jāyir）、ハーティー（Ḫāṭī）、ムフティー（Muḫṭī）、ハンマール・アル＝ハターヤー（Ḥammāl al-Ḫaṭāyā）という 4 人の統治者がいた[666]。さて、ジャーイルはある男に出会った。彼は妻を伴って歩いており、妻は妊娠し、ロバに乗っていた。男がバスラに来ると、ジャーイルは通行を許さず、2 ディルハムを徴収した。この男が不平を言いにハーティーのもとに行くと、彼もまた 4 ディルハムを徴収した。ムフティーのもとに行くと、彼は 8 ディルハムを徴収した。男が「私は貧しいのです」と言うと、［ムフティーは］男を打ち、男の妻を［ロバから］落とし、赤子を流産させた。そして男のロバの尾を切り落とした。男がハンマール・アル＝ハターヤーに訴えに行くと、［ハンマールは］言った。「自身の妻と交わればよいではないか。さすればかつてのように子を孕もう。ロバは手当てをすればよい。さすればその尾が再び生えてこようぞ。」

この男は外に出て、頭を地につけ、この訴えを創造主に届けた。至高なる創造主はお怒りになり、この場所を地中に沈めたのであった。［そこは］長きにわたって荒廃していたが、この時代には人が住むようになった。

次のように言われている。ウマル・ブン・アル＝ハッターブ――**アッラーが彼に満足されますように**――がバスラのある男に対して怒り、彼の館を破壊するために水攻めを行うよう命じた。［その後］水路を 1 本拓くと、水が 1 つの穴に流れ落ちていった。人々がその穴の口を壊し広げると、［そこには］荒野があった。人々はみな、石になっていた。ある者は天秤を持ち上げ、女たちは糸をつむぎ、農夫は鋤を振るい、ある者は服を洗っている最中であった。埋没のあった時代に、創造主のお怒りがあの不当なカーディーたちに達し、彼らの姿を変形させてしまわれたのだということを人々は理解した。**アッラーよ、その罰から我らを救いたまえ。**

＜ホラズムの埋没＞

ホラズムの荒れ地の中に、良い木々に満ちた地方があった。［そこで］地崩れが 1 度起こり、30 数回も村が埋没した。「サニーナーン（SNYNAN）」と呼ばれる場所でのことであった。埋められたために赤い砂が外に立ち込め、風に乗ってトゥースやニーシャープールの境域にまで達し、(p. 296) 150 ファルサング以上にわたってこの砂の波が押し寄せた。ある者が言うには、「私はニーシャープールに出かけていたが、ホラズムの荒地を賑わいあるものだと思っていた。［だが］ホラズムに戻ると、その場所は沈んでしまっていた。［その陥没は］100 人分以上の高さがあり、四方から水がその埋められた場所に流れ込んでいた。」

各地から人々が［そこを］見にやって来てはその人々のために涙した。彼らは［そこから］教訓

666) それぞれ「悪しき者」、「誤った者」、「罪為す者」、「過ちをもたらす者」の意。寓意が込められていることは明らかである。

を得たのであった。

＜見捨てられた泉＞

「見捨てられた泉（al-bi’r al-mu‘aṭṭala）」[667] とは、ひっくり返された地方や宮殿のことである。

［見捨てられた宮殿］

「堅固な宮殿（Qaṣr al-mašīd）」はイスラエルの民の1人の王が建設した[668]。彼には1人のワズィール（宰相）がいた。ワズィールは4000人の男とともに荒野に入り、穏やかで美味な水のある場所を見つけた。彼はそこを自分の礼拝所とし、礼拝を行っていた。長い時が経ち、イブリースはそれを妬むようになった。彼はターバンも巻かず、狂人のようにバーザールに駆け込んでいった。ワズィールは彼に尋ねた。「何があったのか？」

［イブリースは］言った。「罰が下るのだ。」

［ワズィールは］言った。「いつ下るのか？」

「7年以内だ」と答えた。ワズィールは命じて、金の煉瓦と銀の煉瓦で城砦を建てさせた。［その］頂を天の雲にまで積み上げ、その周囲に掘を巡らせた。そして城砦の上に登り、安心して眠った。

創造主は、彼の命を奪うために死の天使を遣わした。ワズィールは弓に矢を番え、城の上に立ち、城砦に現れた人物を見た。ワズィールは言った。「おまえは誰なのか？」

［その人物は］言った。「私はおまえに用がある。」

［ワズィールは］言った。「帰れ。」

［するとその人物は］地面から城の突端に足を載せ、言った。「**私は死の天使である。宮殿を破壊する者であり、館を荒廃させる者である**」。

そう言うと、〔ワズィールの城砦と王の宮殿を〕たたき壊し、それらを見捨てられ、人も住まず、荒れ果てたままにした。創造主が「**それ以来、かれらの居所には、（至極）僅かな人びとを除き住む者もない。（結局）われが、それらの相続者である**」［Q28: 58］とおっしゃっているとおりである。それは［ペルシア語では］、「王たちはさまざまな場所を造営したが、［やがて］打ち捨てられ、誰もそこへは行かなくなった。あらゆるものは世界の創造主たる私に遺産として残されたのだ」という意味である。

「ホスロウのイーワーン（Īwān-i Kisrā）」について[669]。理性ある者は、あれほどの建造物がどうなってしまったか知っていよう。

アブー・ジャァファル・アル＝マンスールはバグダードを建設していたとき、ハーリド・バルマキーに言った。「私には日干し煉瓦が必要だ。ホスロウのイーワーンを破壊しようと思っている。」

ハーリドは言った。「あれはイスラームの町々（p. 297）における旗印です。旅人はあれを目にす

667）これは『クルアーン』22章45節「また（如何に多くの）井戸や堅固な城（qaṣr mašīd）が見捨てられたことであろうか」に基づく。次の「堅固な宮殿」もこの章句からの連用である。

668）場所の同定には諸説あるが、イブン・ホルダードベやムカッダスィーはイエメンにあると伝えている［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 136; al-Muqaddasī, *Kitāb aḥsan al-taqāsīm*, p. 103］。

669）イラクのクテスィフォンの北にあるアスパーンブール（Asbānbūr）に建てられたサーサーン朝の宮殿。前部のイーワーンが現存する。その破壊を望んだカリフ・マンスールをバルマク家のハーリドが諌めたという逸話は有名で、ヤァクービーによれば、結局マンスールはこの建物を破壊しなかったという。たとえば『アルファフリー』参照［Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 34; イブン・アッティクタカー著『アルファフリー』池田修・岡本久美子訳、平凡社、2004年、第1巻305–306頁］。

ると、その建設者の崇高さに驚愕するのです。またあそこにはアリー・ブン・アビー・ターリブの礼拝所があります。破壊なさらぬように。」

マンスールは、「おお、ハーリドよ。おまえはいまだにアジャムを贔屓するのか！」と言い、それを打ち壊すよう命じた。［だが］人々が計算したところ、それを壊すには、新たに焼き煉瓦［を作る］のと同じくらいの費用がかかることがわかった。マンスールはハーリドに言った。「おまえが言ったとおりだ。」

ハーリドは言った。「今となっては、マンスールはイーワーンを破壊する力もなかった、と人々に言われるでしょう。**破壊するほうが建設するよりも容易ですのに**。」

その意図するところは、「ある者は建設し、ある者は破壊する」である。

次のように言われている。泥は人間に「おまえはどれだけ私の一部を取っては上へと積み上げていくのか。私は下に下がっていくというのに」と毎日言っている。

『トーラー』には、「**おお、アーダムの子よ。おまえはいつまで泥を積み上げ、負債を重ねるのか**」と書かれている。

「アフラースィヤーブのギャング城（Gang）」について[670]。［これは］アルボルズの山頂にある巨大な宮殿であり、テュルクたちの王であるアフラースィヤーブが建造した。一方には川があり、もう一方には山がある。8ファルサングの高さがあり、金の玉座が置かれた。オオワシでさえもギャング城の上を飛ぶのは困難であった。その中にはガラスでできた2つの館を建て、黄金の宮殿を運び上げた。イーワーンはルビーとトルコ石で造られた。結局はカイ・ホスロウが奪い取り、アフラースィヤーブを水中に溺死させたが、このギャング城はそのままにしておいた。**だがこういった彼らの居所に住む者は誰もいない**。これもまた残存していない。**アッラーは最もよく知りたまう**。

「盗賊たちの宮殿（Qaṣr al-luṣūṣ）」はジャバル地方にあり、パルヴィーズが建設した[671]。20アラシュもの石がいくつも積み上げられている。それを造った者たちは実に驚異的な人々である。巨大な宮殿と、1000人分の台（dakka）を造った。［かつては］パルヴィーズがそこに座し、中国の天子とトゥルキスターンのハーカーンがその上に立っていた。彼の息子はアサダーバード（Asadābād）[672] にあるもう1つの宮殿に滞在した。2つの宮殿の間は4ファルサングであった。

パルヴィーズが食事をするときには、毎日、焼いた雌の子馬を金のナイフで食べた。［肉は］金の釜の中で沈香を用いて焼きあげられ、麝香をまぶし、金の串に刺して金の食卓で供された。［パルヴィーズは］食べ終えると、すべての食器を下賜し、次のときには新たに［食器を］作らせた。

670）『王の書』では、アフラースィヤーブのもとに逃れたスィヤーヴァシュがギャング城を建設したとされる。スィヤーヴァシュが殺害された後、息子のカイ・ホスロウがアフラースィヤーブからギャングを奪い、1年そこに住んだ後にイーラーンの地に帰った。また、アフラースィヤーブの居所であったギャングは、『王の書』などでは「天国のギャング」と呼ばれていたようである［*EIr*: Kangdež］。

671）前出「カーフ（qāf）の項」の「盗賊たちの宮殿」および注466も参照のこと。アブー・ドゥラフはこの砦について次のように記している。「この砦の建物は非常に素晴らしく、それは石で出来た、地表からの高さ約20ズィラーウの台（dakka）の上にある。砦内にはアーチ玄関、宮殿、倉庫があり、それらの高さは前述のものを凌ぐ。その建物や建物に描かれた絵柄の美しさには目が眩むばかりである。この砦は狩りの獲物の多さ、水の旨さ、牧地や草原の美しさ故にアバルヴィーズの離宮（ma‘qil）であり、遊楽の場であった」［アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』、25頁］。

672）ハマダーンの南西54キロメートルに位置する町。ハマダーン＝ケルマーンシャー街道上に位置しており、サーサーン朝期には非常に重視された地域である。イスラーム時代のアラビア語の地理書では「ホスロウの台所」という言及がしばしばなされている［*EIr*: Asadābād］。

（p. 298）彼が食べる食事には、毎日、1万2000ディーナールが支出された。その支出の中には、石の分銅で2ミスカールもある真珠を粉にして、椀に振りかける分も含まれていた。70種類もの金製や銀製の鍋が炊かれたが、［パルヴィーズは］すべてを食べ尽くした。［ゾロアスター教の］司祭はそれを見て、言った。「これらをすべて食べてしまうとは、王の胃はひっくり返っているのではありませんか。」

ホスロウはこの言葉を心に刻んだ。やがて12年が過ぎ、［ホスロウは］バフラーム・チュービーンと一戦を交えた。700もの傷をバフラームに負わせ、ついにバフラームの体を真っ二つに切り裂いた。すると、剣はホスロウが握りしめた手の中に残ったままであった。彼の手に湯をかけると、ようやく剣の柄から手が離れた。ホスロウは司祭を見つめ、言った。「この力は、あれだけ食べていたからこそだ。」

ところで、［ホスロウ・パルヴィーズが盗賊たちの城で］食事をするときには、アサダーバードまで手から手へと椀が渡され、息子の食卓の上に置かれたものだった。

やがて宮殿もなくなり、皇帝もいなくなった。すべてが荒廃に帰した。何をつくり出そうとも、それらもまた朽ちてしまうのである。この世の教訓として、ホスロウの事例があれば十分であろう。

［地震について］

知れ。地震（zilzila）とは、創造主の命によるものである。その原因は次のとおりである。蒸気が大地の内部に充満し、外に出ようとする。［だが］地表が固い［ために］大地が動いてしまうのである。ときにはある箇所が割れることもあろう。すると［蒸気はそこから］外に出る。それは沸騰している鍋のようなものである。鍋のふたが固く閉められていると、鍋の沸騰は限度を超え、否応なしに鍋を壊して外へ飛び出す。

地震には、別の要因で生じる場合もある。たとえば海岸地帯で揺れが生じると、海に近い場所は、そこに近接しているがゆえに、水が集積し波がぶつかり合うことによって揺れ動く。私はギーラーンの人から次のように聞いた。「キャブーダーンの海（Daryā-yi Kabūdān）[673] が荒れていると、我々の地域も揺れる」と。また、ある人が私に語ったところによると、キャブーダーンの海が荒れたとき、（p. 299）アルダビールの町が揺れ動いたという。アルダビールの町からキャブーダーンまで12ファルサングもある。**まことにアッラーは最もよく知りたまう。**

＜クーミス（Qūmis）[674] で起こった地震について＞

創造主は、世界の礎を荒廃地の上に設けられた。この世は決して確固として安定することはなく、いかなる時代も疫病を免れることはなかった。

吉兆なるヒジュラ（聖遷）から42年目（西暦662–63年）に[675]、クーミスの地で地震が起きた。その地方の建物は倒壊し、何千もの男たちが崩落［した建物］の下敷きになり、4万と96人が土の下から運び出された。ダームガーンやホラーサーンやファールスではさらに甚大であった。イエメンでは数ファルサングにわたって60アラシュほど［土地が］沈下したほどであった。この地

673）「キャブーダーン」という地名はウルミエ湖上の島の名として現れるため、本来はウルミエ湖を指すと考えられるが、ギーラーンやアルダビールの話なので、ここではカスピ海を指すのかもしれない。本訳注（4）、526–527頁および注237参照。

674）アルボルズ山系南麓の地域。中心都市はダームガーン［*EI*²: Ḳūmis］。

675）タバリーは、ヒジュラ暦242年（西暦856年）にクーミスで地震があり、45,096人の死者が出たと伝えているため、ここでの年号は「242年」に訂正すべきであろう［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 105］。

震は、ヒムス、ダマスクス、ナーブルス（Nābulūs）[676]、ラース・アル＝アイン、ラッカ、ルハー（Ruhā）[677]、そしてマッスィーサにまで届いた。シャームの海岸地帯も揺れ、荒廃した。ラタキア（Lāẕqīya）[678] では家が1つも残らず、1人の人間も1頭の家畜も助からなかったほどに揺れた。

＜シャキーク族（Banī Šaqīq）の地での地震について＞

［ヒジュラ暦］276年（西暦889–90年）に、シャキーク族の地にある1つの丘[679] が裂けた。中には7つの墓［があり、その中］には経帷子を着た7人がいた。そこからは麝香の香りが漂っていた。1人は若く、他は年老いていた。耳、鼻、まつ毛、唇はきれいに残っていた。唇には湿り気があり、まるで水を飲んだかのようであった。［目元には］アンチモンを付けていた。その若者の脇腹には傷があった。人々は彼らの経帷子を新しくした。イブン・ジャリール［・タバリー］（Ibn Jarīr [Ṭabarī]）は、「丘が次々と裂け、地面が崩れ、砥石のような緑色の石の水溜めが現れた。そこには誰も読むことができないような銘文があった」と言っている。

［山岳地帯での地震について］

我々の時代の［ヒジュラ暦］561年（西暦1165–66年）に、山岳地帯[680] で地震があり、7日間続いた。山岳地帯の町々ではまったく影響がなかったが、のちにザンジャーンから届いた報せによると、町が1つ倒壊し、山が川の中に崩れ落ち、水がせき止められたため、その地区では水がなくなり荒廃した、ということである。また水は別の側から流れ出て、他の地域を荒廃させた［とのことである］。

地震の多くは、山や泉井のない場所で起きる。［そのような場所では］大地の孔が（p. 300）閉ざされ、蒸気が動き出し、大地を引き裂くのである。山岳地帯には10万もの山があり、10万もの泉や地下水道がある［ために地震が起こりにくい］。

［ヒジュラ暦］562年（西暦1166–67年）には、壊滅的な地震が起こった。アルヴァンドの裾野には木々の林があったが、すべての木が折れ、木の根が上を向いて逆さま立ちになった。大地は切り裂かれた。

＜アンタキアでの地震＞

アンタキアで地震があり[681]、1500軒の家が倒壊し、城壁では70もの塔が崩れた。形容できないほどの恐ろしい轟きが空中に響いた。アンタキアの人々は騒ぎ立て、「終末がやってきた」と口々に言い、荒野へ逃げた。山々は崩れ、海は沸騰した。悪臭を放つ黒い煙が海から立ちのぼり、

676）現在のパレスチナ自治区、ユダヤ・サマリア地区北部に位置する町。

677）現在のトルコ共和国南部のシリア国境付近に位置する町。ヨーロッパでは「エデッサ」と呼ばれ、現在名はシャンルウルファである。

678）地中海に面する、シリア第一の港湾都市。

679）イラクのワースィトにあったサラ運河（Nahr al-Ṣala）のそばの丘のこと［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 340; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 5, p. 321］。

680）ここでは Kūhistān と表記されるが、この他、Jabal もしくは Jibāl というアラビア語表記もなされ、「ジバール／ジャバル地方」とも呼ばれる。いずれも「山岳地帯」の意であり、イラン西部のハマダーンを中心としたザグロス山系地域の高地を指す。

681）タバリーの史書によると、地震の発生は245/859–60年のことである。同書で「ムシャーシュ（Mušāš）の泉」と呼ばれる泉は、本書では「シャーシュの川（Nahr-i Šāš）」と記されている。「シャーシュの川」は既出でホラズム地方のシル川を指すため、ここではタバリーに基づき読み替える。『諸都市辞典』によると、ムシャーシュはメッカ近郊のターイフにある山の名である［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 108; Yāqūt, *Muʻjam al-buldān*, vol. 5, p. 131; 本訳注（4）、489頁］。

一部の人々はその悪臭のために死んだ。

また「〔ムシャーシュ（Mušāš）〕の川」はマッカにある泉であったが、［この地震で］干上がり、革袋1つ分の水が1ディーナールにもなった。やがて信徒の長ムタワッキル・アラー・アッラーが巨額の財を投じ、水が出るようにした。

アンタキアから1ファルサングのところにも大きな川があったが消えてしまい、誰も二度と目にすることはなかった。

この章に続いて、**アッラーが望みたまうならば**、疫病の驚異について一節述べていこう。

［第5章］　さまざまな時代に生じた疫病や死病について

知れ。疫病（ṭāʻūn）や流行病（wabā）は、創造主が望まれ、定められたことである。その原因は、大地から［発し］大気中に混じる腐敗した蒸気である。それが人の喉を通って命の気（jān）に達し、死んでしまう。また［その蒸気によって］、喉の腫れ（ḫunāq）、鼻炎（zukām）、血液の炎症（ḫūn-sūḫta）といった病気が生じる。賢人たちはそれを「疫病（ṭāʻūn）」と呼んでいる。［疫病は］シャームに多い。ザンジバルには種々の膿瘍（damāmīl）があり、ハイバルには種々の熱病（tab-hā）がある。バフラインには脾炎（sipurz）があり、バルフには蚊が媒介する病（paša-gašt）がある。これは一種のかゆみであり、掻いているうちに骨にまで達する。村落部では「蚊鬼（pašā-ġūl）」と呼ばれ、ザクロほどの大きさの腫瘍が額に現れる。また（p. 301）「バルフの潰瘍（rīš-i Balḫī）」や「マディーナの筋糸（ʻirq-i Madīnī）」[682] や［他にも］さまざまなものがある。疫病というのは、腐敗した空気やその土に応じて、それぞれの土地にそれぞれのものがある。いくつかの疫病について述べていこう。

＜アムワースの疫病＞

預言者――**彼に平安あれ**――のヒジュラ［の年］から18年目（西暦639–40年）に、「アムワース（ʻAmwās）」[683] と呼ばれる疫病が生じ、多くの人々を死に至らしめた。呼吸の通り道が塞がり、命を落としていったのである。この年には、我らの預言者の教友たちのうち、アブー・ウバイダ、ムアーズ・ブン・ジャバル（Muʻāḏ b. Jabal）[684]、ヤズィード・ブン・アビー・スフヤーン（Yazīd b. Abī Sufyān）[685] など、一部の者たちが死んでしまった。アムル・ブン・アル＝アースは、「私は避難する」と宣言して出ていき[686]、多くの人々が彼に付き随った。

＜灰の年＞

その後に「灰の年（ʻām al-ramād）」[687] があった。その年には黒い土が降り、2万5000人がこの

682）糸状虫のフィラリア、ひいては象皮症のこと。ペルシア語では rišta として既出［*LN*: ʻIrq-i Madīnī］。

683）パレスチナのラマラ近郊の村の名。古名は Emmaus で、聖書に見られるエマオの地と考えられている。638年に疫病が流行している［*EI*²: ʻAmwās］

684）ムハンマドの教友であり、いくつかのハディースに登場する。アムワースの疫病で死去した［Aḥmad b. ʻAlī b. Ḥajar al-ʻAsqalānī, *Kitāb tahḏīb al-tahḏīb*, Dār al-Ṣādir, Beirut, 1968, vol. 10, pp. 186–187; *EI*²: ʻAmwās］。

685）ヒジュラ暦8年（630年）のムハンマドのメッカ占領時に改宗した。639年に死去［*EI*²: Yazīd b. Abī Sufyān］。

686）アムワースの疫病時、彼は実際にはミスル（エジプト）にいたようである［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 2, p. 360］。

687）ヒジュラ暦18年（639–40年）に起こった旱魃は「灰（al-ramāda）」と呼ばれており、このことを指しているの

年に死んだ。この土は、荒野［のみならず］家や部屋の中にまで降り注ぎ、寝床から起き上がると黒い土の上にいるほどであった。これは「灰の年」と呼ばれている。

＜鼻血の年＞

［「鼻血の年（‘ām al-ru‘āf）」は、ヒジュラ暦］24 年（西暦 644–45 年）のことであった。鼻から血が流れ出し、力が弱り、多くの人々が死に至った。この流行病は創造主の定めであったと知るがよい。原因は大地から立ちのぼる腐敗した蒸気であった。［それらの蒸気の］あるものは血を固まらせ、あるものは血を溶かし、あるものは血を熱してライ病（juḏām）にする。これらの害は甚大である。あるものは土となって降り注ぐが、その害は少ないほうである。

＜法学者の年＞

［それは、ヒジュラ暦］79 年（西暦 698–99 年）のことであった。シャームからルームにかけて疫病が生じ、イフリーキヤの人々がみな死んでしまった。その結果、ルーム（ビザンツ帝国）はシャームに食指を伸ばし、アンタキアを奪取した[688]。

またこの年には、学者たち（‘ulamā）の大半が死んだ。アリー・ブン・フサイン（‘Alī b. Ḥusayn）[689]、ウルワ・ブン・アル＝ズバイル（‘Urwa b. al-Zubayr）[690]、サイード・ブン・アル＝ムサイイブ、アブー・バクル・ブン・アブドゥッラフマーン（Abū Bakr b. ‘Abd al-Raḥmān）[691]、サイード・ブン・ジュバイルといった［学者たちが疫病に］殺された。これは「法学者の年（‘ām al-fuqahā）」と呼ばれている。

［ヒジュラ暦 159 年の疫病］

［ヒジュラ暦］159 年（西暦 775–76 年）には、人間の口中に痛みが生じ、ファールス地方では多くの人々がそれで死んでいった。その後、イラクでは咳の病（su‘ālī）が生じた。さらに世界が闇に包まれ、(p. 302) ズルヒッジャ月の最後の 7 日間その状態が続いた。ムハッラム［月］の新月が確認されると、闇は晴れて光が現れ、疫病は去った。

＜スィダームの病＞

［ヒジュラ暦］49 年（西暦 669–70 年）には、「スィダーム（ṣidām）」[692] と呼ばれる病気が生じ、あらゆる家畜が死んだ。

私が実際に見たことだが、ある年、コヘスターンで牛の疫病が起こり、すべてが死に、［埋め合わせのために］他の諸地方から［牛が］運び込まれた。また、ラクダが死んだ年もあった。

だろう［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 2, p. 358］。

688）この部分の解釈はタバリーに基づく［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 3, p. 473］。

689）シーア派 4 代目イマーム、ザイン・アル＝アービディーンのことか。ただし、彼の死亡年や死亡原因には諸説ある［*EI*²: Zayn al-‘Ābidīn］。

690）「メディナの七法学者」の 1 人。709 年から 718 年の間に死去［*EI*²: ‘Urwa b. al-Zubayr; *EI*² supl.: Fuḳahā al-Madīna al-Sab‘a］。

691）同じく「メディナの七法学者」の 1 人。ヒジュラ暦 94 年（西暦 712–13 年）に死去した［*EI*² supl.: Fuḳahā al-Madīna al-Sab‘a］。

692）本来は馬など家畜の頭に生じる病気。アラビア語の原義は「激突」。タバリーの史書ではこの年に流行したのは人間がかかる疫病であり、その名称には触れられていないため、本項目との関連性は不明である［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 3, p. 118］。

＜犬の年＞

［それは、ヒジュラ暦］300年（西暦912–13年）のことであった。犬たちが人間に襲いかかり、犬に悩まされて多くの人々が死んだ。犬に吠えられただけで人が死ぬほどであった[693]。

この年にはまた疫病も生じたが、それは「マーシャラー（Māšarā）」[694]と呼ばれ、一部の人々が死んだ。その後、「ハニーナー（ḤNYNA）」と呼ばれる疫病も生じたが、［これは］すぐに収まった。

［ヒジュラ暦228年の災害］

［ヒジュラ暦］228年（西暦842–43年）に、ヒジャーズではげしい熱波が生じた。その後大雨が降り、一部の人々が死んだ。さらに続けて［今度は］厳しい寒さが訪れ、人々を死に至らしめた。また、「一番後ろのジャムラ（Jamra al-‘aqaba）」[695]の山の一部が崩れ、［巡礼者の］一団を死に至らしめた[696]。

［ヒジュラ暦246年の災害］

［ヒジュラ暦］246年（西暦860–61年）には、バルフで血が降り、その雨でジャイフーンが赤く染まり、40日間赤いままだったという報せがあった。またこの年には、バグダードで21日間連続して雨が降った[697]。

知れ。賢人たちは、某の年にこれこれの出来事が起きるだろう、と言うが、彼らの判断のとおりにはならない。というのも、この知識は創造主以外には誰も知り得ないからである。一方で、星辰の動きに［世界が］影響を受けることに疑いはない。太陽が天秤宮に入るといつも風が起こり、双魚宮に入ると世界は冷え込み、獅子宮に入ると世界は火がついた［かのように暑くなる］ことは［すでに］証明されている。ゆえに、こういった［星辰の］影響をどうして否定できようか。しかし、アーダムの子らの学識には、それらの真実に達するほどの力は備わっていないのである。

イスカンダルの時代の天文学者たちが一致して言うところには、［ヒジュラ暦］283（西暦896–97）年に大雨が降り、「第2の大洪水（ṭūfān al-ṯānī）」と呼ぶほどの大嵐が起こり、イラクの地の一部を除いた多くの地域が水没する、とのことであった。（p. 303）人々はそれに恐れ慄いていた。［実際に28］3年になると水不足が生じた。雨が降らず、井戸や泉は干上がってティグリスの水は減少した。一方イラクの中心地であるバービルの地では水が浸水し、水没した。これは、賢人たちが一致した判断と正反対の結果であった。さもなくば、神に対して知識において並ぶ者があることになろう。

さて次の章では、石が降ってくることについて述べよう。そもそも天から石が降ってくることがあり得るのか否か。

［第6章］　降礫、降石、埋没について

693）タバリーによると、この年、バグダードで狂犬病が流行したという［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 424］。

694）血液性の腫れ。シリア語由来の語で、血液と黄胆汁からくる腫れが顔や頭にできることをいう［*LN*: Māšarā］。

695）メッカ巡礼者がミナーで石投げを行う際の標的となる、3本の「悪魔の石」の最大のもの。

696）この部分の記述はタバリーの史書に基づく［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 63］。

697）同じくタバリー参照［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 112］。

知れ。天から水が降ることがあり、水が雹になることがあり得る以上、水が石になるとしても、驚くに値しない。「**われは礫を（雨のように）かれらの上に降らす**」[Q51: 33]、「**かれらの上に群れなす数多の鳥を遣わされ、焼き土の礫を投げ付けさせた**」[Q105: 3–4] **と至高なるお方のお言葉にあるように**。理性でもって見ても、水は塩田では塩になり、別の場所では明礬になり、さらに別の場所では［固まって］礫になる。大粒の雹の中には細かな石がある。

フサイン・ブン・アル＝マンスール・アル＝ハッラージュ（Ḥusayn b. al-Manṣūr al-Ḥallāj）[698] が殺害された［ヒジュラ暦］〔309 年〕（西暦 922 年）には、1 粒が 1 ラトル半もある雹が降った。それに続けて強風が吹き、ティクリートの境域からバグダードやモースルまで、黄色い砂が降った。さらにその後、バグダードの人々の間では深刻な病気が発生し、バスラでは火災が起こり、黒い丘のように見えるほど［町が］燃えてしまった。

＜黄色い風と黒い礫＞

［ヒジュラ暦］290 年（西暦 902–03 年）に、クーファから次のような報せが届いた[699]。黄色い風が発生し、日没まで吹き続けた。やがて、その風と土は黒くなった。さらに雹が降った。1 粒が 150 ディルハムもの［重さの］石雹であった。石や鉄でさえもなし得ないほどの被害をもたらした。雷鳴や稲妻がひっきりなしに続いた。

アフマドアーバード（Aḥmad-ābād）の村では白や黒（p. 304）さまざまな色の石が降った。［その石は］くしゃくしゃに襞が寄っており[700]、人間の耳のようであった。人々はその石を諸官庁（dīwān-hā）に持っていき、見せ合っては驚いたものであった。

私はある信頼に足る男から次のように聞いた。いわく、「私がカズヴィーンで廂台に座っていると、雲が立ち込め、雷が鳴った。そして石が 1 つ、その廂台に落ちてきた。それからまた別の石が 1 つ［落ちてきた］。2 つの石はそっくりだった。そのため私は、『これらはどこから来たのだろうか』と困惑してしまった。その後、『ハウサム（Hawsam）[701] で石が降り、多くの人が死んでしまった』という報せが届いた。」

これはよく知られたことである。

＜不思議譚＞

中国の境域では、決まった時間に決まった場所で石が降る。どの石も 1 マン半前後［の重さ］である。［石が］降る時間になると、雲が確認される。すると人々は逃げ出し、洞窟の中に入る。［石に］当たった者はみな死んでしまう。石が降るこの荒野には黄金が生える[702] と言われている。

［本章では］この程度のことを述べておこう。これらは、時期によるものとみなすべきではなく、また時代によるものでも、蒸気によるものでもない。そう、すべては創造主によるものなの

698）初期の神秘主義者（922 年没）。イラン南部のバイダー出身。スンナ派からもシーア派からも異端として告発された。913 年に逮捕され、922 年に処刑された［「ハッラージュ」『新イスラム事典』］。

699）文中のアフマドアーバードは、クーファ近郊の地名を指すと考えられる。タバリーは、ヒジュラ暦 285 年（898–99 年）にクーファで黄色い風が発生し、アフマドアーバードにおいてさまざまな色の礫が降ったと伝える［Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 5, p. 366］。

700）校訂テキストは MQŠNJ だが、lā 写本に従い、mutašannij と読む。

701）カスピ海南岸のタバリスターンとダイラムに隣接する山岳地の名［Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 5, p. 420］。

702）テキストでは RZ で、これでも「ブドウ／バラ」など意味は通るが、ここでは「金（zar）」と採る。

である。誰もそのお方の決定から逃れることはできず、それを防ぐこともできない。風や雨から逃れることができないように、その他の災難や疫病、地震、埋没や降石から逃れることもできないのである。

［逸話］

アブド・アル＝マリク・ブン・マルワーンの時代に疫病が発生した。アブド・アル＝マリクは1人のグラームとともに夜半に逃げ出した。その道すがら、彼はグラームに、「私が眠ってしまわぬように、1つ話をせよ」と言った。

グラームは「私は次のようなことを聞きました」と言って語り出した。

「1匹のキツネがワシを恐れていました。［そこで］ライオンのもとに行き、こう言いました。『私はあなたの保護下に入ります。私を守ってください。』

ライオンは『良かろう』と言い、キツネはライオンの保護下に入りました。

ある日、ワシの姿が見えました。キツネは『ワシが来た！』と言いました。

ライオンは言いました。『来い。私の背中に乗れ。』

キツネはライオンの背中に乗りました。［ですが］ワシは飛びかかり、キツネをさらって飛び去りました。

キツネは言いました。『おお、ライオンよ。私を助けに来てください。』

［ライオンは］言いました。『私の手は天空には届かない。おまえが下にいたならば、私はおまえを守ってやったのに。天からの災難である以上、私に何ができようか。』」

（p. 305）アブド・アル＝マリクはこの話を聞き終えると、言った。「おお、グラームよ。戻って家に帰ろうではないか。私にとってこの逸話は十分な忠告となったぞ。つまり、今回の疫病は天からのものだ。どこにいても降りかかり、それから逃れることなどできはしないのだ。」

知れ。疫病、天然痘（ābila）、地震、大風や大洪水といった天からの災厄に際しては、老いも若きもみな同じである。生後1日の赤ん坊も70歳の老人も、地震のときにはどちらもどうすることもできない。

ここではこの程度で十分であろう。［次は］世界の樹木や草木について述べていこう。